
NEXT TO YOU

灯乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NEXT TO YOU

【Zコード】

N7419U

【作者名】

灯乃

【あらすじ】

ある朝ジョギング中に、トリップ体质の美少女、有紗はどこぞの王子様が行つた「ペット代わり（つてオイ）の魔族の召喚」に巻き込まれた青年にくつついて異世界へ。「おにーさん、お仲間ですね！」大丈夫ですよー、すぐに元の世界に帰れますからね！・・・と思つていたら、今回はちょっと意外な展開が待つていた！？・・・まあ、何事も前向きに、前向きに。だって、旅は道連れが居た方がいいもんね。そう、誰か偉い人も言つてたよ。人生は長い旅のようなものだ。うん、名言。

第1話 体質？（前書き）

趣味全開で書いてます！

第1話 体質？

ひとにはそれぞれ体質、といつものがある。

まあ、年代問わず、女性ならばまず太りやすいか、そうでないかといつものが最も興味をそそられる分野であることだらう。他にも教科書を読むと眠くなる体质、陽に焼け易い、焼けにくい、或いはちょっと斜めなところでは幽霊が見える見えない、といふところだろうか。

幽霊云々については、正体見たり枯れ尾花、といふことも多々あるからして、自己申告と実際が異なることも多々ありそつではあるが。

ここに、ひとりの少女がいる。

名を、七瀬有紗。

美少女である。

街を歩けば十分に一度スカウトに出来わし、同世代の少年にとつてはナンパなどというものをするのも躊躇われる、声を掛ける者は勇者とされるような、紛う事なき美少女である。

抜けのよつた白い肌は、日本人のものにしては余りに白く、元々色素の薄い栗色の髪は、柔らかくふんわりと波打っている。

完璧な造作を誇る白く小さな顔の中で、花びらのよつたふくらとした唇の淡い桃色が愛らしい。

しかし、何より印象的のは、その長く反つた睫毛に縁取られた

大きな瞳。

淡い褐色の瞳は太陽に透けると縁がかつた琥珀色に輝き、その顔立ちと相俟つて異国の血が混じつていると思われがちだが、眞実がどうなのかは彼女自身も分かつていない。

何しろ、生まれ落ちてすぐに養護施設の前に捨てられていた、生糸の孤児である。

顔立ちだけでなく、同年代の少女の中ではどちらかといえれば長身の部類に入る体つきは、ほつそりと華奢でありながら、既にきちんと女性らしい曲線を描いている。

そんな三百六十度どこから見ても美少女と断定して差し支えない有紗だが、少々厄介な体质の持ち主であった。

ズバリ、落ちやすいのだ。

試験やマンホールといった、物理的なものではない。

所謂次元の隙間というヤツに、それはもう何度となく落ちまくっているのである。

切つ掛けは、と本人に聞えば、もう思い出したくもないと即答するだろう。

『じごの平行世界の研究者であるアホオヤジ（敬称は敢えて省く）が、どういう理由でかぴつちりと、おにぎりをくるむラップの如く完全に封鎖されているこの世界の情報を入手すべく、『次元転送に耐えられる頑丈な生き物を』という条件付けで召喚式を組んだとこ

る、現れたのが中学の入学式を終えたばかりの有紗だった、ということらしい。

新しい制服の胸に付けられた花を、同じ施設のチビ達に羨ましがられるのことを想像しながらの下校途中、いきなり『白くて何だか病院っぽい』建物の中、ぼんやりと光る円の上に転送された有紗は、取り敢えずパニックを起こした。

この辺り、まだスレていない自分は可愛らしこころがあつた、と本人が後にしみじみ述懐するところである。

まさか人間が現れるとは思わなかつたなあ、と言つて頭を搔きつつも、きらきらと知的好奇心に眼を輝かせ、思わぬ研究対象に昂奮気味のアホオヤジに理性のどこかがブツツンと切れ、有紗は生まれて初めて大人相手に右ストレートを決めていた。

それから帰せ戻せとアホオヤジを責め立てて、「だつて資料を取り寄せるだけのつもりだったから、帰す方法なんて考えてなかつたんだよー」とへらへら笑う彼の首を締め上げる欲求をどうにか堪えながら、耐え忍ぶこと苦節数年。

ようやくその術式が完成し、懐かしの我が家に帰り着いたときに思わず泣けてしまった。

日常つて素晴らしい、平和つて素晴らしいと実感しながら、元の穏やかに平和な日々に戻った有紗だったが、それ以来、ふとした瞬間にまた別の平行世界に「落ちる」ことが多々あった。

それはもうびっくりのバリエーションで、日本の戦国時代のようなどころから、所謂剣と魔法の世界まで何でもござれた。

どうも、アホオヤジが有紗を召喚したときには封鎖空間に綻びが生じたようで、そのせいであちこち歪みが生じているらしい、というのが彼の言だ。

しかし有紗は 次元転移 の術式を身につけているため、余りおかしな歪みの波に邪魔さえされなければ、すぐに元の座標に帰ることが出来る。

中々興味深い世界も多々あるし、「落ちた」先で色々と研究資料を採取して、アホオヤジの研究室に転送するのも、手軽なアルバイトのようなものだ。

因みに報酬は、彼の奥方（家事万能の超美人。許せん）の手作り料理と、そのレシピである。

そんなこんなで、高校入学を機に一人暮らしを始めた小さなアパート暮らしにも少しづつ慣れつつある今日この頃。

はふ、と伸びをしながら、履き慣れたランニングシューズの爪先を床に落として、ボディバッグに部屋の鍵を入れ、携帯電話にダウンロードしたお気に入りの洋楽を奏でるヘッドホンを耳に掛ける。

朝の六時、一時間余りのランニングコースを今日も走り込むべくアパートの階段を降りた有紗は、まだ少しひんやりとした空気を肺一杯に吸い込んだ。

河川敷をきつちりと舗装する遊歩道に入ると、きらきらと輝く水面が眩しい。

桜並木が真っ盛りだな、と思いながら、すれ違つて愛大家の方々が連れている愛くるしいわんこたちに癒される。

他に見掛けるのは、ダイエットをしているおばさま、仲の良い老夫婦、同年代の人間もちらほらと。

今日も良い天気だなー、と平和そのもののことを考えながら、背の高い、黒いトレーニングウエアの青年とすれ違つたときだつた。

「うわー!?

引きつった悲鳴に、反射的に振り返る。

田の前の空間が、歪んでいた。

ぐにゃりと眩暈のするような歪んだ景色が、青年を無理矢理吸い込もうとしているのを田の当たりにした有紗は、咄嗟に手を伸ばしていた。

(どこのアホよーー!?)

内心で絶叫しながら地面を蹴つて、溺れる人間のように必死に伸びられた青年の手首を掴む。

間に合わない。

召喚 の術式は、既に彼を捉えて、切り離せない。

しかし、こんな滅茶苦茶な術式では、次元を越える衝撃に耐えきれず、彼の肉体は粒子レベルまで粉々になつてしまつ。お伽話のように、竜巻で巻き込んで目的を引き寄せようつた乱暴なやり方に呆れる暇はない。

構築式を計算し、展開。

取り敢えず、この式だけは無意識レベルで起動出来るというのも、少なくとも「女子高生」のスキルじゃないよね、と頭のどこかで声がするけれど。

(・・・ 絶対防衛 ! !)

どこに「落ちる」にしても、五体満足ならどうにかなる。人間、生きてさえいれば何とかなるものだ。

多分。

第2話 「お仲間、キタ——！」

床から一メートルほど上の空間に放り出され、超強力な掃除機並の吸引力で吸い込まれた勢いのままに床に叩きつけられた有紗は、柔らかな空気の層に受け止められるような慣れた感覚に、一秒前の自分の反射神経に拍手を送った。

しかし、同時に覚えた虚脱感と眩暈に、ぐっと息を詰める。その拍子に唇の内側を噛み切つてしまつて、鉄の味が口の中に広がる。

絶対防護 は、有紗が使える中で上位レベルの防護式だ。

高度なだけに、言靈の詠唱をせずに使うとリバウンドでとんでもない負荷が体に掛かり、暫くろくな術が使えなくなるが、そんなことを言つている場合ではない。

青年はどうしただらうか、とどうにか体を起しすと、すぐ隣にぐつたりと横たわっている姿が目に入った。

慌てて呼吸と首筋の脈を確認して、どちらも無事にして青年をめる。治療系の上位術式など、今の有紗には使えない。

術力が殆ど底を突いていて、ぐらぐらと眩暈をするのをねじ伏せ

る。

(こんなところで死ぬんじゃないわよー)

それでは自分が骨折り損のくたびれもつけだらうが、と人工呼吸と心臓マッサージを繰り返し施しているうちに、かは、と咳き込むよつとして青年の呼吸が戻る。

「・・・・・は・・・・・！」

「大丈夫。落ち着いて・・・ゆっくり、息して」

ゆっくりと、子どもに言い聞かせるように言葉を作る。

何度も大丈夫と繰り返して、苦しげに浅く速い呼吸を継ぐ青年の額に張りつく前髪を払う。

さらりとクセのない漆黒の髪は、有紗のそれよりも少し硬い。

（・・・美青年？）

今まで必死だったからよく分からなかつたが、改めて見てみると、青年は野性味の強い、非常に整つた顔立ちをしていた。

今は朦朧とした眼差しでぼんやりとこちらを見ているが、意思の強そうな切れ長の瞳には、既に大人の色香のようなものまで感じさせるが、それは疲労困憊した故の氣怠さ故だつたらしい。何度か瞬いて訝しげな表情が浮かぶと、やはり年相応の若者らしい雰囲気がある。

と、少し離れたところからひとの声が聞こえて、ようやく有紗は周囲の様子に眼を向けた。

「落ちる」ときには、大抵人気のない場所に紛れ込む。

自然のエネルギーが満ちているせいか、森や草原であることが多く、一度バカでかい湖の真ん中に「落ちた」ときには死ぬかと思つたものだが。

ゆるりと視線を巡らせる、石造りの教会のような建物の中だと気付いた。

足元には、効果限定期陣の名残。

そうして、それを組んだらしい人物と、目が合つた。

金髪、碧眼。

ノーブルな美形。

着ているものも、如何にも上等そうだ。

よし、取り敢えずアレは王子と呼ぶことにしようと思いつながら、知らない言語で話しかけてくるのをきつちり無視して、呼吸を整える。

「・・・ 意思疎通 」

これ位の基礎術式なら、今の有紗でも組み立てられる。

ついでにこの青年にもこの術を掛けておこうと、まだ少し荒い呼吸を継いでいる彼に深く口付けた。

「・・・ つー?」

何やら一気に正氣付いたらしく、じたばたと暴れ出すのを抑え込んで、混じり合つた唾液を青年が嚥下するのを確認して離れると、青年の顔が真っ赤に染まつっていた。

無事蘇生したようで、目出度い。

制御を上手く出来ない初心者が、自分に掛けた術式の影響を他者に与える場合、体の一部を媒介として相手に与えなければならないのだが、髪や爪など食べたくないだろうし、血を与えるのは痛いから嫌だ。

消去法で唾液が一番手つ取り早いとはいえ、実際に行うのは初め

てだ。

ちゃんと効果があつたのかなと首を傾げながら、あんぐりと口を開いてマヌケ面を晒している王子に視線を向ける。

「あんた、誰？」

一拍置いて、答えがあつた。

「アウノ王國国王が第四子、ヴァンフレッヂ=ディノ=ハウザリエ=アルノ。闇の子よ。我に名を『え、契約の成就とせぬ、

「・・・・・」

「・・・・・」

召喚。

はい、そーゆー口トでしたか。

というより、ホントに王子様だつたんですね、と韻晦している場合ではなく。

頭痛でも覚えたかのように額を押えた青年が、低く呻く。

「・・・何だ『え、何のぞいせり?』

「あの・・・」のひどが何て言つてたか、分かりました?」

「分かつてたまるか、あんな電波語。日本語上手いのは認めるけどな」

よし、成功。

「あなた、ちよつとだけど心臓と呼吸止まつたんですよ。無理しない方がいいです」

「へ？」

「心臓と人間呼吸で戻しましたけど、頭痛とか、吐き気とかあります？」

心配して顔を覗き込むと、途端に顔に朱を昇らせて、ぱっと顔を背ける。

・・・中々、純情な性格だつたらしい。

「ひょっとして、ファーストキスだつたらしました？」

「・・・」

図星か。

「エリはひとつ、救命活動といつて、お互いにノーカンといつてにしませんが」

真面目に言つたのに、青年はぎしがしと軋むよつた動きでエリを見ると、両手で頭を抱えてしまつた。

「ちよ・・・ちよつと、待て。何だこりや。どんな夢だよ」

その気持ちとは、とてもとてもよく分かる。

有紗もまたに地球時間で二年前、同じことを思つたものだ。

いきなりこんなファンタジックでトリックキーなイベントに強制参加させられて、パニックに陥らない方がおかしい。

けど、すみません。

気分は正直言つて、「お仲間、キター——！」です。この気持ちを共有出来るひとが現れてくれて、そんな場合じやないと分かっていても、とてもとても嬉しいです。

「あの、藤沢学園高校一年の、七瀬有紗です。あなたは？」

今更ながらの自己紹介に、青年が虚を突かれたように顔を上げた。

「・・・藤沢三年の、志波和馬」

その答えに、きょとんと瞬く。

「同じ学校でしたか」

「どうか、まだ高校生だったのか。

いい体格をしているから、てっきり大学生かと思った。

言われていれば、確かに肩幅は広いが、その厚みはそれ程でもない。

うん、実に将来が楽しみだ。

「みてえだな」

「・・・おい」

「藤沢つて校舎がキレイでいいですね。去年改築したばかりで
したつけ」

「ああ。旧校舎の方にはあんま行くなよ。ろくでもねえ連中の溜ま
り場んなつてるからな」

「おー」

「やうなんですか？気をつけます。ええと、志波先輩？あの」

「和馬」

「おー・・・お前達」

「え？」

「志波つて呼ばれんの好きじゃねえんだ。和馬でいい」

「じゃあ、和馬先輩で・・・」

「おい！お前達は魔族のくせに、召喚者の儀をこつまで無視してい
るつもりなんだ！？」

「きなりキレた堪え性の無いヴァンフレッドに、和馬がげんなり
と肩を落とした。

「誰が魔族だ、オラ」

「ええ！？」

「オレは人間やめた覚えなんぞ、一度もねえぞ！」

がーん、と背景に文字が浮かびそうな程ショックを受けたらしいヴァンフレッドに、和馬は心底嫌そうに溜息を吐いた。

「つか、オレ的には夢オチ希望なんだけど」

「和馬先輩、気持ちは分かりますけど、私はこんなアホっぽい王子様の夢を見る趣味はありません」

「奇遇だな、オレもだ」

「でも、取り敢えず現状説明出来るのってこの王子様だけみたいですし、お話でも聞いてみます?」

「そうだな、と和馬が疲れた目を向けるより先に、ヴァンフレッドはがっくりと床に手を着いてへたり込んでいた。

落ち込んでいる様子が、非常に分かり易い。

「そんな・・・僕はまた、失敗してしまったと言つのか?私財をはたいて高価な魔法石を買い漁り、試行錯誤を繰り返し、寝る間も惜しんで研鑽を積んできたと言つのに・・・!」

「・・・何言つてんだ、『コイツ』

「ナルシストみたいですね」

「誰がナルシストか!大体、お前達は何者だつ!僕の感動を返せ!」

「知るかボケ。どうでもここから、わざわざおしゃりを元の場所に戻せ」

「それは無理だ！」

「威張つて言うなー。」

「そこはふんぞり返るといふじやなこと思つたのですけど」

ふたりのツツ パリも何処吹く風、ヴァンフレッドは何故か偉そうに腕を組んだ。

「お前達を召喚するのに使つた魔法石は、どれも古代遺跡から発掘された、秘宝と言つていいものばかりだつたのだ。この国広じと言えども、こんな無茶なことを出来る勇者は僕くらいのものだ！」

アホだ。

清々しい程のアホが、ここにいる。

絶句した有紗の隣で、やはり畠然としていた和馬がふるふると肩を震わすと、がっしと手近なところにあつた拳大の石を掴んだ。

「ふざつけと、なーつー。」

次の瞬間響いたのは、凄まじい轟音と鈍い振動。

もうもつと立ちこめる煙に咳き込みながら、有紗は自分が投じた石があつさつと分厚い石壁を破碎したことに硬直する和馬と、同じく凍り付いているヴァンフレッドの姿を見て、いつそ本当に夢オチだつたらいいの、元のところへ戻る」と思った。

第3話 王子様はハリソンです。

「この建物は、ヴァンフレッドの領地にある古びた教会で、数年前に新しい建物がもつと交通の便のいい場所に建てられてから、彼が隠れ家として使っているのだと言ひ。

「王子と言つても、僕は側室の子なものでな。弟のルカリエッドが王太子となつてゐるから、まあ有る程度の自由はあるのだ」

「弟さん、お幾つですか?」

「もつじき十歳になる。我が弟ながら、氣性の良い愛らしさ子どもなのだが、少々体が弱いのだ。余り王宮から出ぬことも出来んのが哀れでな」

有紗の淹れたお茶を一口含み、ヴァンフレッドは軽く皿を壁つた。

「美味しい」

「ありがとうございます」

「いや、實に美味しい。お前、僕付きの侍女として王宮に来るといい

「すつとぼけたこと言つてないで、わつさと説明してください。あなたがお茶を飲みながら話をすると言つたから淹れて差し上げたんですよ。どうして和馬先輩が、こんな非常識な体になつちゃつたんですか?」

じりりと睨み付けると、ヴァンフレッドは分かり易く狼狽えて視

線を泳がせた。

和馬はと言えば、茫然自失状態から立ち直るなり、素手で岩の残骸を碎いてみたり、一抱えもある岩を持ち上げてみたりと自分の力を確かめた後、なんじゃこりゃーーと絶叫した。

その途端、和馬の口から吐き出された炎が一瞬で傍にあつた棚を灰にした。

そうして今は、これは夢だこれは夢だとぶつぶつ呟いているわけなのだが。

「う・・・うむ。」これは、あくまで憶測なのだが

落ち着かなく組んだ両手の指を動かしながら、ぼそぼそと。

「僕は召喚の魔法陣を組む際に、火竜の牙、水竜の鱗、地竜の爪、風竜の角を封じた魔石使ったのだ」

「・・・よくそれだけ集めましたね」

「僕は金持ちなのだ。賭け事で負けたことはない」

「成る程」

つづづく、変わった王子さまである。

「ものの本には、処女の生き血を捧げると書いてあつたのだがな。いかな目的があるうと、そのような外道な真似が出来るわけがなかう。それで僕の知る限り、最も力のあるものを代替にしようと思

つたのだ

「『』立派です。後でその本を見せて下せ」

「つむ。といふどいふ掠れて読めなかつたのだが、どうせその陣は、生け贋を召喚したものに餌として与える、と言つ物だつたよつだ。・
・だから、恐らく

言葉を濁した、ヴァンフレッシュの代わりに、ずばっと呟つてゐる。

「王子様が用意した、竜の牙だの鱗だのの力が、全部和馬先輩の中に入っちゃつた、といふことでしょうか」

「そ・・・そうではないか、と。まさか人の身に、四竜全ての力を受け入れる器があるとは思わなんだが」

「取り敢えず、火は吹きましたけど・・・」

他にも水やら風やらを出したりするのだろうか。
土は出されても困る。
生き埋めは遠慮したい。

「あ、和馬先輩。王子様を殴つちゃダメですよ。そんな馬鹿力で殴つたら、あつところ間に顔面が潰れたトマトです」

「・・・」

今にも殴りかかりそうな気配を察して声を掛けると、ぎりりと奥歯を噛んできつと拳を握り締める。

「それで？王子様は、どうしてそんなレアな宝物を使ってまで、こんな真似をしたんですか」

基本に立ち返つて訊ねてみると、ヴァンフレッドはいかにも無念そうに溜息を吐いた。

「ルカが喜ぶと思ったのだ」

「……は？」

「弟は体が弱いと言つただらう。だから、僕は外に出る度色々と面白いものを見せてやつていたのだが、もうすぐあれの誕生日でな。ここはひとつ、これまでにない愉快なものを見せてやりたいと思つたのだ」

「……」

「……」

有紗はおもむろに、まだ殆ど中身の残つてゐるティーカップを全て盆の上に回収し、何をすると皿を寄せたヴァンフレッドを無視して和馬を振り返つた。

「和馬先輩。一徹返し、お願ひします」

次の瞬間、和馬の右手ひとつにひっくり返されたテーブルに弾き飛ばされた王子様が、それに押し潰される格好でべしゃりと床に張りついていた。

「・・・つまり、何だ。アリサは魔法が使えるのだな？」

鼻血を止める綿を詰めているせいで、くぐもつた声の「ヴァンフレッド」が、妙にきらきらした田で見つめてくるのを、有紗は思い切り顔を顰めて睨み付けた。

「！」では、そんな風に呼ばれる技術かもしねませんけどね。王子様、一度とこんなことするんじゃありませんよ。シロウトが手を出していいものじゃないんですからね」

あれから有紗は、自分がかつて同じように迷惑な事態に巻き込まれた経験があること、今は無理だが、元の世界に戻る術はある」とを彼らに説明していた。

「有紗。本当に、んなこと出来んのか？」

困惑しているような顔でそんなことを言つ和馬に、はい、と肯ぐ。

「マジかい」

「すぐつてわけには行きませんけど・・・今はそこアホ王子様のお陰で、ろくな術式も使えない状態なので。回復するまでは、ちょっと無理です」

「・・・そんなんダメージ食らつてんのか？」

「今使えるのは、普段の五%くらいですかね。まあ、暫く食べて寝てれば、その内元に戻りますから」

「そうか、とほつとした顔をする和馬に、こいつと笑む。

「大丈夫ですよ。幸いでつかいお財布もある」とですし、焦る「」とは無いです」

「おー。その財布どこののは僕のことか?」

「当然です。感謝料、迷惑料、合わせてどれだけ請求しても足りるもんじゃないですよ。」こちらにいる間は、衣食住全て王子様に面倒見てもらいますからね。拒否権なんてあると思つてんですか?あんまりアホなこと言つてると、今度はそのお綺麗なツラを「田と見られない造作に変えて差し上げますよ」

「・・・・・」

「・・・・有紗。お前、ひょつとして怒つてますよ?」

「」の王子様のお城に、流星群を降らせてやりたい位には怒つてますよ?」

「つもとも申し訳なかつた!許してくれー!もつ!一度とこんなことばしない!僕が悪かつたー!」

途端にがばりと頭を下げたヴァンフレッドを、ふんと冷たく一瞥する。

「最初つからやつてればいいんですよ、アホ王子」

「城なんぞどうなつても構わんが、ルカだけは見逃してくれ!」

「・・・・・」

「・・・・底抜けのブランコンだな、」

全く、変態ほど厄介なものはない。
気を取り直して、和馬に向き直る。

「帰る方法に関しては、まあそんな感じで後回しにしますけど、問題は和馬先輩ですよね。そんな馬鹿力じや、日常生活にも支障出るんじやないですか？」

しかし、その問い掛けに、和馬はあっさりと首を振った。

「いや？普通に物も持てるし、田やら耳やらも普通レベルに調整出来るみてえだし。結構大丈夫そっだぞ」

「順応早いですね・・・」

「開き直った」

実に頼もしい、と感心していると、もう復活したらしいヴァンフレッドが口を挟んできた。

「ではお前達、まずは城に来るといい。いや、何しろ僕が自由に使える金は、今回のことでの全て遣りきってしまったものでな。暫くは、僕の客人という形で招かせてもらいたい」

あつさつと言ひづ、ヴァンフレッドに、和馬が首を傾げた。

「セツニヤ、魔族つてこいじやどんなのを言つんだ？」

地球で一般的に（？）言われている魔族は、なんとなく「ヘンな力を持つ良くないモノ」だ。

しかし、ヴァンフレッドは大して身構えもせず口を開いた。

「む？ そうだな、魔族というのは、魔力操る異形の者達の総称だ。多くの魔術師は、彼らと契約することでその力を己のものとしている。基本的な体色は黒で、稀にいる白い魔族は珍重されるな。王宮魔術師のカーンのところへ行くと、黒い鬼が一本足で立って茶を出してくれるぞ」

なんだそのメルヘンは。
ちょっと見てみたいと思つてしまつたじやないか。

「人型を取れるのは、高い魔力を持つ者だけと聞く。・・・改めて訊くが、カズマは本当に魔族ではないのか？」

「どんだけナチュラルに喧嘩売りやがんだコイツは

「悪気が無さそうなのが、またムカつきますね」

じつとつとした視線を向けると、ヴァンフレッドは慌てたよつて手を振る。

「い、いや、魔族の特徴は黒毛だけではない。瞳が紅色というのもそれなのだ。白い魔族も瞳は紅い。髪の色は魔術で変えられても、瞳の色だけは変えられないと言つしな」

そうなのか、と目を瞠つた和馬が、思い出したようにこちらを向

いた。

「それ、カラコンじゃねえんだろ？」

どうやら、有紗の緑色が混じった瞳の色が気になつたらしい。まあ、良くあることだ。

「自前ですよ。けど、困りましたね。ひょつとして、髪が黒いだけで人間扱いされないってことですか？」

「む？ そんなことはないぞ。異国の人間には、黒髪の者もいるからな。南の方では、髪だけでなく肌も褐色で小柄な者が多い」

「やつは先に言え、ボケ」

全くだ、と呆れて見遣つた先で、ヴァンフレッドが先程淹れ直した紅茶を啜る。その仕草はこれ以上無い程洗練されたものだが、何しきまだ鼻に綿が詰まつてゐるため、間が抜けていることこの上ない。

結局、ヴァンフレッドと共に王宮とやらに赴くことになつたのだが、何しきこには辯鄙な場所だという理由で忘れられた教会である。

ヴァンフレッドは馬があるし、和馬も先程の様子から察するに体力は有り余つていそうだが、有紗は一度休ませて貰わなければ、長時間歩くことなど出来そうにない。

少し埃っぽい客間のベッドで一眠りさせてもらひつことにして、スニーカーを脱いで簡素な寝台に倒れ込んだ途端、有紗の意識はあつさりと眠りの世界に吸い込まれて行つた。

第4話 美形はお得です。

田を醒ましたときの体の感覚で、大体眠っていたのは三時間位だろ？と思しながら、有紗はまだ少し眠気の残っている頭をふるりと振った。

石造りの壁、小さな机と椅子だけがある小さな部屋。かつて、この教会を守っていた誰かが暮らしていた場所なのだろうか。家具の大きさからして、この部屋の主はきっと女性だりうと、そんなことをぼんやり思う。

のそのそと起きだして、少し軋むドアを開いた有紗は、その途端に跳ね起きた和馬に、きょとんと瞬いた。

「・・・何やつてんですか？」

番犬よろしく部屋の入り口に座り込んでいたらしい和馬は、しかし酷く焦った様子で詰め寄ってきた。

「言葉！」

「はえ？」

「だからーお前がいなくなつて少ししてから、いきなりあのアホと言葉が通じなくなつちましたんだよーどうにか身振り手振りの手旗信号で、あいつがオレらの服買いに行つたらしいのは分かつたけど！」

「・・・あー・・・すみません。言つの忘れてました

「何を！」

「ああ、と掴み掛からんばかりな勢いの和馬に、ですから、と落ち着いてくれるよう両手を上げる。

「私が寝たので、言葉が通じるようにしてた術式が解除されちゃったんですね。今掛け直しますから。・・・ 意思疎通 」

今までにはいつもひとりだつたから、自分が眠ることでこの術式が解除されることなど、まるで意識したことがないかった。

これからは、和馬が起きている間は眠らないようにしなければならないな、と思いながら、心許なそうにじちらを見ている和馬を見上げる。

（・・・まずは、可愛いですよ？その捨てられた仔犬のような瞳は反則だと思います！団体は大型犬つてとこですけど、それでもとっても可愛いです！）

じつと見つめてくる漆黒の瞳に、そんなことを思つていると知られたら大変なことになつそうだ。

年頃の男の子は纖細だ。

「・・・わつ、いいのか？」

「え？あ、今のは私自身に掛けただけです。他人の意識に干渉するような術式は滅茶苦茶複雑なんです。今の私には使えません」

普段ならじうといつともないのだが、制御力が著しく落ちまくつていてる今の状態で他人に干渉することなど、恐ろしくてとても出

来ない。

「あ？ けどお前、やつときは」

「だから、術式が掛かつている状態の私の一部を和馬先輩に移すことで、術式の効果を共有できるようにしてたんです。といふことで、いいですか？」

「・・・は？」

意味が分からぬ、と言つよつに目を瞠つた和馬にはっきり言わなければ通じないか、と言葉を続ける。

「血は痛いから、嫌なんです。人工呼吸だと思つて下せい。これもお互いノーカンということです」

「・・・」

途端にぶわつと真っ赤になつた和馬に、つぐづぐ純情なのだなと何だか申し訳ない気分になる。

有紗とて、他人と唇を重ねるなど好きでしたいわけではないが、あの研究室時代に加え、これまであちこち「落ち」まくつた世界で過ごした時間を考慮すれば、精神的には実際よりも十年ばかり年を重ねているだらう。

肉体年齢の方は、元の世界に戻つたときに、時間軸に合つた姿に戻しているものの、中身の方は如何ともし難い。

つまりは、ファーストキスだなんだと騒ぐような精神年齢ではな

い。むしろ、和馬の反応が可愛いなぞと呑気に思つてゐる。

元々そういう方面に淡泊な性質であることも自覚しているし、何より和馬のような美青年相手なら生理的嫌悪感も無い。

つづづく、美形というのは得である。

これがもし生理的に受け付けないタイプだったなら、言葉位氣合いでどうにかしろと放つて置いたかもしないな、と思つたところで、和馬にとつてはどうなのだろうとふと思つた。

「・・・ええと、嫌なのでしたら無理にとせ」

もし和馬に恋人がいるのなら、その相手に義理立てもあるだろうし、考えてみたら最初にしたことも余計なお世話だったかも知れない。

まあ、済んだことをぐだぐだ言つても仕方ないし、勘弁してもらおうと嘆息していると、不意に伸ばされた和馬の腕が有紗の肩に触れる寸前で止まつ、逡巡するようにそこで彷徨う。

「お前じゃ・・・嫌じゃ、ねえのかよ」

押し殺したような声に、首を傾げる。

「嫌だつたら、最初から言つてしませんよ。と言つか、物凄く今更です。私が和馬先輩を蘇生させるのに、何回人工呼吸したかなんて力ウントしてませんけど、余裕で一桁は行つてます」

「・・・そ、れとこれとは、別のような気が」

「正直に言えば、一々通訳するのもちょっと面倒なので、術式を受けてくれた方が助かるのですけど」

本音をぶつちやけると、額を抑えて低く唸る。

さてどうしたものかと思つていると、馬の蹄の音が近づいて来て、思つた通り何やら荷物を抱えたヴァンフレッシュが戻ってきた。

彼は有紗と目が合つと、おや、といつ顔をして荷物をテーブルに置いた。

「目が醒めたのだな・・・と、僕の言つていることが分かるか？」

「はい。私の説明が足りなくて、驚かせてしまつたみたいですね。すみませんでした」

「はは、いや参つたぞ。それまで普通に会話出来ていたものが、突然互いに何を言つているのか分からなくなつてしまつたのだからな。中々面白い経験だった。言葉が通じていたのはアリサの魔法のお陰だつたようだな」

楽しげにそんなことを語るヴァンフレッシュも、これで中々肝が据わっているらしい。

和馬のあの非常識な力を田の辺たりにして、そんな相手と言葉が通じなくなつたら、多少は狼狽するものなのではなかろうか。

まあ、ただ単に鈍いだけといつ可能性の方が高いが。

しかし、おい、と和馬に声を掛けられて振り向けば、酷く複雑そうな顔を有紗とヴァンフレッシュに交互に向ける。

「オレには、お前が日本語喋っていて、あいつが宇宙語喋つてゐるが、いかにしか聞こえねえんだけど」

「む？ カズマの言葉はもう通じんのか？」

「あ、ええと、ちょっと待つて下さるが、

やつぱつ、これは面倒だ。

よこせと伸びて和馬の顔を両手で挟み、問答無用で唇を重ねる。ぱきっと硬直したその口の中に舌を伸ばし、相手のそれを軽く舐めて離れると、耳まで真っ赤になっていた。

「王様？ 何か喋つてもらえます？」

「ひ、うむ？ いや、その・・・それでカズマとも会話が出来るようになったのか？」

「どうですか？ 和馬先輩」

「・・・な、なつた

「へへへと子どものように背く和馬に、ほつとしながら軽く首を傾げる。

「嫌かもせんけど、慣れてくださいね。元の世界に戻るまでは、毎朝しなきゃなんですから」

「・・・」

ああ、いけない。
可愛い男の子が恥ずかしがつてゐるのを見て、ちょっとといいかも
なんて思つてしまふなんて、変態のようではないか。自重しなけれ
ば。

「成る程、口づけで魔法の効果を共有するわけか」

「そんなよつなものです」

「ふむ。異国の言葉も、全て理解出来るよつになるのか？」

「そうですね。固有名詞以外は、大抵自分が普段遣つてゐる言語の
よつに認識されます」

「それは便利だな・・・僕にもその術は使えるよつになるか？」

「一日睡眠四時間で、起きてこむ時間の殆どを術式の勉強につき込
めば、一年くらこで出来るようになると思こますよ」

「や、そうか・・・」

軽く口元を引きつらせたヴァンフレッドは、そうだとわざとひらじ
く言いながら、テーブルに置いた荷物をぽんと叩いた。

「お前達の着る物を用意したのだ。その格好では、髪の色がビリビ
リ言つ以前に目立ちすぎてしまつからな」

「やつですね。ありがと「アゼコ」ます」

素直に礼を言つて手渡された包みを受け取り、部屋の中に戻つて手早く着換える。

常識の飛んでいるヴァンフレッドがチヨイスした割りに、出てきた衣装は随分と可愛らしくデザインだった。

柔らかな白い生地の中着は、胸元にレースがあしらわれている。前を紐で編み上げて調整する、ふんわりと裾の広がるワンピースの緑色は、恐らく有紗の瞳に合わせたのだろう。

残念な頭の持ち主でも、服のセンスはいいらしい。
足元だけは元のスニーカーだが、真新しい白なので、それもさほど違和感が無い。

ヴァンフレッドから軍資金をふんだくつたら、まずは下着を購入しなければなど考えながら部屋から出て、男一人がいる居間へ向かうと、和馬も与えられた衣服に着替えていた。

（おお！美青年は何を着てもサマになるー）

こちらを見て、驚いたように口を瞠つた和馬は、ヴァンフレッドと似たような素材の黒のズボンに、ネックの生成のシャツ、それに幾つもの小さなベルトで前を留めるごついイメージのジャケットを羽織ついて、それらは和馬の精悍な容貌にとても良く似合つていた。

黙つてさえいれば上品な美形である、ヴァンフレッドと並ぶと、とんでもない目の保養である。

「ありがとうございます、王子様」

「うむ。我ながら、よく似合ひの物を選んだと思つ。アリサ、実に可愛らしきぞ」

「流石王子様ですね、さういふとそんな誉め言葉が出てくるなんて凄いです」

「む？女性を褒めるのは当然だろ？」「

「いえ、私たちの世界では、そつでもないんですよ。若い男の子が女の子を褒めると、まず口説いているものと判断されちゃうんですね。そう言つた誤解はお互い不幸の元ですし、大抵皆、決まつた相手のことしか褒めたりしません。社交辞令は枯れた大人の専売特許です」

「成る程、文化の差だな。我々はまず、女性に会つた場合は、相手を褒めなければ無礼とされる。容姿自慢の女性を怒らせるのは、非常に恐ろしいぞ」

しみじみと実感の籠もつた言葉に、それは分かる、と肯く。

「王宮に行つたら、やつぱりそうしないと問題ですか？」「

「お前達は、僕の客人だ。好きに振る舞つて構わないが、アリサはひとりでは行動しない方が良いな」

「？何故ですか？」

「お前のよつと愛らしい娘がひとりで出歩いていたら、男達に襲つてくれと言つてゐるようなものだ。それは王宮でも街中でも同じことだ」

「何ですかそれは。仮にも一応王子様なり、もつと治安を向上させ下さい。若い女の子が安心して出歩けないなんて、景気が悪い話ですな」

むつと眉を寄せて腕を組むと、ヴァンフレッドは仕方がなことでも言つたげに肩を竦めた。

仕事をしる。

第5話 「下半身の衝動も制御出来ないようなヘタレますつことでなさー」

それから、ヴァンフレッドが服と一緒に買つてきたパンとチーズで食事にしたのだが、飲み物として当然のようになりワインを出されたのには、少し参つた。

胡椒で風味付けをされたそれは、少しだけ舐めてみたがどんでもなく辛い上にアルコール度数が半端なく、かつと咽喉が灼けて派手に咳き込む羽目になつてしまつた。

なのに、同じものを口にした和馬は、至極不思議そうな顔をして首を傾げる。

「そんなにキツいか？これ」

「キツいですよー！キツイっていつか、痛いです！」

涙目になりながら、少し炭酸の混じつた井戸水を呷つても、まだ咽喉がひりひりしている。

「つむ、若い娘向きではなかつたかもしれん。済まんな、次は甘めのものも用意する」

「いえ、水でいいです。水がいいです。爽やか炭酸水バンザイです。ていうか、和馬先輩。未成年のくせして、何当然みたいにワイン飲みまくつてんですか」

「いやこれ、美味いし」

「なんだ、お前達は未成年なのか？幾つだ

意外そうなヴァンフレッドの問い掛けに、それぞれ十五、十八、と答えると、ふむ、と言しながらワインを一口含んだ。

「我が国では、十六が成人だ。しかし、未成年だからと書いて、酒も制限されとはいひないぞ」

「だと？」

「・・・いいんです、私は日本の法律を守るんです。つて、和馬先輩、もう十八なんですか？」

「ああ、一昨日なつたばつか。ヴァンは幾つなんだ？」

「僕は十九だ。・・・しかし、アリサは本当に可憐うしいな。どうだ、僕の側室にならないか？」

な、と絶句する和馬を尻目に、有紗は剣呑に眼を細めた。

「寝言は寝てから言つて下さー

「いや、本気なのだが」

「ど」が本気ですか。側室って言つてる時点でアウトです。本命がちゃんといふのに他の女を口説いてんじやありません。生物学上、男の人があちこち種付けしたくなる気持ちは分かりますが、女からしたら巫山戯んなつて話ですよ。

浮氣は男の甲斐性だなんて迷信を信じてるわけじゃないでしょ？奥さんひとり大事に出来なくて、何が甲斐性ですか。

下半身の衝動も制御出来ないよつなへタレはすつこんでなさこ

「・・・・・」

「・・・・・」

「和馬先輩も。お酒くらこはいいですけど、ここのアホ王子に感化されて、旅の恥はかき捨てなんて真似したら、私はひとりで元の世界に帰りますからね」

じりりと横目で睨み付けると、音がするんじやないかと思つてからいの勢いで責やめる。

「わわわ分かってる！って、するわけねーしーオレをここのアホと一緒にすんな！」

「そうですか。ならいいです」

「つかお前、そのツラでそのオカソン的性格とか、ちょっとどうかと思つた」

「ああ、ここの容姿は結構便利ですよ？か弱い女の子のふりをすれば、大抵のひとは親切にしてくれますから」

「確信犯かよ！」

「利用出来るものは利用しますよ。それに、便利なだけでもないです。誘拐未遂、拉致未遂、暴行未遂、痴漢にストーカー、もう男の人に夢も希望も持っちゃいません」

ふつと遠い田をすれば、男ふたりが揃つて押し黙る。

「あ、見てる分には美少年も美青年も大好きですよ？その点、ふたりともばっちりです。是非そのヴィジュアルを維持して下さい。とても田に楽しいです」

「……いや、お前……」

「……苦労したのだな……」

何だかどんよつとされてしまったが、女がひとりで生きてこいつと思えば、強くなければやつていられないのだ。

「といふか、王子様は結婚してたんですね」

流石、腐つても王族。

結婚するのも早いらし。

しかし、ヴァンフレッドは疲れたように苦笑して溜息を吐いた。

「隣国クレタの三の姫が、一応僕の正室となつてはいるが、結婚式でしか顔を合わせたことはないな」

「え？」

「は？」

「じゅやひ、他に好いた男がいるじゅくてな。常に部屋の前に侍女を置いていて、何度も訪ねても追い返されるものだから、もつ顔もよく思い出せん」

「なんですかそりや。ダメダメじゃないですか」

「何でそんな女と結婚なんてしたんだ?」

「さあな。父上が決めたことだから、よく分からん」

あつさつとそんなことを語り、今更ながら理解する。

「・・・そりや、王子様つて王子様なんですもんね。そりや、政略結婚ですよね」

「庶民には理解出来ねえ世界だな・・・」

そんな相手が奥さんなら、愛人のひとりも欲しくはなるか。自分が愛人になるのは真っ平ご免だが、その気持ちは理解出来な
くはない。

それから、自分と和馬が脱いだものを影の中に作った異空間に保存し(ちょっとふたりに驚かれた)、いざ王宮に向けて出発となつたのだが、ヴァンフレッドの馬が和馬が近寄るだけで怯えてしまつて、仕方なく少し離れてその後を追うことになった。

「・・・結構、動物には好かれる方だったんだけどなあ」

和馬は冗談抜きに、少々落ち込んでいるらしい。
だが、仕方がない。

動物は、自分より強い生き物の気配には敏感だ。

「後で、王子様に和馬先輩を召喚するのに使つた本を見せてもらいますから。そのままじゃ、どんなびっくり人間よりハイスペックですもんね」

「……お前、これで元気か出来んの?」

ぼやきながら、ひょいと和馬が振つた指先に、小さな炎が浮かんでいる。

有紗が眠つている間、あれこれ試していたらしい。

「やつてみないと分かりません。ダメなら他の方法を探しまじょう

「……そうか。そうだな」

はあ、と苦く息を吐いた和馬が、ふと改まつた口調で有紗、と名を呼んだ。

「何ですか?」

「いや……その……ありがとうな」

「……」

「なんつーかいい、最初から世話をなりつぱなしで、借りばっかり出来ちまつて。つか、これからもお前頼みなことばっかで、すげえ情けなくて参るんだけど。……オレに出来ることがあれば、何でもすっから言つてくれな」

「の年頃の青年にしては、随分と素直な言葉に、少し驚く。

一応、見た目は年下の少女に借りを作るなど、さぞ嫌がりそうな

ものなの」、卑屈になるでなく、真っ直ぐに感謝を向けてくれるのが
くすぐったくも清々しい。

「それじゃ、遠慮なく」

「ん」

「はい。ここまで運が悪いって共通項も何かの縁ですし。一緒に頑張りましょう」

「は？」

「いや、正直自分並に運の悪いひとが身近にいるなんて思いもしないで。私も大概ですけど、和馬先輩の運の悪さには同情に値します。むしろ、よく正気を保てているなど感心します」

心底真面目に言つたのに、和馬は何とも言えない奇妙な顔をしたかと思つと、ぶはつと吹き出した。

「まあ・・・一応、褒められてるモンだと思つとくけどな。オレはむしろラクキーって思つたぜ」

「・・・はー?」

何の冗談だ。

「この状況のどこに幸運要素があるのだ、と首を傾げた有紗に、和馬はその大きな手でくしゃりと髪をかき混ぜてきた。

「ひとりだったら、そりゃもうどん底もいじだつたらうけどよ。

お前がいるから、こんな状況でも、何か楽しめそうな気がするもん
な」

「楽しみですか・・・？」

・・・何だらう。

心臓が、不思議な感じに、跳ねた。

「今んとこな。まあ、なるよつにしかならねえだらうて、感覚がど
つか麻痺してんのかもだけど」

「ああ、それは分かります。余りにも非常識なことが目の前で起こ
ると、取り敢えず現実逃避のひとつやふたつは基本ですよね」

「妙に慣れた感のある感想が寒いぞ」

「好きで慣れたわけじゃないんですけど。で、和馬先輩は、火の他
にも何か出せるんですか？」

ちょっとわくわくしながら訊いてみると、そうだな、と言ひなが
ら今度は指先にシャボン玉のような水の球を作り出した。

「おお、水筒要らずですね！」

術式の構成もへつたくれもなく、大気中の水分を集めてみせる非
常識な力に感動する。

「・・・お前さ。そのデスマスロ調、しなくていいぞ」

「?ですか?」

「ああ。普通に話せ、普通に。先輩つてのもこりねえから」

「ぶつかりぬうな口調で言われて、分かった、と呟く。

「何か意外。体育会系っぽいから、そういうの気にするひとかと思つた」

「やつや、部活の後輩がタメ口なんかきいたら、速攻シメるけどな」

「部活つて、何やつてるの?」

「バスケ部」

「くえ、モテるでしょ?」

「・・・あなの。オレには、年の離れた姉が、ふたりいる」

「きなり変わった話題にきよとんとする、和馬が苦虫を歯み潰したような顔をして言葉を続けた。

「あいつは、弟のものは自分のモノ、弟と書いてパシリと読む、粗つた男の前では別人になりきる天才だ。バリバリの猛禽肉食系女子を見て育つたオレは、お前じやねえが、その辺の女に夢も希望も持つてねえ」

「・・・ええと、女嫌い?」

「嫌いなわけじやねえが、女が計算して作った女らしさつてヤツはぞつとするな。くねくねされるとバカっぽく見えるし鬱陶しこ」

「いやいや、そんなこと言つてたら、いつまで経つてもカノジョなんて出来ないよ? 女の人は普通、気になるひとの前では多かれ少なかれ計算するから」

「別に、今は部活で手一杯だし。周りの女もつるせえばっかでどれも同じに見えつからじつでもいい」

それはもう、十分女嫌いと言つのではなかろつか。
折角美青年なのに勿体ない話だ。

まだ和馬の指先でふよふよと浮いている水球をつつくと、壊れることなくつにやつと歪んで、元に戻るつとするのが面白い。

「でも、あれだね。火と水が出せるつことせ、こつでもね風呂に入れていいね」

「ひとつを瞬間湯沸かし器みたいに言つんじゃねえよ」

「いや、大事なとこだから。でも、じつやつてんの?」これ。何の言霊も無しにノーモーションつて、どんな反則技なのよ

「・・・何となく?」

なんだそりや。

第6話 シシ「//」の基本は手刀です。

そんなことを話しながら歩いている内に、細い砂利道が人々の行き交う通りに合流した。

やはりといふか、黒髪はおらず、栗毛や褐色の髪色をした人々が多い。所々に派手な赤毛や金髪も見えるが、和馬を見た人々が判で押したように驚いた顔をするのが少し鬱陶しい。

「パンダってこんな気分なのかなあ」

「やついや昔、パンダに抱きつきたくて檻に入り込んで、がつたり引つ掻かれた男の一コースを聞いたことあんな」

「え、どこの動物園？」

「中国のどつか」

と、何やら馬を止めたヴァンフレッドが、この辺りに住んでいるらしく子どもに声を掛けて、コインを手渡しているのが見えた。

子どもはぱっと駆け出して、その後ろ姿を見ながらヴァンフレッドが馬から降りてくる。

和馬が近寄ると馬が怯えてしまつので、そこに残したまま有紗だけが近づいて行くと、振り返って無駄にきらきらして笑顔を浮かべる。

「今、辻馬車を呼んでくれるよう子どもに頼んだ。城下まではまだ

暫くあるからな

「大丈夫ですかね？」

「幌馬車だからな。カズマは幌の端にでも乗つていれば何とかなるのではないか」

まあ、それならば和馬は馬からは結構離れているだらうし、ダメならダメで歩くだけだ。

しかし、そんな心配は杞憂だつたようで、びっくりするほど大きな馬は、暴れる気配もなく大人しくしていくくれた。むしろ御者の方が和馬の黒髪を見て、ちらちらと不安げな視線を何度も寄越した。

ヴァンフレッドが王宮まで、と銀貨一枚弾いていなければ、もしかしたら断られていたかもしれない。

何だかな、と思いながら、そこはかとなく哀愁を漂わせている和馬と並んで、幌馬車の最後尾に後ろ向きに腰掛ける。

そして、のんびりと動き出した馬車を、遠巻きに見ていた子ども達が興味深そうな顔をして追いかけて来た。

大体、五歳から七歳くらいだろうか。

「どうやら」の辺りの子ども達らしいが、着ているものは皆芸術的な刺繡や装飾が施されていて、この世界の服飾技術の高さを伺わせる。

子ども達がこうして労働力となつてゐるでもなく、のびのびと遊

んでいたれるとこりのせ、この土地の安全性と生産力が高い証拠だ。

どの子どもも皆清潔な格好をしているし、何より好奇心一杯に輝く瞳に隠りがあるでない。

最近は日本でも「知らないひとにも知ってるひとにも絶対にいつにいつちやこけません」と教育されていくことを思つと、随分この国は豊かしげにな、と少し羨ましく感じる。

暫く、つかず離れずと言つた感じでついてきていたが、その中のリーダー格らしい子どもが、なあなあ、と声を掛けてきた。

「やつちのこーちゃん、魔族か？」

「んー~どう思つ?」

子供ものは扱いは慣れている。

こつこつと笑つて見返せば、やばかすの散つた幼い顔に、ぱあつと朱が昇る。

「ええつと、えと、目が赤くないから、違つと思つ?」

「やうだよー、正解ー!」のお兄ちゃんは君たちと同じ、人間です

「でも、こーちゃん、髪が黒いだ?」

「遠いところから来たからねえ。お姉ちゃん達の故郷では、みんな黒髪だよ?」

そうなのー? と子供達が揃って声を上げる。

ハハして子ども達を眺めてみると、髪の色と同じ位、顔立ちも様々だ。西洋的な彫りの深い子どももいれば、東洋的な瓜実顔の子どももいる。

黒髪が見当たらないのが、いつそ不思議な位だ。

「黒髪だと、やつぱり怖く見えるかなあ」

「・・・んー、んん、ちょびつと？最初だけ！ねーちゃんすつげー美人だし、にーちゃんかつけーし！」

「ありがとう。ボクのお父さんは、どんなお仕事してるの?」

「とーちゃんはランプ職人だ！ 街で一番腕がいいんだぞ！」

「凄いね、かつこいいね！」

「おー！ おれもでかくなつたら、こーちゃん達みたいこーちゃんの仕事を手伝うんだー！」

その他の子ども達にも声を掛けてみると、皆某かの職人の子か小さな商売を営んでいる店の子ども達で、中には王宮に奉公に出ている姉がいる、という子もいた。

「前の馬に乗つてゐるに一ちゃん、貴族だろ？剣持つてゐるし、すつげー立派な馬だもんな！」

貴族ではなく王族だが、そこは言わなくていいだろ？

しかし、なんとなく予想はしていたが、やはり剣を持つ人間が普通にそこらをふらふらしている世界なわけか。
ちょっと嫌だ。

「ねーちゃん達は、王宮に行くんだろ? 何しに行くんだ?」

「あの馬に乗つてゐるお兄ちゃんが、招待してくれたの」

「美味しいもの食べに行くのか?」

「王宮のご飯つて美味しいの?」

「そんなの決まってんじやん!」リイのねーちゃんが、お姫様のご飯を味見する係だったんだけど、毎日滅茶苦茶美味しいモン食つてつて言つてたぞ!」

(そ、それつて……)

対子ども用甘やかしスマイルが、思わず引きつる。

しかし、丁度馬車が街の外れに差し掛かつて、子ども達はまたねーと無邪気に大きく手を振つて引き返していった。

ここから城下町まで、馬車でしばらく揺られるらしい。

ほつとして彼らに手を振り返して いた有紗に、呆れたよつた和馬の声が掛かる。

「……お前、一重人格か?」

「何をいきなり、失礼な」

むつと眉を寄せると、和馬の口元が軽く引きたる。

「いや、だつてお前……何あの甘々」

「受けがいいのよ、あれ。子どもは素直だし、ちよつと誘導すれば聞きたいことは話してくれるし、乐でいいわ」

「……子ども相手に情報収集してたのかよ」

「大人と違つて、聞いたことをそのまま話してくれるからね」

「……ああ、うん。取り敢えずもう、何も言わねえわ」

「いや、ここはひとつ突つ込もうよ。私たち、これから王宮に居候すんのよ?」

「あ?メシが美味いんだろ?」

思わず、素で和馬の額に手刀でシッコリを入れてしまつた。こす、と結構いい音がした。

「つにすんだよー?」

「お姫様の『飯の味見係つづいたら、毒味係つてのが常識でしょつがつ」

「オレの中には、そんな常識はねえつ

「ロマンがなーつ」

「毒味係の、どじがロマンだ！」

「そーうじやないわよ！十八年も生きてたら、少しは歴史を題材にした小説やら映画やらから雑学を得るもんじやないの！？そういう成分の全く無い脳みそが、ロマンがないって言つてんの！」

「オレの愛読書は少年ジャ　プだつ」

そんなことを言ひ合つてゐる間に、田的である城を中心高く築き上げられた城壁の門が、緩やかに近づいて來ていた。

王宮、といつ言葉から有紗が想像していたのは、某ネズミ園のシンボルでもある白亜の建造物である。

広い庭園に囲まれた、美しくも壯麗な城。

しかし、目の前に聳え立つその想像より遙かに巨大な建造物は、城というより要塞と言つた方が正しいのじやないかと思ひような威容を誇つていた。

非常時には兵士が詰めるのだろう小窓が幾つもある石組みの城壁にぐるりと取り囲まれ、そこに穿たれた威圧感たっぷりの門をくぐつた先には、美しい庭園の代わりに、練兵場と思われる剥き出しの地面が広がつてゐる。

学校のグラウンドもかくやといつ広さのスペース毎に、一階建での宿舎のような家屋がそれぞれ凝つた意匠の旗を掲げてゐる。

それぞれのスペースでは、沢山の人々が剣や槍、或いは体術の訓練をしていて、かなりの迫力だ。

城門で馬車を降りた有紗と和馬は、そこに控えていた初老の男性に馬を預けたヴァンフレッドについて、石畳を敷き詰めた道を歩いた。

「ここに来るまでに、ヴァンフレッドと王宮に来る理由を適当に申し合わせている。

曰く、

『街でチンピラに絡まれていた王子を、奴隸商人に攫われた妹（有紗）を追つてこの国にやって来た和馬が助けた。

故郷は遙か東方のニッポンといつ島国であり、その住人は皆黒髪である。

和馬と有紗は魔術師（死去）の子どもで、この国の魔術に興味があり、しばらくの間王子の宮で過ごしながら、色々と学ぶことになった

た

といひ、シシロミ所満載の設定だが、この国の常識が無いことや、黒髪であることを正当化し、かつこの世界の術式を調べる理由さえあればいいが、と妙に楽しげなヴァンフレッドの主張を受け入れたのだが、何故に兄妹設定や奴隸商人などという愉快なオプションが盛り込まれているのだろうか。趣味か。

まあ、この国の事情を知るヴァンフレッドがいこと言つているのだから、多分これでいいのだろう。

街中と同じか、或いはそれ以上にびしひと向けられる視線を感じながら、ようやく城本体に辿り着く。

（建設当時のモン・サン・ミッシェルってこんな感じかもなあ）

石造りのどこまでも堅牢な城を見上げて、そんなことを思つ。
映像でしか見たことのない彼の城は、雄壮でありながらどこまでも優美だつた。

しかし、ヴァンフレッドの顔パスで城内に入り、暫くの間ぐるぐると階段を昇つて見ると、そこに広がつていたのはベルサイユ宮殿もかくやといふ豪奢な内装だつた。

すつげ、と和馬が隣で呟くのに、無意識にじへじへと靠く。

これは凄い。

凄すぎる。

一体どれだけ高いんだと見上げてしまつ吹き抜けの天井、どこもかしこもきらきらと輝いているようなその空間は、美術性の高い絵画や彫刻で彩られ、まさにこれぞお城！と言つた感じである。

その華やかな空間に、当然のようにしつくりと溶け込んでいる辺り、やはり彼は王子様なのだなと妙に感心する。

それからまた廊下や階段を幾つも通り過ぎて、中庭を抜けた先にヴァンフレッドの顔があつた。

途中、和馬がどうしてこんなに入り組んでいるんだと文句を言つと、敵に攻め込まれたときに簡単な造りだと困るじゃないか、と当然のようには返された。

基本、平和ボケした日本人で申し訳ない。

第7話 IJNの魔族はペチトです。

「お戻りなさいませ、殿下」

そうして宮の入り口で、ヴァンフレッドを出迎えたのは、淡い金髪をすつきりと後ろに撫でつけ、片眼鏡に口ひげのチャーミングポイントも素晴らしい、これぞ執事！という雰囲気の、初老の男性だった。

名前はやはりセバスチャンか、とぞきぞきしていたのだが、ヴァンフレッドは気安い笑みを彼に向けると、家令のヴィクトールだと紹介してくれた。

ヴァンフレッドはヴィック、と彼を呼ぶと、例の胡散臭い設定を堂々と説明し、部屋を用意するよう命じた。

「承知致しました。それでは殿下、お茶を用意致します。今日は如何なさいますか？」

「ナル産のファーストフラッシュにするかな」

「では、そのようこ」

見事に優雅な一礼を残してヴィクトール氏が去っていくと、ヴァンフレッドは客間と思しきこれまで豪華な一室にふたりを案内した。

「ねね、王子様。さつき王宮の前で訓練してたひと達の中に、動物の耳や尻尾のお兄さん達がいたでしょ？彼らも魔族なんですか？」

勧められたソファに落ち着くなり、気になつて仕方なかつたこと

を訪ねると、いや、とあっさり否定された。

「彼らは獣人族だ。常人より遙かに強靭な肉体と感覚を有しているが、魔法を使えるわけではない。髪も黒くはなかつただろう？」

「あ

彼らの愛らしいチャームポイントに気を取られていたが、確かにその髪はこの国で良く見る栗毛や赤毛、金髪だった。

獣人族は、その身体能力の高さから、騎士団や自警団で働く者が多いらしい。

魔族はそれを召喚して契約を交わした者に従属するものであり、昔は魔術を使える騎士が使い魔とすることもあったが、最近は魔術師と騎士の役割分担がはっきりしているのだと言つ。

魔術師を戦場に出して死なれるより、役に立つ魔法具の開発に携わらせ、それを騎士に使わせた方が効率がいい、という方針なのだとか。

実際、魔族は魔術師が造った武器でしか仕留められないことから、彼らは非常に尊敬を受けている。

また、契約を交わしていない魔族というのは、殆ど野生の獣、それも問答無用で人を襲つて食らう狂獣であるため、街中で黒い獣を見掛けたならそれは間違いない魔術師の使い魔、ということになるらしい。

「契約つて、どんなことするんですか？」

「ああ、魔法陣を使って召喚した時点で、召喚者である魔術師の力量が、その魔族より勝つているということになるからな。召喚に応じた時点で、大抵の魔族は召喚者の僕となることを選ぶ。その証として魔族が召喚者に名を『えれば、契約の完了だ』

「・・・勝手に呼びつけといて、従えって？随分横暴ですね」

思わずそう言つと、ヴァンフレッドの眉間に軽く皺が寄つた。

「そうではない。魔族というのは、魔の気配に呪されたもの。かつては「よく普通の獣や精霊だったものだ。魔に呪されたものは皆黒く染まる」とから、「染まる」とも言つが。一度染まったものは、一度と元に戻れぬ。自我を無くし、ただ慣れ狂う衝動のままに、目につく全てを食らうものだ。それを光の中に戻し、従えるのが契約だ。魔族は皆、己を狂氣から引き戻し、救つた召喚者に喜んで忠誠を誓う」

思いも寄らない「契約」の実体に、思わず目を瞠る。

（つーか、精霊て・・・）

そんなんまでいるんかい、と内心関西人のように裏手でツッコミを入れてしまつた。

「魔術師と契約していない魔族は、目につく人間を全て食い殺す。問答無用で討伐対象となるから、ただ殺し続けるだけの存在でいるよりもいいと僕は思う」

それに、とヴァンフレッドが何かを思い出したように小さく笑つ

た。

「魔族にとつて魔術師の生氣と言つのは、酷く心地良いものらしい。僕の知り合いが使役している魔族など、マスターと常に共にあるために、巨大な山猫だつたものがある日小さな仔猫に変じてな。常に肩に乗つてゐるのが、一部のご婦人方の間で偉く好評のようだ」

「・・・ペット扱いなんですか？」

何というか、魔族という言葉の響きからして、それこそ戦闘用に呼び出して支配し、無理矢理戦わせる、みたいなイメージがあつたのだが。

兎だの仔猫だの、聞いた限りでは何ともファンシーで愛らしい姿しか想像出来ない。

そう言つと、ヴァンフレッドはそんなようなものだな、とあつさり肯いた。

「魔族を召喚出来る魔術師、というのがそもそも貴重な存在なのだ。魔術師にとつても、自分の力を誇示するのに丁度いい上に、見た目に愛らしい姿には心が和むだらう。戦になど使って、折角手に入れた使役を失うようなことはまずしない」

隣で、マジでペット扱いするつもりだつたのかよ、と和馬が疲れ切つた声で呟く。

そこに、失礼します、と軽やかな女性の声が響いて、開け放した扉の向こうから、お茶のポットと茶菓子を載せたワゴンを押した、所謂メイド服を着た女性が入ってきた。

メイド服つて全世界共通なんだるつか、と馬鹿なことを考えながら、初めて見るリアルメイドを何と無しに見ていると、ヴァンフレッドには実にこやかに蕩けそうな笑顔を向けていた彼女が、一瞬だけちらりとこちらに視線を向け、すぐさま手元の茶器にそれを落とした。

(うーん……)

非常に訓練された手つきでお茶の用意をする、その赤毛のメイドはそつなく全てを整えて去つていったが、あの視線はいただけない。街の子ども達の、未知の者に向ける怖れ、或いは魔族ではないかとこう疑念の入り交じつたそれとはまるで違つ。

あれは、あからさまにこちらを見下す視線だ。

女同士だからこそ分かる、「アンタ、気にくわないのよ」とこう意思をばっかり乗せたアレである。

王室でメイドをしてくる位だから、彼女はどこぞの貴族令嬢で、庶民のこらりを格下の者だと思っているのかもしれない。

ヴィクトール氏はそんな感じはまるでなく、どこまでも丁重に主の客人を迎える姿勢を取つていてが、どれだけ指導者が立派でもあの手の女はどこにでもいるということか。

まあ、和馬とヴァンフレッドは気付いていないよつだし、お茶はきちんと美味しく出来ていてるから、些細なことは放つて置くこととする。

「・・・それで、王子様。例の魔法書とやらを、早速見せてもらいたいのですけど」

何しろ、和馬が我を忘れて叫ぶと、炎が飛び出すのだ。

そんな生きた火炎放射器をそのままにはしておけない。

「後、竜の生態がどんなものかも知りたいです。元に戻れるならそれが一番ですけど、もし戻れないとしたら、どうにかして力を封じるなりしないと、危なっかしくて放つておけません」

「保護者か、お前は」

「えー、保護者はそつちでしょ？ お・に・い・せ・まつ」

語尾にハートマークを付けて言ひてやると、やめんかいつと喚く。

「氣色悪い」とは失礼な。

「つづか、ここの中字つて読めるようになつてんのか？」

「あ、それは大丈夫。見ればなんとなく意味は分かるよ」になつてると思つ」

「・・・つづく便利だな。外語のテストとか楽勝なんじゃねえの」

「うん。英語で九割以下の点数、取つたことないよ？」

「ずりいつ」

「ずるくないもん、他の努力が結果オーライなだけだもん」
ふいっと顔を背けると、ヴァンフレッシュドがくつくつと肩を揺らして笑う。

「では、文字に不自由しないと言つなら、手分けしてやつたりぢうだ？魔法陣の解析はアリサしか出来んのだろ？し、竜のことについてはカズマが一番知つておくべきだろ？」

「……うわ、王子様がマトモな」とこつてる

「どつかで別人で入れ替わったんじゃねえだろ？」

「失礼な。僕が後先考えずに行動するのは、ルカに関することだけだ」

やつぱり、ヴァンフレッシュドはただのプログラマだった。

第8話 売られた魔障は買ひまじょう

（・・・つーかーれーたー）

あれからずつと、王宮図書館に詰めっぱなしで、件の魔法書を始め、呪いの解き方だの魔に取り憑かれた場合の対処法だと銘打たれた本を片つ端から調べた。

しかし、そのどれも覚え書きのような内容で、よくまああんなものを見参考に召喚術など行使したものだと、逆に王子に感心してしまったようなシロモノだった。

分析 で王子の術力（彼らが言つてゐる魔力）を調べたら、結構なレベルかもしね。

無詠唱の 絶対防御 と無茶な界渡りのせいで、色々としたいことがあるのに、何も出来ないのがもどかしい。

どれだけ回復に時間が掛かるか分からぬのが、どうにもひつともストレスが溜まつて仕方がない。

ここまで術力が低下することなど今まで無かつたから、自分が全く無力な存在になつたようで、不安でもある。

調べ物に集中してそんなことを忘れないのに、図書室の蔵書の、まるで系統付けられていない記載はあちこちに内容が飛んで、それを追いかけるだけでもとんでもない手間が掛かる。

おまけに、最初に感じた通り、それらの本に記されたどの術にし

ても、非効率この上ないものばかりで、疲れた脳みそにはイラッと来るここに上ない。

和馬は和馬で、動物図鑑のよつたなバカでかい本をあれこれ読んでいたが、その余りに非常識な内容に頭痛を覚えていたようだ。

詳しい話はまだ聞いていないが、もう酷く疲れていたから、王子と揃つて夕飯を摂つた後は、隣同士に宛がわれた客間に揃つてさつさと撤収した。

（あー・・・ふかふか・・・・）

ランプの灯りに照らされた室内は、中々幻想的な雰囲気だ。

部屋の隅には大きなバスタブが置いてあつて、蛇口を捻ればお湯が出てくるようになつていいのは、流石王室といつたところか。

疲れた体で、取り敢えず天蓋付きのベッドにダイブしてしまつたが、ちらりと視線を向けて見ると、シャンプーやトリートメントのよくなきれいな瓶や、良い香りの石鹼、化粧水や乳液と思われるものまでが、至れり尽くせりと言つた感じでざらりと棚の上に並んでいる。

王宮つて素敵だー、と思いながら、お風呂の誘惑に誘われ、よいせとベッドから起き上がる。

これまであちこち「落ちた」先では、まず最初の一晩は野宿と相場が決まつていた。

宿が定まつてからも、お風呂の文化がある世界といつのは、思い

の外少なかつたものだ。

取り敢えず、まずはバスタブにお湯を溜めないとならない。

「ひきつときそちらに向かおうとしたとき、軽いノックの音が聞こえた。

何だろ？と首を傾げながらもどうぞと答えると、お夜食をお持ちしました、と言う声と共に、あの第一印象の余りよろしくなかつた赤毛のメイドが入ってきた。

しずしずとワゴンを室内に入れ、丁寧な手つきで扉を閉める様を見つめていると、唐突に彼女の雰囲気が変わった。

「ちよっとあなた。さつとここれから出て行つてトさらないかしら

（・・・あー、やつぱりこう来たかあ）

予想通りと言えばその通りの展開に、うんざりする。

「あなたの兄ときたら、魔族のような髪をして氣味が悪いったらいいわ。殿下はお優しい方だから、あなた方のような嬌しい者にも慈悲を掛けて下さるけれど、こんなことが知れたら、殿下の不名誉になるといつことも理解出来ないの？王宮に魔族紛いの平民を招いて、客人として扱うだなんて冗談ではないわ。王宮で働く私達は、皆貴族の出ですよ。その私達が、どうして平民の、それも奴隸として売られかけたような貴女に仕えなければならないの。私の言つていることが理解出来る頭があるなら、明日の朝にでもここを出て行くのよ。よろしくて？」

傲然と顎を上げて言い連ねる彼女は、有紗が当然自分の言つ」とを聞くものと信じ切つてゐるようだ。

しかし、有紗が彼女の言葉に従つ必要など、まるで無いわけで。

（ていうか、よくこれだけ差別発言が出てくるなあ。何での王子様の宮で、こんなバカ女が働いてんだか）

あの王子様はとんでもなく愉快なブラコンのアホだが、少なくとも平民を見下すような人物で無いことだけは知つてゐる。

「人の話を聞いているの！？黙つていないで、返事をなさい！」

「うるさい。

無視し続けるのも手かもしれないが、ここにいる間、ずっとこの電波を受け続けるのは我慢出来そうにない。

ただでさえ疲れて苛々していたところに、こんなヒステリックな言葉を聞かされて、不快指數がマックスを越えた有紗は、深々と息を吐いて歩き出した。

「何ですか？今すぐ出て行つていただけるのかしら？」

勝ち誇つたように赤く染めた唇を歪めた彼女の傍をすり抜け、扉を開く。

そうして廊下へ出た有紗は、出口はあちらでしてよ、と言う声を背中に聞きながら、それをきつちり無視して隣の扉へ向かい、すう、と息を吸つた。

「・・・お兄様！お兄様あーーー！」

夜の廊下に、有紗の悲鳴じみた泣き声が盛大に響き渡る。

どんどんと扉を叩く騒音の伴奏付きで。

「ちょ・・・え、有紗？」

疲れ切っている和馬には悪いと思ったが、驚いた顔をしてすぐに扉を開いた彼に、素早く唇だけで合わせる、と告げると、その体にがっしり抱きついた。

「お兄様！」

一瞬、和馬の体が強張ったが、ぎこちなく有紗の背中に腕を回してくる。

何事か、とあちこちから人が飛び出してくる気配を確認しつつ、悲しげに声を張り上げる。

「ほんとこりこりのはもう嫌ですーーー親切にして頂けたと思つていましたのに、嘘せん本当は、私たちを氣味が悪いと思つてこるものーーー」

「・・・有紗。落ち着け。誰がそんなことを言つた？」

すかさず漏めるような声を作った和馬に、心の中でぐっと親指を立てる。

「お・・・お夜食を運んで下さったメイドさんです。黒髪は魔族の
よつで氣味が悪いと、平民風情が王子様の慈悲を受けるなど厚かま
しい、やつやと出て行くよつこと・・・」

ざわりと周囲の空気が変わる。

ああ、あのメイドの顔を見られないのが残念だ。

「あの方は貴族だから、奴隸として売られかけたよつな私の世話を
するなど、耐えられないそうです。私だって、そんな風に蔑まれて
まで、こちりでお世話になりたくありません・・・！」

さうか、と和馬の低い声が響いて、大きな手がそつと髪に触れた。

「使用者の躊躇もろくに出来ねえとは、この国の王子つてのもたか
が知れているな。・・・なあ、王子？」

「・・・全く、申し訳のしようもない」

どうやら、こひの間にかヴァンフレッシュも現れていたらしい。

ひつと呑きつた女の悲鳴が微かに聞こえる。

「この国の貴族つてのは、あれか？庶民の税金でメシ食つてるくせ
に、庶民を蔑んで威張り散らすしか能がねえのか？」

低く揶揄するよつな和馬の声に、一瞬、沈黙が返った。

「・・・ヴィクトール」

「は・・・」

「その者を、今すぐ王宮から追に出せ。一度と二度と向かへ伺候するのとは許せん」

「承知いたしました」

「そ・・・そ・・・お許し下さい殿下！ 我が父はグルーディア侯爵でござります！」

「それがどうした」

「・・・」

「王も貴族も、民あつてのもの。そんなことも理解しておらぬ愚か者に、民を治める資格はない。いや、それ以前に、身分や髪の色で他者を蔑むとはな。ひととして軽蔑するのも情けない所業だ。お前のようなものは、我が国の恥だ。僕の賓客を侮辱して、生きていらるだけ有り難いと思うがいい」

（・・・おお）

あのブラン王女とも思えぬ凜とした声に、周囲が素早く従うのが気配で分かつた。

「」は一発、あのメイドにスケープゴートになつていただいて、今後の生活改善を図つとした思惑は、予想以上に成功したようだ。ある輩はやつそつくるまで。

そろそろこいだろうと和馬から腕を離し、その場に残っているのがヴァンフレッドだけだと叫び、それを確認すると、有紗は力一杯溜息を吐いた。

「ちよっと、王子様。ほんと勘弁して下さい。なんであんなのがここで働いてるんです？」

しかし、ぞんざいな口調でそう言った途端、厳しく表情を張り詰めていたヴァンフレッドがぽかんと瞬いた。

「あ・・・アリサ？お前、泣いてたんじゃ・・・」

「は？何で私があんなレベル低い厭味言われた位で泣かなきゃならないんですか。アッタマ悪すぎですよ、あの女」

「・・・・」

ランプの薄明かりにも、ヴァンフレッドの畳然とした顔ははつきりと見えた。

そのヴァンフレッドは、和馬が氣の毒そうな声で呼びかける。

「ヴァン。こいつを泣かすのは、滅多なことじや出来ねえと思つや？」

「う・・・うむ・・・こや、それはそれとして、本当に悪かった。あの者が不快な思いをさせたのは事実なのだろう？」

「ちうですよ、全く。ひとが疲れてるってのと、開口一番出て行け

とか、意味分かんないです

「・・・済まない」

「いいんですけどね、もつ。あ、『めんね和馬。疲れてるとい邪魔して』

そう言つて見上げると、軽く目を瞠つた和馬は、にやつと露の端を持ち上げた。

「いや?別に、役得だつたし」

「え?」

何のことだと首を傾げた有紗に、和馬は楽しげに笑みを深めて見せた。

「結構胸で覚えのな、お前

「・・・この、セクハラ兄貴ーーー」

第9話 「責任は取ります」

あれから一週間ばかり、時々ヴァンフレッシュと息抜きに街で遊んだりしながら、色々調べて分かったことと言つたら。

「無理」

どうしたつて、和馬の中から竜の力とやらを分離させるのは不可能、という事実だった。

既に和馬の体は炎を吐いてもなんら損傷を受けないものに変質しており、呆れたことに水中での呼吸も可能らしい。エラも無いのに。「どうする？元の世界に帰つて、うつかりその体质がバレたら、なんだか怪しげな研究室とかに攫われそうだけど」

「・・・少しは言葉を選ぶとかしてくれてもいいんじゃねえの？」

溜息混じりに和馬が言つたが、選ぼうが選ぶまいが結果が変わるわけでもあるまいに。

「喜んで研究してくれそな、マジドサイエンティストの知り合いでなら紹介してもいいけど」

「そこで追い打ちかけるか、普通ー」

「む。

ツツコツが出来る位の精神的余裕があるなら大丈夫だ。

「ていうか、この世界の技術、つていうか古代遺跡の技術？つてばハンパないし、正直かなり快適なのよねえ」

「なんだよな・・・」

う。

図書館に籠もつて様々な文献を調べていろいろうちに知ったのだが、およそ四百年ほど前、この大陸は一度、一夜にして滅んだのだそうだ。

有紗から見てもオーバーテクノロジーの宝庫のよつた記述がいくつもあり、実際、この城の照明や上下水道施設は全て、古代遺跡から発掘した魔法具によって制御されているらしい。

一度興味本位でその水を操る魔法具の解析を試みたのだが、「正に職人芸！」と諸手を挙げて賞賛したくなるような、高度な術式回路の力タマリだった。

王宮だけではなく、國中の建物は全ていつでも水とお湯の出る水道、水洗トイレ完備は勿論のこと、それを活用した見事な噴水が街中で芸術的な美しさで人々の目を楽しませている。

その水とお湯を利用した冷暖房も、気候の変化に応じて完璧に制御されているため、どこへ行つても過ごしやすい。

もうひとつ、この王宮には光を操る魔法具も設置されていて、やはりどこかの部屋へ行つても壁の魔方陣に触れるだけで灯りが点いたり消えたりする。

大広間のシャンデリアなど、魔力の筆め方によつて色や形を変えるというファンタジックな優れもので、パーティーのときなどは担当魔術師が技の限りを尽くすため、一見の価値があるそうだ。

おまけに、各部屋が無人になると、その魔法具は室内の汚れを電気分解してしまつため、まさに掃除洗濯をする必要が一切ないという主婦垂涎のシステム。

一見、中世ヨーロッパのような町並みと城なのに、中身は近未来ハイテクのカタマリといつ、何と言つかいつ、「来て良かつた！」な世界。

人々の生活が豊かだといつことは、この国では美食や芸術に振り向ける時間が豊富にあるといつことで、出される食事も、醤油や味噌が恋しくなる暇もない程素晴らしい。

それにして、實に物凄いエコである。

感動の余り、王子に「このステキ魔法具、分解して調べさせて下さい！」と言つたら、流石にだらだらと冷や汗をたらして丁重に断られた。

何でも、見学することとされ「王子の客人」だからこそ許されたことであつて、各國の間で生じてゐる争いの殆どは、それぞれが保有する古代の魔法具を巡つてのことなのだそうだ。

幸い、この国が保有する一つの魔法具は、生活基盤そのものを支えて国民の生活を豊かにするものであり、多くの軍人や傭兵を抱えても問題なくやつていけるため、四百年前から一度も他国の侵攻を許したことがないのだそうだ。

その分、狙われることもまた多く、気苦労は絶えないらしいが、それでもそのアドバンテージは確かに羨まれても仕方がないものだとしみじみ思う。

暖を取つたり灯りを取るのに、木を燃やす必要もなければ電気も必要としない。

そんな、有害物質を一切排出しない、夢のような魔法具を田の前にして泣く泣く引き下がつたものの、意思疎通 のお陰で、この国の魔術師も解析に手間取つていいという古代の魔法書をしつかり読み漁つた有紗は、いつかアホオヤジに基本理論を売つて再現させようと考えていたりする。

そうは言つても、やはり元の世界が恋しい。

勿論有紗は帰るつもりだし、和馬だって家族に会いたいだらう。

しかし、有紗はともかく、和馬は既に入外だし（お前も十分亨だろ、という和馬の寝言は無視だ）、何よりも

「まだはつきりとはしないけど・・・和馬つてば下手したら、不死並の」長寿になっちゃつてるかもなんだよね

最初は四百年前の「滅びの日」以後の本ばかりを読んで、よくまあこの世界で最強の聖獣と言われる竜を倒すことなんて出来たものだと感心したものだが、何のことはない。

ヴァンフレッドが使つた竜の一部を封じた魔石とやらも、古代遺跡の発掘品だつたというだけのことだ。・・・思い返せば、本人も

そんなことを言つていたような。

古代文明、どれだけ凄いんだ。というか、ヴァンフレッドはどんどん博打で勝つんだ。

「それなんだけどな・・・」

ふと、図書室の一角、既に指定位置と化したテーブルの向かいから、和馬が物凄く微妙な顔をして、一冊の本をこちらに向けて滑らせてきた。

「何？」

有紗がこの世界の技術を片っ端から調べていたのと同時に、和馬はかなり詳しく竜を含めたこの世界の生き物たちの生態について調べていた。

そして、田の前にある本は、古代語、つまり古代文明における竜に対する考察を記したものなのだ。

ならば、その信頼性はかなりのものだらう。

「そん中に、竜と人間との契約って項目があつた

「ふうん？」

「・・・竜つてのは、ひとに化けて、人間とその、恋愛関係？になることもあつたらしくてな。契約つつても結婚と同意義で、相手の人間に竜と同じだけの寿命と生命力を与えるとか、そういう類いのモンらしい。寿命を同化させる、みてえな感じで」

それはまた、乙女心を刺激するお話だ。

「じじその王道恋愛ファンタジーのようではないか。

死ぬときはいちにのさんで一緒に死のうねと、そういうことだろうか？」

呑気にそんなことを考えていた有紗は、それでな、と和馬が開いたページの一節を示す指の先を見た。

バスケ部らしく、大きくて指の長い手は、結構好みだ。

しかし、そこに記されていた「竜との契約方法」を目にした有紗は、思わずぱつくりと口を開いた。

それは、

- 一、お互いの体液を交換しましょう。
- 二、お互いの名前を交換しましょう。

以上。

「どう、「それでいいのー!?」と思つような、シンプルイズベストなものだった。

いや、それはそれとして。

補足事項として、竜は親から貰つた名前を、伴侶以外には明かさないイキモノである、だのなんだのと書かれていたが、ということは、つまり。

「・・・私達、ぐるぐるしたよね」

唾液も立派な体液です。

「・・・普通に、自己紹介もしたよね」

ええ、初対面の相手に名乗るのは、『マリコ・ケーション』の基本です。

人して、当然です、はい。

因みに契約、つまり結婚は解消不能、一生一度の真剣勝負だそうです。

竜といつのは情が深く、一度愛した相手を生涯愛し続けるという性質を持っているのだとか。

それは、どうやら浮気王子に見透かせたいといふのです、が。

「・・・和馬さん」

「な・・・何だ?」

有紗の据わった声に、若干引き気味になつた和馬の手を、がつしと掴んで握りしめる。

「責任は取ります。結婚しましょ!」

「・・・はあああああー?」

和馬が突拍子も無い声を上げた瞬間、「うう」とともでない熱量を孕んだ炎が田の前に溢れ出た。

「これは死んだかな、と思つたのだが。

「・・・あれ？」

無傷。

「こにも火傷のひとつもないどころか、髪の先さえ焦げていない。

和馬が咄嗟に吐き出した炎を打ち消したのかと思ったが、田の前にあつたはずのテーブルが跡形も無く、和馬の手を握つたまま恐る恐る背後を振り返つてみると、図書館の壁の一部がきれいになくなつていた。

・・・「いやら、蒸発したらし。

「寿命と・・・生命力？」

ぱつりと呟くと、少しの沈黙の後、低く答えが返つた。

「それもあるかもだけどな。・・・竜は契約者を絶対傷つけられねえつて書いてあつたから、オレの攻撃はお前に一切効かないとか、やつこひことだと思ひ」

「うう」としても、期せずして、間違いなく契約が成立していくといつことだけは確認出来た。

それから、騒ぎを聞きつけて飛んできたヴァンフレッドに平謝り

してフォローを押しつけ、幸い保護の魔法が掛かっていたために焼失を免れた本を部屋に戻つて再検討してみると、もうひとつ重要な事項が記されていた。

竜と契約者は、契約後はお互いにしか発情しないそうです。

種族が違うから子どもは作れないけれど、性交渉によつて互いの魔力を交換しないと、魔力の流れが激んで体調が崩れ、いずれ死んでしまうため、必要な本能なのだそうです。

・・・やっぱり、責任は取るべきだと思います。

だつてまだ死にたくないし。

それにしても、番の相手とえつち出来ないと死ぬとか、それってイキモノとしてどうなんだろ？

まさに命がけの愛つてやつですか？

・・・異種間結婚は、やっぱり大変な覚悟が必要みたいですね。

第10話 プロポーズの答えは？（前書き）

若干、R15表現？が・・・。

苦手な方はお気を付け下さいませ。

第10話 プロポーズの答えは？

・・・なんだかまだ、あちこち体が軋んでいる気がする。

あれから再び和馬と話してみて分かったのだが、和馬が炎を制御し損ねたのは、有紗の発言に驚いたからというのも勿論あるが、それ以上に朝からずっと体の不調を覚えていたかららしい。

眩暈と頭痛、倦怠感。

一晩寝れば治る、と言い張る和馬に「プロポーズの返事は？」と訊ける雰囲気でもなかつたので、取り敢えず様子を見るかと思ったのだが、翌朝目を覚ました有紗は、和馬が言つていた通りの症状にこれが、と呻いた。

多少の時間差はあつたようだが、これはキツい。

頭は脳みそを茶巾絞りにされているように上手く動かないし、立ち上がりにもぐらぐらと眩暈はするし、何より鉛でも詰まっているかのように体が重い。

よくこんな状態で和馬は平気な顔をしていたものだと感心したが、朝食の場に現れないのを心配したのか、様子を見に来たメイドさんズの言つことによれば、和馬は幾ら扉をノックをしても返事すらないらしい。

言葉が通じないのだから、それは仕方ないだろうが、本気で死にかけていたらどうしようかと不安になった。

ちょっと疲れが溜まつただけだから、と看病してくれようとする彼女達にお引き取り願い、ヴァンフレッドにも心配しないよう言を頼むと、有紗は痛む頭を抑えつつ、和馬の部屋の前でおろおろしているメイドさんにも同じことを言つて下がつてもらつた。

それでああ、そこからイロイロとあつたわけなのですが。

・・・取り敢えず今、和馬はベッドの下でジャパースト下座を披露中です。

体にタオルケットを巻き付けただけの格好で、広い背中に何本も走つているみみず腫れが痛々しい・・・って、それをつけたのは私ですね、はい。

「・・・あの、和馬？」

「うお、喋ると喉が痛い。

声を上げ過ぎで喉が嗄れるとか、本当にあるのだなと妙に感心してしまつ。

「すまん」

つて、さつきからこの人、これしか言つてないし。

そりや、殆ど何も話さず、訳も分からん状態でベッドに引きずり込まれたのは確かですけども。

お腹をすかせた獣の前に、のこのこと出て行つたおバカな羊が食われたというか、そもそも自分から食われに行つたというか。

「・・・和馬つてさ、女人の人苦手とか言つてなかつたっけ？」

「ほそりと呟くと、初めて和馬の気配が訝しげに揺れた。

「なんか、こつちは初めてなのに、物凄く気持ちよかつたんですけど？」

純情な女嫌いのふりをして、実はどれだけ遊んでいたのかと、何となく面白くない気分でいると、ぎこちなく顔を上げた和馬がようやくこちらを見た。

「そつ・・・なのか？」

物凄く覚束ない口調に首を傾げると、いや、と目を逸らした和馬の顔が紅くなる。

「その・・・覚えてねえつづうか、さつき気が付いたらこつなつてたつづうか・・・オレだつてこんなんしたことねえし、わけ分かんねえけど。やっぱやつた・・・んだよな？」

ちよつと待てい！

何だそれは！？

「うえ、ちょ、あんだけエロエロに人のこと責めまくつといて、無意識ですか！？あの百戦錬磨のエロ魔神が幻だつたと！？」

「ななんなんだよそれ！？」

途端に首まで真っ赤になつた和馬は、間違いなく有紗の良く知る和馬だ。

(うーあー・・・)

アレが和馬、というか竜の本能なのだとしたら、竜つてのはどんだけエロヒロシイイキモノなんだ。

すっかり竜に対する印象が変わつてしまつたぞ。

「・・・まあ、取り敢えず、お互い、調子悪いのは治つたみたいだし・・・結果おーらい?」

「つて、え? お前も・・・?」

「うん。頭痛いわ、眩暈は酷くて歩くのやつとだわ、体は重いわでもしかして和馬もそうなのかなーって様子見に来たら、まあこんなことに」

「・・・・・」

物凄く複雑そうな顔をした和馬を、ひよいひよいと手招く。

「和馬さん、和馬さん」

「・・・何だ?」

「えつとね? 和馬は何にも、謝らなきやなんないと、してないでしょ?」

何か言いかけるのを片手で制して、笑つて見せる。

「むしろ、謝らなきやならないのは、私の方。勝手にくつこてきて、キスだつてしたのは私の方だし」

「ちが・・・」

「違わなこつて。でも、何回同じことがあつても、やつと私は同じことをする。・・・多分ねえ、和馬が今、自己嫌悪?でぐるぐるしているのつて、覚えてないからだと思つんだよね」

喉が痛むから、出来るだけゆっくり、静かに話す。

「自分で決めて、したことだつたり、後悔はしても自分の責任だつて思えるけども、田が覚めたら口ほどしたとか、そりやびっくりだわ。私でもスライディング下座するしかないわ」

お前、と和馬が気の抜けたような声で呼ぶ。

「怒つて、ねえの・・・?」

「ないない。過去は振り返らない主義なのです」

なんだそりや、と和馬が肩を落とす。

「まあ、そんなこと言つても、和馬が禿げたメタボのおつさんだつたら世を憐んで自殺してたかもだけど」

「・・・そーかい」

む？

フォローの仕方を何か間違ったか。

何だか和馬がどんよりと。

「ええと、ほひ。世の中には体から始まる變もあるとゆーし

「・・・・・」

和馬が何か言つたようだけど、良く聞こえなかつた。

「?何?」

「・・・・・悩んでんのがバカらしくなつただけだ」

それは良かつた。

ほつとしたら何だか眠くなつて、和馬がまた黙り込んでしまつた
ものだから、とろとろとまどろんでいるつちに、いつの間にか眠つ
てしまつたみたいだ。

もう一度目を開いたときには夕方で、あれこれべたついていた筈
の体はきれいに清められ、ネグリジエのような寝間着も着ていた。

「和馬・・・?」

ぼんやりと呼びかけると、ソファで本を読んでいたらしい和馬が
起きたか、と言いながら近づいてきた。

「腹は？減つてないか？」

「・・・お腹はそうでもないけど、喉は渴いた」

そうか、と枕元の水差しから、グラスに水を注いでくれる。

少し柑橘系の香りのする、美味しい水。

「有紗

「んー？」

「・・・なんつうか、ひ、色々すつ飛ばした感がありまくつでアレ
なんだが」

すい、と和馬の手が、有紗の頬に触れる。

「生涯、あなたを愛します。結婚して下せー」

(・・・つやうきたかーつー・)

真面目に。

誠実に。

正面から。

ああ、和馬はそういう青年だった。

年上ぶつて、加害者ぶつて、プロポーズを「責任を取る」なんて

言葉で飾るのは、相手にとつて失礼な話だった。

どんな理由でも、切欠でも、一生を共に生きましょひと誓ひ約束に、言い訳なんてしてはいけなかつたのだ。

(敵わないなあ・・・)

本当に、驚かされる。

「責任」ならば、楽だつた。

義務を果たすことなら、余計なことを考えずとも出来るから。

色んなものを見ないふりをして、蓋をして。

・・・本当に、いつの間にこんな狡い考え方をするよつになつてしまつたのだが。

(うん・・・そうだね)

全然、普通じゃない最初だけど。

恋人にすらなつていなかつたけれど。

まだ会つて一週間だけど。

「んなプロポーズが始まれば、何だか上手くいきそうな気がする。

「はい」

自分でも意識しないままに、笑っていた。

誰かを安心させるためでもなく、警戒を解くためでもなく、何も考えないままに、いくつ自然に。

「一緒にいきましょ」

人生という長い道を、一緒に生きて、行きましょ。

第1-1話 王宮内恋愛事情？

結婚しましょう、そうしましょう。

そう言つたところで、元の世界に戻ればまだまだ未成年なわけで、取り敢えず「恋人から始めましょう」と言つことになつた。

普通、こういうフレーズは「お友達から始めましょう」というのが常套句だとは思うが、もうやることやつてる上に、将来どうか生涯も約束してしまつていいのだから、今更まだるつこしい話はパスだ。

・・・まあ、有紗は今までオツキアイとか、そーゆー甘つたることをしたことがないので、何をどうすれば「恋人」なのが少し悩んだりもしているのだが。

えつちか。いや、そんな単純なものでもなさそくな。

「別に、フツーにしてりゃいいだら?・どうせ先は長いんだ、無理してついていくことねえし」

そりやそうだ。

不幸中の幸い、とでも言うのか、もつ一晩眠つて起きてみると、有紗の体調は完全に復調していた。

試しにそれまで出来なかつた術式をあれこれ使つてみたのだが、今までに無いほど調子が良い。

竜の生命力ハンパねえとかそういうことですか。

えつちするなりこれとか、何だか妙にやるせないものがあるので
すが。

何と言つかない・・・いや、いいです。

何も、ゼリの口ロゲだよ、とかそんなこと思つたつしてませんよ?

精神衛生上、そのような思考は全力で排除させて頂きます。
・・・まあ、これなら今すぐにでも元の世界に戻る」とが出来る
ところです。

その日の晩、夕食の席で「言つて、ヴァンフレッシュは少し寂し
そうな顔をしてそつか、と肯いた。

「また遊びに来られるか?」

「ええ、勿論。今度は私達の世界のお菓子でも持つて来ますよ」

「の王宮で出でくるお菓子は基本、洋菓子だ。

今まで食べたことが無いほど美味!なものばかりだったが、流石
に和菓子はなさそつだし、煎餅やポテトチップスなんかの塩味系の
お菓子という概念もなさそつだった。

それとも王宮では、ぱりぱり音が出るようなものは御法度なのだ
ろうか。まあ、ひとつそり食べる分には問題ないだろう。美味しいん
だし。

そう言えば、和馬が蒸発させた図書館の壁は、ヴァンフレッドが王宮魔術師に頼んで修復させてくれたそつだ。

「一体何をどうしたらこんな高出力の攻撃魔法で、被害がこんな規模で済むのかと散々問い合わせられたらしが、『異国の術だからよく分からん』で誤魔化しきつたらし!」

「いや、お前達のことを異国のスペイク何かじゃないかと疑つてくれる者までいてなあ。あれはちよつと参つたぞ」

「ははははは、と呑気に笑つてゐる場合ですか、王子様。

「そういうことなら、さつと出てつた良さそつだな。次は普通に遊びに来るし、オレは古代遺跡巡りとかしてみてえぞ」

「おお! それはいいな! 僕も一度ネルフィアやイグルの遺跡をじっくり見て歩きたいと思つていたのだ!」

男の子つて、どうして遺跡だの探検だのとこつ話になると、子供もみたいにわくわくした顔をするんだろうが。

「つかり可愛いと思つてしまつじゃないか。

むしろ有紗は、あれだけヴァンフレッドがブラコンつぶりを披露している弟君に会つてみたかった。

偶に王宮を散歩していると、他の王子様達は時々見かけたのだが、やはり体が弱いからか、王太子の姿だけは結局一度も見ることが出来なかつたのだ。

「あ、そう言えば。一番上のお兄さんと、一番下のお兄さんが取り合つてた、何とかって言う傳げーな美人さん。あの性格悪そうな五番目の王子様が横から搔つ攫つて行つたみたいですよ」

途端、がばりとヴァンフレッドが全身でこちらを振り返る。

「何！ 本当か！？」

それは、気晴らしにヴァンフレッドに王宮内を案内してもらつていたときのこと。

余り知るものはいないという抜け道を通りて、庭師がその素晴らしい芸術的な技術の全てを投入しているという中庭へ向かおうとしていたとき、和馬が誰かが喧嘩してるみたいだぞ、と言い出した。

王族以外は滅多に使つことのない抜け道で、争いことこのつのは穏やかじやない。

すぐさま気配を殺してそちらに向かったのだが、そこで二人が目にしたのは、煌びやかな衣装を纏つた男一人が、どことなく幸の薄そうな女性を挟んで険悪なムードという、ある意味とてもありふれた光景だった。

しかし、それを目にしたヴァンフレッドは、すかさず物陰に身を潜め、わくわくした顔でその実況中継を始めたのだ。

それはもう、競馬中継もびっくりの滑舌で。

（あれに見えるは、オーガスター兄上が以前から執心していらっしゃ

るといつコリアナ嬢！）

（しかし、大人しく家の中での読書を好むといつコリアナ嬢にとつて、脳みそ筋肉のオーガスター兄上は全く好みではないと専らの噂！）

（おおつー！ギルバート兄上はドヤ顔だー）

（たつた一日遅れで第一王子の座をオーガスター兄上に持つて行かれた恨み辛みを母君に愚痴られ続けて幾星霜、歪んだ性格は螺旋階段並とはいえ、女性受けするのは自分の方だと知つていて自信からか！？）

（コリアナ嬢の立ち位置も若干ギルバート兄上寄りだが、こーれーはーどうだらうか、単にオーガスター兄上の暑苦しさから逃げたがっているようにも見える！）

ヴァンフレッドは、いつでも中継レポーターになれると思います。

それから少しして、有紗と同じ年頃に見える少年がコリアナ嬢の付き添いらしい女性を連れてきて、あからさまにほつとしたコリアナ嬢はそそくさとその場を去つて行つた。

その少年が第五王子のエイオースで、去り際にふつと兄達に勝ち誇つた微笑を残していつた彼が、コリアナ嬢と中庭で楽しげに語らつていたとメイドさんズが噂していたのだ。

流石王宮、見事な愛憎劇の宝庫である。

「そつか・・・それは兄上達がさそのたつり回つてこことだらうな

「・・・お前ら兄弟つて仲悪いのか？」

ふふふ、と邪悪な笑みを浮かべたヴァンフレッシュ、若干引毛飯味の和馬の問い掛けに、ヴァンフレッシュはいや別に、と首を振った。

「母親同士は向やうおどりおどりしきり合つているようだがな。兄上達が角突き合わせているのはこつものことだし、エイオースがそれをからかつて遊んでいるのもこつものことだ。見ていると結構愉快だぞ？」

それは確かに楽しそうだ。

しかし、明日の朝に元の世界に戻ることにして、再会を約束して食事を終えたときだつた。

滅多にこの離宮では聞こえない足音、すなわちばたばたと騒々しい、優雅さの欠片も無いそれが近づいてきた。

開け放たれたままの扉の前に控えていた家令のヴィクトール氏が、すいと廊下に出て行く。

何事だらうかとそちらを注視していると、少しだけヴィクトール氏が初めて見る「動搖します！」といつ青ざめた顔で駆け込んできた。

「で、殿下・・・！」

「何事だ、ヴィック」

「・・・申し訳ありません、取り乱しました。落ち着いてお聞き下さいませ」

「おお、流石ナイス執事のヴィクトール氏。」

「今の一瞬で冷静になりますか。」

「未だに顔色はアレですが、声はしつかりしています、ステキです。」

しかし、すう、と息を吸つてヴィクトール氏が告げた言葉に、その場に居た人間全てがあんぐりと口を開いた。

「奥方様・・・トリステイア様が、駆け落ちなさいました」

第1-2話 じゃあ、またね！

駆け落ち。

・・・駆け落ち！？

「置き手紙には、『わたくしは、愛に生きます』としたためられて
いたとか」

わあ、びくとーるさん、ほりよみですね。

「すげえな・・・ビリの昭和文学だ？」

「お兄様、シシ パリするんなら、内輪ネタは今はちょっと

「シシ パリ ジャ ねえ、感想だ」

似たようなものじゃないですか。

いや、そんなことを言つたら関西人にどうかれるか。

「セウガ・・・」

「殿下。如何なさいますか」

抑えながらも、抑えきれない焦慮と憤りを滲ませたヴィクトール
氏の言葉に、ヴァンフレッドは少し困つたように苦笑を浮かべた。

「誘拐や、その他犯罪に巻き込まれた可能性は？」

「御座いません。侍女達を始め、殿下が贈った宝石も全て無くなつておりましたが、鏡台の前に結婚指輪だけ置き手紙と共に残されましたとか」

それはがめつていうか、しつかりしているといつか。

「そうか。あれだけ持つて行つたのなら、暫く生活に困ることもないだろう。ろくでもない男に引っかかったのではないのならいいんだが」

「他人事だな、ヴァン？」

「前に言つた通り、結婚式のときにはしか会つていらないしな。母親が平民出の僕に嫁ぐなんて冗談じゃない」と侍女に喚き散らしているのも聞いたし、今更驚く程のこともない」

わあ酷い。

「そう言えば前に、ヴァンフレッドが、奥さんには他に好きなひとがいるようなことも言つていたような」

それにしても、黙つて敵前逃亡とは卑怯なヒトだ。

「うーん、それにしても妻に逃げられた王族というのは、この国ではひょつとして僕が初めてなんぢやないだろうか。前例が無いから対処の仕方がよく分からんが、クレタと戦にはしたくない。父上が動くと大事になつてしまつからな、僕がクレタの大天使に話をすると伝えてくれ。それから、クレタの大天使に、すぐにこちからへ来るよう使いを頼む」

畏まりました、ビヴィクトール氏が懇懃に一礼して三十分後。

王宮の一画に居を佔えられているというクレタ王国の正大使が、真っ青に今にも氣絶しそうな顔で離宮にやって来たとき、有紗と和馬は野次馬根性丸出しど、隣室からその様子を伺っていた。

マジックミラーと盜聴用の空氣穴が完備された応接室にて素晴らしい。

ヴァンフレッドと大使が相対するテーブルに載っているのは、間違いないトリストイアという元嫁直筆の置き手紙と結婚指輪、そしてヴァンフレッドが神殿から取り寄せた結婚宣誓書。

何でも結婚宣誓書といつのは、何重もの鍵を掛けられた神殿宝物庫の奥深くに保管されているもので、その紙切れひとつがふたりの結婚の事実を証明するものらしい。

「・・・まあ、僕の不徳の致すといふことはいえ、こいつ言った次第ですでの、これはこちらで処分させて頂きます」

少し黄ばんだ、びつしりと横文字の並んだ羊皮紙を手に取ったヴァンフレッドに、大使がお待ち下せーと悲鳴を上げる。

「暫し・・・暫しのお待ちを！姫様は我らが必ず探し出してござんにいれます故！」

「探し出しちゃいます！また、『愛のない』結婚生活に連れ戻したところで、姫が私を受け容れるはずもない。・・・ああ、ご存じでしようが私は姫に指一本触れてはおりません。この宣誓書さえ無

くなれば、姫は晴れて思い人と結ばれることが出来る。めでたしめでたし」というものじゃありませんか」

「こりと笑んだヴァンフレッドは、そのまま何の躊躇いもなく羊皮紙を真つ一つに引き裂いた。

途端にその表面に記されていた文字が幻のように消える。
「うわ、魔法具だつたよつだ。

その途端、あわあわとそれに手を伸ばしていた大使が、ぎやー！
と大の男とも思えぬ悲鳴を上げる。

「なな・・・な、なんてことを・・・!『貞節』の守護が失われれば、姫様の御身は・・・!」

「ええ、姫の望み通り、愛するひとと結ばれることで、何の障害も無くなる」としおうね。おめでとうござれこめゆ」

卷之三

・・・初の女房に逃げられた王族の烙印を押されることに、実は密かに怒っていたんだろうか。

まあ、確かにかつちょ悪いといえばかつちょ悪いか。

それにもかかわらず、彼らの話から察するに、あの結婚誓約書というの
は人妻に対する横恋慕防止措置なわけですか。

逆から言えば、奥さんの浮気防止。

男は側室がつづり抱えても問題ないのに、奥さんは魔法具で浮気は許さないとか、不平等も甚だしいぞ。

爆発しろ。

翌朝は蜂の巣をつづいたような、という表現がぴったりの王宮の騒がしさで、有紗と和馬は離宮の窓からその様子を眺めていた。

ひっきりなしに城門を行き来する馬車、各国の紋章を刺繡した衣服を纏つて駆け回る人々。

話を聞いたときは「駆け落ちするヒトつて本当にいるんだな」位にしか思わなかつたふたりだが、こうも王宮中が半ばパニック状態になつてゐるのを見ると、その認識が如何に甘いものだつたのかとしみじみ思い知つた。

国のみんな。プライド。外交問題。

政略結婚、というのが、そんな面倒くさいものを全て内包したものなのだと、この騒ぎを見ていればよく分かる。

昨夜、別れ際にヴァンフレッドが「暫く忙しくなる。もしかしたら見送りは出来んかもしれないが、また会える日を楽しみにしてる。今度は湖で釣りでもしよう」と言った通り、彼は朝食の席には

現れず、ヴィクトール氏が既に本宮へ行つたことと別れの言葉を伝えてくれた。

驚いたことに、次々にやってくる各國の馳車が持ち込んで来ているのは、晴れて独り身となつたヴァンフレッシュへの縁談らしい。

昨日の今日で、もう縁談。

王面つて、凄い。

インターネット並の情報伝達速度だ。

「・・・でも、なんだかんだ言つて、『飯は美味しいし、いいところだつたよね』

出来ることなら、老後はここで暮らしたいと思つて、居心地のいい場所だった。

「そうだな

「夏休みにでも、また遊びに来る?」

「その頃には、もう新しい嫁さん貰つたりしてな

今度のお嫁さんは、ヴァンフレッシュを閉め出したりしないお姫様だといい。

そうしたらきっと、一緒に遊べる。

うん。

異世界の王子様やお姫様が友達、といつのも楽しへくていじやないか。

その証は今頃、ヴァンフレッシュの指で青く輝いている箒だ。

有紗特製、意思疎通 の術式を組み込んだステキ指輪。

持ち主認識機能付きで、本人にしか使えず、つつかりどこかへ無くしても勝手に戻つてくる優れモノ。

次に遊びに来たときはその指輪を通じて呼びかけるから、ちゃんと返事をするように、と言つて、やつぱり最後は、次こそ能力を紹介するが、と「ブリーフ」で締められた。

「じゃあ、帰ろつか」

「ああ」

手を差し出すと、壊れやすい宝物のよつて握り返されるのが、少しふくすぐつた。

（ああ・・・そつか）

帰る場所が同じ、といつのは、それだけで嬉しいことなんだ。

今まで、色んな場所に行つたけれど、そこで会う入たちはどうして「いつか別れるひと」だった。

さよならは、こつだつて寂しい。

それでもやつぱり、ずっと育ててくれた肝つ玉母さんのシスター や、学校の友達より大切に思えるひとはいなかつた。

和馬は、「お別れする心構え」をしなくていい。

ずっと、傍にいてくれる。

（こやむじる、ホントに[冗談抜きで不老長寿とかだったら、ふたり きりで生きて行くとかそういう話?]）

・・・まあ、なんだ。

人生、なるようになる。

前向きこ、前向きこ。

自分達が生きて、暮らしていくべき場所は、生まれて育つたあの世界なのだから。

（じゃあ、またね）

今回はよならじやない。

笑つてまた会おうと言つてくれたひとに、また会いたいと思えるのだから。

「・・・ 次元転移 ！」

だから、ヴァン。

パソコンと賭け事はほじほじにして、あんまりアホなことしだけないで、兄弟ネタで愉快なことがあつたら全部記録して、今度こそ可愛いお嫁さん貰つて、次会つたときは猫耳のおにーさんたちも紹介してね！

第1-2話 じゃあ、またね！（後書き）

一度元の世界に戻ります。

次からは楽しく平凡（？）な高校生ライフ、始まります！

第1-3話 七瀬有紗は残念な美少女です。

学生は、忙しい。

何しろ、やらなければならぬことが、山のよつてにある。

そこで、学生なのだから勉強するのは当たり前だ、などといふのは寂しい青春を過ごした大人くらいのものだろ。

かくいう有紗も、一度は決して楽しい青春を過ごした口ではないのだが、一度目の現在、一応青春真っ盛りの入り口に立ったばかり、と表現される身分としては、それなりに周りと同様の忙しさを抱えていたりする。

（ああもう、先週の土曜日に聞いた注意事項なんて、きれいサッパリ忘れてるつてのー）

内心、そんなことをぶつぶつ言いながら有紗が眺めるのは、新入生が行わなければならない、授業の選択や提出書類の一覧を記載したプリントだ。

（）（）藤沢学園高校は、学区内で有数の進学校であると同時に、所謂お坊ちゃまお嬢ちゃまが通う学校としても有名である。

その分、学費や必要経費もバカにならない高さなのだが、その全てを免除される奨学生である有紗は、黙つてさえいればそこらの嬢様よりよっぽどお嬢様に見える、という中学時代からの友人らの太鼓判を貰っている。

黙つてさえいれば、なんだからね！と何度も念を押す彼女らは、一体自分に何を期待しているのだか。

「そんなの決まってんじゃない！あーちゃんを工サにて、有望株のイケメンをゲット！それ以外に何も期待したりしないから、安心していいからね！」

「堂々とそんなことを言うのは、中学一年から同じクラスだった春田さんめ。

ふわふわの猫つ毛を短くカットして、前髪を可愛らしくピンで留めている。

有紗と並ぶと肩の辺りまでしか届かない小柄な身体に、ふっくらと丸い頬の童顔ながら巨乳であるため、男子生徒から常に高い人気を誇っている。

「さざなら変なことしなくとも、いくらでもイケメンのひとりやふたり、余裕で引っかけられるでしょうが」

ここは一年F組の教室。

各学年、AからFまでクラスがあり、その中でF組は特別進学クラスとして、他のクラスとは別のカリキュラムで授業を組まれている。

つまり、忘れ物をすることが許されないということなわけで、有紗は今朝、随分久し振りに感じる通学鞄のチェックを何度も行ったものだ。

全く、気分的には長期の休み明けだが、さつさと頭を切り換えない、ければ、同級生の醸し出す新生活ウェーブに乗り損ねてしまいそうだ。

「それ、同感ー。オレ、七瀬に一票」

そう言つて、隣の席の机で組んだ足をぶらつかせてゐるのは、同じ中学出身のもうひとり、城島大輝という少年だ。

ちょっとツリ目のかわららしい顔立ちをして、他校の制服より高級感のあるニットベストとパンツ、それにネクタイというこの制服を、一年生ながら既にばつちり着こなしている。

彼とは中学時代は一度も同じクラスになつたことがなかつたため、今まで殆ど話したことが無かつたが、同じ学校出身という親近感から、入学式以来、有紗とささめと大輝の三人は仲良くなつるむよくなつてゐる。

「つうか、七瀬をエサつつう発想が分からん。ここまでぶつ飛んだ美少女相手だと、普通男つて引くから。寄つてこねーから」

「だからいいんぢやないーーうわー、すげー美少女、でも近寄りがたいよなー、お、なんかちつこくて程よく可愛いのがいるーみたいな感じでー！」

力説するせさめに、成る程ーと拳で手の平を叩く大輝に、有紗は軽く眉を寄せた。

「そこで納得しないでくれる？大体はつきり言つて、その巨乳がある限り、私よりささの方があつぱど男子の注目を浴びてんだから、

「ひひひ辺しつかり自覚しどきなさこよ~。」

「うわーん、セクハラツセクハラよひー。」

「はん、巨乳を巨乳と言つて何が悪い。世の中に数多いる、控えめな乳の女性陣の嫉妬を精々浴びるといいわ」

「あーちゃんだつて立派に巨乳じゅんー貧しくないじゅんー。」

「私が巨乳なら、やわは爆乳」

「うわああああんー。」

「・・・お前ひわーー、一応オレ、男なんだけど?」

呆れ返つたように、どこか気まずそうに言つ大輝に、泣き真似をしていたささめと視線を交わした有紗は、同時に両の手の平を上にして、軽く肩を竦めて見せた。

HAーという効果音が相應しい、あのポーズである。

「素敵な年上の婚約者がいる、城島グループの御曹司サマが、何を仰ひわざわん」

「ねー、最初つから対象外なのに、男も何もあつたもんじやないよねー」

途端、ひひひの会話を聞いていたらしくクラスメイトの女生徒達が、えええー?と悲鳴を上げた。

「城島君、もう売約済みなのーー?」

「何だー、流石城島の御曹司、入学早々美少女ふたり侍らせて優雅なことねーとか思つてたのにい

「えー、じゃあ七瀬サンと春日サンは、城島君狙いじゃないんだあ?」

口々にそんなことを言つクラスメイト達に少々引きながら、最後の質問にだけはきつぱりと手を振つて否定する。

「ないない。ね~させ」

「ねえ? 中学の校門に、赤い外車で乗り付けるような婚約者サマに、喧嘩売るようなマネなんて怖くてとてもともー」

せりふとせさめが落とした爆弾発言に、また周囲で盛大な悲鳴が上がる。

「あ・・・アホ春日! あれは・・・つづーか、婚約なんて祖父さんが勝手に言つてるだけで、親もオレも認めてねーんだよー!」

「えーそつなのお?」

「あんな美人の、どこが不満なのよ?」

「オレのやることなすことに口出しする権利があると思い込んで、一般常識がなくて、親の言うことに従つのが当然だと思ってて、特技がお茶とお花で、八歳も年上で、顔を合わせる度に子どもは何人にしましょうかとか中学生だったオレに真顔で家族計画持ち出して

「へりてー」

「・・・・・」

「・・・・・」

思わずやめと揃つて憐憫の眼差しを向けた先、大輝はふつと自嘲氣味に吐息を零した。

「とゆーわけで、オレはあのひとと結婚する位なら、海外逃亡を断行する。そのときは協力頼む」

「城島君・・・いや、大輝君ー」の春日やめ、協力は惜しみませんの」とよー。

「私も出来る範囲で協力する。頑張れ、城島」

「・・・お前らの温度差つて結構すげえよな」

有紗とやめを見比べてぼやく大輝に、やめがそお?と首を傾げる。

「あーちゃんは冷静なふりして、結構熱血さんよう?あたしが電車で痴漢に遭つたときなんかー、痴漢をぼつこぼつにして駅員さんに突きだしたんだからー!カツコいいのよー!」

「ふん。ささのキューートな尻を無断で触るよつた変態に、遺伝子を後世に残す権利は無い」

「・・・七瀬が痴漢に何をしたか、詳しく述べなくていいからな

「えええ、そこが聞いて欲しいところにい

「わわ。男っていつのは、多かれ少なかれ痴漢願望を持つてゐる生き物なのだよ。その自分の中の同類項が、それを実行する卑劣極まりない変態にさえ同情を覚えさせるのだからして、いくら城島が女に不自由しないだらう可愛い顔をしていても、余り油断してはいけないよ？」

につこり笑つて友人に言い聞かせれば、目の端で大輝が盛大に顔を引きつらせるのが見えた。

「あーちゃん・・・そんな、世間一般の善良な男性陣に喧嘩売るようなことを断言しなくても」

「うとうう。わわはいい子ね」

「七瀬つて・・・ホント、残念な美少女なんだな・・・」

「失礼な。城島も、一度見ず知らずの男に胸や尻を触られてみればいいわ。痴漢を全てこの世から抹殺したくなる気持ちが分かるでしょつよ」

「いや、オレ男だから。オレの胸やら尻やら触るつたら、それ真性の変態だから」

「同性愛者を変態呼ばわりとは・・・意外と差別主義なのね」

「やつ言つ深淵なテーマとは違つだろー」

第1-3話 七瀬有紗は残念な美少女です。（後書き）

ムーン様の方で、R18 第9・5話「竜王降臨？」を掲載しております。

和馬（？）の「Hロ魔神」つぶりを「」見になりたい方はどうぞお出で下さいませ。

・・・ホントにHロのみですので、お気を付けトモ（汗）

第14話 兄妹モードはデフォルトです。

「ああ、と喚いた大輝には構わず、おっとりとプリントに再び目を落としていたささめが、幼い仕草で首を傾げる。

「そんなことよりー、部活ってやっぱり何か入った方がいいのかなあ？帰宅部でバイトってのも捨てがたいけど、やっぱ高校生って言つたら部活で青春かなあ」

「この学校は、進学校であると同時に、きつちりスポーツ関係にも力を入れている。

F組が特別進学クラスであるように、E組はスポーツ推薦で進学してきた生徒達で編成されていて、彼らが牽引力となつている運動系の部活動は、強豪チームとして名を馳せているものが多い。

そんなクラス分けをしていると、当然のようにAからD組のお気楽青春の普通科、さわやかスポーツのE、ガリ勉のFとそこはかとない対抗意識が生まれるらしいが、流石に入学して一週間やそこらでは、今ひとつ実感も無い。

まあ、F組のメンバーは国公立進学コースが最初から決まっているようなものだから、運動部に入部する者が毎年それ程多くないといつのも頷ける。

ささめの視線が追つているのも、美術系や文化系の部活案内ばかりだが、有紗は部活で青春するつもりなどない。

「あ、私部活はパス。何かバイト探して、勉強も真面目にしないと

「夢が無い！夢が無いよつ！あーちゃんはその外見なら、じゅーぶん芸能界狙えるんだから、夢を大きく持つてー！」

「失礼な。私は適当な大学に入つて、国家公務員？種取つて、安定した老後の年金暮らしをするのが夢よ？」

「そんな世知辛い夢は嫌ー！と叫ぶための頭をよしよしと撫でていると、溜息混じりに大輝が口を開いた。

「・・・春日。お前の狙いは正しいかもしんねーわ。七瀬を見てると、美少女つてモンに対する幻想がすげー勢いで崩壊する。なんつかこいつ、お前が物凄く善良な生き物に見える」

「それ、あんまり褒めてるよつて聞こえないー・・・」

「ちょっと、ささを口説くんなら、あんたの痛い婚約者をきつちり切つてからにしてよね」

「誰も口説いてねえし。・・・つか、やつぱ痛いよな・・・痛いんだよな・・・ふ、ふふふふふ」

「『』免城島、私が悪かつたから戻つて来て」

「いや・・・いいんだ・・・マジで痛いひとだからさ・・・」

「大輝君大輝君ー！部活！部活で青春しようつー八つも年上のオバサンが、十五の青春パウワーについて来られるモンならついてきてみろな感じでー！」

「ああ、オレ部活はバスケ部だから」

途端にけろりとした顔で言う大輝に、半泣きだったささめが盛大に口ケる。

「へ? バ、バスケ部?」

「(口)のバスケ部って、結構レベル高くなかつた? Fに入つてついでいけんの?」

「ふふん、オレって結構、文武両道を地で行つちゃう美少年なんだぜ? ・・・いや、そんなブリザードな目で見なくたつていいいじゃん。マジな話、一応ミニバスのチーム入つてたんだつて。それに、今の藤沢のエースもF組なんだぞ。超かっこーの。オレ、あのひとに憧れて藤沢入つたんだよなー」

思いの外真面目な顔つきになつた大輝が、瞳をきらきらと輝かせる。

バスケット選手と言つには若干背丈が足りない氣もするが、まだ高校一年、男の子はこれからが成長期だ。

「えー、そんなにかつこいいヒトがいるのー?」

「おうよ、(口)の辺りでバスケやつてて、あのひとを知らないヤツなんて・・・」

ささめの興味津々と言つた問い掛けに身を乗り出していた大輝が、その中途半端な体勢のまま固まつた。

「城島？」

「大輝君？」

「え・・・ちよ、うええつ？」

大輝の席は、一番窓際。

有紗とささめは、そのすぐ横。

つまり、有紗とささめは窓の方を向き、大輝は教室の入り口側を向いていたわけで、その視線の先を追つて振り返った有紗は、見慣れた姿を見つけて、ぱっと顔を綻ばせた。

少し着崩した制服姿で、まるで見知らぬ相手のようだが、自分が彼を見間違えるはずもない。

「和馬。 どしたの？」

立ち上がり迎えると、一年の教室に周囲の視線をまるで気にした風もなく入ってきた和馬は、妙に真剣な目つきで有紗の姿を上から下まで確認したようだった。

「和馬？」

「ん？ ああ、お前の制服姿を見に来ただけだ」

「ふつふつふ、可愛いでしょう」

藤沢学園の女子の制服は、ちょっとお嬢様っぽいラインが可愛い、前をボタンで留めるタイプのジャンパースカート。

胸には学年毎に色の違うリボンタイ、それにアースカラーのショートジャケット。

どこの「デザイナーズブランド」といひの制服は、この辺りではかなり人気が高い。

ぐるっとその場で回って見せると、可愛い可愛い、と大きな手が頭の上で軽く弾む。

「有紗」

柔らかな声で名を呼ばれ、瞬く。

視界が翳つて、馴染んだ感触が唇を覆う。

ちゅく、と濡れた音と共に軽く舌先を舐められて、温もりが離れる。

「じゃあ、何か困ったことがあつたらいつでも言えよ?」

「過保護だつてば」

かもな、と笑った和馬が軽く頬を撫でて教室を出て行つて、ひょつとして暫くは兄妹モードが消えないのかも知れないな、と思いつがら席に戻る。

先頃までいた世界では、和馬は「可愛い妹に余計な虫がつかない

よつにあつひりガードする兄」役を完璧にこなしていたのだから。

「・・・わせ？城島？」

つい先程までバカ話をしていたふたりも、完全に田を剥いて固まつていてる。

はて、一体何事、と首を傾げたところで、余りに日常となりすぎて当たり前のよつに受けてしまつた、先程の和馬の行為を思い出した。

(・・・えええええと)

つい一時間前まで、毎朝の習慣だったことなのですが。

おはよつの後は、必ずアレだったのですが。

周囲の人々も、挨拶代わりにハグや頬ちゅーは当たり前の世界だったのですが。

すみません。

ここは日本で、学校の教室なわけで。

・・・はい。

朝つぱらから「ティープなキスをするよつな場所ではないですね。

「いめん」

すひや、と片手を上げてみる。

「あれ、あのひとの『デフォ』だけで、びっくつするよくなうことじゅやないのよ。もうさせないようにするから、勘弁してくれる?」

「いや、こい、さん。

「ああああああーちやんーつー?」

「びびびびびくつするなつて、びくつするわーー。」

「だから、『めんたい』」

「『めんたい』『めんたい』『めんたい』ーー何の超イケメンのおじーさんーー?あーちゃん、男嫌いのくせに、じこであんなおじーさん引っかけたわけ!?」

「あのひとは三年F組志波和馬! 藤沢バスケ部エースにして、全国模試一桁常連の秀才だつ!」

「え、そうなの?」

知られざる和馬の一面に驚いていると、そうなの、じゃねー!と力一杯怒鳴られた。耳が痛い。

「志波先輩つつたら、クールでストイックで、どれだけ女に騒がれても動じない、オレらの憧れだつたのに・・・つー何もお前みたいな残念な美少女に引っ掛からなくたつていいじゃねーかー!」

「大輝君ー、本音だだ洩れ過ぎー」

「憧れつて・・・男が男に幻想持つつて、こんなに暑苦しきものだつたのね」

「やかましいつー。」

「・・・こやこやこやでもでもでも、あーちゃん、ふつーにあのおにーさんとべろちゅーしてたよね！？名前呼びしてたよね！？何で、どーして、いつからそんな関係にー！？」

「企業秘密」

そんないー！とわめが絶叫したところで、がらりと音を立てて担任教師が教室の扉を開け、歴代のF組にあるまじき教室の騒々しさに、やかましい！と一喝したのだった。

「あーちやああんつ」

「んー?どうした、わわ」

「今忙しいんだけどなー」

昼休み、手洗いから帰ってきたささめが、愛くるしい瞳を煌めかせながら教室に飛び込んできた。

だがしかし、季節限定のチョコレート菓子の最後のひとつ、その所有者を決定するじやんけんの真剣勝負をしていた有紗と大輝は、昂奮状態のささめに些か冷たい反応を返す。

当然の如く、ぷつと丸い頬を膨らませたせめに、近くにの席に屯していた男子生徒が、墮ちた。

「何よう、折角大二ユースを拾つて来たのにいつ

「うん、最初は……」

「ぐつーー！ やんけんつ

有紗がチヨキ。大輝はグー。

۱۷۰

「つしあせ！」

掛け声と共に机を叩き、季節限定、塩キャラメル風味アーモンドチョコの最後の一粒をゲットした大輝が、素早くそれを口に放り込む。

「……ふふ……そつか……あたしの存在ってチョコ以下なんだ……」

「それで、大ニユースって何? させ」

「気になるじゃねーか、早く言えよ」

「うわああああんー愛が無いよつづー」

「愛が欲しいなら彼氏を作れ」

「そりそり、オレらが提供出来るのは友情だけだ」

「最近、大輝君まであーちゃんのどどめ色に染まっちゃって……あたしは悲しい……」

「……城島。例えチョコを挟んだライバルでも、ささが私たちを捨てて男に走つても、私たちの友情は永遠よねつ」

「ふつ、当たり前じゃねえかつ」

がつしと組み合つ一人の手。

「仲間外れはいやーつづーだから、大ニユースなんだつてばつー留学生なのーウチのクラスに、美少年留学生つー」

途端に女子一同が色めき立つ、男子は眞面目無む邪じやな顔になる。

「美少年で・・・噂じゃなくて、けやんと顔見たの?」

「モチのロンヨウーミルクティー色の髪の、白くてすらりーっとした、モーテルさんみたいな美少年つーでも肩幅広いのー手足長くてウエスト綿まつて、脱いだら多分ソフトマッチョーー」

「そ・・・そり・・・」

「服の上から、そこまで分かるのか・・・」

少し、有紗と大輝の中で、わざめを見る目が変わった瞬間だった。

留学生の名は、ランスレイル・フォゼット。

イギリス系アメリカ人だが、祖母はドイツ人らしい。

まあ、そんなことを日本人の高校生が言われても、「白人だあ」で全て片付いてしまうのだが。

落ち着いた、少しクセのある日本語でランスと呼んで下さい、と挨拶した彼は、確かにきれいな顔立ちをしていた。

中性的と言えばいいのか、普通に女装が似合ってしまう。そんな纖細な面立ち、淡い髪色、そして淡いモスグリーンの瞳。

それだけなら儂げな印象になりそうなものなのに、かつちりと張り詰めた肩と、細身ながらしっかりと引き締まっている体躯が弱々しさとは無縁であることを示している。

何かスポーツをやっていたのかという質問に、バスケットボールと答えた時点で、大輝が彼と親しくなるのは決まっていたようなものだったかもしれない。

ポジションはどこだ、NBAのどの選手のファンだ、シューズはどこのを使ってる、と楽しげに語りうふたりに、クラスの女子一同が、揃つてうつとりと見惚れている。

「ランス君、日本語上手だねえ」

「ミズ・カスガ。ありがと」

「ややめ、でこなうつ。」

「サー・ザーハン。」

「や、や、め」

「サ、サー・メイ」

「ややめ」

「ササー・ハーン。」

「違うよ! それじゃあ鶏肉だよ!」

「オウ……」

それをめの人懷つことは驚嘆に値するが、結局ラッシュレイルはさめのことを「ササーメイ」といつ微妙な呼び方をすることになった。

幸い、有紗の名は英語圏でも珍しいものではないため、彼が苦労することはないかった。

大輝の名も中々難しかったようで、どうしても「ディッシュキー」となってしまうらしい。

大輝はちゃんと発音を教えようとしたのだが、DISH=KEY（死と鍵）? と物凄く微妙な顔をされた為に、最終的には「ディー」に落ち着いた。

「あーちゃんばっかり、ラッシュにちゃんと呼んでもらえて狡い……」

「いや、そんなこと言われましても」

力一杯、不可抗力です。

「『めんなさい……ササーメイ』

「ラッシュは悪くないよ! こいつちいさく、『めんね?』

「ササーメイ、とつてもキューートね。アリサのグリーンアイズも、

ステキナリ」

（（ナリ！？））

「ナリは違うよ！ステキ、です。ね？」

「ステキ、テス、ネ？」

どこの口助だ、と動搖した有紗と大輝を尻目に、ささめはにこにこと異文化「ミミユニケーション」を堪能している。流石だ。

そうして、元々ささめがクラスのマスコット的存在だったこともあって、ランスレイルは一週間も経たない内に、すっかり馴染んでしまった。

部活もバスケット部に入部して、本場仕込みの技とそのルックスであつという間にファンクラブが出来るんじゃないかという勢いらしい。

しかし、雛鳥の刷り込みといつわけでもないだろ？が、ランスレイルはささめに酷く「執心だ。

勿論、同じ部活の大輝とも仲良くしているが、ささめの姿が視界に入ると、ぶんぶんと振り回される犬の尻尾の幻影が見える時がある、と言つのが大輝と有紗の共通した意見なのだが。

おい、と肘で腕を突いてくる大輝が、何を言いたいのかは分かる。

しかし、自分にどうしろと言つのかと逆に訊きたい。

時は昼休み。

場所は屋上。

世は群雄割拠の戦国時代などでは勿論なく、ただ穏やかに平凡なかけがえのない日常が続く幸せがここにある。

だがしかし。

「やはり、チョップステイック・・・ハシは、難しいデス」

本日ランスレイルがお買い上げになったのは、購買部のお弁当。購買部、と言つても金持ち藤沢学園だけあって、それを作り上げるシヨフの腕も一流だ。

下手なデパ地下のものより、余程味も見た目も上だらう。

しかし、サンドイッチと一口サイズに切られた鶏肉のロースト、それにサラダという内容の洋風弁当に、先割れスプーンではなく日本人の心の故郷、割り箸様が入っていたのが目の前で繰り広げられる光景の原因だ。

どうしても箸を使いこなせないランスレイルに母性本能を刺激されたらしいささめが、仕方ないなあと言いながら、代わりに箸を操り、所謂ところの「はい、あーん」状態が先程から続いているのである。

これが、バカップルの周りの目を気にしない行為であるなら、完全に目を背けるなり逃げ出すなりして精神的な自衛をするのも許さ

れる。

だが、ささめはあくまで親切心で行動しているし、ランスレイルもささめの手を見て箸の扱い方を学ぼうと真剣そのものだ。

・・・例え、その行為の帰結がバカップルそのものであろうと、逃げ出すというのは異国からの客人に対して、余りに失礼な態度だろ？。

（く・・・つ私は南瓜私は南瓜私は南瓜つ！）

隣では、大輝がじやがいもに変身中らしい。

ぶつぶつとうつむき加減に呪文を繰り返す有紗たちは、とても不気味だったようだ。それに気付いたランスレイルが、気遣うように声を掛けてくる。

「ディー。アリサ。具合、悪い？」

「え？ いやいや、何でも何でも。なあ、七瀬？」

「うんうん、今日も良い天気ねー、城島ー！」

あからさまに拳動不審な有紗と大輝に、きょとんとしたささめの傍らで、ランスレイルが不思議そうに首を傾げる。

「以前から、少し気になっていたディスが。ササー・メイはファーストネームで呼ぶ、何故、ディーとアリサ、ファミリーネーム、ディス？」

改まつてそう訊かれると、特に意味はない、となるのだが。

歐米文化圏で、ファーストネームが正に先に名乗る名前であるといつのは、家名よりも本人の資質そのものを優先するといつ背景があるらしい。

それは実際に素晴らしいことだと思つて、その文化に馴染んだ人間が、互いを名字で呼び合つことをよきよそしこと感じることも想像に難くない。

・・・と言つたことを思考した結果は、やっぱり、友達なのに名字で呼ぶのはどうなの?ということになるわけで。

(説得も納得のいく説明も出来ません、曹長一・)

白旗である。

よつて、有紗は無条件降伏を選択した。

「・・・うん。言われてみればそうだよね!城島、今度から大輝つて呼んでもいいかな?」

「おつ!オレも有紗つて呼ぶぜ!春日もそれをつて呼ぶな!」

「うそ、いいよ!」

スポーツマンシップに乗つ取つて、がしつと手を握り合つた有紗と大輝は、正に同志だった。

『・・・せせが空氣読めないのつて、別に私のせいじゃないよねつ!ね!?』

『・・・有紗。オレはあいつの、世にも恐ろしい病名を知ってるぜ?
』

『それは、まさか・・・っ』

そう。

有紗と大輝の葛藤も知らず、嬉しいなー、と笑いながら、尚も「はい、あーん」を躊躇いなく続けるさめは。

『・・・天然』

それはもう、救いがたい程に進行した、不治の病であった。

『ふ・・・自分が汚れていることを清々しく感じたのは初めてだわ』

『大丈夫だ。オレだって、あいつと四六時中一緒にいる関係を結ぶ勇気はねえ』

「あーー!もう、あーちゃんと大輝君てば、何内緒話?ダメだよう、あーちゃん、彼氏でもない男の子といちゃいちゃしたらーー!」

志波先輩が泣いちゃうよー?にっこり笑うをさめにに対する有紗と大輝の心は今、ひとつになつた。

((・・・お前にだけは、言われたくなえわーーー))

お前さあ、とある週末の朝、大輝が物凄く微妙な顔をして有紗に話しかけてきた。

「何?」

「どおしたのー? 大輝君てば、折角の可愛いお顔が台無しよー?」

「顔色、良くないデス……やはり、アレのせいデス?」

アレって? と有紗とせりあめが首を傾げると、大輝はいやその、と珍しく歯切れを悪くした。

「あー……。お前つて、香水とか、特別っぽいシャンプーとか使つてたりする?」

は、と思わず間の抜けた声を上げてしまった。

「香水なんだ買つたことはないし、シャンプーリンスはドリッグストアの特売品。なんのセクハラ?」

「……いや、やつぱりつだよな……」

「ちょ、大輝君ーー? そこで引いたらダメじゃん! せめてセクハラ疑惑は否定しようよ! ねえ、ランス!」

「? セクハラ、とは、なんデスか?」

「はつうーー？」

英語圏の人間に、和製英語は通用しません。

ささめがランスレイルにセクハラの概念を教えるべきか窮しているのを横目に見つつ、有紗は何やらどんよりしている大輝の顔を覗き込んだ。

「おーい？」

「う・・・いや、忘れてくれ・・・」

「恥ずかしい過去をバラされたくなれば、今すぐキリキリ吐きなさい」

はあー!?と大輝が素つ頓狂な声を上げる。

「何だよ、恥ずかしい過去つてー！」

「いや、中学んときに大輝と同じクラスだつた子に訊けば、ひとつやふたつは出でてくるかなあと」

「おおおおお前なあー！」

「ふつふつふ、若者よ。女の情報網を舐めたらあかんぜよー。」

「何で龍馬ーー？」

単なる気分です。

しかしやはり、大輝のツツ「ミ」はこうでなければ。

ほれ、さつさと吐きなさいと田の前で携帯電話をちらつかせてやると、大輝はうぬぬぬ、と苦悩に満ちた顔をしていたが、最終的には陥落した。

大輝の恥ずかしい過去つてなんだろう。

後で誰かに聞いておこう。

「いや・・・昨日な?

部活の後、みんなでメシ食いに行つたんだけどさ、そこでやつぱりカノジョいんのかとかそういうハナシになつて。んで、オレとランスがお前・・・志波先輩のカノジョと同じクラスだつて誰かが言つて。

美人かーとか、仲良いのかーとか、色々訊かれたんだ、けど「

『ごによ』によと言葉を濁した大輝に、ランスレイルが助け船を出した。

「そこに丁度、三年のヒト達も來たデス。シバ・センパイ、もいたデス。

・・・ステイツにも、シバ・センパイ程のプレイヤーは、なかなかないデス、のに」

はあ、と何故そこで溜息ですか。

「・・・で、志波先輩に一年のヤツらが話振つてさ。

志波先輩が『城島とフォゼットは、有紗と随分仲がよさそうだな』つて、だからお前から何か聞いたんですかって聞いたら・・・『お

前達からはいつも有紗の匂いがするからな』、つて・・・

「・・・皆サン、まるで『ディー』とワタシが、アリサと不適切な関係を持つているかのような顔を・・・」

不適切な関係、つて。

懐かしいフレーズですねーって、そういうことを言つている場合じゃないですね。

和馬の嗅覚は、人間の個体識別も可能なのかーって感心している場合でもないですね?

「・・・あはははははは！」

「笑い『ひちやねえわーー』

「そ、そつ『テス！』とも、不名誉、『テス！』

「大輝君とラランスに、あーちゃんを押し倒すなんて、出来るわけないのにねー？」

さわめの尤もなコメントは置いておくとして、取り敢えずその場を笑つて誤魔化した有紗は、一度とそんな間抜けなボロの出し方をしないよう、徹底的に和馬に言い聞かせなければと思いながら、強引に話題を変えた。

「それにしても、大輝つて純正お坊ちゃんのくせに、中学までは公立だったのって、なんで？普通幼稚舎からここに通つてそうな感じだけど」

素直なささめが、「そつ言えばそつだよねえ？なんでー？」と乗つてくれて助かった。

バ和馬め。

自分がどれだけマッドサイエンティスト垂涎の希少生物か、少しは自覚しろと言うの！」。

「や、オレのお袋つて元々庶民だし」

「うなの？とささめが田を丸ぐする。

「えつヒー、玉の輿ーとかそつ言ひへ。」

「まあな。

んで、オレには兄貴と姉貴がいて、ふたりはきつちつお試験クリアしてセレブコースのお育ちなんだが、お袋がなんちゅーか、ママ友とのオツキアイとか、PTAのお茶会とかで胃に穴が開きそうにストレス掛かったらしくて」

それは確かに、想像するだけで大変そうだ。

「んで、久しぶりにオレを産んだら、もう無理絶対無理あんなんやつてられるかーってなつちまつたらしくて。

元々親父もお袋には頼み込んで嫁に来てもらつたクチだし。

まあ、兄貴と姉貴のどつちかが跡継ぎになるだろつてことで、オレは無事ゆとり教育の公立校に入ったわけ」

「・・・うー、玉の輿つて意外と大変だつたりするんだー？」

「ウチは成金だからそりでもねーけど、すげーとこ嫁イビリとか、まじハンパねーらしいぞ」

入学早々、有望なイケメンをゲットする、を目標に掲げていたさめが、へにょりとしょげる。

まだ狙っていたのか。しょげる姿も可愛いが。

「日本の教育も、やはり色々あるのデスね？」

軽く首を傾げながら言つランスレイルに、三人の視線が集中する。

「アメリカはどんな感じなの？」

「ハイ。裕福な家の子どもは、キンダガーデンからボディガードがつくテス。貧しい子どもは、学校、行けません」

う、と三人だけでなく、傍に居たクラスメイト達も顔を引きつらせた。

流石、格差社会先進国。

どつちの子どもも可哀想。

「えつとー、ランスは、どうして留学先を日本にしたのー？」

些かわざとらじく声を上げたさめに、ランスレイルはにこりと笑んだ。

「ワタシ、子どもの頃、日本人のトモダチいたデス。カレが日本の桜吹雪、夏の花火、秋の紅葉、冬のコタツで食べるアイスクリームはスバラシイと」

「コ・・・ツ」

大輝が何か言いかけ、慌てて口を塞ぐ。

『・・・つなんで！？なんで冬だけその扱いなの！？途中まではいいハナシだつたのに！』

『た、確かにコタツでアイスはスバラシイかもだけどよー。』

『大体、最近のおうちにおコタはないよー。』

「?.どうかしたデスか？」

不思議そうな顔をするランスレイルに、三人は「ぶぶぶぶ」と壊れた扇風機のように首を振った。

取り敢えず、桜の季節は過ぎてしまったが、夏はみんなで一緒に花火を見に行く約束をした。

しかし、秋の紅葉もどうにかなるだろうが、冬のコタツでアイスというのは、ランスレイルに体験させてあげられるものなのか。

「こぎとなつたら、お坊ちゃんの大輝君に買つてもらえればいいよー

「オイ」

第17話 正しい恋のカタチ。（前書き）

R15成分まるっと（？）です。

お気をつけ下さい（汗）

第17話 正しい恋のカタチ。

目を覚まし、シャワーを浴びて気分をすっきりさせた有紗は、タオルで髪の水気を拭いながらベッドに戻ると、まだ夢の中の住人をやっている和馬の髪をわしゃわしゃとかき混ぜた。

さらさらとした指通りの良い黒髪は撫で心地が良い。

「あー やー やー やー やー」

今日も良い天気だ。

レースカーテンの向こうに広がる青空は、すっかり初夏の色をしている。

むーともうーともつかない声を上げて目を開けた和馬は、何度も眠そうに瞬くと、寝起きとも思えない素早さで有紗の腕を掴み、あつという間にベッドの中に引き込んだ。

「のわー」

「・・・ 有紗」

耳元で甘ったるく名を呼ばれて、だからその悩殺エロボイスはどこから出しているんだ、と思う間もなく昨夜の続きとばかりに組み敷かれる。

もうすっかり互いに馴染んだ肌が、首筋に吐息が触れるだけで期待にふわりと上気する。

(あああああ自分の意思がこんなに弱いとか、弱いとか……っ)

けど、やりたい盛りの高校生が、恋人と時間とふたりきりになる場所の三點セットを手に入れて、覚えたばかりの体の快樂に溺れないわけがなく。

防音 の術式を張り巡らせた有紗の部屋は、今日も主の、ちょっと外には聞かせられない声に染め上げられるのだった。

疲れ切っているのに、心地良い倦怠感と裏腹の活力に満たされ、有紗は快樂の名残をそつと吐息に混ぜて吐き出した。

「有紗」

「んー……？」

背後から抱き締めて、情欲をそそるでなく、ただ愛おしむようこの耳の後ろに唇を押し当たられる。

和馬は、じつやう有紗の名前を呼ぶのが好きらしい。

大切そうに、丁寧に作った声で名を呼ばると、じんわりと胸の奥が温かくなっていく。

(それにも……)

和馬が大輝達に言つた「有紗の匂い」とやらを、和馬自身も物凄く良い匂いの香水の類いだと思っていたのには驚いた。

その後、「そいや動物つて、メスの匂いで発情するよな」と真顔で言われて、フェロモンですか！？と愕然としたが。

おまけに、大輝とランスにあんなことを言つたのも、「ひとのモノにべたべたするあいつらが悪い」とか、がつたり確信犯だった上に意外と口コロが狭いことも判明した。

それでいいのか、バスケ部のエース。

・・・今の和馬は、素手で岩を粉碎出来る。

だから正直、バスケットを続けるとは思つていなかつた。

身体能力も反射神経も、最早今までとは比べものにならないのだから。

しかし和馬は、激しいスポーツの中で自分の体を動かすことによつて、「いかに自分を“人間”の範囲内に收められるか」を追求しているのだそつだ。

ぎりぎりのラインを見計らつて、じいじちゃんと生きていけるようだ。

これまで培つてきた関係を崩さないよう、壊さないよう、きちんと全力で取り組んで、努力している。

まあ、スタミナだけはどうしたって人外レベルだから、疲れたふりをするのが大変らしいけれど。

「ん・・・」

頬を撫でる指に誘われて、触れるだけのキスをする。

こうして、和馬と肌を重ねるのは好きだ。

安心する。

いや、快樂に酔わされている間は安心もへつたくれもあつたものじゃないのだが、その後こうして長い腕に包み込まれていると、本当に世界でふたりきりになつたみたいで、それを悪くないと思つている自分がいる。

幸せだと、思う。

有紗のふわふわと波打つ髪に、和馬の長い指が絡んで、解くとするするとこぼれ落ちていくのを楽しむように繰り返す。

(うーん、なんといつもかしこ空氣でしちゃうか)

かつて繰り返してきた出会いと別れの中で、気持ちをくれたひとがいなかつたわけじゃない。

共に沢山の時間を過ごして、絆、といえるものを一緒に作り上げた人達だった。

そんな大切に思えるひとたちを、全部切り捨てて、有紗は生まれ

育つた世界に戻ってきた。

後悔はしていない。

ただ、生きる世界が違つただけのことだと簡単に忘れられる程、彼らとの時間は薄つペらいものではなかつたし、有紗は大人でもなかつた。

だからといって、そのせいで自分が臆病になるのもおかしな話だろ？

彼らとの出会いは、決して有紗の人生を貧しくするようなものではなかつたのだから。

今まで、無意識に「恋愛」というものを遠ざけてきたのは、単にこちらに戻つて来たときには既に精神が成熟していた有紗にとって、中学生といつのがどうしたつて子どもにしか見えなかつたからだ。

二十歳過ぎの女が、中学一年生にきゅんきゅんするというのは・・・いや、アリといつひともいるだろ？が、有紗にとってはナシだつた。

十一歳から再び人生やり直して、二十歳を過ぎれば気持ちと体の齟齬も気にならなくなるかな、とのんびり構えていたのだが、まさかこんな風に捕まつてしまつとは思わなかつた。

・・・思えば、初めて会つたあの日から、和馬ならば同じ気持ちを分かち合えると感じたときから、欲しかつたのかも知れない。

和馬が。

何も偽りずに、ずっと傍にいられる存在が。

それだけなら、友人という立場でも良かつたかもしれない。

けれど、自分は女で。和馬は男で。

ずっと傍にいられる関係を望むなら、きっと遅かれ早かれ、恋をしていた。

順番なんて、どうだつていい。

どんな順番の、どんな始まりの、どんな形の恋が正しいなんて、きっと誰も知らない。

ただ、自分達の場合は「アナタがいないと生きていけない」がシヤレにならないリアルであるだけ。

そんなことさえ嬉しいと思つてしまつてているのだから、もう本当「どうしようもない。

（は・・・コレが噂に聞く、カラダに落とされたとかそーゆーことだらうか！）

いやだつて、最初のアレも凄かつたけど、体の相性が良いとでも言つのか、滅茶苦茶気持ちが良いんですよ。

大事に大事に快樂を教え込まれて、蕩けそうな笑顔付きで可愛いだの好きだと毎回のよつに囁かれれば、それは墮ちると言つモノでしょ、そうでしょう？

ひょっとして、竜の力とやらの中にはエロスキルも入っているんじゃなかろうなと訝りたくなる位、他の誰も知らない有紗でさえ、絶対和馬のエロテクはかなりのハイレベルだと断言出来る……つて、そんなことを断言して庇りますか自分。

と言つて、和馬とえつちした後はお肌つやつや、髪もさらさらキューティクルが一割増しになつてるのは、多分気のせいじゃない。元々若いし、肌の美しさには自信があつたけれど、疲れにくい体质にもなつたようだし、やはりなにがしかの変化は起きていたみたいだ。

・・・万が一、この世界にいられなくなつたら、和馬と一緒にヴァンフレッドの世界にでも亡命して、街の片隅でコツソリ魔法具でも作つて生活しよう。やつしよう。

両印の指輪もあることだし、あそこならいつでも行ける。

これから、自分達の未来にどんなことが待ち受けているかなんて、知らないけれど。

あの日、和馬の手を取つたことだけは、何があつても後悔しない。

「和馬」

恋を、していふ。

その人の名を呼ぶ。

何だと応える間に、ちゅ、と口づかる。

「大好き」

そう囁いた途端、理性の吹っ飛んだ和馬が「エロ魔モード」にスイッチして、再びぐぢやぐぢやの快楽に叩き込まれた有紗は、雰囲気に流されてうつかり気持ちを告げるのはもつやめようと決意した。

腰が痛い。

第17話 正しい恋のカタチ。（後書き）

次回はムーン様の方に第16・5話（タイトルビーしようかな・・・）を投稿予定です。

またしてもがつたりエロなので、18才以上の方、よろしければお気を付けてお越し下さいませ（汗）

第18話 お控えなすつて！？

有紗は、美少女である。

黙つていれば！という友人らからの厳しく断固とした条件付きだが、少なくともまず有紗をして「不美人」と評する者はこの辺りには存在しない。

よつて、新入生の分際で、それまで爽やかスポーツ系近寄りがたいけどストイックな色気がタマラナイ、と上級生のおねーさま方に密かな人気だった（らしい）和馬とらぶらぶしい関係になつたところで、「何でアンタが！」と吊し上げられるような事態は今のところ起きていない。

まあ、和馬は「ケツ、所詮は面白いかよ」と些か評価を落としたようだが、本人がそんなことにはゾウリムシの纖毛程の関心も払わないため、至つて平穀無事な日々を過ごしている。

しかし、世の中そんな平凡（？）なカッフルばかりではないわけだ。

「あーちゃんあああああああん！！」

今日も今日とて、相も変わらずその口リ巨乳で道行く青少年の視線を釘付けにしていたささめが、本日は半泣きおめめうるうるというオプション付きで抱きついてくるのを、有紗は少々戸口シマな優越感を持って受け止めていた。

（はつはつは、羨ましいか愚民共！ああ、相変わらずの腕の中にす

つぱりサイズ！腹に当たるうもんうもんの巨乳！ナイス抱き心地ですわあ、セセめさんー。)

・・・少々ではないかもしない。

「んー、どうした、それ?」

大輝とランスレイルが目を丸くしている中、ぽふぽふと小さな背中を叩いてやると、ささめはがばりと顔を上げた。

そのつぶらな瞳が、ふわっと涙で潤む。

「やうがそうか、どこの馬の骨かな？ わざを泣かせるような救いようのないアホは、この私がきつちりナシつけてまつぼぼの再起不能にしてあげるから、落ち着いてゆづくり話していりやん？」

「ままま待てー！有紗！お前こそ落ち着け！」

「そそそそそうテス！ ササーメイも、ネ！ 落ち着くテス！」

男ふたりが慌てて取りなし、どうにかうぐいぐと涙を堪えねやれめから聞き出したところによると。

きょーうつのおつべんつとなんだろなー、といつものよに足取りも軽く通学路を歩いていたささめは、突然見知らぬ青年に声を掛けられたのだそうだ。

「それでね、それでねつ、『オレのこと、覚えてるか?』って訊くからー、知り合いだつたかなーつて一生懸命思いだそつとしたんだけどね?」

十八歳から二十歳くらい、格闘技つて叫びついで日々喧嘩で鍛えてますなカンジの拳ダ「あり、大型わんこ系で、ちよつと無口なカンジの強面で女の子より男の子に人気のありそつなおにーさんなんて知り合いたいないしー」

「や、やつ・・・」

「そ、それで?」

「わん?」

ランスレイルのソフトマッチョを見抜いたときにも思つたが、素晴らしい観察眼である。

彼へのわんこの説明は、後でささめにしておいてもひまつ。

(でも、ランスレイルの『わん?』はちょっと可愛かった。流石、ささめのわんこだ)

「だからね、覚えてませんー、って言つたらね、なんか物凄い『がーん!』てなつてね?」

悪いことしたかなーつて思つてたら、いきなり真っ黒いおベンツがすーつて傍に止まつて

「つゆ、とさめの瞳が再び潤む。

「そのおにーさんのこと』と『若ー』って呼びながら、サングラス掛け

たヒト達が『このお嬢ですかい！』とか言つてー

「・・・」

「・・・」

「ボディガードを雇つてこるとは・・・ハツ、ササー・メイ、ソレは
ササー・メイがいつも言つてこる『タマノ・ジン』とこうも「スカー
?」

ぱあつと顔を輝かせ、おめでとうございますデス！とでも言つて出
しかねないランスレイルの頭に、有紗は右から、大輝は左から手刀
をぶちこんだ。

空氣を読めないのは、たゞめひとりで十分だ。

いや、そういう問題じゃないかもしねないが、取り敢えず黙れ。

「そ・・・それでね？『若の』こと、末永くよろしくお願ひいたしや
す！』とかー、『見た目はちょっとおかねえですかいいお人です
んで！』とかー、『いやいやまずはお嬢の親御さんにして挨拶を！』
とか色々言われてね？そしたらおにーさんが、『うるせえワラワラ
出て来んな、てめーらはすつこんでるー』って言つもんだから、怖
くなつて逃げてきちゃつたのうつうつーーー！」

うん。

『めん、たそめ。

怖いおにーさんつて、精々頭の悪い巨乳好きの不良高校生くら

かと思つてたよ。

ランスレイルが頭を抱えてうんうん唸つているが、そうしたいのは「おちからの方だ。

「まあ・・・うん。今日は一緒に帰るつか」

こんなちまくて可愛い生き物、車に詰め込まれてお持ち帰りされたら大変だ。

そこで、けどよ、ヒビにか状況を飲み込んだらしい大輝が片手を挙げる。

「それにーさん、ささめを知つてるっぽかっただよな？覚えてるか、つて聞いてくる程度には、お前と面識がある筈だぞ。第一、向こうはお前を顔見ただけで確認してんだから」

「う・・・うん？」

「んで、お前はぱつと見じや思に出せないってことは、そう深い知り合いでもない。

人間の顔つてそう長いこと覚えてられるモンじゃねーし、ここ最近で、今まで会ったことのないヤツと話したりしてねえか？」

服装とかでも大分印象つて変わるし、と言つ大輝に、賞賛の目を向ける。

「おお・・・初めて大輝が賢そつに見える」

「初めてかよ！」

しかし、うーん、と暫くささめは首を捻っていたが。

「やつぱつ、あんなおにーさん、知らなによつ

大輝の初の賢さは、無駄になつた。

それから復活したランスレイルに「そのスジの方々」の恐ろしさを懸々と言つて聞かせたのだが、何故かランスレイルだけではなく、それを大輝まで真つ青になつた。

「△・・・△クドーとは、そんなにも恐ろしいものなの△スか」

「うわああああんー怖こよひひひひー。」

「有紗・・・頼むから朝つぱらから十八禁は勘弁してくれ」

「いや、歐米人つて任侠映画とかで妙な先入觀持つてることがあるから、こには一発えげつない話でその幻想を打ち壊しておこうかなあと」

「「「えげつなさずがる（んだよ）（よつ）（デス）ーー。」」

あ、なんか初めて総ツツ△△貰つたぞ。ちよつと嬉しい。

しかし、「そのスジ」の方々は、無関係な一般市民には極力関わらないといつのが基本方針だと思つていたのだが。

と言つた、その『若』とやらが、どこかで本氣でささめを見初めたとして、上手くこつたとしても。

「ささめが『姐さん』とか……」

ぱそつと呟くと、暫しの沈黙の後。

「……『ガフツ』

「……『ブフツ』

大輝とランスレイルが、美少年らしからぬ声を漏らして、腹を抑えてふるふると震えております。

うん、確かにね。

このちんまり可愛い口の顔のささめが、深紅やら艶紫やらのウツクシイ着物に陣傘差して「お控えなすつて!」なーんてキリッと言つているところとがうつかり想像したら、そうなるよね。

でもほら、ふたりとも?

ささめは怒らせると、寒はつとも怖いんだよ?

何のために私が表情筋と腹筋の限界に挑戦して、真面目な顔を保つていると思つてんの?

ああほら、隣から黒い触手の幻影が。

私は知らん。

「……城島クン。ミスター・フォゼット

おどろおどろしい響きのその声に、ようやく一人が凍り付く。

遅いわ。

「ワタクシ、他人の不幸を喜ぶような方と友情を結ぶのは吝かではありませんが、自分の不幸を笑われるのは流石に我慢出来ないものですから、お一人とのご縁はこれきりにして下さいませ」

につこりとそれはそれは可愛らしく笑つて言い切つたをさめに、大輝とランスレイルはその場で「メツキバツの如く土下座した。

・・・後で「」とさりふたりが、ささめなら『姉さん』も十分出来るんじやなかろうかと愚痴つていたのは、ささめには内緒だ。

放課後。

まあ、正面から堂々と突撃を掛けてくる辺り、それ程危険なこともないだろ? と云ふことで、コメツキバッタから無事「友人」に復帰した大輝とランスレイルが、部活を休んで送るうかと(少しごくびくしながら)申し出たのを遠慮して、有紗はささめと並んで校門に向かつた。

しかし。

「ああああーちゃんつ」

「おおひ」

まさかとは思つたが、堂々と校門前に立つしゃるといせ。

わわめ曰くの、

『十八歳から二十歳くらい、格闘技ついで言うより田々喧嘩で鍛えてますなカンジの拳ダコあり、大型わんこ系で、ちよつと無口なカンジの強面で女の子より男の子に人気のありそつなおにーわん』
がそこにいた。

ランスレイルといい、この『若』といい、わわめは随分わんこ系男子に縁があるようだ。

(和馬も最初はわんこ系だったのになー・・・今じゃがつたり猛獣系、つていや別に今はそんなことを考えてる場合じゃないし)

つかり脳内でひとりノロケを展開しそうになつた自分を叱咤しつつ、有紗は今朝「ゴクドー様に近づいちゃイケマセンよ?」と言ひ聞かせたせいか、すっかりガクブル状態でひしとばかりに腕にしがみついてくるために、『若』が何とも言えない顔をしているのを少しばかり申し訳なく思つた。

職業に貴賤はありません。

（オクトワリするにしても、きちんとお話位はすべき・・・ってさめさん、私の腕を乳で包み込むのは如何なモノかと。周囲の男性諸氏の視線がとつても痛いです）

あのー、と自由な方の手を上げ、『若』に話し掛けてみる。

ずっとさめを注視していた『若』が、ようやく有紗の存在に気が付いた風にこちらを見る。

その瞳が些かも揺るがないのを見て、有紗は内心おや、と首を傾げた。

大抵の男性陣は、有紗の顔を見ると目を逸らす。

そうじやないのは余程度胸があるか、自分に自信があるか、目を逸らすことも出来ずに見惚れているか。

或いは、他の女性に、単なる顔の造作以上に心惹かれて、どうでもよくなつてゐるか、だ。

・・・まあ、初対面のとき半死半生だった和馬や、苦労性のくせ

に脳天氣なお坊ちゃんの大輝や、アメリカ育ちわんこの「ラブスレイルは別として。

何にせよ、有紗の中で少し『若』に対する好感度は上がったわけだが、ささめの観察眼が正しければ、ちょっと問題があるのも確かなわけで、有紗は改めて『若』を見遣つた。

「青少年保護育成条例つて、存じですか？」

「・・・は？」

「ですから、青少年保護育成条例というモノで、十八才未満の青少年に対する淫行は禁じられているんですよ？」この口はまだ十六才なので、そう言つたお説いは暫く遠慮頂きたいのですが

取り敢えず正攻法で軽いジャブを、と思つたのだが、思いの外クリーンヒットしたらしい。

ようりと躊躇めいた『若』が、「よよよ」ではなく「く・・・つ」とこう感じに校門に懐く。

ふむ。精神攻撃は意外と有効らしい。

「大体、女子高生を出待ちとか、ビニのストーカーですか」

ぐわつ。

「朝から女の子を捕まえるのに保護者付きつて・・・ハツ」

げしつ。

「これだから繊細なオトメ『口』を理解しない童貞野郎は嫌なんですよ、つたく」

ちーん。

（・・・やりすぎたかな？）

まあ、これで引く程度の男ならわめはやうんが。

さあびづる、とちょっとわくわくしながら待つていろと、『若は暫しの沈黙の後、不死鳥の如く復活した。

そうこなくては。

「・・・君は？」

おお、ずどんと響く重低音ボイスですか。

結構声は好みですけども。

「人に名前を訊ねるときは、まず自分から名乗るのが基本ですよね？」

「こいつと極上スマイル付きで言つてやると、むつとしたようこ眉を寄せる。

「・・・久川怜司」

「七瀬有紗です。別にこの子の保護者でもなんでもないので、口説

「へやでしたらお好きにございへん」

あーちゃん…と悲鳴を上げるわれらの頭を、よしよしと撫でる。

「大丈夫大丈夫。私がこれだけ言つても冷静つてことは、ちゃんとお話が出来るひとみたいだから」

口説くだけなら淫行じやないしねー、と呟つと、『若』改め久川が微妙な顔をする。

「ただし、一時間後にこそこそから直接私に連絡が無ければ、その場で警察に通報しますので、あしからず」

「どうしても、俺を変質者扱いしたいわけか・・・」

久川が溜息混じりにぼやくが、甘いと呟つのだ、若造が。

「この子を放さえさせた時点で、あなたは私の中で抹殺対象者なのですけども、一時間くらいは武士の情けでくれてやつてもいいかなと」

「・・・あーちゃんつーだつて、このヒト、『くべーさんだよー!?』
辻闇に近づいたら、シャブ漬けにされてありとあらゆる口口口
しごりとされて、アラブの産油国かどつかにヤマトナドシ「ブラン
ドで売り飛ばされちゃつて言つたじゃんーー」

半泣きのやれぬの呟びこ、しーん、とその場が静まりかえる。

「む。ちゅうと脅しすぎたか。

すまん、久川氏。

しかし、その久川は小さく溜息を吐くと、胸元のポケットからひらりと一枚の写真を取りだした。

セレジアは、小学生へうこのふたりの子供も・・・つて。

(わわの乳がナイー?)

・・・ではなく。

つぶらなお皿々もあるいほつても、今と殆ど変わらない小さなわざめと、じことなく久川の面影がある子どもが、仲良く公園で遊んでいるの図を収めたその写真に、わざめの皿と口がまん丸になる。

ああ、その口の中ペペペペのキャンドイーを突っ込みたい。

「・・・わわ」

「は、はーー?」

びくっとわざめが震えて、えくえくと縛まりの無い笑みを浮かべるが。

「ひひひの、氣の毒なおにーさんのことを『知らないよ』って言つたのは、じーの誰かなー?」

「藤沢学園高校一年F組の、春日わわですかー。」

その通りーとふわふわの頭にずびしつと手刀を当てる。

「謝んなさいっー・今すぐー・」

「おー」「おー」「おー」「おー」「おー」「おー」「おー」「おー」

いや、とだけ低く応えた久川は、実に心が広い。

「それドーーのおにーさんは、わわのどうごーお知り合ーー?」

くわっと問い合わせた有紗に対し、わわめは久川の顔を見ながらわたわたと両手を奇妙に動かしていくが、ようやく何かを思い出したらしく、ぱあっと顔を輝かせた。

(・・・「わわー」)

ロワーラ趣味の男を瞬時に惱殺するに違いない笑顔を浮かべたさめは、もみじのよーなお手々をぱちんと打ち鳴らし、思い出したよーーと声を上げた。

「あのねー、あのねー、ーのひとはねーー」

「わー・・・わん?」

そうして、わわめはひととひとと久川に近づくと、「はあ、とそれは可愛らしい笑顔を浮かべた。

「おーーちゃん、だよね?」

「・・・ああ」

あ。久川氏が鼻血を吹きそうです。

いや、そんな気配は周囲のあけいちでもしておりますが。

口つ四葉の「おひやん」、恐るべし。

「たさの、お兄さん？」

全然似とりども、と首を傾げると、違うよハーハーと振り返る。

「昔、回じマンシヨンのお隣れなんだつたおーーちゃんーー小れこ頃、よく遊んでもひつたんだよーー。」

ああ、幼馴染みつてヤツですか。

第20話 可愛いは正義です。

翌日。

『幼馴染みのおにーちゃん』、久川との再会はどうだった、と訊ねた有紗に、ささめは珍しくうしゅう、と沈んだ顔を見せた。

事の次第を有紗から聞いて、何だかなという顔をしていた大輝とランスレイルも、どうした?と身を乗り出していく。

「んん・・・おにーちゃんのおとーさんはね、昔(レジ)くじーさんだつたけど今は違くてね、ふつーの建築会社やつてるんだけど。昔のノリつてゆーの?そーゆーのがまだ残つてて、社員さん達が未だにあんなカンジなんだつてー」

「あー・・・。最近はヤクザ渡世も厳しいとか言つからねえ」

「だからお前はどうしてそんな情報を」

「ホラー・やつぱりタマノコシではない?テスかー」

どうしよう。

やつぱりランスレイルに、ささめの「空氣読めないスキル」が伝染している気がする。・・・取り敢えず放つておこう。

それでねー、と飼い主もシカトしてゐるし。

あ、尻尾が下がつた。

「おにーちゃん、」の間二十歳になつたばつかりなんだかどね？なんか、おとーさんがコネづくつの為におにーちゃんにお見合いしろって言い出しち、売り言葉に賣い言葉で好きなヒトがいるから無理つて逃げたら、どこのヒトだーつになつて、咄嗟にあたしの面前出しちやつたんだつてー」

それはまた、何と云つが。

「ベタだわね・・・」

「ベタだな」

「ベタ？」

・・・ワンスレイルの日本語の語彙が、日々おかしな具合に広がつてゐるのは、気にしないで行く方向でお願いします。

「で、どうすんの？幼馴染みのおにーちゃんと再会して燃え上がる恋ーに挑戦してみたり？」

それはそれで面白そつだと思つたのだが、それをまあまあかあ、と笑つた。

「おにーちゃんのお見合い話が流れるまで、オツキアイしてゐるフリを頼まれただけよう？おにーちゃん、昔からすつじくモテるんだから、あたしなんか本氣で相手にするわけないよう」

ぱたつ、と有紗の手から、ぐるぐる回してこたシャープペンシルが落ちる。

(「…………これから天然は……」)

何故にあれだけあからさまに好意を示されて氣づきませんか！？

あれだけの精神攻撃をクリアして、さあめの前に「ふはは」と立ちはだかる狭く高き門である有紗を乗り越えていった勇者久川の、あの鼻血を吹き飛ばすな顔を何だと心得る！

「あ……あーちゃん？」

「……わわ」

な、ナニ？ と元気味のわざめに、ヒヒヒヒと笑つてやる。

「わわなライケる。……墮とせ」

「ほえ？」

大輝とラムスレイルが何か言いかけるのを、ぎらりと視線だけで黙らせる。

「それだけべつたべたのシチュなんだから、ここで墮とわなくてどうするか！ あの人は立派に『将来有望なイケメン』よ！ その可愛い口り顔と巨乳を最大限に有効活用して、上目遣いに『おにーちゃん』、勿論語尾にはハートマークを百個添付！ それで墮ちない口り【ンは】の世にいなーい！」

「おおお墮とすつてーーつてゆーか、あーちゃん！ おにーちゃんは口り【ンハ】じやないようつー！」

「間違つた、巨乳好き」

「それも違ーうー。」

「ナニを言つー世の中の男の九割は巨乳好き、そうでない男はゲイ
か口リコンー久川さんはゲイじゃないんだから大丈夫！行け！」

ぐつとサムズアップしてゴーサインを出す有紗に、ささめがそん
なあああーと悲鳴を上げ、周囲の生温かい視線が集中する。

しかし。

「・・・へえ？」

「つー？」

瞬時に、その場の空気が絶対零度にまで低下した。

大輝とラススレイルのぎょっとした顔が視界の端に映る。

「どこの誰が、『将来有望なイケメン』なんだ？」

なあ有紗、とあくまでも穏やかに仰るのは、何やら丸めたプリン
トでとんとんと肩を叩いている和馬だった。

ああ、背筋が寒い。

「いっ。どいで。そんな男と会つたんだ?ん?」

サムズアップした親指もそのままに、有紗はぎしがしこつの間にかすぐ傍まで来ていた和馬の笑顔を振り仰いだ。

「はい。目が全然笑つてませんね？」

『あ・・・つあーちゃんが固まつてゐようつー・すつ“いー・尊敬つ尊敬つー!』

『さ、ささめ・・・氣持ちは分かるがちょっと黙つとけ!』

『オウ・・・これが、日本人の操る「氣」というもののデスか・・・!スバラシイ!』

『てめえも黙つてろ、ランスー!ソレが出来るのはアニメと漫画の世界の住人だから!』

ああ、大輝のツツコミが遠くに聞こえる。

「き・・・昨日の放課後、校門前で?」

「ふうん?」

(つて、なんでここまで追い詰められた氣分にならねばならないんですか!?)

理不尽だ。

「・・・和馬さん」

「ん?」

ああ、余裕ぶつこいた微笑が可愛くない。

前はあんなに可愛かったのに。

だがしかし！

「愛してるわっ！」

「知ってる」

「・・・・・」

まさかのカウンター・アタックなクールリアクションに途方も無い敗北感を覚え、有紗はごんごんと机を叩いた。

（・・・ああああ、やつぱり可愛くないーっ）

前はあんなにあんなに、純情で可愛かったのに！

『なんか・・・愛の告白タイムじゃなくて、ガチンコファイト見るみたいだよっ・・・』

『しかも、有紗が完敗・・・つわー、オレ、志波先輩への尊敬ゲージがマックス上昇中だぜ』

『しかし・・・シバ・センパイは、先程のアリサの言葉の中から、『将来有望なイケメン』というトコロだけをピックアップしたのですね・・・』

やかましい。

特に大輝、爆発しない。

結局、和馬が何をしに一年の教室まで来たかと言えば、バスケット部の練習試合で使うオーダー表を作成するためだつたらしい。

男三人がそつちの話に入り込んでしまつたため、有紗は些かぐつたりした気分で、きゅるんと首を傾げているささめを見遣つた。

・・・癒される。

「いや、まあ・・・ね？あのヒトなら、やれこれ似合いだなーとワタクシは思つた次第なので御座いますよ」

「そ、そつかなー？」

てれてれてくれ。

うん、やつぱり癒される。

可愛いのは、正義だ。

第21話 女子はヅカ系美少女が大好物です。

美少年かと思つたら、ヅカ系美少女でした。

それが、一年E組、女子バスケ部所属の冬島杏子を初めて見たときの感想である。

授業のカリキュラムが全く違つとはい、必要最低限のコマ数は各クラス共通なわけで、「さわやかスポーツのE組」と「ガリ勉のF組」は、体育のときは合同で授業を行うことになっている。

まあ実際は、毎日部活で鍛えているE組の生徒達に、その間殆どが予備校に通つていてF組の生徒達がついていけるわけもなく（大輝とランスレイルは別だが）、合同と言つてもF組の生徒達がE組の生徒達に「全力で手加減お願いします！」状態なわけで。

（おお・・・今日も爽やか、サラサラ前髪が汗に眩しいっス！）

毎回テキトーに授業をさぼりつつ、そんな風に杏子を眩しく見詰めているのは、何も有紗だけではない。

先週から始まつたバスケットボールの授業で、今日は試合形式。

女子バスケ部でも期待の新人という杏子の涼やかな長身と凜とした佇まい、何よりそのプレイの美しさに、体育館は現在、端から見れば「ここは女子校か！」と誰かがツツ「ミミを入れるような様相を呈している。

いいのだ。

女の子は、ヅカ系美女が大好物な生き物なのだから、別に間違つていないので、うん。

「きょーたま・・・今日もカッコいいよ！」

それめなど、とつべの昔に田をつむとりハートマークにしている。

しかも、「はづ・・・」と囁つ悩ましい溜息付きだ。

未だ「オツキアイしてるフリをしてるだけだよ！」状態から、中々脱出来ずにはいる久川辺りが見たら、悔しさに悶絶してしまうかもしねれない。

今度、写メつて見せてあげよ。

一応、E組の生徒とF組の生徒をランダムに組み合わせたチーム分けだが、殆どE組の生徒同士のガチンコ勝負状態だった試合は、あっさり杏子のいるチームの勝利となつた。

「く・・・つバスカツトするときの流し田にやられてしまつたわ！」

「キラめく汗にうつかり見とれている隙にボールを奪われてしまつなんてつ！私の未熟者、未熟者ー！」

「あの、ショート体勢に入るときの、手首のくいっがーくいっが堪らないのよつうー！」

・・・一部、随分コアなファンがいるようだが、体育の授業は概ねそんな感じだ。

しかし、そんな杏子はバスケット部に所属しているわけで、同じバスケット部繋がりで大輝やランスレイルと親しいかと言えば、別にそういうわけでもないらしい。

「そりや男バスと女バスじゃ顧問も違つし、体育館の使用時間も違うし。別に接点とか殆どねーもんな」

役立たずめ。

「あ？ 何か言つたか？」

「何でもアリマセンヨー」

「うわ、何か今すつづームカついたんだけどー。」

「えー、だつてー、大輝君とランスつてば、折角きょーさまと同じ部活なのに、仲良じじやないなんてー・・・チツ、使えねえ」

「・・・」

「・・・」

「ササー メイ？ デカしたテスか？」

「うん？ 何でもないよー？」

それをめがいつも通りのきゅるんとした笑顔を浮かべて、有紗と大輝は一瞬自分達が見たものを幻だったと思つてこした。

ああ、ランスレイルが空気を読めない子に育つてくれて良かつた。

兎に角、杏子の女生徒の中における人気というのはかなりのもので、上級生にまでファンがいるらしい。

細身ながらすつきりと引き締まった長身は、その辺の草食系男子より余程凜々しく頼りがいがあるし、バスケ部の規則で短く整えられた髪型も清潔な少年らしさを醸し出している。

おまけに本人の性格がクール系で、どれ程周囲に騒がれてもさらりと流しているのがまたヨイ！と言つ感じだ。

それだけ聞くと、どうも以前の和馬も同じような評価だつたらしいのだが、以前有紗のソフトグラだけを見て絡んできたどこの学校にも数名はいる「勘違つたヤンキー少年ズ」を、どのような手段を使つたか「僕達真面目っ子」にジョブチェンジさせてしまつて以来、触らぬ神に祟りなしといつ評価に補正されている。

お陰で有紗は「絶対に近寄っちゃなんねエ美少女」としての地位を無事獲得し、有り難く平穀無事な日々を送つてゐるが、口リ巨乳のささめどヅカ系美少女の杏子は毎日なんだか大変そつだ。

まあ、ささめは天然スキルでかなりの哀れな男子生徒の秋波をきれいにスルーしているのだが、杏子は常にファンクラブ会員（勿論女子）に取り囲まれていて、ウカツに男子生徒が声を掛けようものなら、その場で瞬殺されそうな視線であつという間に駆逐されてしまう。

あんな調子では、もし杏子に好きな男の子でも出来たら大変だろうな、と他人事ながら思つてゐたのだが。

「あれー？大輝君、どしたの？顔色悪いよ、大丈夫ー？」

ある朝、たさめがそう言つように、大輝が酷い顔色、といつが、「生きてますかー？」と目の前で手を振りたくなるような躊躇たる足取りで教室に入ってきた。

「おーい、どした？ 大輝」

別に、以前調べた大輝の恥ずかしい過去なんて誰にもバラしていないでですよ？

臨海学校に行つたときに、遊泳禁止区域の向こうできつちり溺れて、レスキューのおにーさんに人工呼吸されちゃつた話とか、中学三年にもなつて、授業中に寝ぼけて先生を「母さん？」なんてふりちーな顔で呼んじやつた話なんて、勿体なくてまだ誰にも披露しないですよ？

しかし、そこで有紗ははつとあることに気付いた。

ランスレイルが、幾分引きつった顔をして黙つている。

空氣を読んで。

(・・・つ一体何事！？)

その衝撃の事実に戦いた有紗だつたが、元祖・「空氣読まない菌保持者」のささめは、ねえねえー、と大輝の腕を突ついている。

「どうしたのー？保健室行く？」

・・・うん。 ささめは優しくていい子だね。

その可愛らしい子犬が纏わり付くよーな攻撃にも、ぐんよりとしあままだつた大輝が、突然がぱりと立ち上がった。

周囲が目を丸くする中、大輝の引きつた視線の先を追うと、今田もさらさらとした前髪も爽やかな杏子が、背後にファンクラブ会員をひつつけて教室の入り口に佇んでいた。

『まさか・・・ッ』

『ワ、ワタシは知りません、ナニも知りませんー！』

ランスレイルは、いつの間にか日本のコトナカレ主義を会得していた。 ブラボー。

「・・・城島」

ああ、今日も少しハスキーナ声がステキですね、杏子さん。

「は、はいッ！」

それに対する大輝の声は、思い切り裏返っている。

情けない、とはとても言えない。

何故なら、杏子の背後からは、生き靈の百や一百は平氣で飛ばしそうな顔をした女生徒達数名が、それはそれはじつとりとした視線で大輝を射貫いているのだから。

流石のささめも大人しく口をつぐんでじつと成り行きを見守つて
いるといふのに、杏子ひとりが平然とした顔で近づいてきて、大輝
と向き合つてゐる。

・・・ひょっとして、ささめ以上に空氣の読めない方なんだろう
か。だとしたら恐ろしそう。それとも慣れなのか。是非ともそつ
ちであつて欲しい。いや、それもどうなんだ。

ぐるぐるとそんなことを考えながらふたりの様子を眺めていると、
杏子は殆ど同じ高さにある大輝の顔をじつと見詰めて淡々と口を開
いた。

「昨日の返事を、聞かせてもらえるか?私はお前が好きだ。良けれ
ば付き合つてくれないだろ?」

その直球に男前な告白に、真つ青になつたままの大輝が何か言う
より先、ささめがあんぐりと田を剥く。

「う

『わわーーお願いだから、今はび・くわいえつヒーー。』

『ササササササー・メイ、今は風林火山なのデスーー。』

ランスレイルが何処かズレたような、この上なく正しいような口
本語を使つたような氣もするが、一人がかりでささめの口をどつに
か塞ぐ。

・・・イエスと答えて、ノーと答えて、大輝に明日は無い氣

がする。

重苦しい沈黙の中、大輝は勇敢だった。

ファンクラブ会員を背負つた杏子を責めながらも真つ直ぐに見返し、しつかりとした声で言葉を作つた。

「オトモダチカラオネガイシマス」

・・・勇者だ。

勇者がここにいる！

『・・・つヒラいぞ、大輝！おねーさんは感動したつー』

『ハイ！ディーもやるとときはやるボーイなのデスね！』

そんな中、感動を分かち合う有紗とラムスレイルに鼻と口を塞がれたままのささめが、ぐつたりと酸欠になつていた。

第22話 諸刃の剣

オトモダチ。友人。

その概念をなんぞや?と問われて咄嗟に答えられるといつのも中々無いのではなかろうか。

何となく小つ恥ずかしいというのもあるが、顔見知り程度でも「オトモダチー!」と言える心の広いひともいれば、相手のことを良く知り、その人となりを全て認めた上でなければ「友人」とは呼ばん!という友情道を究めようとする人物もいるだろう。

有紗は別に、そこら辺の拘りはない。

自分が相手を気に入つて、相手も自分を気に入れば友人。

勿論、そこから一緒に過ごす時間が増えればその友人に対してもわくし、何かあれば力になりたいと思う。

だがしかし。

(「ごめんよ大輝・・・!私はあなたの友人失格さ!ああ、軽蔑してくれて結構さ!それでも・・・つそれでも私は、私は・・・つ自分の身が一番可愛いんだあああー!」)

新たに大輝の「オトモダチ」となった杏子が、『「そうか、じゃあこれからよろしく頼む』と言つたのは、つい昨日のこと。

「城島」

「ハイツ」

「……以前から気になっていたんだが、何故敬語なんだ？ 同い年だらう、普通に喋れ、普通に」

そう言つ杏子も立派に「女子高生」の喋り方とは少しづれていますが、小学生からバスケ一筋、バリバリの体育会系の杏子にとつてはこれが普通らしい。

ああ、今日も凛々しくてステキだ。

そのステキな杏子は現在、「座る場所が他に無い」と言つ理由で大輝の机の上に腰掛け、そのすらりと長い足を無造作に組んでいる。

普段ならば適当に寄り集まっていた他三名は、心の中で大輝に滂沱と涙しながら詫びつつ、少し離れたさわめの席の周りでこつそりその様子を眺めていた。

だつて、杏子のファンクラブ会員様達に睨まれたくないもん。

さわめは杏子が再び教室に現れたとき、最初こそ浮かれてきらきらした目をしていたが、有紗とランスレイルが必死にファンクラブ会員の存在を示し、そのおどろおどろしい視線に気付いた途端、素早く保身に転じた。

生き物として、ヒジローに正しい。

『うーーーきょーたまはステキだけど、ステキだけど……つ』

『ステキな女の子に好かれたヤローを氣の毒に思つ口が来るなんて、思つてもみなかつたわ・・・』

『ミ・・・身の危険を感じる『テス。『ディーと一緒にいてとばっちりを受けたらどうする『テス、と考えてしまつなんて、ワタシはハクジヨーな人間なの『テス・・・・!』

『そんなことナイよウフー!』

『そうよ、ランス! それを言つなら私達は皆同罪なんだからー!』

『ササー・メイ・・・アリサ!』

がつしどばかりに手を握り合い、こちらの三人の友情はとてもとても深まっていた。

友情は、輝かしい努力や勝利ではなく、いじましい共犯意識なんてモノで深まつたりも、する。

だけど、溺れかけた人間が、必死に手を伸ばす力はハンパではありません。

下手にその近くにいると、闇雲に掴みかかつてきた手によつて、無事な人間まで一緒に水に沈んでしまうから気を付けましょ、といつ有り難い教師の教えを、このとき三人は綺麗サッパリ忘れていた。

孤立無援だつた大輝が、突然鶏がキュッと絞められたような切ない声を張り上げた。

「ふふふ冬島……」

「何だ？」

「トットモダチのお前に、オレのしんゆー達を紹介しよう! じやないかー！」

その上擦つた大輝の声に、手を取り合つたままだった三人がびしりと凍り付く。

止一めーてええええー! と叫ぶ間などある筈もなく。

「ランスレイルは知つてるよなーそっちの超絶美少女が有紗ーちゃんで口リ可愛いのがわせめだーよろしくしてやつてくれー!」

「・・・ほつ」

杏子の涼やかな瞳がこちらを見て、三人はひいいー! と内心悲鳴を上げた。

（ただただ大輝君のばかああああー! そりや、きょーさまとお近づきになりたいとは思つたけど、思つたけど・・・・・）

（状況が違うだろつ、このアホンダラーー! 死ぬならひとりで死んでいい、しんゆーだと言つなら私達を巻き込むなあああー!）

（ああ、お花畠が見えるテス・・・・）

しかし、三人とてそんな心情をそのまま顔に出す程オコサマではない。

杏子自身には何の非も無いのだ。

内心ガクブルになりながらも、それぞれにつっこり笑顔を返す。

「よろしくー！大輝君のしんゆーそのー、春日ささめですー！」

「しんゆーそのーの、七瀬有紗です。よろしく」

「その三の、ランスレイル・フォゼットデス」

「ユニークーケーション」の基本は笑顔です。

しかし、杏子は何故か短く名乗ると、微妙に胡乱な目つきで大輝を見た。

「うちのクラスの子達が、城島は常に美少年美少女ハーレムを囲つているような節操なしだと言つていたのは、本当だったのか?」

束の間、杏子がいきなり地底人と入れ替わり、意味不明の言語をしゃべり出したぞさつぱり分からんどうしよう、と言つたような沈黙が落ちた。

それから、その言葉が四人にも理解可能な日本語だと言うことを、ようやく脳みそが認識し。

「… 何でそーなる! ?」

大輝の悲鳴に、唖然とした三人も我に返つた。

「おおおお恐ろしいことを言わないでもらえますか冬島さん！？
私は大輝の友人であつて、それ以上でもそれ以下でもそれ以外でも
も『ございません！

大輝の命に関わりますので、一度とそんなバカな話を仰らないで
下さいませー！」

有紗が大輝のハーレム要員呼ばわりされているなどと聞いたら、
和馬がどんなアホなことをしでかすか！

蒼白になつた有紗に続いて、ランスレイルが据わりきつた目を杏
子に当てた。

「レティ・・・ワタシをゲイ呼ばわりするとは、いい度胸じゃない
デスか。

ワタシはゲイを差別する狭量な人間ではないデスが、区別はする
デス。

彼らはワタシの知らない世界で幸福になつてくれればいい存在で
あつて、そういう性的嗜好を一方的に押しつけられることには多
大な嫌悪しか感じまゼン。

理解出来ましたか？理解出来たなら今すぐ謝罪をして頂きたいも
のデスよ？」

（・・・誰「レ」）

そこには見慣れた可愛いわんこではなく、氷雪を支配する
魔天狼でした。

穏やかな、しかし初めて聞くランスレイルのブリザード混じりの

声に、それをまともに受けた杏子が流石に顔を引きつらせた。

「・・・すまない。失礼なことを言つたようだ」

分かつて頂ければ良いのテスよ、と笑むラヌスレイルの目は、しかし全く笑つていなかつた。

何か、ゲイに對してイヤな思い出でもあるのだろうか。

・・・きっと知らない方がいい。うん。

ついでにクラスの女生徒達が、一部物凄く残念そうな顔をすることになんて、ワタシは何も氣付いていませんヨー、と視線を在らぬ方に飛ばす。

しかし、立て続けの衝撃に些か動搖していた有紗は、氣付かなかつた。

「大輝のハーレム要員」などという非常な不名誉をアコガレの杏子に疑われたささめが、テンパつた為か、或いは己を守ろうと瞬時に目覚めた本能故にか、全てをリセットする最強の呪文を唱えようとしていることに。

「きょーさまー！大輝君は、ハーレムなんか作つたりしないようー！」

ささめ、きょーさまは止めた方がいい。

本人が思いきり引いているから。

「だつて、だつて・・・！」

ささめがぎゅっと握りしめた拳を上下させる度に、その立派なお胸がもいんもいんと上下するのを杏子の視線が捉え、その視線は杏子自身のスレンダーなバディに移つた後、「ふふ……」と少々乾いた色を浮かべた。

・・・いやあの、スポーツ選手にコレは邪魔だと思しますよ？

しおつちゅう肩こりを訴えたりして巨乳も結構大変そうですよ、と気持ち的に杏子の肩をほんと叩いたとき、ささめがしゅびつとの両手で大輝を示す。

子ども向け特撮ヒーローものの変身シーンのようだ。

起死回生の一発逆転ホームランを繰り出す前フリ。

これさえあれば怖くない。

そうしてささめは大きく息を吸つて、言った。

「大輝君には、おじーさまが決めた、とっても痛々しい婚約者がいるんだものー！」

(・・・つそーいえばそんなネタもあつたーつー！)

有紗だけでなく、大輝本人とランスレイルもすっかり忘れていたのか、三人は揃つてぽん、と掌を拳で叩いた。

あれから大輝は、二つてじと杏子に叱られました。

曰く、

「告白をした相手に『オトモダチから』なんて言つたら、そこから某かの発展があると期待するに決まつていてるだろ？—決まつた相手がいるならきつちつそつ言つて断らんかー！」

正論です。

これ以上無いほど正論です。

その清々しい凜々しさと、何の弁明もせず「スマセン、スマセン」と謝り倒す大輝の姿に、F組の教室に満ちていた杏子のファンクラブ会員様達のおどろおどろしい空気は綺麗サッパリなくなつていた。

それが、「婚約者がいるなら仕方がないわよね」なのか、「あなたへタレ、これ以上杏子様が相手にするわけないじゃない」なのかは知らないが。

「・・・あのヒトの存在を有り難く思つ口が来るとはな・・・ふふふ、ふふ

「」の一田でめつきり人相が変わってしまった大輝の机には、彼の好むジュースやらお菓子やらがわざと載っている。

有紗達からの貢ぎ物である。

保身に走つて友人を見捨てたことは、やつぱりちょっと申し訳ないなと思ったわけで。

そんな中、でもお、と季節限定爽やかオレンジピール入りチョコレートクッキーを貢いだささめが首を傾げる。

「きょーさまのコトは物凄く特殊なパターンだよつー・大輝君、学校中に婚約者がいることバレちゃつてー、このままじゃ卒業するまでカノジョとか絶対出来ないよつー。」

その婚約者の存在を盛大にカミングアウトしてくれたのは何処の誰ですか、ヒツツ「む者はここにはいない。

杏子には申し訳ないが、あの恐ろしいファンクラブ会員様方が彼女にひつついている限り、彼女こそ嬉し恥ずかし男女交際など夢のまた夢だろう。

「それ以前に、冬島さんの元思い人とオツキアイしてくれる勇者が、今後出でくるかどうか・・・」

「少なくとも・・・ほとばりが冷めるまでは無理と思つテス」

「はつはつは、それがどーした！オレらは学生だぞ！？学んで生きるイキモノじやねーか！色恋なんて、いづれあのババアとの婚約を

解消してからで十分だつ！」

「ははははー！とふんぞり返つて笑う大輝に、そのしんゆー二名は内心そつと涙を拭つた。

・・・憐れな。

第22話 諸刃の剣（後書き）

次回、
ちょつとシリーズ
和馬視点がが入ります。

今までのアホっぽいノリとはかなり毛色が違つお話となつてありますので、本編のこのノリを気に入つて下せつている方には「う？」となるモノかと思います。

しかし、作者は基本アホの子なので、すぐに元に戻りますので！

そろそろ異世界ノリ、というかヴァンフレッドが懐かしくなつてきましたところでもありますので、そちらがお好みの方は新章にご期待下さいませ！

第23話 竜を喰らつた人間（前書き）

自分で書いてて、本編との余りの落差に「つまづ」となりました。。

次回からはまたアホなノリに戻りますからーはー！

第23話 竜を喰らつた人間

あのとき田を開いてまず思つたのは、ああ自分は死んだんだなと
いう、今から思えば随分と間の抜けたことだった。

死んだ人間が思考などするわけがない。

人間が死んだ後に残されるのは、ただのタンパク質とカルシウム
の塊だ。

脳の活動が止まり、そこを走る電気信号が途絶えれば、人間が思
考を続けることなど出来はしない。

なのに、あのときそんなことを思つたのは、目の前に天使のよう
に愛らしい姿の少女がいたからだ。

自分はクリスチャンでもなんでもないが、現代日本に生きている
若者で、「死後の世界のお迎え」という言葉から妄想するのが美麗
な天使の姿というのは、別に珍しくもないことだと思つ。

・・・まあ、その天使のようだと束の間見とれた少女が、今まで
自分が遭遇した中で最も逞しい人間だと氣付くのに、そう時間は掛
からなかつたが。

ぐるぐると年相応か、それ以上に幼い笑顔を浮かべて己の好奇心
のままに行動するかと思えば、突然酷く大人びた目をして見せる。

自分も大概凶太い、鈍いと言われる神経の持ち主だと自負してい
たが、有紗は「ふふん」と笑つてあつさりその上を行く。

面白かった。

何が起きても動じず、当たり前のようになつて傍にいてくれたその存在の確かさに、どれだけ救われただろう。

・・・有紗が傍にいてくれたから、耐えられたのだと思つ。

今の自分は、誰がどう見たつて「化け物」だ。

思つだけで水を操り、風を起こし、触れた木々を生い茂らせ、ほんの少し感情が高ぶれば炎を吐き出す。

ありとあらゆるプライドをかき集めて平氣なふりをしていたが、夜になつてひとりになり、自分が自分の知る己と違つものになつてゐるのだと、灯りも無いのに見える田や、聞こえるはずも無い扉の遙か向こうの物音や声に気付く度、そのおぞましさにぞつとした。

自分は何だ。

もう、人間ではないのか。

そんな疑問に、自分の全てがYeosと答えた。

疲れぬ夜を過ごしてさえ疲れ一つ覚えない体も、こんな体は自分じやないとえれば闇雲に何処かへ逃げ出したい程の恐怖を感じた。

それでも、朝になつて口が昇れば、明るい光の中で有紗はいつも笑つていて、少しも恐れる様子もなく触れてきた。

『おはよう、和馬』

触れる、その手と、脣。そして、笑顔。

その温もりに、何かが許されている気がした。

それらを温かいと感じる自分の心だけは自分のものだと思えたから、必死になつて縋り付いた。

それは執着だつたのか、それとも依存か。

何でも良かつた。

有紗を、人を、どんな形であれ同胞だと、守るべきものだと感じるならば、自分の心だけは人間なのだと思えたから。

そうして知識を蓄えていく中で、既に自分と有紗が共に在り続けることが決まっていいるのかもしない、という可能性に行き当たつたとき、込み上げたのは浅ましい程の歓喜だった。

けれど、同時に恐ろしくなつた。

有紗を求めるこの気持ちを、この心を、「自分ではなくつた自分」のものなのではないか。

生きるための本能が、ただ「必要だから」彼女を欲しいと啼いているのではないか。

そもそも、自分がどう思つていたところで、自分の道を自分の足で歩くことを躊躇わないだろう彼女に、こんな「化け物」である自分の伴侶として生きることを強いていいのか。

・・・それまでの決して長くない人生の中でも、「女」が「男」に向ける目がどんなものかは知っていた。

彼女の瞳にそんな色はまるでなく、一杯的好奇心でいつだつてきらきらと輝いていて、そこに時折氣遣う色が滲んで見上げてくる度、胸が軋んだ。

日に日に強くなる飢餓感と渴き。

身体の不調と、どうしようもない苛立ち。

その全てを癒す存在が有紗なのだと、飢えた本能が叫んでいた。

彼女が別のやり方でこの呪縛を解く方法を見つけてくれたなら、と自分が望んでいたのかどうかは今でも分からぬ。

ただ、有紗は本当にびっくりするくらい前向きで。

男として最低なことをしたはずなのに、和馬を責める言葉など何一つ口にせず、共に生きる道を選んでくれた。

一緒に生きよつと言つてくれた。

多分。

あのときの言葉と笑顔に、本当に魂だと呪縛されたのだと思つ。

愛おしいと、痛い位にそう思つた。

人じやなくていい。

「化け物」だつていい。

自分が何者かなんて、そんな哲学めいたことを考えなくても、答えは既に自分の中についた。

自分は、有紗を愛するもので。
自分は、有紗を守るもので。

それが、全部だ。

何があつても彼女を守る。

有紗が自分を救つてくれたように、生涯掛けて彼女を傷つける全てから遠ざけよ。

例えそれが獣の本能だろうと、人の心だろうと、そんなことはどうだつていい。

結果は同じだ。

何も変わらないなら、悩むことに意味なんてない。

・・・それでも、慣れない強烈なばかりの衝動はどうにも制御し難くて、有紗が拒絕しないのを良いことに、それこそ獣のように求め続けた。

その衝動をどうにか飼い慣らすまでの暫くの間は、有紗の傍に自分以外の「オス」がいることに苛立ちばかりが募つて、有紗は素直に気持ちをくれているのに、わざわざそれを確かめるようなことをした。

多分、有紗は知らないから。

彼女が思うよりずっと深く、濃く、誰よりも何よりも自分自身よ

りも、和馬が有紗を大切に想っていることを。

こんな運命に巻き込んだことを、謝ったりはしない。
そんなことをして、今の自分達を否定したりしない。
だから、否定なんかしたりしない。
誰にも否定させない。

前とは少し違つ命だけど、それでも前よりずっと生きていると感じ
じる。

生まれて生きる、喜び。
それをきっと、有紗に出来つまでの自分は、本当の意味では知ら
なかつた。

自分の命よりも大切に想える相手がいて。
その相手が、いつでも手の届くところにいる。
笑ってくれる。
愛して、くれている。

『和馬』

そう、自分の名を呼ぶ声に、自然と柔らかな甘さが混ざるよつこ
なつたのはいつだったか。

(・・・有紗)

お前が、誰よりもじぶとくて逞しいことなんて知つてゐる。

だけど、それだけじゃなことだつて知つていい。

お前を抱き締めて過ごす夜に、自分が時々泣きながら眠つていてる
こと、お前はきっと気が付いていないのだろうけれど。

傍にいるよ。

お前が当然のように「オレ」を受け容れてくれたよつて、オレだけは
何があつてもお前の傍にいる。

だから、有紗。

笑つてくれ。

ずっと。

オレの傍で。

第24話 恋人は悪役？

「いいいいいよっしゃああああああああーー！」

人が、歓喜の雄叫びを上げるとき、というのはどうも言つたシチュエーションでしょうか。

まあそれは人それぞれ、スポーツ観戦と言つひともいれば、気になる相手からいいカンヅメのメールが来たとき、試験でも選挙でも貯蓄金額でも兎に角目標を達成したとき。

或いは宝くじに当選！なーんてことにもなれば、雄叫びの千回くらいは海に向かつて叫んじやうのも当然といつもの。

しかし今、有紗が「うふふふふふ」と少々不気味な笑いを垂れ流しているのは、そんなササヤカな幸福の故ではない。

（やつと・・・つやつと・・・つーふよ♪テトリスト人生とおさらばですーつーー）

そう。

例の諸悪の根源、マジドサイエンティストのアホオヤジのせいであつちへぼちやん、こつちへこうりと「落ち」まくつっていた有紗の体質（？）が、見事に解消されたのである。

季節は夏。

別に「落ちる」ことに周期があつたわけでもないが、和馬と共にヴァンフレッドの世界に召喚されたのをカウントに入れなければ、

もつ半年近く、「落ちて」ないな、とは思っていたのだ。

それである晩、『最近どうよ..』と暇でもなからうつに連絡を寄越したアホオヤジにそう言つたところ、『あーそりゃそうだらうねえ』とへりうとした返事が返つて来たのだ。

一瞬硬直した後、どうしたことだと問い合わせたところ、あくまでのほほんとした空氣を醸さなこ声がのんびりと答えた。

『アリサがあちこちに「落ち」やすかつたのは、ボクが君を召喚したときの歪みに、君が同調しまくつていたからだもん。この間その歪みを解消するのに成功したから、多分もう「落ちる」ことはないと思つよー..』

その言葉を十回ほど牛のよう反芻してその意味をあらうと脳が理解した途端、有紗は「そういうことは、わざわざわんかこんのクソアホオヤジー……」と絶叫していた。

「これだからマジでサイホンティストは嫌なのだ！」

全く、ヒトとしてどうかと呟つー

自分の興味のあることは一般人がどんな引きする程喋りまくらへに、一般的に必要なコミュニケーションは不全もいふところ。

有紗がどれだけこの体质を鬱陶しく思つてゐるのか、誰よりも知つてゐるはずなのに、この気遣いのなさと嘆いたらいつそ笑えるベルだ。

田の前に相手がいたら、けたけた笑いながらハエ叩きでその顔に

ばつちり編み目が付くほど張り飛ばして いたに違いない。

しかし、アホオヤジとの通信をぶつちり切つて、改めて現実を咀嚼したところ、冒頭の雄叫びに繋がった、とそう言つ話である。

本当に、我ながらよく生きていたものである。

因みに火山の真上に放り出された直後は、暫くトラウマで温泉という文字すら見たくなくなつた。

しかし、そんな感覚はともお尋ねだ。

世間一般の高校三年生は、夏休みと言えば受験シーズンまっしづらと言うところだろうが、幸い和馬は推薦で都内の大学に進学することが確定しているから遊び放題。

遺跡巡りだらうと遺跡発掘だらうと遺跡造りだらうと、今なら脳みそらりぼーの小学生並に楽しめそうだ。

（ふつふつふ、王宮裏の森のずっと先に、グランドキャニオンばかりの岩場があつたのよねー。あそこにこつそりアンホールワットなブツを作つておいたら、いつか見つけた誰かがびっくりするだろうな

あー。)

・・・そんな、異世界の歴史学者が発狂しゃうな」とを、うつかり考えてしまつたりもしたけれど。

取り敢えずは、王子様のいる世界に飛びれつひ、パーです！

・・・すいません、調子に乗りました。

友達の家に遊びに行くときは、前もって連絡するのがスジつてモノですよね。

いきなり押しかけたりしたら、そりゃあ迷惑といつもんです、はい。すいません。ゴメンナサイ。勘弁して下さい。

「・・・有紗

ああっ、和馬の声も引きつるしー。

しかし、失敗を笑つて許されるのは、か弱い女の子だけですよね、と言つことで。

構築式、展開。

「田標捕捉・敵認識・照準確保。・・・ 氷棺！」

次の瞬間四方八方に冷気が走り抜け、周囲の見渡す限りの草原にわっさりと群れていた真っ黒い獣達は、立方体の氷の中に閉じ込められていた。

・・・ おお、戦術用術式なんて、何年ぶりだろ？

血みどろの真っ黒い獣の群れね。みんな大きいな、虎っぽいのとオオカミっぽいのと鹿っぽいのと何だか種類もぐちゃぐちゃ混じつて統一感つてものがない。

ほほー、ナルホドナルホドあれが噂の魔族さんですか。

ああほんと上手くいって良かつた良かつた、なーんて言つてる場合じやないんですよ。

(うつひーいーいーいーいー)

「のわあつー？」

がつしと和馬にしがみつき、力任せにぎゅうぎゅうつとその胴体を締め上げる。

怖かつた怖かつた怖かつた怖かつた怖かつた怖かつた怖かつた。

もひとつおまけに怖かった。

ホラ少年漫画とかでよくあるじゃないですか。

戦闘シーンで敵さんとかが、いよいよってときに「ふつふつふ、
ワタシには奥の手があるのだヨ」なカンジで「ワタシに」の技を使
わせるとは大したモノだ」みたいなTHE・奥義！を繰り出したり
するじゃないですか。

アレ、無理ですかー！

普段使つてない技とか武器とか、そんなもんひょいひょい使いこなせてたら、誰も苦労しませんから！

普段包丁持たない女子高生が、いきなり満漢全席作れって言われたつて「無理ッス」ってなるでしょう!?

何事も反復練習と訓練と実戦と慣れがないと、思い通りの結果なんか出せたりしないんです！

一度身につけたことだつて、少しサボつたらあつ」という間に「あれ自分、どうやつて出来てたんだつけ」つてなるんですね！

人間忘れる生き物なんですよ、特に基本がのほほんな戦争知らない日本人なんて、基本思考に戦闘モードなんて入つてないんですよ！

「あー···」

ミー・ミーと和馬にしがみついてガクブル状態の有紗の耳に、どことなく気の抜けた、聞き覚えのある声が届いた。

よう、と両手を挙げる和馬の声がちょっと苦しげなのは、有紗が全身全霊掛けてその胴体を締め上げているからで。

「また、随分ととんでもないときに。何も、魔族討伐の最中ど真ん中に跳んでこなしても良かつたのではないか？」

「ああ・・・アホの子のヴァンフレッシュに、反論しようのない正論を言われてしまいました。

そりやあ、転移先の座標の安全確認を怠るとか、「落ちモノ」のプロ(?)失格つてもんですよな。

・・・ショックだ。

ますますずーんと落ち込んだ有紗の背中を、和馬の手がぽふぽふと叩く。・・・うん、フォローのしようもないうことですね。

「まあ、お陰で僕達は助かったが

と呟つたらヴァンフレッシュにフォローされた！

「殿トー。」

ええヒトヤー、と有紗が顔を上げかけたとき、今度は知らない声が危機感たつぱりにヴァンフレッシュの注意を促した。

咄嗟に頭上を仰ぎ、遙か上空に幾つもの点・・・って、あれだけ上空なにこちやんと鳥の形だつて分かるつて」とはどれだけバカでかいんだろう。

色は多分黒なんだろうな。

遠すきでよく分からぬけど、物凄い殺氣というか、食欲というかがびしばしに飛んでくるもんな。

飛んでるモノって言ひより、急降下してくるモノって滅茶苦茶照準付けづらこんですよ、どうしまじょうかと思つたとき。

「・・・うせえな」

ぼそ、と和馬の呟きが聞こえて、ひとつ虫の有紗を片手で抱えたまま、もう一方の腕を無造作に振るのが見えた。

(え)

次の瞬間、上空に群れていた筈の黒い鳥たちの姿は綺麗サッパリ消えていた。

一瞬、白い炎のようなものが空気を歪ませたから、多分焼き払った・・・というより、アレだ。

以前、有紗が和馬にプロポーズしたときに、図書館の壁が同じ田に遭っていた。

つまり、蒸発。
どれだけ超高温。

・・・じめんなさい、前言撤回します。

和馬は多分、少年漫画の悪役、出来ます。

第25話 死亡フラグはあらわひ。

それから再会の挨拶もそこそこに、ヴァンフレッドと愉快な仲間達・・・ではなく、魔族討伐隊を編成する近衛騎士団第四師団の方々から、近頃この森付近で魔族の出没が頻発していると聞かされた。因みに第四師団というのは、第四王子であるヴァンフレッドを護衛するのがお仕事なのだそうだ。

その団長は、猫耳もナイスチャームな赤銅色の髪と水色の目をした、大人のお色気たっぷりの三十一歳、カイル＝ムート。

流石に初対面で「その二角お耳を触らせて下さい。」とは言えなかつたが、かなり手がむずむずしてしまった。

そして副団長は栗色の長髪を後ろで括り、怜悧な印象のダークグリーンの瞳が素敵なアルフォンス＝トルザ。

いかにも仕事が出来そうな落ち着いた感じだが、こうこうタイプつて俺様タイプの上司の下で一生苦労するんだよなあ、なんて失礼なことを思つてしまつた。

ほら真面目なひとつで、やんちゃなことを好きなよつて出来るひとに憧れるところがあるじやないですか。

そのフォローをついついやつてる内に、気が付いたら腐れ縁で逃げられなくなつているとか、そういう雰囲気がひしひしと。

実際、有紗を田にするなり口説いて来ようとしたカイルを、即座

に黙らせたのもアルフォンスだった。

和馬が何か反応するより前に、アルフォンスの剣の柄がカイルの脇腹にめり込んでいるのを見たときには、どんな反射神経ですかと呆れたが。慣れか。

「・・・・・つってーな、何しやがんだ、アル！」

「それはこちらのセリフです。殿下のご友人にして我らの恩人の方々に、何をいきなり恥を晒そうとしてやがんです。少しば見境というものを持つて下さいハレンチ上司」が

「アホか！美人を見かけたら口説くのが、正しい男のマナーってモノだらうが！」

「・・・・・」

「な、何だよ？」

アルフォンスにじつと見詰められ、何故かびくついた様子のカイルから、ダークグリーンの瞳がゆっくりと有紗に移った。

「アリサ殿」

「はい？」

「あなたはお幾つですか？」

「?十五ですけど・・・」

有紗の誕生日は十月だ。

しかしそう言つた途端、カイルがぎょっとした顔をしてまじまじと有紗を見詰めてきた。

「ウツソだろ、十五！？ その体でか！？」

直後に叫ばれたその言葉に、一瞬辺りが静まり返り。

「・・・ヴァン」

「な・・・なんだ？ カズマ」

「こいつの尻尾、むしつていいか？」

カイルには、素敵な猫尻尾（長毛種タイプのふつさふた）。ああ触つてみたい）もついてます。

かなり本気に聞こえた和馬の言葉に、その尻尾がぶわっと広がつた。

（おおつ！？）

凄い、そこまで大きくなるとは思わなかつた。

「ああ、それはいい考えですね、カズマ殿。私にはサッパリですが、その尻尾は同族の女性には堪らなく魅力的に映るらしいのですよ。その鬱陶しい尻尾が身だけになれば、さぞ団長の周囲は静かになつてくれることでしょ？」

お手伝い致しますよ、とにかく笑むアルフォンスは、思つてはよりずっと怖いひとだったみたいですね。

それともあれか、ずっと溜まりに溜まっていたストレスが一気に解放されているとか、そういうことだらうか。

「ま、ま、ま、ま、待てーーー落ち着けアルーーー、え、落ち着いて下せーーー。」

「いえいえ、その尻尾を丸刈りにすれば、成人前の女性を口説こうとしてしまった恥ずかしさなど、きっと塵の如しだと思つますよ。」

・・・敬語責めつて、ちょっとといいかもしれない。

その場はどうにか、ヴァンフレッドの「まあまあ」とこう取りなして、カイルの尻尾は無事と相成つた。

良かつた。ハゲた尻尾はきっと可愛くない。

しかし、改めて「魔術師でーす」と紹介されたものの、やはり有紗の氷漬けにしろ、和馬の瞬殺にしろ、彼らにとつてはかなり非常識なものだつたらしい。

騎士さんの中には「俺達の苦労つて、苦労つて・・・べつーーー」と泣いちゃつてるひともいたし。

まあ、それはそれとして、基本的に単独行動が主の筈の魔族が、こんな風に群れるというのは非常に珍しいことなのだそうだ。

「前回の記録だと、もう一十年以上前になるかな。・・・魔族が元は普通の獣や精霊だったというのは話したと思うが、つまり基本的

に連中は『魔族』という形では繁殖しないのだ

有紗の作った「魔族の氷漬け」を、軽く拳で叩きながらヴァンフレッドが言つ。

「しかし稀に、魔族は群れ集い、その群れの中で序列を作り出すことがある。そして、その群れの全ての個体に最強と認められた個体がメスとなり、第二位のオスと番つて卵を産む」

そうして生まれた「純血の魔族」は、一般的な魔族とは比べものにならないほど知能が高く、また能力もズバ抜けているらしい。

要するに現在は魔族の繁殖期で、その為人的被害もとんでもない勢いで増加しているのだとか。

・・・楽しいサマーバケイションのつもりが、何だか随分血なまぐさい感じがしてきた。帰ろうかな。魔族怖い。

ああでもここで「所詮他人事だし」みたいな顔して帰つたら、物凄く後味悪いんだろうな。

悶々と考え込んでいると、それにしても、と和馬がヴァンフレッドに声を掛けた。

「お前、仮にも一応王子様だらう? なんでそれこそこそ前線真つ直中にはいるんだ?」

あ、言われてみれば。

しかし、どことなく騎士団の面々に微妙な空気が流れる中、ヴァ

ンフレッシュドはけりつと答えた。

「そりやあ、僕が前線に出れば民は『王族直々に魔族討伐に取り組んでいる』と安心する上に、母上が庶民の出だから、まかり間違つて死んでも貴族からの反発が無いからな」

「うーん」とをせりりと言わないで貰えませんか。

「うとうその一般庶民なんですよ。

その庶民がお母さんだから、アナタが死んでも困らない的な発想がまかり通つていて、正直すっげー馬力つくなんですよ。

「それに何より、魔族が増えて瘴気が濃くなるとルカの体に障る」

って、やつぱりそれかい。

何でもヴァンフレッシュの可愛い弟ルカ君は魔力適性が高すぎて、ショットちゅう「魔力酔い」を起こしてはぶつ倒れていのだそうだ。

能力が高すぎる子どもにはよくあることだが、受け止める情報量にまだ出来上がつていない小さな体が耐えられず、神経が参る前に自衛手段としてブレーカーが落ちるやつなもの。

そう言つヴァンフレッシュも、現王族の中では唯一ルカ君と同じ位魔力適性が高く、幼い頃は同じように苦しんだ時期があつたため、他の適性の低い兄弟達よりずっとその気持ちが分かる、というのがブランの真相らしい。

・・・今まで「ちよつとキモい」とか思つて「めんなさい。

そんなルカ君は、この「魔族の繁殖期」が始まつてからと重いつもの、浄化作用のある結界を張り巡らせた後宮から、本当に一步も出るこどが出来なくなつてゐるらしい。

実際に魔族の脅威に晒されている庶民の皆さんに比べたらナンボのもんじゅという向きもあるかも知れないが、小さな子どもがベッドでずっと苦しんでいる図とこつのは、どうしたつて胸が痛むものだ。

しかし、騎士団の方々はちょっと意見が違つたらしい。

ヴァンフレッド直々に前線に出ていかなくとも、近衛騎士団である彼らが動けば十分に民は安心するし、単独の魔族討伐ならまだしも、群れた魔族相手に主を守りきれる確実な自信はない。

「俺達も、殿下の力があれば助かるとは言つても、普段ならともかく、繁殖期の討伐なんて誰も経験してねえんだから、出来れば王宮で大人しくしていて欲しかつたんだが・・・」

溜息混じりにカイルが語つたところによると。

繁殖期が始まつて暫く経つた頃、熱を出して寝込んでいるルカ君のお見舞いに行つた際、泣きそうな顔をしながらヴァンフレッドの手をぎゅっと握りしめたのだそつだ。

『ヴァン兄上、もつ魔族討伐になんか行かないで下さい。ヴァン兄上が行けば、民が喜ぶんだろうなつてことは分かつてます。でもヴァン兄上がいなくなつたら、ぼく、ぼく・・・』

『・・・ルカ？お前はいずれこの国の人になるんだ。そんなお前が民より僕のことを優先するなんて、いけないことだよ』

そのとおり、確かにヴァンフレッシュの顔は緩みまくっていたそな。

『僕は死なないよ。必ずお前のところに帰つて来る』

『兄上え・・・』

因みに、ルカ君は銀髪碧眼の超絶美少年だやうです。

その様子を眺めていた侍女さんたちが、揃つて鼻血を吹きそつな顔をしていたそうです。

確かに、どこの恋人同士の今生の別れですかつて感じですよ。

ていうか、ヴァンフレッシュ。

それ、死亡フラグじゃない？

第26話 ムンクの叫び

流石に、死亡フラグをばっちり立ててしまつた友人を見捨てて帰ることが出来るほど、薄情にはなれません。

・・・ホントは嫌なんだけど。

だつて怖いの嫌だし。それに例え人間をもりもり食べちゃう魔族つて言つたつて生き物は生き物。

切つたら血が出る生きているものを、現在進行形で襲われているわけでもないのに、「はい、アンタら怖いから殺しちゃうね！」なんんてさらりと決められる程、有紗はまだ人間捨ててない。

「つて、あれ？」

「どうした、アリサ？」

ええと、と以前聞いた情報を頭の中から引っ張り出して確認してみる。

「魔族つて、力のある術者なら使い魔に出来るとか言つてませんでした？」

そうすれば何も殺さなくてもいいのではないか、と思つたのはやっぱりシロウト考えだつたわけで。

「繁殖期の魔族は、普段より数段凶暴化しているからな」

あつさつ無理だと言われました。

そりやそりや、そんなことが出来るなら誰かが先にやつてこますよね、と若干へこんだ有紗の頭に、ぽんと和馬の手が乗る。

見上げれば、もう随分見慣れた瞳が穏やかに笑んでいる。

「大丈夫だ」

「え？」

「いや・・・誰かに大丈夫だつて言われたら、何となく大丈夫な気になるだろ？」

少し困ったような顔で、和馬はそんなことを言つてくれて。

どうしましょう。

現在、目の前にある選択肢、どちらを選ぼつか葛藤中です。

「、素直に惚れ直し、きゅんきゅん胸をときめかす。

」「これから天然のタラシは・・・!と力一杯おののく。

・・・難し過ぎるから、後で考えよう。

何にしても、このまま不気味な魔族のオブジェを放置して、いざ氷が溶けたときにでろでろに腐つてもアレだと言つことで、氷棺を解除して魔導具の素材になりそうな牙やら爪やらを回収することになりました。

流石にモーグロイ作業は遠慮させてもらいましたけど。みんなもしなくていいよーって言つてくれたし。

和馬もやめとけばいいものを、他の人達やヴァンフレッシュまであれこれ捌いたりむしったりしている中、男の子のプライドが刺激されたのか手伝いに行つて、しつかり吐きそうな顔色になつていた。

しばらくお肉は食べたくないそうです。

それから、彼らが今回の魔族討伐で滞在しているといつ離宮に移動した。

前回お世話になつたヴィクトール氏もここにて、相変わらずのナイス執事つぱりに感動しつつ、再会の挨拶と「殿下をお助け下さつてありがとうございます」なんてお礼もされてしまつて、少し照れた。

いや、勿論、ヴァンフレッシュや騎士団の人達からもお礼は言われたんだけど、ヴィクトール氏のはううううう。

ヴァンフレッシュのことを、ほんとに大事にしてるんだなあついうのが伝わつてくる感じで。

誰かが誰かを大事に思つてゐる空氣つて、やつぱりいい。

それに引き替え、「お母さんが庶民だから危険な魔族討伐をさせて、うつかり死んでも気にしない」連中つたら何なんだ。

いや、あの王宮の誰も彼もがそりじやないのだろうとは思つけれど、少なくとも責任者。

つまり王様。ヴァンフレッドの父親かも知れんが、その内見ているがいいわ。

いつか会うことがあつたら、和馬にちよいと風を操つてもらつて、カマイタチでハゲ散らかしてやる。安心しろ、てっぺんに一本だけはちよろつと残してやる。

「あ・・・アリサ? 今、何か不穏なことを考えていなかつたか?」

「いーええ?」

ヴィクトール氏に淹れて貰つた美味しいお茶を頂きながら、にっこりと笑む。

流石に郊外の離宮だけあつて、王宮内の豪奢極まりなかつたヴァンフレッドの離宮とは比べものにはならないが、それでも十二分に立派な応接室には、有紗と和馬、ヴァンフレッドの他に、騎士団の団長と副団長も同席していた。

男のひとは制服を着ると一割増しになると云つが、カイルもアルフォンスも私服のセンスはいいらしく、むしろそれぞれの個性であるお色氣と冷静さが強調されていて、実に眼福だ。

「ていうか、王子様。駆け落ちした元奥さんのこととか、新しいお嫁さんの話とか、色々聞きたいことがあるんですけど

実はずつと気になつていたのだ。

わくわくしながら訊ねると、カイルがブフォットのお茶に噎せた。

アルフォンスはティーカップを静かに持つたままだが、微妙に固まっている。

「この反応は、もしや何か面白い顛末があつたのだろうかと期待が膨らむ、わくわくわく。

いや、単に「そんなプライベートなことをいきなり訊くか！？」的な動搖かもしれないけど。

いいじゃないか、当時現場にいたんだから。

しかしヴァンフレッドは、ああ、とティーカップをソーサーに戻すと、何でも無ことのよづて口を開いた。

「新しい妻については、保留中といつたところだな。一応候補は決まっているらしきのだが、何しろ繁殖期が終わるまではそんなことも言つてられん。・・・元妻は」

そこで珍しく、ヴァンフレッドはちょっと言ことよびんだ。

「余り耳障りのいい話ではないのだが、それでも良いか？」

「むしろ是非」

がつづり食いついた有紗に、微妙な視線が集まつたような気もあるが、気にしない気にしない。

テレビのワイドショーが、どうしてあれだけ視聴率を取つていてると思つてゐんですか。

人間、ゴシップネタが大好きな生き物んですよ。みんな正直になりましょうよ、他人の不幸は蜜の味つて言つでしょ？

「そ、そつか・・・」と若干引いてくれたヴァンフレッド曰く。

彼の元妻、トリスティア姫は、祖国クレタにいた頃から彼女に想いを寄せてくれていた恋人がいたそーな。

それはクレタの有力貴族、その末っ子三男坊のお坊ちゃま。

まあ、彼らなりに「身分違ひの恋！」だの、「愛こそ全て！」だの、「世界はふたりの為に！」的な諸々があつたようなのだが、何と言つてもお姫様が嫁いだのは国内貴族ではなく、外国の、しかも王族。

そんなお姫様を搔つ攫つたお坊ちやまに、クレタの面々が「ひいいい！」とムンクの叫びになつたことは想像に難くありません。

（あ、ムンクの叫びつてあのヒトが叫んでいるシーンを描いたわけじゃなくつて、あのヒトが「うーるせー、なにこの音」って耳を塞いでるトコロを描いた絵らしいですよ）

國を挙げての捜索に、若いふたりはあつさり捕獲。

しかし既に時は遅し、ヴァンフレッドは結婚誓約書をポイしちゃつてるし、元々白い結婚だつたというのが暗黙の了解とはいえ公然の事実だつたこともあつて、クレタ側が平謝りすることできれいに離婚が成立したのだそーだ。

とは言え、それで全てがメテタシメテタシと行くほど、世の中やう甘くない。

国の体面に盛大に傷を付けてくれたお坊ちゃんは当然実家から勘当されて、お姫様も王族から除籍。

元々身分を捨てて「アナタさえいれば他には何もないワ」と恋人の手を取った筈のお姫様も、そんな浅はかなことを断行するだけあつて、その内ほどぼりが過ぎればなし崩しに許してもらえるだらうと甘っちょろいことを考えていたようだ。

彼らは誰にも祝福されることなく結婚したものの、何の後ろ盾も甲斐性もない貴族のお坊ちゃん、王族としてのプライドと教養だけは売る程あつても、食事と言えば侍女が持つてくるもの、というお姫様がタツグを組んでも何の生産性が上がるわけもなく。

「あれから何度か、彼女から援助を求める手紙が来てな・・・」

「・・・はい?」

どうやら元嫁の元お姫様は、ヴァンフレッシュが嫌がる彼女に一度も触れようとしなかつたことや、公式行事の度に義務として贈つていた宝飾品の質の良さから、彼のことを「自分に恋い焦がれるカワイソウなお人好し」だと思つていたらしい。

あの手紙なあ、とカイルが溜息混じりにぼやく。

「面白えつちや面白かつたけどな。『贈り物を持つて来るなら会つて差し上げてもよくつてよ!』ってカンジのことをずりずら書いた後に、こそっと殿下が魔族討伐でガンガン名を上げてることも知つ

てる口ひで書いてあるの」

それを受けて、アルフォンスがおつとつと頷く。

「あんなぴよぴよした甘つたれのもやしつ子と殿下を引き比べるだけでも間違つてゐるといつのに、今更殿下の素晴らしさに『眞付いて口ナを掛けてくるなんて、頭と尻の軽い女といつのは、一体何を考えているのか、ええ。本当にさつぱり意味不明ですねえ』

勿論その手紙は私が纏めて送り返しましたよ、向こうの思い違いを懇切丁寧に教えて差し上げる一筆を添えてね、とにかくに笑うアルフォンスに、有紗はこのひとの前で、ヴァンフレッドの悪口だけは絶対に言わないようにしようと誓つた。

・・・ぴよぴよつて。

第27話 武器の名前は

「少年漫画の悪役が出来ちゃう」和馬と違つて、騎士団の方々は魔族討伐の為、日々真面目に鍛錬をしている。

若く鍛え上げられたぴっちぴちの肉体美が躍動する様は、マジで眼福です。

一方、和馬は自分の力をほぼ本能的に理解して制御しているし、それにその、「お前が危険な目に遭わない限り、オレがキレて暴走するなんてことはないよ」で、「オレが絶対そんなことはさせないけどな」だそうなので。

・・・はい。

私はとっても幸せ者です。

(つて言つかーど)あんな殺し文句覚えてくるかなあ！？素！？素なのアレー！？)

もういいです、こうなつたら力一杯天然タラシにきゅんきゅんしますとも！

つかりひとりで思い出して、にへらと笑つてしまふとも！

・・・氣を付けよつ。

他人様に見られたらきつとかなり不気味だ。

有紗自身は、「魔族討伐手伝いますヨー」と言つたところで、またビビつて次はテンパらないとも限らない、というか思い切りそつなりそうな予感がびしづしだつたもので。

取り敢えず、氷棺だけはいつでもどこでも起動出来るように勘を取り戻すべく、訓練場の隅で反復練習中である。

アレは見た目には口がないし、前回ほぼ完璧な形で仕留めた魔族の死体をバラすことが出来た（結局グロかつたんだつた）為に、ヴァンフレッド達からかなり好評だったのだ。

行くぞー、と言つ和馬の声に応じて、彼の周囲にある沢山の石が風に乗つてふわりと風船のように舞い上がる。

それがランダムに、かつかなりの高速で飛び交うのを捕捉して、氷漬け。

ひたすらそれを繰り返すだけだが、あれこれ付け焼き刃でやうつとしたつてどれも中途半端になるだけだ。

どっちにしろ、有紗と和馬は「寄分」扱いなのだから、万が一助力を請われたときに、請われただけの働きが出来ればいい。

ぶつちやけ、命を懸けるつもりなんてサラサラないし、いざとなつたら敵前逃亡致します。

まあ、カイルとアルフォンスに、「万が一のときは、殿下だけ連れて逃げてくれ」とヴァンフレッドのいないところで頼まれてしまつたから、それだけは果たすつもりだけ。

逃げるのは得意技です、バツチ来いです。

うつは言つても、彼らは思つてはいたよりずっと強い。

魔族討伐隊に編成されたメンツなのだから、当然と言えば当然か。

様々な攻撃用術式を組み込んだ彼らの武器は、利き腕全体を覆つて更に足許まで届く程の、巨大な鋭い爪の形をした魔導具だ。

普段は腕輪の形をしていて、戦闘形態時には剣にも盾にもなるそれは、「魔族狩り」というそのまんまの名前がついている。

誰が決めたんだろう。・・・きっと、恥ずかしい名前を付けられたくなかったひどがいたんだろうな。

個人別にチューンナップされたそれは、それぞれの得意な術式が付加されていて、皆さん景氣よく目標に爆炎だの水圧だの風圧だの雷撃だのを叩き込んでいて、ちょっと楽しそう。

魔力適性が高いと言つだけあってヴァンフレッドの攻撃はかなり派手だし、騎士団長のカイルや副団長のアルフォンスも同様だ。

「あーっはははは、うはははははー！」

「オーラオラオラオラ、みんな纏めて死にさらせえオーラー！」

「三十一。三十二。三十四。三十五・・・」

・・・魔族討伐のとき、彼らの傍にはいかないよつこじよつ。うん。

そして、その魔族の群れが現れたと一報が入ったのは、七日後のこと。

ヴァンフレッドの王族色だという青を基調とした騎士団の制服を、いつの間にかヴィクトール氏が有紗と和馬の分も用意してくれてい、採寸されたわけでもないのにぴったりのそれに、改めてここに服飾技術の高さに感動した。

いやだつて、ホントにかつこいいんですよー。

コスプレ気分だとか言われよつと構いません！

うつかり和馬と「女将校と部下」いつをしてくなつたのは内緒です！

かつちつとした詰め襟にはシンプルながら凝つた刺繡がされちゃつたりして、少し長めの上着を締めるベルトは黒、ズボンと足許のブーツも黒で、全体的にとってもシャープな印象。

ああ、スタイルがいいと何を着ても良く似合つ。

きつと和服も似合つ筈。

今度浴衣とか着てくれないだろうか。男の人気が浴衣の袖をまくつて、剥き出し�になつた二の腕とか大好物なんだけど。

「有紗？」

「んー、何でもない、何でもない」

すいません、和馬で妄想している場合ぢゃないです。

軽々と抱き上げてくる和馬の首に腕を回す。

ヴァンフレッドを始め、騎士団の面々は馬で移動だが、和馬は相変わらず馬に怯えられるし、有紗も馬術経験はない。

よつて、彼らの後を空を飛んでついて行つて、必要そうであれば介入する、といつ話になつてゐる。

「これは彼らの生きる世界で、経験といつのは貴重な財産だ。

それを無闇矢鱈と無責任な部外者が奪つていいものじゃない。

ならば何故つこでこくのかと言えば、有紗達の「非常識な力」が後ろについていると思うだけで、彼らの恐怖が減るからだ。

けれどそもそも、彼らは有紗達がいるからといって油断するようなアマチュアではないし、部外者に頼ることを良しともしていない。

万が一の保険のようなもの。

だから、これは本当に有紗の血口満呑だ。

命懸けで戦う彼らに、命を懸けるつもりのない有紗が「手を貸す」なんて、きっと傲慢もいいところ。

それでも、自分に出来ることがあるのに、友人が死ぬかもしれない場所に行くのを、黙つて見ていいことなんてやつぱり出来ない。

青の制服を纏つた彼らが一糸乱れぬ隊列を組んで駆け出していくのを、離宮の屋根の上、和馬の腕の中と、いふこれ以上無いほど安全な場所から見詰めていた有紗が、ふと名を呼ぶ声に顔を上げると、ちゅ、と柔らかなキスが唇に触れた。

「行くぞ」

・・・うん。

和馬の瞳が、大丈夫って言つてる。

ひとりじゃないから、大丈夫。

そうだった。自分はもう、ひとりじゃない。
どんなことも、どんな結果も分け合つて受け止めてくれるひとがいるんだつた。

だから、大丈夫。

「うん。行こう」

ふたりで、一緒に。

有紗が頷くのと同時に、捲いた風がふたりの体を重力から切り離した。

とまあ、一応そんな殊勝な気分でヴァンフレッシュ達の後を追つて来たのですが。

(うーわー・・・)

何て言つか、皆さん流石プロ。

襲撃があったという村は、既に半球状の結界に覆われて完全に保護されていて、その外縁部ではそりゃもうあちこちで派手な戦闘が繰り広げられています。

今回の群れは熊タイプがメインみたいだ。

他にも小型の何かがいたみたいだけど、それらはもう全部動かなくなっている。

熊、と言つても動物園で見るテディベアのでつかい版みたいな可愛らしいモノじゃなくて、その三倍はありそうな体躯と異様に長い爪と牙、額にはねじくれた角まで生えている。

幸い、数は全部で七頭と少なくて、一頭を数人で取り囲み、完璧なまでに統制された連携で攻撃を加えていく様子は、正に見事の一言。

特に指揮権のある三人と来たら、「何のストレス解消?」って位

に景気よく、かつえげつなく攻撃を繰り出していく。

訓練中に聞いた高笑いや雄叫びや不気味なカウントまで聞こえてきた。

あ、ヴァンフレッドの攻撃で熊の片腕が吹っ飛んだ。

うーん、実に楽しそうだ。まあこんなこと、脳内麻薬大放出してラリッてないとやつてらんないんだろうけど。

「あいつら・・・完全にイッてんな・・・」

ぼそ、と和馬がそう呟いたところから察するに、彼の聴覚はそれらをきつちり捉えているみたいです。

そんな上官にちゃんと従つているんだから、部下の騎士さん達つてばホント凄い。

村の上空にふよふよ浮きながら、正に高みの見物と洒落込んでいたふたりだが、不意にぱっと和馬が振り返った。

その視線の先を追い、有紗は思わず悲鳴を呑み込んだ。

（ひ・・・つ）

最初は、それが何なのか分からなかつた。

深い森の中に蠢く、黒い塊。小山のよつな。

そしてその正体を理解した瞬間、有紗は本気で泣きたくなつた。

今ヴァンフレッド達が戦っている巨大熊すら一呑みに出来そうな
それは。

(魔族つて、魔族つて・・・つ獣か精霊つて言つたじやんーっ！ー)

そう。

それは、獣でも精霊でもなく。

ぐぱあ、と開いた顎から滴り落ちる体液も生々しい、巨大なゲジ
ゲジだった。

結論。

「何もありませんでした」。

何しろ有紗が「巨大ゲジゲジ」に強烈な拒否反応を示した途端、和馬が一瞬で焼き払ってしまったのだ。

・・・だって、ムシキライ。女の子だもん。

正に跡形も無く、足の一本も残っちゃいねエという完璧さ。

しかも森の木々には一切炎による被害無し。どんな攻撃精度なんだろうか。アレをやってみると言われたら・・・試算しただけで吐きそうになつた。深く考えるのはよそ。

よつて、ヴァンフレッド達はその存在にすら気付かなかつたのですが、まあ・・・うん。

知らぬが仮つて、素敵な言葉ですよねーと言つわけで、正しい日本人のコトナカレ主義を發揮しつつ、見事に熊タイプの魔族襲撃を退けたヴァンフレッド達に、村人の皆さんが歓声と感謝を捧げる様子を「良かつた良かつた」と上空から眺めて、その日は無事撤収と相成つたのです。

(うーん・・・?)

が。

辺りに漂っているのは、「何故にこんなことに?」と言つ微妙な空氣。

あれから数日後、今日も一同が鍛錬に勤しんでいたこの離宮に、王都からお客様がおいであそばしたのだ。

しかもその人物は、ヴァンフレッド曰く「脳みそ筋肉で暑苦しい第一王子、オーガスター殿下。

前回、すぐ下の弟殿下と女性を取り合つた挙げ句、五番田の王子様に鳶に油揚げされちやつた可哀想なお人。

・・・確かにムキムキのマッチョ系で、褐色の髪と瞳を持つ顔の造作はそつ悪くないのに、ヒゲまで生やして男らしさを強調しているものだから、「正當派王子様」なヴァンフレッドと向かい合つて座つていると、残念ながらかなりムサく見える。

ヒゲ、剃ればいいのに。

男のひとつてカツコいヒゲに憧れるつてよく聞くけど、女の子から見たらうやうやしくておつさん臭く見えるだけなのにな。

二人の王子様が体面中の応接室の中を、ほんの少し開いた扉の隙間から覗いているのは、有紗と和馬、そしてカイルとアルフォンスといふこの二組のお馴染みのメンバー。

彼らと打ち解けた切欠は、元の世界から持ち込んだポテトチップスでした。

運動した後は、塩氣のあるものが欲しくなるのです。

みんなはお酒付きだつたけど。

(おへ)

ちらりと、ヴァンフレッドがこちらを見たけれど、その視線に困惑が色濃く滲んでいるのも当然といつもの。

何しろ彼の一番上の兄上は、この応接室に入つて以来、足の上で組んだ指先を落ち着かなく動かしているだけで、一言も口を開いていないのだから。

見ているこつちが苛々してくる。

『ええーい、いい年をした男がぐずぐずと！用件があるならひとつと言わんか、このヒゲが！そのマツチヨな筋肉はお飾りか！？』

『ホントになあ。・・・あのおつわん、幾つなんだ？』

『あー・・・幾つだっけか？アル』

『オーガスター殿下は、御年三十になられますよ。『正室との間に八歳になられるお子のシェイド様もあられます』

子持ちかよ！と有紗と和馬だけでなく、カイルまでがツツ「なんだ。

カイル団長は、王子様だらうがヤローには興味がないそうです。

しかし、そんなこつちの苛立ちが通じたわけでもなかろうが、オーガスターはよつやく口を開いた。

「そんなん。ヴァン

「……はい。何でしょつか?兄上」

ヴァンフレッドがあからさまにほひとした顔をする。

「……」

「……」

再びの沈黙。

『……ねえ、あのおっさん、頭、一発しばっていい?』

『落ち着け有紗、それだつたらオレがあのおっさんの座つている椅子を、ここからちよいとひっくり返してやるから。上から水をぶちまけてやつてもいいぞ? その辺の花瓶やらツボやらのオプション付きで』

『あー……バレンキやこいんじゃね?いや、むしろやれー。』

『バレるに決まつているでしょ! あなた方の不祥事は殿下の恥になるのですよ! ? バカな真似をしたら私があなた方をしばき倒しますからね! 』

すいません! めんなさい、大人しく見物します。

それにしても、ヴァンフレッドは偉い。

よくあのうだうだ兄貴に嫌な顔ひとつしないで付き合つて……

と思つたら。

ガゴン！と景気のいい音が響いたのは、ヴァンフレッシュの靴底と、その目の前にあつた檻材の応接テーブルの間から。

「・・・兄上？」

「…………」。

「僕もそう暇な体ではないのですよ。」用件があるのでしたら、十秒以内にお願いします。じゅ・・・

「た・・・・つ頼みがあるので！」

「ハ。七。六。・・・」

・・・ハイ。一度とガヴァンフレッシュの」とを「アホの子」なんて言こません。

いつちやつた高笑いを垂れ流しながら「魔族狩り」であれこれ吹き飛ばす姿を見たときにもそう思いましたけど、ここに改めて誓わせて頂きます。

あわあわと両手を奇妙に動かしたオーガスタが、本当によつやく声を振り絞ったのは残りカウント三秒前のこと。

「うー、今回の魔族討伐が終わつたら、一度我が離宮に来てもらえんか！そしてシェイドに魔族討伐の恐ろしさを、徹底的に教え込んで欲しいのだーっ！」

何で
すと？

溜息混じりに口を開いた。
「どうでしょかと首を傾げて訊ねると、ヴァンフレッシュが

「……ショイドに、何かおねだりでもされましたか？」

「そそそそうなのだ！あやつときたら、私に似て脳天気なほややんのくせに、お前達の活躍を聞いて『ボクも魔族討伐に行きたいのですー。父上ー、ヴァンフレッド叔父上と一緒に連れて行つてくれるよう頼んで頂けますかー？』なぞとすつとぼけたことを言い出しあつて！」

うーむ、意外と自己評価は出来るマツ チョだつたみたいだ。

でも、その図体とだみ声で子どもの口まねばざつかと騒ぐ。キシリ。鳥肌が立つたじやないか、ざつしてくれぬ。

しかし、ヒヴァンフレッドが呆れたように首を傾げる。

「そんな子どもの我が儘など、叱り飛ばして諦めやれやめよいが
ではありますか」

そつや そうだ。

それが父親の勤めとぬ一モノでしょ。」

だが、オーガスターはその分厚い肩をがつくりと落とした。

これだけは言いたくなかった、という感じに声を絞り出す。

「・・・あやつは、私以上に脳天氣なのだ」

「・・・それは・・・実に恐ろしい病ですね」

ヴァンフレッシュの顔が恐怖におののく。

「ううのだ、とそこで力一杯頷くオーガスタの脳天氣さに輪を掛けた脳天氣さ。それは確かに恐ろしい」

「常に『どうにかなるよ』が合い言葉。落馬して足と腕の骨を折ったときも『あれえー?』で済まし、狩りの最中に崖から落ちて行方不明になつたときも、『誰かが助けに来てくれるまで寝てようかなーと思つたら、丸一日お昼寝しちゃつたよ』と必死に捜索していた従僕達を笑顔で奈落に叩き落とす。そう言つ息子なのだ」

しーん、と辺りが静まりかえる。

丸一日眠つていられるつて、それってヒトとしてどうなんだろうか。

『・・・ちょ、大丈夫なの? その子、生存本能とかそーゆーモノが付いてないんじや』

『いや・・・それだけ凶太いつことは、逆に生き残りには向いてるんじやね?』

『オーガスタ殿下の離宮に行つた連中が、時々妙に疲れた顔で帰つて来ると思つたら、そういうことだつたのか・・・』

『まあ・・・物凄く好意的かつ前向きに解釈すれば、大物と言えな

いこともないかもしない可能性が、僅かなりとも残されている余地がほんの少しあこの世のどこかに存在しているかもしませんよ?』

アルフォンスさん、そんな思つてもないことを無理に言わなくて
も。

思い切り皿がキョドりますよ?

結局、『生きて帰れたらそのように致しますよ』とヴァンフレッドがオーガスターに約束して、その場はお開きとなつた。

だから、やつぱり死んで死亡フラグを立てるなと叫んでる。

第29話 謎のヒト。

それは、四度目の魔族討伐のときのこと。

「ウモリの翼のひついた黒い蛇達がその時のお相手で、そのうねうね感がかなりキシヨかったのだが、カイルが「魔族狩り」での殆どを三枚おろしだの簡切りだの開きだのにしてくれたから、あんまり他の面々に活躍の場はなかつた。

むしろ皆遠巻きで、「近寄っちゃなんね」、「迂闊に近づいたらオレらもやられる」的な空氣があつて、何故だらうと思つていたら、何のことな無い。

猫系獣人族である彼は、長くてによろによろしたモノが大好物なのだそうだ。

主に玩具的な意味で。

他人様の楽しみを奪つてはいけません。

思つ存分蛇タイプの魔族と遊びまくつたカイルは、返り血でどろどろになりながらもヒジヨーに満ち足りた顔をしておりました。

「ふはははは、これだから魔族討伐は止められねエゼー！」

・・・趣味だったのか。

けど、やつぱり副官のアルフォンスにはきつちり叱られていた。

「調子に乗つて、収穫前の畠に魔族の頭をすつ飛ばすひとがありま
すか！」

遊びじゃないんですから、少しは本能ではなく理性で行動するよ
う心がけなさい！」

アルフォンスのことを、「お母さん」と呼びたくなつてゐる今日
この頃。

彼ら第四師団の他にも魔族討伐隊が編成され、国のあちこちで活
動しているという話は聞いていたのだが、そのひとつからメスの産
んだ卵を発見したという連絡が入つた。

訓練中だつた彼らがざわめき、その報せを持つて來たヴィクトー
ル氏に、ヴァンフレッドが「本当か」と確認を取る。

「は。フィスカ砦を預かるルナメイア將軍が、十八個の卵を確保し
たとか」

「そうか・・・どうだつたか言つていたか？」

「はい。非常に美味であつたと、大変ご満足そうであられました」

(・・・・・へ?)

ヴィクトール氏の言つたことを一瞬認識出来ず、有紗は点になつ
た目を和馬と見合わせた。

『・・・今、美味つて言つた?』

『・・・そう聞こえたな』

そんなアイコンタクトをしている間も、周囲では「いいなー」だの「魔族の卵つてすっげー滋養が高いんだろ?」だの「知ってるか?アレ食つたら魔力適性が桁違いに跳ね上がるんだってよー」だのとこう言葉があちこちから聞こえてくる。

とこ「こ」とは、やつぱつ。

(魔族の卵つて、食用なんですかあああああー?)

びつじよつ、凄いカルチャーショックだ。

食べるんだ、そなんだ。

いや、日本人だつてナマ「だのホヤだの、冷静に考えたら普通にお魚やタコやエビだつて異国の方々から見たら「それ・・・ナマでいっひやうの?マジで?」な目で見られたりしますけども…

だつてほら、魔族つて言葉の響きがアレじゃないですか。

彼らが発する瘴気とやらのせいで、ヴァンフレッシュの可愛いル君が寝込んだりしてゐるじゃないですか。

そんな魔族さんの卵を、食べて平氣なんだろうかといつ素朴な疑問に答えてくれたのは、氣遣いの出来るアルフォンスさんでした。

「魔族の卵は、瘴氣を持たないらしいのですよ

あ、なんですか。

「まあ正直、私は機会があつても口にしたいとは思いませんが」

ですよね！

「ええ。大抵繁殖期にメスとなるのは、非常にグロテスクな外見をしたものばかりらしいですから。

そんなモノの腹から出て来たブツを口にするなんて、私の美意識が許しません」

・・・美意識でしたか。

なんだろう、アルフォンスさんってキャラが掴み難いな。

ナンバーツーキャラなのか、お母さんキャラなのか、ちょっとナル系なのか。うーん、謎のお人だ。

その謎のお人、アルフォンスのご趣味は、料理。

やつぱりお母さんか。

普段は勿論離宮の料理人たちが作ってくれる、毎度美味しい料理の数々を有り難く頂いているのだが、ローテーションを組んで順番に取っている休息日には、他の面々が近くの街に遊びに繰り出す中、目新しい食材を買ってきては、これまたプロ顔負けの創作料理を作り上げて夕飯時に提供してくれるのだ。

ヴァンフレッド至上主義で、近衛騎士団の副団長で、やんちゃな団長のお母さん役で、細々した事務仕事もさらっとこなして、いきなり飛び込んできた有紗達にもちゃんと気遣いをしてくれて、おまけに料理の達人。

・・・改めて考えてみたら、何そのハイスペック。

「あー・・・。アルはなあ、何でも出来すぎるのが困りもんなんだよなー」

そんなことを仰るのは、キャベツ畑にめりこんだ特大の蛇の頭を回収しに行って、その帰りがけに好みのお嬢さんに声を掛けて摔倒させてしまった上司のカイル（それでもアーフォンスに叱られていた）。

現在彼の居室で、和馬との辺りの特産品である果実酒の飲み比べ中。

一見甘そうに見えたから有紗も少し舐めさせてもらつたのだが、それだけでぐわっと喉が焼けて頭がくらくらするほど高濃度のお酒を、ふたりは「美味しいな、コレ」「だろう！ オレの一番の気に入りだ！ ようやく分かってくれるヤツが出て来て嬉しいぜ！」なんて言つて、とっても楽しそう。・・・チツ。

いいんだ、おつまみ美味しいから。

ふつさふさの素敵尻尾が彼の大好きな蛇のよつにふりふりくねくねして、イイ感じに酔つている模様。

和馬はと言えば、全くの平常モード。

それでいいのか未成年。

前回来たときもワインをがぶ飲みして平気な顔をしていたし、ひょつとして竜つてのはお酒に酔わないイキモノなんじゃなかろうか。

「みよっ」

と思つていたら、隣に座つていた和馬の腕が伸びて、所謂お膝抱つこ状態に持ち込まれてしましました。

酔つてこらなら酔つているらしい顔をしろ。つーか、酒臭い。

「うははーーーあー、若いつていいいねえ？愛しちゃつてるわけだな！
よしーもう一杯！」

どこの青汁ですか。

「有紗ー。愛してるぞー」

「はーはー、私も愛してますよー」

そういうことばシラフで言え。

酔いに任せて懐くな、鬱陶しい。

逃げようもなくぎゅうぎゅうに抱き締められて溜息を吐いている
と、けらけらとカイルが笑つていたのが、はあ、と椅子の背もたれ
に体を預ける。

「アルはー。モーグーのがねエんだわ」

クエスチョンマークを浮かべた有紗と和馬に、カイルはおっさん
臭い微笑を浮かべた。・・・いや、大人っぽいってやつですね、酒
臭いどいつも。

「なーんでも自分ひとりで出来ちまうから、ひとりでいても困らね
エんだよな。

自分が相手に何かするのが当たり前で、何かしてもいいつか、
助けてもらつたりつら思考回路がねーのよ

「あー・・・だから、あんな出来たヒトがアンタの下にいるわけか。
一番上なんてのは周りに助けてもらつてナンボだもんなー」

「おー、ひとを甲斐性無しみたいに言つてんじゃねーぞ、カズマ。
・・けどまあ、やつこいつ」

カイルの揺らしたグラスの中で、赤紫色の液体が煌めく。

「殿下に死んで、オレの補佐して、部下やお前らの面倒をつかつ
見て。

それはそれでアリな生き方だとは思つんだけど、やっぱ男つて
のは女がいねーと生きていけねえイキモノだろ。
なのにあのツラだ、放つておいても女が寄つてくるモンだから、
手に入れる為に必死こいたこともねーわけよ。きっと、本気で女に
惚れたことなんてねエんだらうなあ

まだ若いんだから、もつとアツく生きればいいのよー、と仰る
カイル、御年三十一。

アナタは年の割にはつちやけ過ぎだと懲つのは氣のせいですか。

街に行く度に違う香水のにおいをさせて帰つてくるとか、ここに
は魔族討伐の間だけの短期逗留のはずなのに、毎日「うわお」つて
なる位ラブレターが来てるのはアナタだけですよ？

素敵猫耳のイケメンで近衛騎士団の団長張るだけの実力があるとなれば、女人達にモテモテなのは分かりますけど、少しは程々にしどかないと。

時々部下の騎士さん達が「オレ、あのひとの部下でいるがぎり力ノジヨとか出来ない気がする・・・」とか、「ちょっとといいカンジになつたと思つても、最初から団長狙いだつたり、そうじやなくても団長を見た途端、女の子の目つてハートマークになるもんなん・・・」とか、こつそり陰で泣いてるの、ご存じですか？

彼らだつて近衛騎士団にいる位だから、見目も実力もきつちり平均以上なのに、アナタがそんなお色気ダダ洩れだから、何だか影が薄くなっちゃつてるんですよ、気の毒に。

（・・・ハッ。ひょつとしてアルフォンスさんがあんまり街に行かないのつて、その辺までフオローしてるんじや・・・！）

だつて、カイルとは別のストイックな魅力もりもりの美形だし、あんなお人がカイルと並んで街を闊歩したら、老女から幼女まで纏めてホイホイ状態になりかねない。

普段あれだけ健気に魔族討伐に取り組んでいるヒラの騎士さん達に、益々出会いが無くなつてしまつことはこれ必至。

「つたぐ、若さが足りねエんだ、若さが！」

・・・団長。

大事な副官の若さを吸い取つてるのは、きっとアナタです。

今回の魔族討伐では、久しぶりに有紗達の出番があった。

流石にちょっと数が多くすぎで、騎士さん達が使っていた「魔族狩り」がついに何個か壊れてしまったのだ。

それに引き替え、ずっと無茶苦茶な使い方をしている筈の三人が使っているヤツはいつもつやつやぴかぴかしていく、何でも魔力適性の高い人間は自分の魔力で常に表面をコーティングしているから、本人が死なない限り、壊れる可能性はほぼゼロなんだとか。

てっきり王子様仕様、上官仕様の特別バージョンなのかと思つていたのだが、

「そんな風に一々仕様を変えていたら、整備するのにとんでもない手間暇が掛かるだろ！」

と言つて、これまたもつともなお言葉。

付加している攻撃術式こそそれ個別にチューンナップしているけれど、その基本構造は全て同じ。

それでもなければ、大量の整備をこなすなんてやつてられません。

・・・某宇宙的ロボットアニメで、どうやってメカニックさん達が主人公達の超！特別仕様の機体を整備していたんだろうとか、攻撃食らつてぶつ壊れたときに、量産品じゃない特別受注のバーツやら武器やらをどこから調達してたんだろうとかは、深く考えたらダ

メなんだろつな。

きっと、大人の事情つてヤツがあるので、うん。

そんなわけで、今日は壊れてしまつた「魔族狩り」の補修を行つべく、整備担当の魔術師さんがやつてきました。

それがまた、ちょっと意外な人物。

何せ、まだ有紗と同じ年頃に見える、ポニー・テールに眼鏡を掛けたお嬢さん。

名前はシルヴィア・ルーギス。

おつとりほわわんとした雰囲気の持ち主で、明るい栗毛と灰色の丸い瞳が実に可愛らしいひとなのに、これでとつて二十歳を過ぎているのだというから驚いた。

「ああ、よく見えないって言われるんですよ。これでも魔導具の製作・調整に関しては、どこの誰だらうと私の右に出すつもりなんてこれっぱかしも無いんですけどね、うふふふふふ

・・・そう言つて作業場となつた応接室、目の前にずらりと並んだ腕輪状態の「魔族狩り」にふらふらと歩み寄り、うつとりした顔で頬ずりする彼女から某マッドサイエンティストのアホオヤジと同じ匂いを嗅ぎ取つた有紗は、余りお近づきにならない方向で対処しよつと心に決めた。

人間、見かけで判断しちゃあいけません。

危険なモノほど、可愛らしい姿で擬態しているもんなんです。

「・・・お前が言つた？」

「何か言つた？」

いや何でも、とさりげなく視線を逸らした和馬に首を傾げつつ、そう言えばこの間の魔族はグロかつたなあと思い出す。

順位争い課程での「共食い」によつて、もはや元々何の動物なのが分からぬ、ぐによぐによした胴体に無数の手足や翼がひついたような化け物が何体もいて、「氣色悪いわー！」となつた有紗は思わずその口の中に氷棺を数百発叩き込み、設定温度を下げたそれで内側から凍らせて粉碎してしまつた。

和馬の得意攻撃は基本炎熱系だし、乱戦時あんまりぽこぽこ使わない方が良いのですよ、うん。

他の個体はヴァンフレッド達が苦戦しながらもどうにか倒したし、今のところ多少の怪我人はあつても死亡者はゼロ。

でも、武器が疲労破損するつてことは、それを使う人間の方も疲れが溜まつてゐるんだろうなと思つてゐると、突然目の前を人影のようなものがとんでもないスピードで横切つて行つた。

「ヴィーッ！－！」

「え？ ちょ、フィオ！－？」

人類には不可能な速さで「うふふふふ」と自分の情熱対象を愛でていたシルヴィアに駆け寄り、その勢いのままがばちょと抱きついたのは、ほつそりとしなやかな体躯の黒髪の青年。

(・・・黒髪?)

ここでは和馬以外に見かけないその髪の色にもしやと思う間もなく、突然すっ飛んできたその青年は小柄なシルヴィアを抱き締めたまま、うちゅう一つと盛大に口づけた。

むう、瞳の色が確認出来ないじゃないか。

シルヴィアは何やらじたじたと暴れていたが、次第にくつたりと力尽きた。酸欠だろうな、大丈夫かな。

「ボクを置いていくなんて酷いじゃないか、ヴィーーー何でーーーどうしてーー?ボク、何かヴィーの気に障るようなことしたーー?」

ようやくシルヴィアの唇を解放した黒髪青年の、うるりと潤んだ瞳はやつぱり紅。

くせつ毛とツリ目が印象的な白皙の美青年と言つてもいい容姿なのに、その様子はまるで母親において行かれた幼稚園児。

成る程、これが噂のヘタレ系男子ってヤツか。初めて見た。

「しかも、こんなむき苦しい野郎ばっかのトロロにひとりでのこ来るなんて!

ヴィーはこんなに可愛いんだから気を付けなきゃダメだつていつも言つてるだろ!?

人間のオスなんてみーんな、若くてキレイな女の子なら誰でもいいっていう、節操も良識も道徳心も心がけもなつてない、サイツティーのイキモノなんだから!」

いやいや、シルヴィアの使い魔（多分）のオーナーさん。

そんな、人類のオスの一面について、そこまで深く抉り込むよーな真実を口にしなくても。

人間、ホントのこと言わると不愉快になるイキモノなんですよーてば。

ああほら、特に心当たりありまぐりのカイルなんて、ずんビン不機嫌オーラを出しちゃつてからに。

「・・・シルヴィア殿

「ほん、とわざとらじく咳払いをして、ヴァンフレッド。

「そちらが、貴殿に仕える使い魔、『フイオラスリート』ルルウか？」

「は、はい・・・お騒がせして、申し訳ありません・・・

まだよろよろとしたシルヴィアは、「何お前、誰お前」と言わんばかりに警戒心バリバリの使い魔青年に、べつたりと背後から抱え込まれたままだ。

「・・・フィオ

しかし、『主人様に名前を呼ばれた途端、彼はほにゃあと相好を崩した。

外見年齢推定二十五、六の、この使い魔さんの実年齢が、とつても気になる。

あのね、とシルヴィアが物凄く疲れた様子で口を開く。

「今は、魔族の繁殖期でしょう?」

「大丈夫だよ、ボクはヴィー一筋だからね!」

「・・・そういうわけなくてね?私はここに「魔族狩り」の整備の為に来ているの」

「そつか。うん、それで?」

「おや、どうなさいましたかお嬢さん。」
「ううん、お嬢さん」とシルヴィアの肩がぴくぴくと震えた。

おや、どうなさいましたかお嬢さん。

「・・・私が・・・フイオと同じ魔族を殺す為の魔導具を整備したりしたら、フイオが傷つくんじゃないかしら、とか、フイオに嫌われたらどうしようつ、とか、色々、色々考えて悩んでいたアレコレは、全部丸」とムダだったのかしら・・・?」

「ええ!?

「ヴィーってば、そんなどうしようもないバカみたいに下らない」とで悩んでくれてたの!?」

ビシイツーと周囲の空気が凍り付く。

その冷氣の発生源は間違いなくシルヴィアなのに、その使い魔は嬉しげに頬を染めちゃつたりなんかして、大丈夫かコイツ。

「もうー、嬉しいけど、ホントにしうがないなあヴィーは。ヴィーはボクのことだけ考えていればいいんだから、そんなどうでもいいことで一々悩まなくつていいんだよ?」

・・・うん。

世の中って、ホント上手く出来ている。

有紗の中でヴァンフレッドがアホの子から卒業したと思ったたら、ちゃんと新しいアホの子が登場するなんて、神様の計らいって素晴らしい。

和馬やヴァンフレッド達と、そそつと氣配を殺して部屋の隅へ移動する。

『ナイわー・・・。あれはナイわー・・・』

『使い魔つてのは、どれもみんなあんなガキ臭いモンなのか?空気が読めないにも程があるだろ』

『い、いや・・・。『黒虎のファイラスリート=ルルウ』と言えば、我が国でも十体といない人型を取れる使い魔で、かなり優秀な力を持つていると聞いていたのだが・・・』

『ケツ、女の扱いもまるで知らねエ、タダのアホガキじゃねーか

『使い魔というのはバカみたいに主に執着すると聞いていましたが、

本当にそうなのですねえ。

いやあ、実際に見てみると本当にバカバカしい。驚きました』

「あれ？ ヴィー？ どうしたの、急に黙りこくれひやつて？」

「・・・・」

シルヴィア嬢は、それはそれは素晴らしいプロフロッシュショナル魂の持ち主でした。

「ねえ？ ねえ？ ヴィーってば、何怒つてんのや？」 と小うるさいハエのよーに纏わり付くご自分の使い魔をきつちり無視し、ヴァンフレッド麾下の騎士さん達の「魔族狩り」整備に淡々と取り組み始めたのです。

三日後、完璧に整備し終えた「魔族狩り」に、騎士さん達が心から感謝をシルヴィア嬢に捧げたとき、その部屋の片隅ではあれからずつとご主人様にシカトされ続けた使い魔が、後ろ向きに体育座りをしていじけておりました。

・・・ちゃんと持つて帰つてくれるのかな、アレ。

第31話 魔王

「魔族狩り」の整備を終えたシルヴィア嬢が、護衛の騎士さん達と共に王都へ戻つて一週間。

訓練場の隅には、全長五メートル（尻尾を入れれば七メートル）はあろうかという巨大な黒虎がぐるんと寝そべっています。

縞模様がなくとも、何となく虎は虎だつて分かるもんなんですね。

・・・はい。シルヴィア嬢は、ご自分の使い魔を最後まできつちりシカトして、ひとりでお帰りあそばしてしました。

時々丸い耳がぴろぴろと動いているが、相変わらずの轟音、爆音、高笑いに雄叫び、不気味カウントの響き渡る訓練場でわざわざ寝転がらなくとも、もつと静かなところで寝れば良いのに。

午前中の訓練が終わり、さあ昼時だとなつても、どんよりとした空気を辺りに撒き散らしたまま、虎は起き上がる素振りもない。

「うーん、何だかこのまま腐りそうだ。

その様子を見て、ケツと吐き捨てたのは、滴る額の汗を拭つた力

イル。

「つたく、鬱陶しいつたらねエな。女がてめえのこと考えて悩んでるのに気付かなかつただけでもガキだつてのに、それを『どうしようもないバカみたいに下らない』つて、サーイーアークー、もいいところだよなあ？」

カイルさん、その女子高生みたいな「サーイーアークー」ってどこで覚えて来たんですか？

あ、虎の耳がぴくつてなつた。

「まあ、少なくとも女性に向ける言葉ではありますんでしたねえ」「お気の毒に、と淡々と応じたアルフォンスの言葉に、虎の耳がぴくぴくつと。

「しかも、自分の失言に相手が怒つてることにも気付かねえつて・・・見てるこいつちがハラハラしたよな」

溜息混じりの和馬の言葉には、その首筋の毛が立ち上がりました。

「シルヴィア嬢が置いていったとこりう」とは、結局自力ではどうにも出来なかつたのだな。・・・もしかしたら一生無理かもしけんな」

せりつとヴァンフレッドがトドメを刺すと、虎の見事な体躯がベチャチャと潰れた。

氣の毒に。

「・・・でもアレつて、シルヴィアさんの使い魔だから、繁殖期なのに大人しくしてゐんですね？契約を解除されちゃつたら、やつぱり暴れ出すんですかね」

しかし、有紗が素朴な疑問を口にした途端、虎はぶわっと全身の毛を逆立て、「そんなの、イヤだああああああ！」と人の言葉で泣

を叫んだ。

獣の形をしてこむのと、声帯とかどつなつてこむんだろ？

・・・え、男性陣。

何故にそんな恐ろしそうな顔を見るのは、私を見ますか？

「十五でも、女は女か・・・追いかけ方がハンパねエ」

「しかも、無意識ですよね、コレ・・・」

「オレ達って、無意識に最悪の可能性を考えなによいじてるんだな・・・」

「・・・流石に少しばかり、気の毒になつてきただぞ」

何ですかもつ。

「だつて、ここに捨てて行つたつてことは、もつこりなつてことじょう？」

「　　・・・　」

だから、契約の解除もあり得るんじゃないかと思つただけなのに、と首を傾げると、男性陣の顔が見事に引きつり、虎はふうっと傾くと、そのままずしんと地面に倒れ込んだ。

途端に四人がダッシュして、虎の巨大な頭の周りを取り囲む。

「いいいいいやいやいや…ほら、てめはアレだ、超レアで力の強い使い魔なんだろ！？」

「そそそそそうですよ…それにホラ、何事も心を込めて謝罪すれば、許して頂ける可能性はありますとも…ね！」

「えええええと、アレだ！ホントにいらねえなら、お前のご主人だつて、ここを発つ前にそうしておるつて！」

「そそそそうだぞ！そ、それにだな、お前のような使い魔を手放すなど、高名な魔術師であるシルヴィア嬢はしたりしないと僕は思つー！」

何この状況。

男同士の団結つてヤツだらうか、暑苦しいな。

・・・放つとい。

しかし、やつさと踵を返して食堂に向かおつとした有紗の体が、風に攪われてふわりと浮く。

「ちょ、和馬？」

そのまま和馬の傍らに強制収容されて、びしりと虎の虚ろな紅い瞳を示される。

「いいか、有紗。コレは可哀想な位アホの子のビーぶつだが、一応同じ釜の飯を食つた仲だ。それがここで腐れて死んだ場合、その死体の後始末をするのはオレ達だ」

「・・・それは、鬱陶しそうだわね」

「だらう。つまり、コレは生きたまま飼い主にお引き取り頂いた方がいいモノなわけだ。しかし、残念ながらコレに女心といつ深淵な謎を理解出来るのはお前しかいな」

「だから、シルヴィアさんにどうしたら許して貰えるか助言しさう？」

「そうそうそう、と男四人が揃つて肯ぐ。

そんなことを言われましても、マッドサイエンティスト臭のする大人の女性の気持ちなんて、あんまり理解出来るとも思えないのですが。

(・・・ふむ)

仕方がない、コレは一般論でお茶を濁そう。

どんよりとした虎の顔を見下ろす。

「女に置いて行かれたからって、いつまでもいじけて迎えに来てくれるの待ってる男つて、最悪にポイント低いんだけど」

ビクッと虎の体が震え、周囲から「ひーー」と悲鳴のよひなものが聞こえた気がした。

何ですか、ホントのことじやないですか。

「悪いことしたら『メンナサイは基本だけど、何でこっちが怒つてるのかも分かつてないくせに口先だけで謝られると、却つてムカつくものなのよねえ』

「……」

「それって結局、こっちのこと全然理解しようとして、自分が楽になりたくて言つてるだけだし。大体、シルヴィアさんみたいに手に職持つてる大人の女の人に、ガキ臭い使い魔が必要かつてそもそも疑問だし」

「……」

「それでもシルヴィアさんの傍にいたいんだつたら、それなりの誠意つてモンを見せなさい、誠意つてモンを」

「……つづりすればいいのを……？」

「つむ、ゼロ距離で巨大虎にうるうるお団々で泣き付かれるというのも、中々経験出来ることではないだろうな。」

「アンタはどうしたいわけ？」

「ど、どうして……」

ヴィーと一緒にいたい……とめそめそ俯く巨大な虎。

ああ、丸い耳がへたれて、まさにヘタレ系。ちょっと可愛い。

「なんで？」

「決まってるだろ！ボクはヴィーが大好きなんだよーー？」

「じゃあ、そいつに行けば？」

「・・・へ？」

「大好きだから、一緒にいてトセー、つて」

余計なことをうだうだ考えずに、とにかく行動しろといふのだ。

「」のヘタレ系アホの子使い魔が、小難しいことを考えてもムダだ
わうし、シルヴィアさんだつてそんなことを期待してはいないと思
う。

いや、世の中のお嬢さんつて、時々物凄いドリーム入っちゃうこ
とあるからな、どうだらうな。

昔友達が、彼氏が初めてのデートのときにちょっとアレなファッ
ションセンスなことが発覚して、一気に醒めてたもんな。

・・・でも、ルン三世は、リアルについてはいけないと感じます。

「そ・・・そしたら、ヴィーは許してくれるかな・・・？」

「まあ」

「そんないーー？」

シルヴィアさんのお怒り深度なんて、初対面の部外者に分かるわけがないでしょうが。

「少なくとも、ここにでつじうじしていればしてはるだけ、シルヴィアさんの中でアンタの価値が暴落し続けるのは確かだと思うけど？」

分かつたらとつとと帰れ。

死ぬなら」」いやないと」」ろでお願ひします、面倒だから。

「そ・・・そつか・・・」

ずつと「伏せ」状態だった虎が、のそのそと「お座り」状態になる。

・・・でかい。
何だかムカつく。
ずっとでろんと伸びてた物体に見下ろされると、

「……うん。ボク、ヴィーのどこに行くよ」

よしよし、上手くいった。

しかし、そんな言葉と共にぐるんと温かい舌が有紗の頬を舐めて
いつて。

• • • •

その日の午後、シルヴィア嬢がご自分の使い魔を迎えて来られました。

ヴァンフレッドから、「貴殿の使い魔がボロボロきんのようになつて死にかけている」と連絡があつたからです。

・・・この日から、騎士団の面々の間で、和馬の評価は「魔王」になりました。

第31話 魔王（後書き）

ちゅうとお出かけするので、暫く更新お休みします。

まだまだ暑い日々が続くと思いますが、皆様もお体にお気を付けて
！

第32話 純血種？（前書き）

お久しぶりです。

台風が物凄かつたですね・・・。

第32話 純血種？

その晩、休息日の日付が変わつても、アルフォンスが帰つて来なかつた。

「今日の夕飯には、先口街で頂いた料理を少し真似たものを作つてみますね」と、居残り組の期待と支持率をぎゅんぎゅんに上げまくつて出て行つたのが、市の始まる早朝のこと。

いつもならお昼前には帰つて来て、午後一杯の時間と手間暇、プロ並みの技術を使って「お母さん！」と抱きつきたくなる程美味しい料理の数々を作り上げてくれるといつに、待てど暮らせと帰つて来ない。

いや、いい年をした独身男性が一晩位帰つてこないからと言って、普通なら皆「それがジーした」「けつ、どうせ上手いことやつてんだろ」と気にすることはないだろう。

しかし、それが「ああ・・・またか・・・」「・・・いいなあ」なカイルではなく、みんな大好きお母さんなアルフォンスであるとなると話は違う。

アルフォンスは名実共に騎士団のナンバーワンであり、その彼をどうこう出来るような者が街にいるとも思えないが、万が一何かの事故に巻き込まれているという可能性はある。

ヴァンフレッドとカイルも不測の事態に備え、アルフォンス不在への対処を話し合い始めたとき、ようやく彼が帰還したとの報せが入り、ほっとした空気が流れた。

「ンだよ、氣い揉ませやがつて」

「しかし、アルフォンスが連絡も無しにこんな時間まで戻らんとは。
・・何があつたのか？」

そのヴァンフレッドの問い掛けに、走つて報せに来た騎士さんが、
物凄く微妙な顔をして「はあ・・・」と言葉を濁した。

「その・・・」覧頂ければお分かりになるかと・・・」

なんじやらほー。

そんなんに言ひにくい」とがあるのかと思つたが、確かに見れば分
かつた。

分かつた、のだが。

(・・・女の子?)

十歳くらいだらうか。

長い長い灰色の髪はぼさぼさに顔に掛けり、細い体に纏つている
のはぼろぼろのワンピースのよつたな布地一枚。

足許は裸足で、しかし少女の足が地面についていないのは別にア
ルフォンスが抱き上げているわけではなく、その胴体に少女の腕が、
片足に少女の足がぎつちりと巻き付いて「何があつても離すもんか
い」とばかりにひつついているからであった。

「……連絡もいれず、一日のよつたな時間まで遅くなつました」と、
申し訳ありません、殿下」

それでもきつちつ一礼して謝罪する辺りが立派です、アルフォンスさん。

思に切り「何ソレ」な空気が流れる中、ヴァンフレッシュが「ほんと咳払いをひとつ。

「いや、いい。説明は後にして、取り敢えずその娘を風呂に入れて、眠らせてやつてしまつだ? お前のことだから、既に食事は『えているのだ』」

「ああ、紳士ですね、ヴァンフレッシュ。」

しかし、アルフォンスは珍しく困り果てたような顔をすると、おもむろに少女の襟首に手を伸ばし、みよーんとワンピースの布地が伸びきる位に引っ張つたのだが、彼にしがみついた少女はびくともしない。

え、何その根性。ちょっと氣に入りましたよ? 。

「……」覧のよつて、この有様でして。私もどうしたものかと

それにはうでじょうとも。

ナビ、ナビもがそつせつてひつを虫になるのは、不安だからなんですよ、お母さん。

しかし、ナビもをあんまり甘やかしてはイカシとこうのも、これ

また事実。

「和馬？」

「へいへい」

次の瞬間、アルフォンスと少女の真上から、だばーっと滝のよつな水流が流れ落ちる。

大丈夫、器用な和馬は程よいぬるま湯にしてくれているから。

床に落ちた水分はすかさず分解されて消えてしまつから、部屋が水浸しになる心配もございません。

・・・それにしても、結構な水圧のはずなのに、子どもは相変わらずのど根性でアルフォンスにひつついている。

うーん、ますます気に入った。

その後、汚れの落ちた彼らから、和馬が水分を除去して洗濯終了。

「・・・おふたりとも」

あ、何ですか？アルフォンスさん。

お礼なら和馬に言つて下さいね、私は何もしていませんから。

「・・・アリガトウゴザイマシタ」

うん、礼儀正しい大人のひとつて好きだなあ。

そうして、改めてアルフォンスが連れてきた少女を見遣つた一同は、汚れの落ちたその姿に思わず揃つて目を瞠つた。

汚れてくすんだ灰色になつていた髪は、きらきら輝く雪のような純白で、日に焼けた褐色の肌との対比が眩しい。

一切の癖の無い長い髪がさらりと流れ、流石にいきなりの丸洗い洗濯コースに驚いたのか、将来の美貌が大いに期待できる幼い顔立ちの中、まん丸に見開かれたその瞳は、鮮やかな深紅を宿していた。

(ええと・・・?)

周囲も驚いているが、アルフォンス当人も力一杯硬直しているところを見ると、もしかしたら少女が魔族であることに、今まで気が付いていなかつたんだろうか。

体毛の白い魔族はとつてもレアだとか言つ話だつたから、髪の色が黒じやなくて瞳の色が見えなければ、想像の埒外だつたとしても当然か。

それから、珍しく三十八秒ほど固まつていたアルフォンスは、深呼吸ひとつと共にいつも通りの落ち着きを取り戻した。流石だ。

「捨てて来ます」

「・・・つ！」

がーん!-という感じに、少女の紅い瞳が見開かれる。

「市からの帰りに路地裏で行き倒れているのを拾つたのですが・・・。

ええ、私が選びに選び抜いた、お値段以上に価値ある肉や燻製に野菜、香草の類いをむさぼり食つたと思つたら、仕方なく改めて市に行つた私の後について回り、散々邪魔をした上に購入したものをいつの間にか全て腹に收めている。

そんなことを今日一日で何度繰り返したことか・・・。」

ぐ・・・つとシリアルスな感じにキメてますが、アルフォンスさん。それだけフツーじゃない子どもが人間じゃないこと位、帰つて来る前に気付きましたよ。

へんなどころで抜けたひとだなあ。

「おまけに先程など、教会へ預けて戻ろうとした私に飛びついたと思つたら、いきなり噛み付いて来たのですよーこのどーぶつは！」

見て下さい、と示されたアルフォンスの手には、ぱつぱつと小さな歯形・・・つて、どう見ても牙の痕みたいな点々が四つ並んでいるのですが。

あの、アルフォンスさん。ただでさえハイスペックなあなたに、天然属性は不要だと思いますよ？

「大体、人型をしていて暴走していらないのなら、どこのに主がいるのでしょうか！」

使い魔の分際で迷子になるなんて、魔族の風上にも置けない下等どーぶつじゃありませんか！

でええい、とつと離れなさいーこのどーぶつがー。」

人間の子どもじゃないと分かつた途端、容赦なく引き剥がそうとし始めたアルフォンスだが、白い髪のど根性魔族少女はしぶとかつた。

どれだけぶん回されても、服を引っ張られても、アルフォンスがぜいぜいと力尽きてもひしごばかりにひつついている。

「・・・アルフォンス」

「は・・・申し訳、ありません・・・」

いや、とヴァンフレッドがぽりぽりと頬を搔く。

「その娘・・・ひょっとして、魔族の純血種なのではないか？」

へ?と部屋中の視線がヴァンフレッドに集中する。

「いや、僕も以前ちらりと文献で見ただけだから、余り記憶は定かではないのだが。純血種は他の魔族と異なり、自ら主を選んでその血を受け、契約と為すとか」

ひぐ、とアルフォンスの口元が引きつる。

「・・・こんな頭の悪そうな、大メシ食らいのビーフンしようもないどーぶつが、純血種、ですか?」

魔族の純血種と言えば、人型を取れば容姿端麗、頭脳明晰、魔力天元突破が常識なのだとか。

いえいえ、その子もあと十年も経てば、立派にアルフォンスさんに見劣りしないほど美女になる可能性はばっちりですよ？

将来性を考慮するって大事ですよ、それに今でも十分愛くるしい姿は癒し効果ばっちりですよ？

「さてな。本人に訊いてみたらどうだ？」

これまた「尤もな、ヴァンフレッドの言葉に、アルフォンスがしぶしぶ少女を見下す。

「・・・お前は何だ？」

しかし、少女は紅い瞳をぱちぱちとさせただけだ。

「・・・やっぱり捨てて来ます」

意外と短気ですね！

いや、疲れているのかな。そりゃ丸一日こんなことをしていれば疲れもあるといつもんです。

ちょっとお茶でも如何ですか？

「マスター」

しかしセレーネ、よつやく少女が口を開いた。

あ、やっぱリアルフォンスさんがアナタの『主人なのですね。

そのアルフォンスさんは心底嫌そうにしてますけど。

「名前、付ける。私、マスターのものになる

「遠慮します。私に幼女趣味はありません」

いや、そういうことじやないでじょう、とその場にいた全員が心中でツッコんだが、契約を中途半端なままにしているからそんな奇妙な行動に出てしているのではないかとヴァンフレッドに諭され、アルフォンスは、はあああ、とそれはそれは深々と溜息を吐いた。

それにしても、普通の魔族との契約だと、魔族側から名前を教えた契約完了と聞いていたのに、純血種といつのはほとん特殊な生態をしているみたいだ。

そんなことを考えていると、アルフォンスがおもむろに口を開い

た。

あ、名前が決まりましたか？

「・・・『大メシ食らい』」

「『大メシ食らい』。それ、私の名前？」

「そ・・・」

「「「ちよつと待つああああああつ……」」

「くら句でもソレは無いー」とその場にいた全員で総ツッコミして、ギリギリ少女の名前がそんな切ない響きのものになる危機は回避された。

いやほら、今はいいですよ？

ちつこくてふりちーな内は、そんなあだ名でも可愛らしことこうもんです。

けど、将来的にビ美女になる予定のお嬢さんには、『大メシ食らい』はないと思うのですよ、幾らそれが事実でも。

はあ、そんなものですか、と頷くアルフォンスのセンスに任せていたら、髪が白いから「ミルク」とか、肌が褐色だから「蜂蜜」とか付けそうで何だか怖い。

「では、そうですねえ……その髪ですから、ミルク……」

ひー！

「・・・といつのは、いぐり向でも安直過ぎですね」

「ううですよー！名前つていつのは大切なんですよー！」

アルフォンスさんの美意識に叶う、びゅりほーなお名前を付けてあげましょー！ね！

殆ど祈るような気持ちで一同が見守る中、少しの間考えた後、アルフォンスは少女に「ノーラ」と名付けた。

おお、無難な名前だと一同ほっと胸を撫で下ろしたのだが。

「昔私が飼っていた大メシ食らいの犬が、ノーラと言つたのですよ

・・・同じまでも大メシ食らいから離れられないんですね。

食い物の恨みつて恐ろしい。

「ノーラ。私、ノーラ？」

「ええ、そうです」

しかし、ビ根性大メシ食らい魔族少女改めノーラは、それはそれは嬉しそうにぱあっと顔を輝かせると、ようやくひょいと床に降り立つた。

「マスター、ノーラにご飯と名前くれた。ノーラ、マスター守る」

「結構です」

即答でした。

「えええつーー？」

再び、ガーンーと今度は躊躇めく全身で表現したノーラは、その場でよよと頽れた。

「私は自分の身位、自分で守れます。守ると言つなら、あなたは力一杯殿下をお守りしていなさい」

は？と田を丸くしたヴァンフレッドを示され、ノーラは一度彼を見た後、彼女の『主人に田を向けた。

「でも、ノーラのマスター、あのひとじゃない・・・」

「何か、文句でも、あるんですか？」

ぎりりと光るダークグリーンの瞳が、紛れもなく『』の大メシ食らいのどーぶつがー』と言つていました。

ああ本当に、食い物の恨みつて恐ろしい。

と言つた、この子が純血種というなら、例の「食用魔族の卵」ご出身と言つわけで・・・いや、深く考えるのはよそう。

しかし、怒れるお母さんといつのは、世界一恐ろしい存在です。

「あなた、本性は何のですか。紛らわしい人型なんかいつまでも

してなんじゅありますよ、わざわざと戻りなさい」

ほれほれとアルフォンスに促され、びくっと震えたノーラの輪郭が歪んだと思つたら、次の瞬間そこには純白の翼を背中に生やした、白地に銀色のまだら模様も美しい豹でした。

まあ、びゅりほー。

「・・・余り、食材には向いていなさそうですね」

食べる氣ですか！？

既に額にタテ線が入りまくつの一回の間に、戦慄が走る。

いえ、中華人民共和国の方々なんかは、四つ足のモノはテーブル以外全て召し上がるといつお話ですけども！

市場で犬や猫の毛皮が普通に売られていると聞いたときには、うつかり泣きそうになつてしましましたけどもー。

やつぱり人語を解するイキモノを食すのはどうかと想つのですよ、ヒトとして！

「あ・・・アルフォンス？」

どこか引きつったヴァンフレッドの呼びかけに、いつも通りのこのつと穏やかな笑顔が返る。

「はい。何でしよう、殿下」

「その・・・だな。ノーラの主はお前なのだし、やはりノーラはお前の傍に置いておくべきだと思つぞ」

「・・・はあ。やはりこんなビーブツがお傍にいると、鬱陶しいでしょうか」

(ああああー)

ちよ、もう勘弁してあげてトセ。

ノーラがもつぶるふる震えて、「ビ」今までちよちよくなれるかに挑戦!「な勢いで蹲つているんですよ。

お腹空かせたビーブツが、「」飯くれた人に懐いて尻尾振るのって可愛くないですか?

拾つたビーブツは最後まで面倒見てあげましょ、それが正しい保護者の姿つてモンですよ、お母さん。

『・・・カイル。魔族の純血種とか、結構なレアもんだったりするんじやねえの?』

『そりやあ、純血種なんて滅多にお目にかかるモンじゃねーし、魔術師連中にしたら喉から手が出る程垂涎のイキモノだと思つぜ?けどアルの価値基準は、「殿下のお役に立つか否か」だからなあ・・』

つまり見た目が可愛かろうがびゅりぼーだろうが、アルフォンス

つまみ、押しかけ使い魔なんぞお呼びじゃないと。

いぐら見た目が可愛かろうがびゅりぼーだろうが、アルフォンス

にとつては仲間の為に買った食材を全て食い尽くされた上に噛み付かれ、小汚い格好のまましがみつかれて仕方なく連れて帰つたら、その巻き添えを食らつて問答無用の洗濯丸洗いコース・・・つて、そう考えたら確かにちょっとイヤだな。

結局、「その団体は鬱陶しいですよ、少し縮みなさい」と仰つたご主人様の命令に従つたノーラは翼付きの子猫という何とも萌え萌えしい姿になり、今後はアルフォンスの使い魔としてひつつき虫になることになりました。

「ビーブツの分際で厨房に入つてきたりシメますからね

「目の前をうろちよろしていたら踏みますよ」

「私は他人様に幼女趣味と思われるるのは断じてご免です。不用意に人型になつたら蹴りはがしますからね」

とアルフォンスに言われる度、ぶぶぶぶ、と音がするよつた勢いで頷く子猫の姿に、騎士団一同は心から思つたと言つ。

このひと、鬼畜属性があつたんだ、と。

第34話 らぶれたー

今日までに有紗が遭遇した人型の魔族は、マッドサイエンティスト臭のするシルヴィア嬢のヘタレ使い魔と、アルフォンスの押しかけ使い魔の一體だけだ。

つまり、その彼らの行動原理だけを見て、一概に「魔族とはなんぞや?」という疑問を解き明かすのは余りに浅はかなことだとは思うが、少なくとも彼らには同族意識、と言つものは皆無であるらしい。

「マスター、マスター。ノーラ、偉い? 偉い?」

「ええ、ノーラはいい子ですねえ。本当によく出来た使い魔ですよ

肩に乗つた翼付きの子猫の喉を優しげにくすぐつているのは、紛れもなく先日鬼畜属性が発覚したばかりのアルフォンス。

・・・皆、さりげなくそちらを見ないよう視線を逸らしております。

気持ちは分かる。

いえ、彼ら主従の仲が非常に睦まじいものになつたといつのは、とても喜ばしいことですとも。

例えその理由が、魔族討伐の際にノーラが実寸大（尻尾まで入れると全長五メートルの巨大豹）に変貌し、その口から放つた衝撃波でかなりグロテスクな姿をした繁殖期後期の魔族を一瞬で消滅させ

たお役立ち感からだつて、それはそれでアリといつもんです。

何せ、アルフォンスの価値基準は「ヴァンフレッドの役に立つかどうか」という素晴らしい基準なのだからして、それを外野がどうじつ言ひつひとでも「ござこません。

・・・ただ、昨日までとのギャップがちょっと気持ち悪いなーと思つてゐるだけだござこます、はい。

それにしても、このところ魔族の襲撃が大分間遠になつてきた。

討伐、と言つても基本「襲つたら返り討ち」戦法であつて、幾ら精銳揃いの討伐隊の面々が強いと言つても、森の奥に棲んでいる魔族にわざわざ喧嘩を売りに行くようなアホな真似はしない。

そんなことをしていたら、命が幾つあつても足りやしないのだ。

よつて、魔族の襲撃が群れ規模で発生しなくなれば繁殖期は終わりと判断されるらしいのだが、その確信を得られるのがいつなのか、一時的に収まつても再開したりしないのか、と何せ余り例があるわけでもないことなので、上層部はその辺の判断をぐるぐる悩んでいるらしい。

しかし、危機感が下がれば、気が抜けちゃうのが人間といつもの。

騎士団の面々は、襲撃の数こそ減つても繁殖期後期型の強大かつグロい魔族の脅威を何度も目の当たりにしているため、気が抜いてる場合も何もあつたもんぢやないのだが、平和な街のお嬢さん達にとっては「魔族? だつて、すぐ近くに騎士様達がいらっしゃるから、ここは安全だし・・・」という感じもあつたらしい。

そんなわけで、最近離宮の訪問口には、お嬢さん達からの差し入れだのラブレターだのが急増中である。

宛先は九割がカイル。

その他の一割に引つかかつたヒラ騎士さん達は、本氣で号泣しております。

「い・・・つ生きてて良かつた・・・！」

「人生、そう捨てたもんじやないんだな！」

「い、いや！ おおお落ち着け！ ？ コレがまた団長への足がかり作戦の一環とも限らん！ 何事も冷静に対処すべきだ！」

「 」 「 」 「 はう！」 「 」 「 」

・・・何だか彼らが女性不信になつてそうで、氣の毒です。

因みにアルフォンスにも何通かお手紙が来ていたのだが、「マスター、らぶれたーつてなに？」との使い魔の問い合わせに、「一時の熱病にうかされた氣の毒な女性が、気に入つた男に番になつて下さい」という意思を伝えるものですよ」と身も蓋もナイお言葉をのたまつた途端、アルフォンスの手の中にあつた紙の束はノーラが吐き出した炎によつて、一瞬にして灰になつていた。

それを叩撃した面々は、すわまた鬼畜モードの説教が！？ とおののいたのだが、アルフォンスはおや、と目を瞪ると既に定位位置となつている肩に乗つたノーラの喉をちょこちょことくすぐつた。

「手間が省けましたよ。ありがとうございます」

「ノーラ、偉い？偉い？」

「ええ、偉いですよ」

飼い主に囁をくすぐられ、うつとつと皿を締める子猫（翼付きだけ）の姿と、のとは、とっても可憐にしかったです。

それはさておき、ちょっとお困りなのは大量の贈り物を頂いている、お色気猫耳イケメンのカイル団長。

彼がおモテになるのは、てっきりその容姿と問答無用のお色気のせいだと思っていたのだが、世の中の女性達だって高嶺の花より近所の雑草、幾ら彼の色気にアテられたからって、それだけできゅんきゅん恋い焦がれちゃつたり致しません。

ならば何故に…と言つなら、カイルは非常にマメなのだ。

一度でも言葉を交わしたお嬢さんは、その名前や容姿は勿論、その時話した会話の内容全て記憶し、頂いたラブレターに返事をするときにはそのままのことを織り交せて丁重に応じる。

・・・ある意味、アルフォンスさんより記憶力や処理能力に優れているのかもしれません。

しかし、カイル自らいちまちま手紙をしたためている時間などこれっぽかしもないわけで、その代筆を任せている離宮の書記官がこのところ泣きそうになつてゐるということだ。

謹厳実直を絵に描いたような、非常に生真面目で仕事の細やかさと正確さを買われて書記官といつ仕事に就いた筈の方々なのだが、最近彼らが、

「何かや・・・最近、オレみたいのが女の子に優しくしてもらいたいって思うのが、そもそも間違ってる気がしてきてさ・・・」

「ああ・・・オレらには、あのヒトみたいな恋愛経験値とか、甘々しい気遣いとか、少しお恥ずかしいボキヤブラーとか、そういうモテ要素、皆無だもんな・・・」

「いいんだ・・・オレ、今度見合にするんだ・・・繁殖期が終わったら、あのヒトも王都に帰つてくれるから、その後なら安心かなあつて」

などと互いを慰め合つてゐる姿が、執務室では日常茶飯事になつてゐるのだとか。

今更ながらに気付いた、以前世話になつた離宮には侍従さんの他にメイドさんも沢山いたのに、この離宮にいる女性が厨房で働く肝つ玉母さん的な元気の良いおばちゃん達だけ、と言つのも、もしかしたらナイス執事のヴィクトール氏辺りの配慮なのかもしれない。

確証は無いが、そんな気がする。

だつて、絶対仕事にならなさそうだもん。

しかし、そんなカイルのお色気にも全く反応しないお嬢さん方がいるのだそうだ。

それはすばり、犬系獣人族のお嬢さん方。

何でも獣人族というのは、普通の人間はちゃんと恋愛対象になるのだが、種族が違うとお互い全く無反応なのだとか。

・・・でも正直、ぱっと見だと獣人族の皆さんが犬系なのか猫系なのか判断し辛かつたりする。

いや、短毛種の猫系のヒトは、流石にすぐ分かるのだが、カイルみたいな長毛種だと時々「ん？」てなるし、三角お耳もよく見れば猫系のヒトの方が大きかつたりするけれど、どっちもラブリーなナイスチャームであることには変わりないし。

彼らはどうやってお互いを一目で識別しているんだら、という素朴な疑問には、和馬の「匂いだろ」の一言で納得しました。

そんな中、王都からやって来たのは、魔族討伐隊の現状把握を任務とする監察官。

（おおつ！知的クール系美女なのに、ふつさり尻尾がらぶりーです、お姉様！）

彼女の名は、リュシーナ＝メイ。

緩く巻いたシルバー・ブロンドを頭の後ろで一つに括り、明るい茶色の瞳には知的な光がびしつと浮かんでいる。

スレンダーな長身を男物の文官服に隙無く包み、まさにジテキる大人的女。ああ、憧れる。尻尾可愛い。

彼女はエラい人なので、その応対にはヴァンフレッドとカイル、アルフォンスがそろい踏み。

それをこつそり・・・と言つわけでもなく、お客様が女性の場合、応接室の扉は開け放たれたままなので、割と堂々と中の様子を見ることが出来る。

(おお・・・しゅげえ)

リュシーナさん、マジでカイルに無反応。

カイルも美人と見ればあからさまに浮かべる「爽やか親しみ度数マックス笑顔」の欠片もなく、小難しい会話を淡々と繰り広げている。

いや、単に大人の真面目な会談中だからじゃね?ってだけのことがも知れないが、妙齡の女性がカイルの前で彼の色気に全く動搖していませんよの図というのが、もうそれだけで超レア感ばりばりなのだ。

因みに有紗に関しては、以前カイルが昼寝をしているときにぱたんぱたんと地面を叩いていた彼の尻尾で、それこそ猫じゃらしで遊ぶ猫のように猫パンチで遊んでしまったため、騎士団の中では「ああ・・・子どもには、団長のフェロモンも通用しないんだね」と微笑ましく見られてしまっている。

すいませんね、お子様で。

それはさておき。

何だか、騎士さん達の様子が、変。

「い・・・犬系・・・」

「そ、そ、うか・・・どこの店でも、騒いでるのって猫系の「か人族の「ばっかりだつたから、大人しくしてるカノジョ達のことが全然目に入つてなかつたかも・・・！」

「そ、うだ・・・！犬系の女の子、オレ達の天使はすぐそこにいたんだ！」

ちょ、大丈夫ですか、皆さん。

何だか目がイッちゃつてますよ？

あ、猫系の騎士さん達はますますどんどんよりど。

それと反比例するように入族、犬系獣人族の皆さんは、これから魔族討伐に出陣ですかって勢いで盛り上がりで盛り上がっている。

・・・きっと、明日から街では犬系獣人族のお嬢さん方に、前代未聞のモテ期が到来するに違いない。

猫系獣人族の騎士さん達に、幸あれ。

数日後、各地の魔族討伐隊から現状の情報収集を行つた監察官達の報告を受け取つた国の上層部は、今回の繁殖期は収束したと判断した。

ヴァンフレッド以下第四師団の面々にも王宮への帰還命令が出て、一月余り世話になつたこの離宮からも撤収することとなつたのだが、良かった良かったと周囲が浮かれる中、有紗はひとり壁に懐いて青ざめていた。

「な・・・・夏休みの課題・・・全然、やつてない・・・！」

「あ？ 元の時間に戻れば休みなんて丸ごと残つてんだろ？」

そういう問題じゃないんですよ和馬さん！

継続は力なりって言ひでしよう！？

アレは継続しなきゃ何の力にもなりませんヨーという有り難い教訓でもあるのだからして、夏休み前に授業で詰め込まれた数式やら公式やら年表なんですが、現在のーみその中で検索不能な程薄れまくつているこの状況は、仮にも一応進学校に通つている高校一年生にとつてはかなりヤバいお話なんですよ！

（自分は進学が決まって余裕だからつてーつー）

思わず和馬に八つ当たりしたくなつてしまつたが、そんなことをしている場合ではない。

早く帰つて勘を取り戻さなければ、新学期が始まつてから一気に成績下降コースまつしぐらだ。

奨学金を頂いている身としては、断じてそんなことは避けなければ。

幸い、無事魔族の繁殖期も終わつたようだし、ヴァンフレッドの死亡フラグも回避出来たと思つていいだろ？

当初の予定とは大分違つてしまつたけれど、物凄く濃くて楽しい夏休みを過ごせた。

帰つたら山のような課題が待ち受けているのは・・・まあ、少々気が重いが、どうにかなるだろ？、きっと。多分。

こぞとなつたら和馬に家庭教師をしてもらおう。偏差値の高い恋入つて素敵だ。

そして、慌ただしくヴァンフレッド達に別れを告げに行くと、彼らは揃つて「え？」という顔をした。

「狩りに協力してくれた礼もしていないといつて・・・もう少しいられないのか？」

「なんだよ、みづやく本格的に遊びに連れてつてやるつと思つてたのによー」

「王都に戻つたら、私自慢の新鮮なフルーツをふんだんに使つたタルトを、是非味わつて頂きたいと思っていたのですが・・・」

あ、あんまり誘惑しないで下さい！特にアルフォンスさん！そんな最終兵器を持ち出されたら、つっかりこの世界に永住したくなっちゃうじゃないですか！

「有紗」

「う・・・」

「また来ような？」

ぽん、と和馬の手が頭に乗る。

何だか物凄く子ども扱いされている気がするけれど、アルフォンスの手料理にがつたり餌付けされてしまつた状態では、反論する気も起きやしない。

新鮮なフルーツのタルト・・・いやいや、ここで誘惑に負けたら本当にずるずると屈着いてしまいそうな気がする。ここは我慢だ、頑張れ自分。学生の本分は勉強です。

夏休みは、ここでおしまい。

明日からはまた、元の世界で頑張ろう。

あ、なんかたこ焼きが食べたくなってきた。

ゲロ甘です。」」注意下せー。

だつてタグに「溺愛」つて入れてるしーと開き直つて・・・つていやコレ、久しぶりにムーン様の方に投稿するモノを書こうかなーと思つて書き始めたモノなのですけど、途中で力尽きてしまいました（汗）。

・・・和馬視点のエロつて、需要はあるんでしょうか。うーむ。

透けるように白く滑らかな頬に、そつと触れる。

先程、和馬自身も覚えのある「これでもか」と言わんばかりの大量の課題をじうにか片付けた有紗は、そのまま沈没するよつに寝入ってしまった。

明確な「保護者」というものが存在しないからなのか、有紗は自分が甘やかすことが下手だ。

課題なんて新学期までに終わらせることが出来れば十分な筈なのに、カレンダーを確かめればまだ夏休みは半分近く残っている。

(全く・・・)

有紗が自分を甘やかない分、彼女を甘やかすことを[△]の役割だと勝手に決めている和馬は、その華奢な体を抱き上げてベッドに乗せた。

その拍子に、さらりと柔らかな栗色の髪が枕に散つて、その艶やかさに束の間、目を奪われる。

心臓を焦げ付かせるよつな、ちらりとした熱。

・・・一昨日辺りから、だろうか。

それまでは安心しきつた顔で眠る姿を眺めているだけで満たされていたのが、覚えのある飢餓感を覚え始めたのは。

甘い肌の香り。

芳しい髪の匂い。

誘つような、吐息。

夏の最中といふこともあって、有紗が身につけているのはやつたりとしたロングTシャツと、ショートパンツだけ。

薄いタオルケット一枚では、その魅惑的な体の線を少しも隠すことが出来はしない。

(まずい・・・な)

その愛らしい唇から田を背けるのに、苦痛に感じるようになつてきているのは、かなりまずい兆候だった。

今日一日ぐらくなは我慢出来るかと思つていたんだが、と思つ聞じ、勝手に動いた自分の右手が、頬から顎へ、それからしなやかな首筋へと滑っていく。

「ん・・・」

くすぐったそうに身動いだ有紗に、慌てて離そつとした和馬の手に、有紗の細い指が触れる。

酷く子どもじみた仕草で和馬の手を引き寄せて、酷く嬉しそうに頬をすり寄せる有紗の様子に、辛うじて「食え」から氣を逸らしていた意識が、揺れた。

「有紗・・・?」

可愛かわいいお前が悪い、なんて言つたりどんな顔をするのか、ちよつと見てみたい気もしたけれど、深くゆうくつとした呼吸を繰り返す唇に口づける方が先だつた。

何度触れても、時々溶けて消えてなくなつてしまつたじやないかと怖くなる程柔らかな唇に、自分のそれをそつと擦りつける。

繰り返しそうこして、自然と緩んだ唇の間に舌を忍ばせると、すぐには素直に応じてくれる。

田を覚ましたのかと思ったが、そういうわけではないらしい。薄く甘い舌のひどく覚束ない動きは、まるでキスもろくに知らないかのようだ。

とろとろと甘えて、時折艶めいた吐息を零す。

「・・・あ・・・・ず、ま・・・・」

呼ぶ声の甘やか、ぞくつとした。

しかし余程疲れているのか、有紗は誘つよつた声で和馬を呼んだくせに、唇を離すとすぐに深い眠りの中に沈んで行こうとする。

そのまま眠らせてやりたい気持ち、腕の中に閉じ込めてもつと甘い声を聞きたい気持ちが胸の裡でせめき合つ。

「有紗

その名を呼ぶと、少し落ち着く。

まるで呪文のようだと時々思つ。

たつた三文字の、大切な音。これ以上にきれいな音の響きなんて、和馬にとつては何も無い。

愛しくて、愛しくて、ただひたすら大切にしたい。

甘やかしたい。

甘えて欲しい。

・・・触れたい。

「・・・有紗」

体を内側から蝕むような飢餓感を、無理矢理抑え込む。

何度も経験して、この体中から力がこぼれ落ちていくような不快感にも大分慣れた。

・・・大丈夫だ。これ位なら、まだ耐えられる。

この感覚を掴むことが出来るようになるまでに、何度も眩暈と苦痛に負けてしまったこともあつたけれど、有紗が疲れて眠っているのに「腹が減った、抱きたいから起きろ」と言うのは・・・いくら何でも痛すぎる。

イキモノとしては正しくても、ヒトとして、といつよつ男として駄目だわ。それはちょっと遠慮したい。

少しきせのある、指通りの滑らかな髪に指を絡ませる。

健やかに落ち着いた呼吸をゆづくつと繰り返す有紗の寝顔は、どれだけ見ても飽きない。

勿論、そのくるくると表情の良く変わる瞳が自分を映しているところが一番嬉しいのだけれど、こうして無防備に安心しきった顔を見させてくれるのが幸せだと思つ。

傍にいるだけで幸せをくれる有紗は、和馬の生きる理由そのものだ。

・・・そのまま、どれ位そうしていただろう。

陽が落ち、あちこちで点されている灯りのせいで逆に濃い闇の中でも、和馬の目は世界をはつきりと映していくが、昼間に比べると仄かに藍色の紗が掛かつたような感じだ。

強すぎる光の中よりも、むしろものを見るには楽な位で、有紗の長い睫毛がふるつと揺れるのがスローモーションのように見て取れる。

「あ・・・れ？」

寝ぼけたままの、どこか幼い口調。

「じめん・・・何か、落ちた・・・」

ふにゃあ、と手の甲で目を擦つてそんなことを言つ有紗を見て、

和馬は自分の喉が鳴るのを覚えた。

普段は真っ直ぐに強い瞳がとろんと半ば閉じられていて、言つてこることやしていふことはむしろ予どもっぽくなつてこるので、何故だか妙に色っぽい。

おまけに、先程と同じように和馬の手を探し当たる有紗は、それにすりすりと頬づりしながら、「和馬の手、好きー」なんて言つてくれて。

・・・これで本人には誘つているつもりが無いのだから、本当に始末が悪い。

それは、分かっているのだが。

「有紗」

「んー？」

「・・・お前が悪い」

可愛すき。

そんな姿を見せつけられて、そんな可愛いことをされて、ぎりぎり保つていた糸で辛うじて押し留めていたなけなしの理性がすっ飛んでしまった自分は悪くない。・・・多分。

翌朝、和馬は腕の中に抱き込んでいた有紗がもぞもぞと動き出すのにつられて目を覚ました。

「どうやら、腕の中から出でていこうとしているらしく」といふ付いて、半ば無意識に引き戻す。

「……和馬さん」

「ん……？」

腕の中に一度良くな收まる柔らかな体は、どうにも手放しがたくて、時々有紗に「抱き枕ですか」と呆れられる。

その有紗の、あのですね、と妙に折り正して口調に、ぼんやりと瞬く。まだ眠い。

「そりやあ、こっちに帰つて来てからずっと、課題に掛かりつきりで毎日沈没してた私が悪かつたですよ。家庭教師してもらつたことも、力一杯感謝しておりますよ？」

「……ああ……？」

「でもですね？・・・出来れば、空腹はこまめに訴えて頂きたいなあと、思う次第なのですよ」

そう、少し掠れた声で訴える有紗が、拗ねたように、恥ずかしそうに伏せた目元が淡く朱を滲ませていて、昨夜の少々濃かつた熱を思い出させる。

確かに、かなり「お預け」を食らっていた上、課題の山から解放された有紗が妙に素直で可愛かったものだから、いつもより・・・まあ、ちょっとしつこくしてしまったかも知れない。

しかし、その原因の大部分は和馬に縋り付いて、謫言のように和馬の名と「大好き」を繰り返す有紗の破壊的（主に和馬の理性に對して）可愛らしさのせいであって、空腹云々は大した問題ではない。

そう説明しようかとも思つたのだが、そんなことを言つたら「何を恥ずかしいことをつるつと言つてくれてるんですかー！？」と真っ赤になつて呼ばれた上に、ベッドから叩き出されかねない。

不幸な結果しか招かないと分かつていて、わざわざ壁つらともないだら、

（・・・まあいいか）

その事実に当人がいつか気付くか気付かないかは知らないが、有紗が言つてゐるのは、つまり今後は余り遠慮する必要はないと、そういうことだ。

「か・・・和馬？」

つべ、としなやかな背中のラインに指先を滑らせると、有紗が顔と声を引きつらせる。

「有紗」

「は、はい？」

うん、どうしたものか。

有紗らしくもない、少し怯えたようなその表情に、思い切りそそられる自分を自覚してしまった。

鬼畜系の言動は、どこぞの矢鱈とハイスペックなロン毛の副団長の専売特許だと思っていたのだが、ひょっとして鬼畜属性とこの2つは感染するのだろうか。ちょっと嫌だ。

・・・いや、これは単にアレだ、不安げに揺れる大きな瞳がちょっと潤んでいるところだとか、その瞳がこちらの反応を見逃すまいと懸命に見詰めてくるひたむきな感じとかが、男心をジャストミートにフルスイングで打ち抜いてくれるだけだ、きっとそうだ。

といふわけで。

「腹が減った」

笑つてそう告げると、一拍置いて「嘘吐きーー」と絶叫しかけた有紗の唇を、和馬は問答無用で塞いでやつた。

別に、嘘なんて吐いていない。

お前の言う通り、ちょっと、自分に素直になることにしただけだ。

第36話 趣味は人それそれです。

夏休みも終わり、和馬にがっつり家庭教師をしてもらつたお陰で（ええ、そりやもう色々な意味で）、どうにか無事、休み明けのテストも乗り切つた。

そうなると、一学期というのはイベントの宝庫である。

体育祭、学園祭、その他諸々の体験学習。

その中で真っ先にやつて来る体育祭は、まあ当然ながらスポーツクラスであるE組の独壇場だ。

他のクラスにしても、ムダに対抗意識を燃やすより、それぞれ有名どころの選手を力一杯応援する方が余程楽しいといつことで、一部女子などは手作りの応援グッズまで完備している。

ただし、これまた当然というべきか、一応建前上は「各クラス対抗で青春の汗を流しましようね」というのが体育祭の趣旨なのだからして、E組の面々は、それぞれが所属している部活動の競技には参加することは出来ない。

それでも、元々の運動神経と鍛え方が違う彼らのこと、どんな競技だうと人並み以上にこなしてしまつわけだ。

「いっけえええええ！」

「任せろつー」

「……………つあたーつぐー！」

ギヤラリーからのシンクロ率ばつちりの掛け声が体育館一杯に響いて、次の瞬間、バスケットボールがゴールネットを揺らしていた。

流石、バレー部のエース。

バスケットボールにアタックをかまして、見事にゴールを決めました。

「この試合は絶対面白いから！」と言つ噂話に乗つかつて、卓球で初戦敗退した有紗とささめは、一種異様な熱氣に包まれてゐる体育館に試合見物に来たのだが、これは確かに面白い。

何しろ、二年E組の現男子バレー部エースを擁するチームと、三年E組の元男子バレー部エースを擁するチームが対決しているのだ。

こんな愉快な試合は決勝でするもんぢやないかと思うのだが、そ
こはくじ引きの神様が決めたことだから仕方がない。

お陰でまだそれ程ギヤラリーがいない中、彼らの派手な応酬を楽しむことが出来るのだから、神様に感謝だ。つるかめつるかめ。

「ふはははは！先輩、体がなまつてるんじやないつスか！？」

「ええい、生意気なクソガキが！見よ、必殺・・・！」

ପାତ୍ର-ବିବରଣୀ

そうして、三年の元バレー部エースがぶん投げたバスケットボ

ルは、そのまま見事にゴールネットを揺らした。WAIO。

あのー、あなた達ホントにバレー部なんですか？バスケ部でも十分レギュラー張れそうですよ？

審判役をしている元バスケ部主将の和馬が、ホイッスル吹きながら呆れ返った顔してますよ？

「・・・先輩。『必殺！』の後、何て言つたんスか？」

「・・・いや。ここで何かを叫んだら、自分で中でナニかが終わるよーな気がしてな・・・」

そうつスか良かつたつス、ああそなんだ、とさりげなく視線を逸らしながらぼそぼそと言い合つふたり。

何だかとつても仲が良さそう。

そんな彼らは、結構な有名人である。

確か、三年の元バレー部のエースは新藤、一年現バレー部エースは鈴川と言つたはずだ。

揃つて実力もあり、バレー部らしくガタイも良くて見目もマル、おまけに社交的となれば、周囲の人気があるのも当然と言つもの。

「あー、あのヒトらのなあ。オレも試合、見たかつたな」

大変見応えのあつた試合が終わつて教室に戻ると、こちらは先程サッカーで二回戦敗退した大輝が羨ましそうに溜息を吐いた。

男子バスケ部と男子バレー部は、体育館の使用時間が結構被るため、何だかんだと親しくしているのだとか。

「普段からあんなノリなの？」

祭りのテンションではっちゃけていただけではないのかと問えば、大輝とランスレイルは揃つていんや、と首を振つた。

「しおっちゅうラーメン賭けて、愉快な勝負してたしな」

「そうデスね、お一人にはラーメンの美味しい食べ方も教わつたデス。ミソにはグレイテッドチーズ、ショーケにはタバスコ、シオにはソースが一番だそうデスが、ワタシはシオにもチーズが好きデス」

「ここにここに」。

・・・ああ、穢れないその笑顔が眩しい。

有紗は無言で、口元を引きつらせている大輝の襟首（今日は学校指定のジャージです）を引っ掴んだ。

『・・・大輝！？アンタがついていながら、何をバレー部のアホに勝手な真似をさせとるかー！』

味噌ラーメンに粉チーズはともかく、タバスコとソースはどうかと思う！

『『ししし知らねーって！大体、オレはランスの保護者じゃねーぞ！？』

それはそうかもしけないが、何だかもう絶対、ランスレイルの中の「日本の高校生像」は愉快なことになつてゐる気がする。

日米間の正しい相互理解の道は、遠い。

そんな中、でもお、と少し唇を尖らせてささめが首を傾げる。

「あのヒト達、ショッちゅうカノジョさんが変わるって話だよう?.あたし、モーグーヒトは好きじゃないなー」

ささめはどこから仕入れてくるのか、結構な情報通だ。

一学期の「大輝への告白事件」以来、E組のヅカ系美少女杏子ともすっかり親しくなつてゐるし、その人懐っこさが勝因だろう。

バレー部の彼らについては有名人だけあって、有紗も時々噂話を耳にするのだが、確かにあのふたりの傍にいる女生徒は頻繁に入れ替わっているらしい。

まあ、世の中にはそういう輩もいるよね、と有紗は適当に聞き流していたのだが、夏休み中に久川と「祝 遊園地で初デート」を行し、恋する乙女成分が目下増量中のささめにとつては、少々不快な話のようだ。

しかし、ささめの言葉を聞いた大輝とランスレイルは、一瞬視線を交わすと微妙に落ち着かない様子でそわそわと指を動かした。

「ええと・・・な?」

「シンシアサンと、スズカワサンは・・・何と話すか・・・」

大輝とランスレイルは暫し、『お前が言えよ』『いえ、ディーがどうぞデス』と何やら押しつけあつていたが、最終的にはじゅんけんで負けた大輝が、ぼそぼそと口を開いた。

よしよし、ランスレイルはちゃんと日本人のタシナミ、「じゅんけん」を覚えているな。

「最初はぐーー」の掛け声も完璧でしたよ、良かつた良かつた。

そして、敗者の大輝曰く、新藤と鈴川のふたりは、確かにじゅつちゅうオツキアイする相手が変わっているのだそうだ。

おまけに、「付き合つて下さい！」と告白するのは、常に女生徒からだと言うのだから、非モテ系男子や、中々女の子に告白する勇気を出せない純情系男子からすれば羨ましいどころの騒ぎではないだろう。

「けじなー。・・・フラれんのもにつつもあのヒトらの方なんだよな」

「は？」

「ほえ？」

目を丸くした有紗とささめから、な?とランスレイルに視線を移した大輝に促され、ランスレイルが重々しく肯く。

「ワタシ達が知る限り、確率は百パーセント、デス」

それはまた、何と言つか。

「変な趣味やちょっとついていけない性癖の持ち主だとか、女の子の纖細なオトメゴロ口をぶつちり踏みつぶすような、『デリカシーに欠けたことを平氣でしたり言つたりするヒトだとか?』

「実は秋葉系のオタクだとか、アヤシイ新興宗教にハマつてるとかー、美味しいパスタ食べながら寄生虫のおハナシしちゃうとかー、もしかしてそーゆーいやんなヒト達なのー?」

ささめは有紗の抽象的な発言を、見事に具体化してくれました、ありがとうございました。イメージって大事よね。

「・・・何でそーなる」

大輝ががくりと肩を落とす。

因みに、アメリカでも「OTAKU」は通じるやうです。

道理でランスレイルが微妙な顔をしているだけで黙つていろと思つた。

「いや、実際付き合つてみなきや分かんない、女の子が百パーセントどん引きする原因つたらこの辺りかなあと」

「ねー、怖いもん」

ささめと頷き合つてそう言つと、大輝は苦笑じみた表情を浮かべて、ぽりぽりと頬を搔いた。

「まあ、確かにについていけねー趣味かもな。・・・あのヒト達、ふたりしてバンジージャンプが趣味なんだよ」

「へ、と揃つて間の抜けた声を漏らした有紗とをために、ラシスレイルもそなうのデス、と頷く。

「休みの日にアルバイトをしてるのは、こつかマカオタワーに行く為だそづテス・・・」

マカオタワーといつのは、中国にある世界一高いバンジージャンプがあるところなのだとか。

・・・バンジージャンプ。

てつきりテレビのバラエティ番組で、罰ゲームとして行われているだけのものだとばかり思つていた。

確かに趣味・バンジージャンプな相手とオッキアイなんて、一般的なお嬢さんにはちょっと荷が重すぎる。

高いところが苦手なささめなど、想像しただけで「無理!」となつて青ざめているし、久川との遊園地デートでも、きっと微笑まい乗り物ばかりをチョイスしていくに違いない。

まあ、世の中には色々なひとがいる。そういうヒト達には、いざ趣味を同じくする、彼らに相応しいお嬢さんが現れてくれる」というふう。

そんなことを考えてみると、不意にラシスレイルが何かを思い出

したように、ぱっと顔を上げた。

「そ、そ、テス！ 今度ステイツから、ワタシの姉が遊びに来るテスよ！」

「おお！ あの美人のねーさんかー？」

途端に大輝が色めき立つのも無理はない。

以前、写真で見せてもらったランスレイルの四つ年上の姉上は、栗色の髪に弟と同じモスグリーンの瞳の、とても笑顔が素敵な美人さんだ。

現在は本国の大学で美術の勉強をしていて、日本美術、中でも戸絵画に大変興味を持つているのだとか。

姉が来たら、是非会って下さいネ、とランスレイルはにこにこと笑っているが、ごく一般的な日本の義務教育しか受けていない三人は、内心冷や汗を垂らしていた。

『日本画……？ 何か知ってる？』

『……見たら多分「ああ！」ってなるけど、タイトルは知らんつてレベルだ』

『うー、名前まで覚えてるのって、大抵外国の絵だよう……』

全くもって、右に同じです。

しかし、今更付け焼き刃でちょっとした知識を詰め込んだところで焼け石に水。

折角大学で勉強をしている方がこいつしゃぬと壁のだから、この際色々と教えて頂く気持ちでお迎えしよう。

・・・」(つづいて)「いや、日本の教育つうか、と編んでこむと思ひ。

本国の文化をろくに知らないって、なんか恥ずかしい。

第37話 ミコティアナ

次の日曜日、某国立美術館近くのカフエで待ち合わせをした一同は、約束の時間前に全員集合していた。

体育会系の大輝とラヌスレイルは時間厳守が身に染みついているのは勿論、有紗も時間にはマメな方だし、ささめは年の離れた兄上様達にぐりんぐりんに猫可愛がりされていて、ちょっとでも約束の時間に遅れると大変オソロシイことになるため、皆十分前行動が基本なのである。

そう言えば、イスラム教のヒト達って、約束の時間を守らなくつても、「だつて神様がそう思ひ置しだつたんだもの」で許されちゃうんですけど。

と言つよつ、「明日何々をしますからネ」と言つちゃいけませんよー、どひしてもつてときは「神がそうお望みならばね?」と言つておけば良いですよ、という戒律があるんだとか。

元々、それこそ砂嵐とかで「田的地にたどり着けるかどうかは神のみぞ知る!」って土地柄にお住まいの方々だから、そう言う風習がまかり通るのも分からなくはないけど、その理由が出がけに奥さんには、「ちょっとアナタ、玄関の電球が切れちゃつたから取り替えてくれないかしら」と言われたからってのはどうなのか。

それを堂々と仕事相手に主張するつてんだから笑つちゃうけど、そこで「なんでやねん!」とツッコんだら「神の教えを冒瀆する気!?」とか言つて、殺されかねない勢いでキレられちゃうつてんだからオソロシイ。

皆さん、イスラム圏を旅行するときは気を付けましょうね。郷に入つては郷に従えですよ。ツアコンのヒトがイスラム教徒だったら、約束の時間に遅れて来ても怒れませんからね？

だって、そのヒトの遅れた理由が「子どものおねしょ布団を干してたから」でも、「目覚ましが鳴らなかつたから」でも、「着てきた服がなんか気に入らなかつたから」でも、全部「神様の思し召し」なんですもの。

「初めまして。ランスレイルの姉の、ミリティアナ・フォゼットデス。ミリイと呼んで下さいネ」

そうして、ランスレイルと一緒にやつて来たミコティアナは、写真よりずっとときれいなひとだった。

かなり旅慣れているらしく、薄化粧にTシャツにジーンズというラフな格好だが、さりげなく耳元で揺れているピアスや腰の細さを強調するチーンベルトが、厭味無く大人の女性という感じだ。

何より、ふんわりと落ち着いたもの柔らかな笑顔は、リラックス効果がハンパない。

赤ん坊並の 波とか出してるんじゃなかろうか。

せやめとは種類が違うが、癒やし系という同類項できつちり括れてしまつ、男女問わずに誰からも愛されるタイプだ。

「・・・ディーー」

想像以上に素敵な女性の登場に、揃ってミリディアナに見とれていた有紗達だったが、ランスレイルの奇妙に落ち着いた声に、はつと我に返った。

イカン、幾らワーンスレイルに一通り紹介されていたとはいえ、自己紹介もせずにぼけらつたとしているなんて、失礼にも程があつたと慌てたのだが、その前にランスレイルがにっこりと言葉を続けた。

「ミリィのボーイフレンドに立候補するなら、先に痛々しいファイアンセを、ディーの人生から完全に排除する『デス』よ？」

「・・・・・」

大輝の顔が盛大に引きつり、有紗とさわめはぽん、と両側からの肩を叩いた。

いやだつて、綺麗なおねーさんを見たときの青少年としては、大輝の反応は至つて真つ当ですよ？

アメリカのハイスクールとは比べものにならないほど純情可憐な日本の高校生男子は、いきなりそんな高望みはしたりしませんよ、ランス君。それ位今までの付き合いで分かるでしょうに。

だからホラ、自慢の姉上様にちよつと見とれるくらいは許してあげてくれませんか？

（まあ、これだけ素敵なおねーさまだったら、番犬になりたくなる気持ちも分かるけどねー）

今日のランスレイルは、びしつと警戒態勢のお耳も凜々しい、ジ

ヤーマンシ>Hパードモードです。

・・・それにしても、ラシスレイルって威嚇するときも笑顔なんだな、気を付けよ。

「ひいつタイプが、実は怒らせると一番怖かつたりするのだ。

ミリーディアナは外見通りのおつとりさんなのが、まだ日本の空気感に慣れていないのか、マア、ディーにはファンセがいるのね、イタイタシいつてじつじつ意味だつたかしら、などと仰つてこる。

その辺は「奥義・日本人の曖昧なホホエミ」で誤魔化しながら力フェテラスに移動した一同は、十一時の開館時間までお茶をして時間を潰すことにした。

先週から始まつた「江戸絵画展」を、ミリーディアナは随分楽しみにしていたらしく、ランスレイルと同じ色の瞳がきらきらと輝いている。

「そうデスね、一般の学生サンが、日本画のことをベンキョーしたことがナイのは、仕方のないことだと思つデスよ」

これから訪れる予定の展覧会のパンフレットをテーブルに置いたミリーディアナが、にっこりと笑つて言つ。

「普通の水彩画や油絵と違つて、日本画に使われる絵の具は、とても高価デスから」

初めて聞く事実に、高校生一同は揃つて「へー」と耳を傾ける。

例えば、ミリティアナはパンフレットに映っている、有紗達でも「あー、なんか見たことがある」と言つような、華やかな鶏の絵が描かれた掛け軸の写真を指さした。

「ちょっと違う話になるデスが、少し前まで、どれだけオーケシヨンで日本画が持て離されても、この素晴らしい作者の描いた絵の贋作・・・セモノは、存在しないだろうと言わていまシタ。何故だか分かるデスか?」

「・・・絵の具が高いから、ですか?」

「この話の流れからはそうなのだろうとしか言ひよつがないが、そんなんにぶつ飛んでお高いモノなのかと首を傾げる子ども達に、ミリティアナは悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「この作品は、絹地に描かれているデス。描かれた当時と同じ素材、同じ染料を揃えようとすれば、日本円だと・・・そうデスね、五千万円位になるとと思つデスよ?」

「せんまん!~?と驚愕を顕わにした一同に、ミリティアナはそうデス、と肯いた。

「だからこそ、贋作は存在しないと思われていたデスね。贋作作りの主な目的は、それを高く売つて儲けることデスから」

しかし十数年前、サザビーのオークションで、それはそれは精巧な贋作が発見されたことから、その常識はひっくり返つた。

現在でも海外のオークションでは日本画が人気を博しているが、近頃その真贋の鑑定が非常に困難なものになつてゐるのだとか。

ミコディアナは小難しい話をこねくり回して知識をひけらかすような人ではなく、ちょっとした雑学めいた話を幾つもしてくれた。

「そう言えば、この間教授から聞いた話なの『テス』が、とてもとても古い日本の『ビヨーブ』が、ヨーロッパの館から発見されたその『テス』よ」

安土桃山時代、諸外国との交易で、華やかで大きく、しかも折りたたんで運搬できる屏風は、日本文化を面白がる当時の歐州においても、かなりの人気物件だつたのだと。

しかし、屏風といつのは何しろ紙で出来ている。しかも当時の海外貿易は、命懸けの船旅である。

潮風と虫食いによつて、運ばれていつた多くの屏風が大変氣の毒なことになつてしまつたらしい。

「そのため、ビヨーブを運ぶ際には、近くに大量のチリペッパーを置いておいたそう『テス』

グッジョブ唐辛子。流石、今でもお米の虫除けに活躍しているだけのことはある。

そうして無事到着した幾つかの屏風は、非常な高値で取引されることになり、殆どが金持ちや貴族に買われていつた。

しかし、幾らお金持ちやお貴族様だつて、盛者必衰、いつまでもブイブイ言わせていふことなんか出来ません。

屏風は持ち主が変わる度に来歴が分からなくなり、とある東洋文化好きのお姫様が、「なんか中国っぽくて素敵だワ」と手に入れた屏風をバラして補強した後、お屋敷の壁の一部として組み込んだものが、近年豊臣秀吉時代の大坂城下町を描いたモノらしいと鑑定されたのだとか。

へー、へー、とミリティアナの話を聞いていた内に、いつの間にか時間は過ぎ、美術館の開館時間となっていた。

ほぼ十一時、ジャストに入館すると、少しひんやりとした独特的の空気が肌を撫でていく。

美術品の保管は、温度湿度の管理が最重要課題だ。そもそも立派な空調設備が採用されているに違いない。

「//コイさん、お話上手だねー」

すっかりミリティアナのファンになってしまったたらしさをさめが、ほつ、と両手を頬に当てて息を吐く。

確かに、これだけ美人で物腰柔らか、おまけに知識も知性も兼ね備えていますとなれば、憧れるなと言つ方が無理だ。

有紗だつてきゅんきゅんときめきまくりだし、大輝など「世の中には、パーフェクトな美人つているもんなんだな・・・」と半分泣きそうになつてている。

「最近、笑っちゃう位物・凄・く！残念過ぎる美少女とか、姐御系天然口リ美少女とか、恐怖のジカ系美少女にしか遭遇してなかつたから、この世にはふつーの美人なんてモノは存在しねーのかと思つ

てたのに・・・・・

・・・おい、大輝。本音をダダ漏らすんなら、せめて時と場合と場所を選べ。

閑静な美術館、おまけに素敵レディのミリディアナさんがいらっしゃるとあつては、丸めたパンフレットでしばくことも出来ないじゃないか、卑怯者。

しかし、大輝の「パーフェクトな美人」発言を聞いたランスレイルは、展覧会会場に入るなり絵の前に立ち尽くし、うつとりと見入っている姉の後ろ姿をちらりと眺めて、小さく溜息を吐いた。

「・・・ディー。そう言つてくれるでしたら、本格的に痛々しいフィアンセをディーの人生から排除してみませんデスか？」

ワタシに出来ることがあるでしたら、何でも協力する「テスよ、と言つランスレイルに、三人は「へ？」と目を丸くした。

何ですかいきなり、番犬モードのランスレイルの発言とも思えない。

それは一体どーゆーこと?と三人が揃つてクエスチョンマークを浮かべると、ランスレイルはぼそぼそと歯切れ悪く口を開いた。

「ミリイは・・・一人ではダメなのデス。傍に誰かがいないと、生きていけないデス」

何だそりや。

普通誰だつてそうじやないかと首を傾げると、ランスレイルは「ふ・・・」と珍しく遠い目をした。

「子どもの頃から、ミリィは何かに夢中になると、周りが目に入らなくなるヒトだつたデス。プライマリー・スクールのとき、蝶の羽化を研究すると言つて、部屋中巨大な芋虫とサナギだけにしたときは、マムが泣いていたデスね・・・」

ひいいいい！

反射的に、同じように真っ青になつたをさめどがつしと抱き合つ。

何それ、何のホラー・ハウス！？

いーやーー想像しただけで鳥肌が立つ！

「それ位だつたらまだ良かつたのデスが

それ位！？部屋中巨大芋虫だらけが、「それ位」！？

「F B Eでアンリー・サルウェポンが開発されているという話を聞いたときは、それがどれ程の威力があるものなのか、実地で試してみると言い出したデス。・・・あれが一番辛かつたデス」

アンリー・サルウェポンというと、非殺傷武器。

銃社会のアメリカで、それは画期的な話ではなかろうかと思つたが、それは一般人に試すことが出来るモノなのか。

あ、何だかこれ以上話を聞いてはいけない予感がひしひしと。

「・・・臭いのデス」

「・・・・・は？」

「催涙弾の悪臭バージョン、と言えばいいデスか。それは世界中のあらゆる悪臭を放つ物体を組み合わせて、どんな凶悪犯でも悶絶する悪臭を、と言うコンセプトで開発された最終兵器だったのデス」

その材料はと言えば、有名所ではフルーツの女王と呼ばれるドリアン、アラスカのアザラシの漬け物キビヤック、日本のクサヤも候補に挙げられたそうだ。

「最終的に、ドリアンと腐敗した魚、人間の排泄物を組み合わせた臭いは、どんな人種の人間も耐えられない悪臭と感じるとかで」

流石に人間の排泄物は家族総出で止めさせたデスが、と呴くランスレイルは、当時のことを思い出しているのか、ちょっと虚ろな目をしていた。

「兎に角、ミリィは一人にしてはいけないヒトなのデス。傍に誰かがいなければ、必ずや恐ろしいことが起きるのデス」

一人では生きていけないって、そう言つ意味ですか。

あははー、日本語つて難しいですね？

「デスから、ミリィの心を魅了してくれた日本美術、そして日本に、ワタシ達家族はとても感謝しているのデス！」

力一杯、それはもう魂の叫びを籠めて言つランスレイルに、日本人三名は未だうつとりと絵画を眺めているミリ、ティアナの後ろ姿を、今までとはちょっと違つ気持ちで振り返つた。

・・・大輝君、コメントをどうぞ。

「・・・美人つて」

はい？

「・・・怖い」

第37話 ミコティアナ（後書き）

作中に出でくるFBIの最終兵器は、実在します。

アメリカは多民族国家なので、どんな人種の犯人でも悶絶するような悪臭を開発するのは大変だったらしいですよ。

第38話 トライア（前書き）

後半、マッヂョ好きの方は、少々ご不快になる表現が御座います。
そう書つた方はお読みにならないようお願い申し上げます。

灯乃は今まで、ナルシストでないマッヂョな方とお目にかかったことがナイので、ちょっと苦手です。

高校生活最大のイベントと言えば、やはり学園祭だ。

義務教育時代と違つて手作りの飲食物を扱つことも許されるようになるし、格段に手の込んだ衣装を用意することも出来る。

特にこの藤沢学園高校は、お坊ちゃんお嬢ちゃんの通うオカネモチ学校なので、各クラスにかなり高額の予算を与えられ、それを如何に運用して利益をあげるかのショコレー・ション的な要素もあるとかないとか。

まあ、そんな裏事情なんてものは、せーしゅん真っ盛りな現役高校生の知つたことじやないわけで。

「和馬のクラスは、何するかもう決まった？」

もうすぐ学園祭ですヨー、生徒一同気張つて青春しようね という告知が生徒会執行部から出たのは、もう五日前のこと。

それ以来、有紗の一年F組は何をするか、やいのやいのと騒ぎ合つて、いるだけでサッパリ話が進んでいないのだが、有紗の部屋に遊びに来ていた和馬は「ああ」とあっさりと肯いた。

「うちのクラスには、斎藤がいるからな

「斎藤さん？」

誰だそれは、と首を傾げると、和馬は少し困ったよつて苦笑を浮

かべた。

「あー・・・知らねえか。齊藤健吾つつて、ウチの名物野郎なんだが」

その齊藤氏は、入学当初から異彩を放つ人物であつたらしい。

有紗と同じく奨学金による入学者で、入試の成績はトップ、新入生代表で体育館のステージに齊藤氏が現れた途端、女生徒達の盛大な悲鳴が上がつたのだと。・・・真つ黄色の。

「オレも、最初は何で女子が男子の制服着てるんだって驚いたからなあ」

しみじみと、昔を懐かしむように腕を組んで頷く和馬曰く。

その美人な齊藤氏は、美人なだけでなく、行動力にも溢れたとても愉快な人物なのだと。

「一年の学祭んとき、それまで無かつた女装コンテストの開催を生徒会に申請して、どういう手段を使つたんだか全校規模で派手に開催した挙げ句、満場一致で優勝搔つ攫つて行つてな」

「へー」

それはまた、随分と突き抜けたお人のようだ。

女子高生というイキモノが、「女装男子（ただし美形に限る）」に成層圏をマッハで突破する勢いで萌えることを、正確に理解していたに違いない。

学園祭を盛り上げるのに、これ以上のネタがあるだらつか。残念ながら、有紗の辞書にそんなモノはない。

勿論、去年のコンテストでもぶつけきりの優勝で、今年もそなうことは間違いないと言われているらしい。

何しろ、どこから手に入れてくるのか、「どこのお城の舞踏会ですか」と言うようなドレスを、それはもう見事に着こなしてステージに現れるというのだから、ちょっと青春の笑える思い出に出てみようかな という程度の少年達に太刀打ち出来る筈もない。

その斎藤氏がお祭り野郎として君臨しているお陰で、毎年和馬のクラスは大盛況。

一年時は中国風ホーラーハウス、一年時は観客参加型の舞台劇を華々しく成功させて、歴代トップの売り上げを叩き出している。

今年は彼の「ディナーショウを開催予定で、既に常連の他校の生徒達からは「前売りチケットお願い!」と言つ声が売り切れご免の勢いで上がっているのだと云つ。

何その学園伝説。

「普段から松 聖子式スキンケアを実施してるので豪語してて、そこの女よりよっぽど白くてぴかぴかしてるし」

マジですか。それは凄いな、お化粧しない男のひどが、きちんとメイクしている女子に勝てるってよっぽどですよ。

・・・和馬のクラスのおねーさま方が、斎藤氏をじつ思つてゐるのか、ちょっと気になる。

美少年を愛でるのは田に樂しいけれど、男のひとに「女」として負けるのはちよつと悔しい。オトメゴロロは複雑です。

「えーと・・・それは流行の男の娘とか、そーゆー人種なの?」

戸惑い半分、わくわく半分で訊ねてみたのだが、それには和馬はどうなんだかなと首を捻つた。

「アーッ、一年の頃からカノジョいるしなあ」

「いや、男の娘とゲイは違うでしょ」

「どう違うんだ?」

不思議そうに問い合わせて、う、と詰まる。

残念ながら、もややんとした曖昧なイメージがあるだけで、両者の違いを説明出来る程の深い知識はありません。

・・・明日、誰かに聞いてみます。

「それはね、あーちゃんー、ゲイとオカマさんと男の娘の間には、それはもう、厳然！とした違いがあるのよーー。」

ぐつと両手で握り拳を作り、軽くファイティングポーズを決めてそう仰るのは、確かに我らがロリ巨乳、今日もぷくぷくほっぺが可愛らしこれわめさん、なのですが。

いや別にささめに訊くつもりはなくてね、そういう話に詳しいのってクラスに誰かいるかな？って話を振つただけなのよ？

え、何？何でそんなにつぶらなお田々をきらきら輝かせてるの？大輝とランスレイルが思い切り引いてるよ？

しかし、ささめはその愛くるしげほっぺをぷう、と膨らませて腕を組んだ。

「ええー、あたしはむしろ、あーちゃんが知らないコトにびっくりだよう？いつもあたし達に微妙にただれたツツコミするくせにー、女子高生の必須知識に欠けているのはどうかと思つのー」

「・・・必須知識なの？」

そうなのか、それはちょっと知らないのは恥ずかしいな。

是非」教授下さー、わめさん。

「いやそれ、別に必須つてわけじゃ・・・」「ないと思つテスよ・・？」と中途半端に上げた手を海中のワカメのよう彷徨わせる大輝とランスレイルを余所に、ささめはよーし、と力強く頷いた。

そうして、さわめが懇切丁寧に語ってくれた話を大雑把にざっくざく纏めるなりば、その二者の違いと言つのは、自意識と恋愛対象の相違に要約出来そうだ。

自分を男だと思っていて、恋愛対象も同性なのがゲイ。

自分を本当は女だと思ってるから、当然恋愛対象が『異性』である男なのがオカマさん。

自分を男だと思っていて、単に女の子の格好をするのが好きなだけだから、恋愛対象も普通に女の子であるのが男の娘。

ふむ、すつきり。後で和馬にも教えてあげよう。

「最近、テレビでもホントに女の子にしか見えない男の娘つているもんねー。まあ、あーゆー可愛い『は、極々一部だと思つけどー』

「?普通の男の『が、趣味でスカートとか穿いてるだけなんじゃないの?』

女装を趣味とする位なのだから、それなりに自分に似合つと思つてやつてているのではないかと言つ有紗の素朴な疑問に、さわめはくわつと畠を見開いた。

「甘いー甘いよ、あーちゃんー?」

「はいー?」

いやだから、何でそんなにHキサイト!?

既に机ごと物理的に引いている大輝とランスレイルの傍に、一緒に引きたくなっちゃうよ！？

しかし、ささめは「ふん！」と小さな拳を握り締めてファイティングポーズを取ると、言った。

「骨格も筋肉の付き方もまるで違つ上に、ヒゲやら喉仮やらスネ毛
腋毛なんかのムダムダしい余計なオプションがひつつきまくりの男
のコが、衣装だけで『可愛い女の子』になれるわけないじゃんー
！そんのはタダの視覚の暴力！ある意味犯罪！ひとりでコツソリ
する分には好きにしてーだけど、人前に出没した時点でー一度とそん
なオロカな真似をしないよーに、可及的速やかに断固たる態度で慌
てず騒がず、完膚無きまでに駆逐すべきなのよー！」

Γ Γ Γ Γ Γ Γ

ホントにアナタの人生に何があつたと言うの、ささめさん。

「男の娘のなりそこない」を、イニシャルGの黒い物体と同じ扱いをしたくなる程の、そんなに痛ましい事件があつたとでも？

そそつとさりげなく大輝とランスレイルの近くまで移動して、ふー、ふー、と肩で息をしているささめを三人揃って遠巻きに見守つていると、ふと我に返ったのか、ぽつりとささめが呟いた。

「ひらめひやんがねー・・・」

『・・・ヒラメ?』

『何故、急におサカナの話になる?テス?』

『ささめの上の兄さんよ。「閃く」って字でセンさんだから、ひらめちゃん』

確かに、現在二十四歳の社会人だ。もうひとり、その一つ年下に並と書いてケイさんと言つお兄さんがいるのだが、ささめは「ほたるちゃん」と呼んでいる。

彼らはトーゼンながら、年の離れた可愛い可愛い妹であるささめを溺愛しております。

その気持ちは物凄く良く分かるけど、他人事ながら、ちょっとやばいレベルじゃないかなーと時々不安になつたりします。

そして、そんな彼らを「ひらめ」だの「ほたる」だと可愛らしい呼び方を出来るのはささめだけです。

だつてふたりとも、高校から大学までずっとアメフト部所属のガチムチマツチヨなんだもの・・・ってまさかオイ。

「閃さんが女装に走つたとでもー?』

それはダメだろ?!

世の中にまやつていて悪いことがあるー。

そしてガチムチマツチヨの女装なんてものは絶対に後者だと断言

させて頂ります！

見たくない、見たくないよ、それはダメだよ確かにイーシャルG
レベルに駆逐しても許されるよ！？

しかし、われぬはふつとの口り顔に似合わなにアンニコイな溜息を吐いた。

え、やだなにせめて～せめにはそんなブルーな表情は似合わないよ～

ほら、いつも通りのきめるとどうぶつーな笑顔を浮かべてトセー
お願いします。

「ひらめちゃんが高校生のとき」ねー・・・・・

ああ、やつぱり回想モードに入るんですね。

閃さんが高校生というと、私達は小学生だった頃ですか。

「アメフト部の出し物で、バーチガール喫茶をやる」とになつたとかでねー・・・むづちむづちのアメフト部員が沢山づつに集まつて、網タイツなうわせさん衣装合わせとか、うつふんな接客練習とかを、毎日やつててねー」

さああああ、とうつかりその光景を想像してしまつた三人の顔か
く、血の気が引く。

実際に目の当たりにしたわけでもないのに、脳内映像だけでトラウマになりそうだ。

しかし、幼氣な子ども時代に、正にその地獄絵図のただ中に放り込まれていたわざめの前で、そんなことはとても言えない。

ああ、なんてムカい悲劇でございましょうか。

「ふふふ・・・部活帰りの男の口ひで、単品でもアレなのに、集団になるとさー・・・」

家畜臭いよね、と静かに呟いたささめに、現役バスケ部所属の男子高校生である大輝とランスレイルが、ビクッと震えた。

いや、大丈夫だよふたりとも。

ウチの体育館シャワー室完備でしょ、今時の男の口だもん、ちゃんと部活の後にはシャワーを使つてるよね？

和馬だつてそつだつたもん、そつだつて言つて。

それなのに家畜認定されたくないでしょ？

第38話 トラウマ（後書き）

作中の齊藤氏にはモデルがいます。

灯乃が遭遇した中で、間違いなくベスト3に入る愉快な先輩でした。
・・。

今現在、何をなさっているのかは存じませんが、松聖子式スキンケアは、彼のつるぴかお肌を見る限り、間違いなく有効です。

灯乃は面倒過ぎて挫折しましたけど。

第39話 男にて一言は認めません。

しかし、セセナはそんなトラウマを抱えているにも関わらず、いやだからこそなのか、ちゃんと「男の娘」道を貫いているヒドビトには寛容であるようだ。

まあ、女装MENETS美少年に萌えない女子高生はいないから、セーキーことなのだな。

「だつて、可愛いしー」

そうですね、ホラーなガチムチマッショの女装姿と一緒にしたら、真面目な男の娘さん達に失礼つてモンです。

「でもー、大輝君とラヌスは、女装なんてしちゃダメだよー?」

きゅるんとよしやくいつも通りの笑顔を浮かべて言ひたため、大輝とラヌスレイルがぶぶぶぶぶ、とそれはもう力強く肯く。

「しないしないしないしないするわけない

「例え神に命じられてもしない」テス」

落ち着け、ふたりとも。

普通に人生していく歩いているだけなら、女装なんて遠い世界のことだから。

神様は女装じろとか言わんから。

・・・でも、大輝もランスレイルも立派に「美少年」の括りに入る容姿をしているのだから、女装をしてもそれ程見苦しいことにはならないと思つのに、何故にさためはそんな「分かつてんだろうなオフ」な顔をなさつてしているのでしょうか。

「えー、だつてふたりとも骨格ちゃんとしてるしー、上腕二頭筋も三頭筋も胸筋も背筋もしつかりしてゐるしー、第一肩幅があるから女の子の服着てもバランス悪くなつちやうだけだしー、脚は一ハイ穿けば誤魔化せるかもだけど、やっぱりスネモとか氣になるしー」

「や、やつ・・・」

「・・・・・」

「・・・・・」

「男の娘になることはねー、よつぱんじ骨格に恵まれてないと無理だと思つのー」

それは、恵まれててゐると言つのだらつか。

大輝とランスレイルの顔色が益々アレなことになつてゐるが、さめは少し考える顔をして首を傾げた。

「お顔はね、よつぱんじ崩れてなければ、お化粧でどうとでもなるからいいのよつ？でもねー、首から下は、やっぱり骨が細めで、筋肉とか最低限なカンジじゃないとダメだと思つのー」

やつぱんじやめは、かなり長兄の女装姿がトラウマになつてゐる

みたいです。

出来ればお肌もあんまり焼けてない方がいいなー、とかためは言うけれど、それはむしろもやしつ子と言ひんじやなかろうか。

まあ最近多いけどね、そいつ草食系男子。

特にうちのクラスは草食系含有率高いし、その気になればやれそうな連中も結構いそうだよなと思っていると、突然背後から「うふふふふ」と不気味な笑い声が響いた。

何事！？と振り返ると、そこに何やらノートを丸めたものを握り締めて、クラス委員長の井内美保（趣味・パンダ。私物は殆どパンダグッズ）が、トレードマークのスタイルリッシュなメタルフレーム眼鏡をきらーん！と輝かせて立っていた。

肩まで伸ばした真っ直ぐな黒髪も美しい、後輩が出来たら絶対「お姉様」と呼ばれるタイプの、実に頼りがいのある娘さん、なのですが。

あのー、何だか眼鏡の奥の瞳が据わつてますよ？

「・・・よく言ってくれたわ、春日ちゃん」

「えー、なにー？」

美保は持ち前のクールビューティな仕草で、眼鏡のつるを揃えた人差し指と中指でクイッと上げると、それはそれはイイ笑顔を浮かべて見せた。

「中途半端な真似はしない。・・・それが、商売繁盛の鉄則つてモノよね」

はあ、それは全くもつてその通りだと思います。

その何やら異様な迫力にざわついていた教室が静まり返り、クラス中の視線が女王様・・・いや、委員長・美保に集中する。

「話が纏まらなければ纏まらないだけ、どんどん学園祭の準備期間が圧迫されて、いざれ自分達の首を絞めるだけ。そんなことは分からきつているというのに、未だにぐだぐだとクラスの出し物ひとつ決められない。そんなことが許されるのか？ 答えは、否！」

「ぱしーん！」と丸めたノートで自分の手のひらを景気よく叩いた美保は、ぐるりと教室を見渡した。

「聞け。この教室内にいる全ての貧相な野郎共」

「「「「「・・・」」」」

わあ、クラス中の男子生徒が一斉にびくつきましたよ。

皆、貧相つて程貧相な体つきをしているわけじゃないのだが、少なくとも美保の言葉に「オレ、実は脱いだら凄いんです」と自己肯定を貫けるナルシストはいなかつたらしい。良かつた良かつた。

そんな彼らを睥睨し、美保は更に言葉を続ける。

「いいか？世の中には、ちょっとカッコいいスポーツ系の男子相手には初々しくも気後れしてしまい、声を掛けられないお嬢さんは多

「あれど、可愛い女装男子に声を掛けられない女子高生はまずいな
い！」

それは確かにその通り。

ガタイのいい、「オレってカッコいいよね」的な男子には、緊張
しちゃって見詰めるだけが精一杯の純情な娘さんでも、相手が女装
男子となれば「きやー可愛い！」となってしまうものだ。

何か、垣根が取つ払われる感じ？

少なくとも、相手に対する警戒心つて、限りなくゼロに近くなる。

「そして、学園祭というシチュエーションで女装をしたところで、
変態扱いするような女の子だって、今時どこにもいやしない」

そうですね。

女装男子を正しく異性と認識する女の子も、まずいとは思
いますけれど、その残酷な事実は今は伏せておきましょう。

お前達、と美保がゆつくりと言葉を刻む。

「人生で一度位、女の子に取り囲まれてきやあきやあ持て離されて
みたくはないか・・・？」

次の瞬間。

きつと世にも珍しい、男子生徒自らの希望による「男の娘」をメ
インとした喫茶店が誕生することが、一年F組クラス委員長、井内

美保の名において可決された。

・・・その後、美保とさわめの厳正なる審査の結果、「男の娘候補」が選抜されていったのですが、ガタイのいい男子高校生が女装を出来ないって言つて本気で悔しがるの図と言つのは、端から見るとちょっと気持ち悪かったです。

何はともあれ、クラスの男子生徒の半数が（多少、さわめが渋々妥協した部分もあるようだが）女装することになり、同じような仮装をした女子と入り交じつての「男の娘はだ～れだ カフェ」と言う微妙なネーミングながら、これ以上無く内容の分かりやすい名前が申請書に記入された。

大輝とランスレイルを含む女装しない男子については、一部女子から「執事のコスプレとかどうかしら?」な意見もちらりと出たのだが、そんなことをしたら男の娘をウリにする意味が無くなってしまうじゃないか、と美保が無言の圧力で黙殺した。

確かに、英國風執事スタイルなんて、ランスレイルなんかがやつたらシャレにならない。

似合ひ過ぎて、普通にきやあきやあ言われてしまつ。

女性客が集まるところには、自然と男性客も集まるものなんですよ、例えそこが女装男子の巣窟でも。

何事も中途半端はよくありません、一兎を追つ者は一兎をも得ずつて言いますからね。

そして、方向性が決まつてしまえば、一気に走り出すのが若さ

とこつもの。

見事に一致団結しているクラスの様子に、その頂点に君臨する美保は、正に女王様のように満足げ。

「ふ・・・何だかちょっとクセになりそうだわ」

調教つて楽しいわよね、と呴いた彼女の声は、聞かなかつたことにしました。今はクラスの団結が最優先事項です。

そんな美保とさあめを中心に決定された衣装は、浴衣。

ボディラインがまず分からず、むしろ寸胴である程よく似合つとされる、日本の誇る伝統美。

・・・ただし、「だつて、お祭りだものー」と言つ理由で、スカタイプになつてゐるアレですが。

それぞれのおうちから、もう着なくなつた浴衣を持ち寄つて再利用すればいいよねー、と仰るのは、確かにその通りかと思いますけれど。

(えええええ)

ちよ、さあめさん。アナタ、スネ毛は嫌とか言つてなかつた?

何故にわざわざそんな危うい道を選択するの、と言つ周囲からのかクエスチョンマークに、さあめはにっこー、とそれはそれは愛くるしくも自信に満ちた笑顔を浮かべた。

「大丈夫だよ、うー。」

え、何が？

「脱毛クリームだつたら、全然痛くないからねー！すぐにつるつるぴかぴかになれるよう！最近のヤツはお肌も荒れにくくなってるし、何も心配いらないよ、うーーー！」

・・・ハイ、ソウデスネ。

きらきらと明るい記憶か、きらきらと黒光りする記憶になるかはまだ分からぬけど、どちらにしあわせと、忘れられない青春の思い出になるに違ひない。

さつき「女装出来なくて悔し泣き」していた男子生徒達も、俄然やる気を取り戻していますよ。

その分、男の娘要員の男子生徒は、思い切り青ざめていますけど。

一度やると決めたからには逃げるなよ、野郎共。

男に一言は無いんだろう？

第40話 浴衣のシンデレラ

あつとこつ間に時は過ぎて、学園祭当日。

・・・お化粧の威力って凄いですね。

いや、ここまで来れば、もう特殊メイクの域だと思つ。

何しる、まだまだ成長過程なんです、遅くなるのは数年後からなので将来性に期待して下さい、という風情の、それでもどう見ても男子にしか見えなかつたクラスメイト達が、どこから見てもスレンダーな女の子にしか見えなくなつてゐるんだから、これをワザと言わすして何と言つのか。

色とりどりの浴衣に合わせた華やかな簪や髪飾りが、優雅に結い上げたカツラを彩り、しゃらりと涼やかな音を奏でてゐる。

背が高めのコには、しつとじと大人っぽい紺色の地に水色の朝顔や上品なクリーム色の矢絣柄。

小柄なコには、可愛いピンクや黄色に明るい花柄や、水色に流水と金魚。

お嬢様含有率が高いだけあつて、提供された浴衣もミニスカ仕様にしちやうのが勿体ないような素敵なモノばかり、着付けも複雑な帯の飾り結びも完璧です。

どこもかしこもつるつるに脱毛された上にマーキュアペディキュアもしつかり施され、丸みは無いがムダもない、真つ直ぐな脚線美

を披露する男の娘達に、ダイエットに夢中の女子からは怨念めいた視線が向いております。

男の子って、意外と足のラインがキレイなもんですね。

これなら全然大丈夫です、むしろアリです。

と云うか、わざめの主張がしみじみと正しいものだと実証されました。

わざめにダメ出しを食らつた男子が数名、巫山戯てその「ひひひ」ついバディに浴衣を羽織つて「どーお?」とシナを作つた瞬間、近くにいた女子数名が迷わずそれ手にしていたブラシやドライヤーやヘアスプレーを投げつけましたから。

けど正しく選抜された男の娘の中からは、マイクを担当した女子が「・・・負けたッ」と完敗宣言を吐き出した美少女も数名発生して、そんな彼らに女の子にしか見えない女装男子が見とれている様子は、何だか百合のようでカオスです。

今回のイベントを切欠に、新たな世界へ踏み込んでやう奴がいたとしたら・・・うん、それはとっても楽しそうだ。

誰か勇気を出して、最初の一歩を踏み出してくれないだろうか。クラスを上げて応援するぞ?

そんなちょっぴりカオスな「男の娘はだ~れだ カフュ」のシステムは至つて単純。

ウホイトレスがそれぞれナンバーを記したプレートを胸に付け、

客は「これは男の娘でしょう!」と思つた子のナンバーを二つ、お帰りの際に所定の紙に書いて係に提出。

それが全部当たつていたら、一番お好みの男の娘と記念撮影が出来ます。さあ、アナタの鑑定眼を試してみませんか?といつモノだ。

因みに、一番人気が高かつた男の娘は、打ち上げのカラオケ代金を免除ということだ、皆「うふふ、勝つのはこのアタクシよ!」「おほほ、冗談はそのお顔だけになさい!」とすっかりお嬢様キャラが定着している模様。

「うん、實に楽しそう。どうやら皆、無事開き直りに成功したようだ。

因みに、「お嬢様キャラ」は今回、男女問わず必須です。

実際やつてみるとちょっと楽しくて、それこそクセになりそうですね。すわよ、オホホのホ。

「ハーフのつて、深く考えずに楽しんだ者の勝ちなんですね。

男の娘達も皆、大分裏声が板に付いてきています。声変わりがまだのコなんて、正体を知つているクラスメイトでさえうつかりしたら間違えそう。

そして、衣装が浴衣なだけに、提供する飲食物も和菓子と日本茶。

抹茶だらうが煎茶だらうが焙じ茶だらうが番茶だらうが玄米茶だらうが、オーダー次第でどんと來い。その辺で出てくるモノとはひと味も一味も違うモノを提供させて頂きます。

ミースカ浴衣を「ちょっとそれは・・・（ぱつ、と初々しく頬を染めて下さいました、ごちそうさまです）」と辞退して裏方に回った面々のお嬢様スキル、本領発揮です。手際の良さがハンパないです。きっと彼女達はいい奥方になるに違いない。

有紗自身は、浅黄色の地に桔梗柄というちょっと大人っぽい雰囲気の浴衣で、短めの裾の下にはしつかりスパッツを着用している。

他の女子は大抵、見えても大丈夫な下着を穿いているから、このせいで男の娘に間違えられるかもしだれないけれど、まあそれはそれで面白そうだし問題ない。

いつ下着が見えてもおかしくない格好でふらふら歩き回って、和馬の機嫌が氷点下になるよりずっとマシだ。

その辺、ほんと口コロが狭いからなー。

「つおーい、有紗ー」

皆の支度もそろそろ終わった頃、シフト表を確認していた有紗は、女装を免れ、顔色も足取りも明るく祭りの準備に勤しんでいた大輝とランスレイルが、困惑した表情を浮かべてやつて来るのに首を傾げた。

「どうかした？」

それが、とふたりが顔を見合わせる。

「さあめが更衣室から出て来ねーんだ」

「中で、イウチサンがササーメイを宥めている声は聞こえるテスが・・・」

何ですと?

あの一人は、今回のイベントの旗振り役だ。その彼女達が揃つて引き籠もり状態というのは、全くもつてよろしくない。

この「男の娘はだれだ カフエ」の成否に関わりかねん。

慌てて女子用更衣室として確保していた空き教室に向かうと、確かにその扉の向こうから、美保の弱り切つた声が聞こえてきた。

今回、「委員長」から密かに「女王様」にジヨブチョンジした美保とも思えない様子に疑問を抱きつつ、「入るよー」と声を掛けて扉を開く。

「ああ・・・七瀬ちゃん」

教室の隅、上品な薄藤色に撫子柄の浴衣が良く似合つ美保が、途方に暮れたような、安堵したような顔で振り返る。

その彼女の傍で、桜色に小花模様も可愛らしい浴衣姿のささめが、膝を抱えて丸くなっている。

「・・・どうしたの? われ」

「・・・・・・」

「ひらからは殆ど、背中にふつりと丸く結ばれた帯しか見えないが、そのまま「えいや」と転がしたくなる程の燐くるしが漂つてこむところ、一体何をこじかでこむのや。」

更衣室に残つていたのは美保とわれぬだけ。

ふたりとも既に着替えを終えていたため、開いた扉はそのままにしておいたのだが、ちょっと閉めた方がいいだろかと思つてみると、やさめが何やら迷つと呟いた。

「え? 何?」

よく聞こえずと聞こ返すと、今度はもうじきはつと聞こえた。

「・・・あーちやんも、みーちやんも、ズルい」

みーちやんとちのむ、美保のことですか。

いやいやそんな、いきなりズルいと言われても意味不明ですよ?.

「・・・好きでちりちりこわなじやないもん。毎日牛乳だつて飲んでるもん。・・・わつと、ひらめきやんとほたるちやんこ、おつきくなる遺伝子情報を全部おかーさんの中から持つて行かれちゃつたんだもん」

ぶつぶつぶつ。

え、何? 何でこきなり、ちやんちやんびつづつーあーとなアイデントイティと向か合ひしているの?.

恐らく事情を知っているだろう美保に「一体何が？」と田顔で問うと、うむ、と頷きを返した美保が唐突に丸くなっているささめの脇の下にぐいっと手を入れ、そのままよいせと持ち上げた。

おお、力持ちですね。

女子の中では結構背が高い部類の美保に背後から持ち上げられると、ささめの小柄な体はまるで小学生・・・つて。

（・・・ええええええと）

何かを諦めたよーに、でろんと力を抜いたささめを持ったまま、くるりと美保がこちらを向いた途端、その場に何とも言い表しようがない沈黙が落ちた。

・・・世の中の男性諸氏は、近頃体型が欧米化してきている若い女性が浴衣を着るとき、ソレ用の下着で胸を潰すか、腹回りに「どりやあああ！」とばかりにタオルなんかをぐるぐる巻きにしていることをご存じでしょうか。

浴衣美人の中には、男の人の夢とア「ガレじゃなくて、タオルがみつちり詰まっているんですよ。

哀しいことですけれども、それが切ない現実です。

そうしておかないと、帯を締めたときに、お胸が「もいーん」と乗つかつちゃうんですよ。

H口系のマンガなんかでは全然アリかもしませんけど、現実ではたのもつたりして、下品でカッコ悪くなるだけなんです。

それでもそれなりに背丈があれば、多少タオル巻きになつて寸胴になつても、帯を高めに締める作りも相俟つて視線が上に行くから、浴衣つていうのはちやんとキレイに着こなせるようになつてこる、のですけども。

・・・ わわわは、巨乳である。ついでに小柄である。とビメに童顔だつたりする。

幾ら童顔でも今までちやんと年相応に見えていたのは、どうやらそのぼぼーん、きゅぽんーなナイスバディの為だつたらしい。

わわめのイメージに合わせた可愛い桜色の浴衣を纏つべく、恐らく大量のタオルを巻き付けたのだらつ。

その結果、小柄、寸胴、童顔の三拍子揃つたわわめは・・・び」からびう見ても、「ちょっとふくふくした小学生」だつた。

(あー、うー、おー)

世の中には、越えられそうで決して越えられない、広く深い川と言つものが存在する。

そして、その大河は確かに「小学生」と「小学生みたいな高校生」の間にも存在していた筈だつた。

しかしづわめはその大河を、いつも簡単に飛び越えてしまつた。

「寸胴さんこそワタシのシンデレラよ」と優雅に微笑む浴衣と言つ存在の、底知れないパワーによつて。

(・・・ダメだ・・・ッ)

の一みそをどれだけフル回転させても、今、目の前にある現実をフォローする言葉が見つからない。

と言つた、こんなためにウロイトレスをさせたりしたら、客から「何で小学生が・・・？」と奇異の目で見られて、イベントビニルではなくつてしまいそうだ。

そんな、触れたら碎け散りそうな緊迫した空氣の中、「オウ・・・」とビジョーに聞き慣れた感嘆の声が響いた。

「ササー・メイ、とつてもキュー・トテスよ?ええと、この間テレビで見た、アレのよ・トス」

せじほこと孫を愛でるじーちゃんのよ・トス表情を浮かべたランスレイルに、その場の全ての視線と期待が集中した。

彼の隣では、今すぐこの場からダッシュで逃げ出したいけど出来ずに固まつておつます、という顔をした大輝の額に、だらだらと汗が滲んでいる。

ランスレイルのにこやかな笑顔が、これ程頬もしく思えたことがあつただろうか。いやない。

『・・・つお願い、ランス! 欧米人の女性礼賛スキルを持つてのアントになら、この状況を開拓出来る筈! いえ、アンタにしか出来ないわ!』

『頼む！オレはフォローしようとして言ったことがビツボに嵌まつて、益々事態を悪化させちゃう生糸の日本人なんだーっ！』

そんな二人の必死の祈りを受けつつ、エエト、と何かを思い出そうとするように眉を寄せていたランスレイルは、不意にそうテス！と顔を輝かせた。

「まるで、ストロベリーサンのようテス！」

そのとき、確かに時間が砕け散る音を聞いた気がしました。

『『・・・・ランス・・・・』』

ストロベリーサン イチゴサン（恐らく水分）シチゴサン。

即ち、七五三。

そのオヤジギャグのよつた結論に辿り着いた有紗と大輝は、生ま
れて初めて「よよよ・・・」と床に崩れ落ちた。

『・・・どうしよう、大輝。私今、目の前の霧がスッキリ晴れた気
分になつてるんだけど』

『先入観の無い素直な感性つて、物事の本質を的確に抉り出すんだ
な・・・』

そこはかとない敗北感にも似た寂寥感にふたりが打ちひしがれて
いる中、硬直した美保の手からぼたつと落ちたささめが、再び壁に
向かつて膝を抱え、まるくなつた。ああ、可愛い。

「ああッ、皆、心配したアスー?」

「どうもしないよ、ランスレイル。

キミは何にも悪くない。

ただちょっと、可愛い口リ田乳より、男の娘の方が浴衣を着こなせるんだという事実にびっくりしただけだ。

第41話 学園祭開始十分前の攻防。

その後、美保は一体どううしきを頼つたものか、学園祭開始一十分前には、ささめにとつても良く似合つ「不思議の国のアリス」な衣装を用意してくれました。

水色のパフスリーブワンピース、白いエプロンドレスに白黒ボーダーラインの二一ハイソックス。

超上げ底の黒いエナメル靴を履き、ワンピースと同じ水色のリボンの付いたカチューシャで、くるくる巻き毛のカツラをしつかりと装着したささめは、本の世界から飛び出して来たんじやないかと思うよつたアリスでござります。

オプションには、タキシードにモノクルをかけた白ウサギのぬいぐるみもあつたりして、「えへへー、似合つ?」とはにかんだ笑顔を浮かべられた日にはもう、さあ、ハートの女王を惱殺してらつしやい!と言ひ愛くるしさだ。

「・・・セセ」

「なあにー?」

ささめが美保から新たに『えられた指令は、チラシを持つての宣伝係。

イベントの内容と全然関係のないコスプレでも、田立ちやいーんだ文句あるかのポジションである。

周囲からの絶賛を受けてすっかり「機嫌になり、「一杯お客様さんを呼んでくるからねー！」と新たな気合に満ち溢れている有紗の肩を、がっしと掴む。

「今日は、久川さんが来るんだよね？」

「う、うんー？ 来るよ？？」

よーしよー。

任務中は基本誰かが一緒に、あの強面久川と一緒に「このらぶりーきゅーとなアリスがいるところを想像するとちょっと微妙だが、少なくともあの御仁に正面切って喧嘩を売るようなバカはそうやういまい。

久川が来たら、お帰りになるときには、必ず教室まで送り届けてくれるように念を押しておこう。

まあ、有紗がわざわざ言わなくても、きっとそうしてくれるだろうけれど。

コレにお祭りモードの校内をのんたつたとひとりで歩かせるのは、不安じいの醜いじゃない。

断食明けのオオカミの群れの中に、程よくこんがりジュー西に焼き上がった子羊の丸焼きを放置するようなものだ。

「ねーねー、あーちゃん？」

そんな決意を固めていた有紗に、わざめがきゅるんと首を傾げた。

・・・ふわふわもじゅのウサギのぬいぐるみを抱き締める、田乳のアリス。うーむ、マニアが泣いて喜びそうだ。

「あのねー、こいつお願いがあるのー」

うん、何かなー？

そんな風にもじもじと恥じらいながら、ほっぺをぴんくに染めて上目遣いなんかされちやつたら、どんなヤローも一撃必殺だぞだからあんまり、余所でそう言つお顔をしちゃダメよ？久川さんの前でだけにしどきなさいね？

「あのね、あのね、今度ね？・・・あーちやん達と、ダブルデートがしてみたいのー」

ダメかなー？と見上げられて、有紗はちゅうと incontr 感つてしまつた。

(トート・・・?)

と言つと、アレか。

恋人と外で待ち合わせをし、何処かへ遊びに行つてウフフアハハと絆を深める恒例行事。

「・・・やう言えば」

腕を組んで脳内情報を検索してみたが、どうにもやつは言つた感じのモノが引っかからない。

「え？」

「和馬と、『トートリッシュ』トートって、したことないかも」

えええええー…? とためがひっくり返った悲鳴を上げるが、ない
もんはない。

今更自分達がインドア派だと氣付くとは、ちょっと感慨深いもの
がある。和馬も人混みキライだもんな。

「えー、じゃあ、ええ? ··· お休みの日とか、会つたりしないの
ー?」

「う、ううん? 大抵、うちにいるけど」

「う、うかうて、あーちゃんのお部屋?」

「うん」

「あーちゃんのお部屋に、志波先輩が来るの? うつむ?」

「うん。 ううだね?」

それがどうかしたのかと首を傾げると、ためのまつげがぼぼぼ、
と赤く染まつっていく。

うーむ、ナニか想像してしまつたらしい。

「な、なにしてるのー?」

おおひ、直球で訊いてきますか。

さて、どうしたものか。

一、アダルティな好奇心を力一杯満たしてあげる。

一、「健全な高校生のフリをして、「慌てる」とはなーの『』」と安心させてあげる。

・・・はい、すみません。一は、学園祭開始直前の明るい教室で語るようなことじゃないですね。

H口系の恋バナは、またの機会に致します。

「んー・・・。レンタルショップで借りてきた映画見たり、一緒に『』飯食べたりもするけど、勉強見てもらうのが多いかなあ」

嘘は言つていませんよー。

何しろ和馬は、全国模試一桁の常連さんなのである。

教え方も上手だし、家庭教師としてはとてもハイレベルで有り難い。

お礼に『』飯を作ると、ちゃんと後片付けは手伝ってくれるし、本当に良く出来た恋人で私は幸せです。

こり笑つてそつぱつと、たとねは一瞬大きく目を瞠つてこじり寄つて来た。

「・・・あーちゃん、志波先輩にお勉強見て貰つてゐるのー?」

あ、今度はそつちに食いつきましたか。

「ひょっとして、昔のホールなんか貰つてたりしてー?」

「そ、それはなつよ?」

それ位、頼めばくれるだらうけど、分からなことはすぐこの場で教えてくれるから、わざわざホールを貰つ必要性が無いのだ。

さういふと期待に輝いていたためが、がつくつと頃垂れる。

意味も無く謝つてしまふたくなる「じょんぱつ」具合で慌てつつ、有紗は強引に話を戻した。

「だ・・・だからね?別に構わないんだけど、なんでわざわざダブルホール?」

デートなんでものは、恋人同士で行つものだと定義されてゐるのだからして、わざわざ二組揃つて行く意味が分からん。

そんなことをしても、うぶうぶしき空氣を出してほしだけなんじやなかろうか。

しかし、やれぬは腕の中の血つサギをぎゅうと抱き締めると、それはそれは初々しへぽまつと頬を染めた。

・・・すいません、ちょっとカメラを持って来ていいですか?

カレシの久川じゃなくても悶絶しそうな愛くるしいイキモノがここにいますよ、シャツターチャンスは今ですよ。

「き・・・緊張しちゃうんだもんー」

「・・・へ?」

何を今更? 夏休み以来、デートなんて何度もしてたんじゃなかつたの?

その度甘酸っぱくも微笑ましいノロケ話を聞かされて、大輝とランスレイルと三人揃つて、幸せ一杯夢一杯オーラでお腹いっぱいになつたものですよ?

ランスレイルが「これが胃モタレといつものデスか・・・」とげんなりしながら、初めてささめからちょっぴり距離を置いた瞬間だつたよ?

しかしささめは、今この瞬間、その腕の中の白ウサギと成り代わるものならば死んでも構わん! と言い出す野郎共が大量発生しそうな勢いでそれを抱き締めながら、切羽詰まつた様子で訴えた。

「ま、前は平氣だったの! おにーちゃんとお出掛けするの楽しいし、嬉しいし、それだけだったの!」

あー・・・何でしようか、物凄く胃薬が欲しくなる予感が致します。

胃もたれに一番効くのって何だっけ。

て言つた、わせぬは未だに彼のことを「おーーちゃん」と呼んでいるのか。

実の兄上達のことは名前で呼んでるのに、ただでさえシスコン氣味の彼ら、久川サンが呪われちゃつても知らないぞ？

彼ら久川サンが喧嘩慣れしても、ガチムチマッショのアメフトガイドにタッグを組んで突撃されたら、回避不能なんじゃないかなー？

そんな風に若干現実から逃亡しけている有紗に、わせぬは容赦なく究極のメンタルアタック・「幼馴染みのおにーちゃんとのドキドキ物語～初恋のほのかな香りを添えて～」を繰り出してきた。

「でもね、でもね、最近、ダメなんだもん！おにーちゃんといふとどきどきしちゃって、あんまりゴハンも食べられないし、手とか繋いでも、汗搔いて湿っぽくなっちゃってるんじやないかとか気になつてばかりだし、ふたりになつたら、何話していいか分かんなくなつちやうしー！」

（・・・ああ・・・うん・・・）

世の中の恋バナって、みんなこんなに初々しくも甘酸っぱいモノなのかな・・・。

なんだか、自分が世間の垢で汚れきつてゐる気がしてきて、真っ直ぐにわせぬのキラめく瞳を見られないよ、ウフフフ。

オトナになるつて、キレイなものを直視出来なくなるつてことだつたんだね、初めて知つたよ、アハハハハ。新たな眞実をありがと

う。

「だからね、あーちゃんはオツキアイのセンパイだし、それにそれには、あーちゃんが一緒だつたら緊張しないかなーって……」

もじもじもじ。てれてれてれ。

(久川さん・・・私はアナタを尊敬します)

よくもまあ、こんな愛くるしいイキモノを目の前にしておきながら、ここまでキレイにキレイにささめの「恋心」を栽培することが出来たものです、心の底から感心します。いえ、むしろ感動します。

きつと久川には、成人男性百人分の強靭な理性が搭載されているに違いない。

・・・よし。

初対面のとき、ちよいと苛めてしまったお詫びに、今度は微力ながら一肌脱いであげようぢゃありませんか。

いや別に、おふたりの微笑ましいデートを堂々とバガメ出来るザラッキー！なんて思つていませんよ？

たまには和馬と普通の高校生カップルみたいなことをしてみたくもあるし、あなた方の初々しい空気を少し分けて貰いたいなーなんてことも思つてないですよ？

余所様と自分達を比べてもいいこと無いですね、これからはこち
らでマイペースにやらせて頂きますよ、ハイ。

・・・でもちょっと位、「天然な小悪魔？カノジョに振り回されて、ぐるんぐるん回っちゃう氣の毒なカレシ」なーんて言ひ、少女漫画の王道をリアルで楽しむ位は許して下さい。

今まで胃もたれを通り越して、胸焼けまでいつちやう位甘々いノロケ話をずっと聞いていたんだから、これ位の役得があつたつていいと思うんです。

第42話 鼎が開くとき。

（・・・うーわー・・・）

辺りに漂づ、しーんと静まりかえつた空気が耳に痛い。

現在教室の床に完全に人事不省となつて伸びているのは、私服だからどこの学校の生徒なのかはサッパリだが、派手な金茶色の髪をシンシンと跳ねさせ、重そうなシルバーアクセサリーを耳や鼻や首や手首に「これでもか！」とじやらじやら纏つた、まあ、所謂「不良少年」と言われる高校生だと思われます。

事の起こりは数分前。

・・・いえ、我がクラスに発生した、「完成度激高男の娘」達を見た瞬間に、こういうことが起こっちゃうかもなー、という危惧が頭の片隅をちらつと掠めたりはしたのですけども。

要するに、彼らを頭つから女の子だろ？と信じきつて、疑いもせずにナンパしちゃうお密様といつ、ちょっとアレな事態が「冗談抜きに現実となつてしまつたのです。

「ホントは男だからー」と幾ら言われても信じられない気持ちも分からなくもないけど、かなりしつこく口説いてきた掛け句に「んなこと言つて逃げる気かよ？」とか逆ギレして手首を掴み、全然、全く、これっぽっちも頭つから信じない相手に、健全な高校一年生男子がキレても仕方がないと思います。

教室の真ん中では、不良少年の顎先に、ひじょーにキレのある動

きで鋭く真下から抉り込むよーにお盆の縁を叩き込んだ男の娘・図書委員の下沢真幸がぜいぜいと肩で息をしながら、据わりきった田つきで伸びた相手を睨み付けている。

その鳥肌がびっしりの細腕には、意外なパワーが秘められていた模様。

（・・・うーむ、やつぱり可愛い。シャレにならんくらい可愛い。おまけにやつぱりアホを見下しきつた田つきが壮絶に色っぽい。）

田尻の泣きぼくつて、お色気ポイントとして最強ですね。

真幸がその細身の体に纏っているのは、水色の地に氷紋の、とっても涼しげな浴衣である。

腰には山吹色の帯を締め、黒髪のカツラを右耳の上で緩くまとめて少し巻いた毛先を垂らし、紫から薄青のグラデーションを見せる色とりどりの花を象った髪飾りを挿した姿は、ティーンズ誌の浴衣特集を飾つても全くおかしくない美少女つぱりだ。

そこには、「本を読んだりするときが一番幸せ」オーラを放ちながら、いつも教室の片隅で分厚い本を読みふけっている地味系少年の姿はない。

マイク担当のクラスメイト達は、魔法使いだと思います。

「・・・・・」

（え？ちよつ・・・・うわあ）

「アーヴィング！」

おもむろに真幸がその細い足を持ち上げ、低めとはいえ尖ったミールの底で、不良少年の頭を踏みつける。

一起きり、オラ」

声変わり前のその声が、こんなにも恐ろしく聞こえたのは初めてです。

あのー、女王様キャラは委員長の美保だけで十分ですよ？

クラスメイト一同と、満員御礼の客達全員が固唾を呑んで見守る中、げしーと一際強く蹴りつけられた不良少年がぐぐもつた声を上げて身動きする。

ああ良かつた、生きてた生きてた。

「う・・・？」

「・・・てめえは、ナンパの仕方も知らねえのか？オレが男だつたから良かつたものの、女の子の腕掴んで脅すような真似を普段からやつてるわけか、ああ！？味噌汁でツラあ洗つて少しほの一みそに皺増やしてから出直して來い、この腐れ×××野郎が！」

((((・・・つそつちですかー！？))))

まさかのお怒りポイントに、その場にいた全員が、美少女の姿を

した男の子・・・いや、男の中の漢に心臓をぶち抜かれました。

効果音は勿論、リボルバー・キャノンの銃声です。

てっきり、自分が女の子扱いされたことにキレたのかと思いきや、世の中の纖細な女性陣が言いたくても言えないことを、いつもズバーンと言い切ってくれるなんて、まあなんてアニキなジョントルマン。

『やだ・・・あの子、カツコいー・・・』

『え、何番何番!? やだー、じつに向いてくれないと分かんないー!』

『・・・ヤベえ、オレ今、あいつのヒトアニキって呼びたくなつち
まつた・・・』

『う、大丈夫だ、オレもだ。見た目は美少女でやつてる』とは女王様だけど、あいつは間違いなく、ウチのクラスで一番のアニキだ・・・

教室内の空気が物凄い勢いで桃色と紫色に染まる中、当の不良少年だけが一度真っ青に血の氣の引いた歪んだ顔を、じわじわとどう黒く染め始めた。

あ、マズい。

「つざけんなよ、このカマ野郎ー!」

そのカマ野郎を力一杯ナンパしていたのはどこの誰ですか、とツツ「こんでいる場合では無い。」

幾らアーチな男の娘でも、殴り合いなんものと無縁の図書委員が、頭に血が上った喧嘩上等な単細胞不良少年に掴みかかられて避けられるわけがない。

喧嘩慣れしていない普通の高校生は、殴りかかられたらざゅっと目を閉じるだけで精一杯だ。

浴衣の胸ぐらを掴まれた真幸もその例に漏れなかつたが、有紗は不良少年の拳が彼に届く前に、手にしていた盆をフリスビーの要領で鋭く投じた。

ストライク。

「ごいーん、と鈍い音を立てて不良少年の頭に直撃した盆は、床に落ちるとくわんくわんと踊りながら「任務完了了！」と宣言した。

つむ、じ苦労。

立て続けの衝撃を食らつて、不良少年は再びばつたりと人事不省となり、一拍置いて「おおおおおー！」と教室中に歓声が沸き上がる。

や、どーもどーも。

「あーちゃん、すゞーいーカツコーーー！」

教室の入り口で、ぴょいぴょいと白ウサギを抱えて飛び跳ねるさめの贅辞に、おほほほほー！とふんぞり返つて高笑い。

マイク担当の、「ふつふつふ、設定年齢二十一歳、大人の色気も

感じさせつゝ決して下品にはならない、誰もが振り返る絶世の美女にしてあげるからね……ああッ、このお顔に心ゆくまでフルメイク出来るなんて……カ・イ・カ・ン」と仰るクラスメイトに若干引き気味になりながらも、その宣言通りのメイクを施された今の有紗には、高笑いがとつともよく似合つ。

「トーゼンよー！アタクシ達の仲間に手を出そつなんて下等動物は、この世に存在する価値はなくつてよー！」

「やうやくやうやく

「全く、ナンパした挙げ句に逆ギレして暴力を振るつなんて、男の風上にも置けませんわー！」

教室に渦巻くおーつほほほー！とこつ高笑いの洪水。

うん、うひのクラスってほんとノリがいい。

お客様まで一緒に高笑いをして下さつて、『声援ありがとうございます。』

「さあ、皆さんー！」んな下等動物には、それに相応しい罰を下えてあげなくてはいけませんわー！」

我がクラスの誇る最上級男の娘を、このアホはよりこもよつてカマ野郎呼ぼわりしてくれたのだ。

その罪、万死に値する。

有紗はデコラティブなネイルアートを施された指を軽く組み、に

つ、じつと極上の笑顔を振りまいた。

「どれ程手を尽くしたところで、下等動物には美しさなど手に入れることは叶わないのだと、その厳肅なる事實を身をもつて証明して頂きましょう……？」

そう有紗が言い終えるなり、しゅびつと教室を飛び出したせめが、控え室から男の娘達のメイク直しをしていたクラスメイトを引つ張つてきた。

勿論、マイク道具一式も持参します。

しかし事の次第を説明されるなり、その芸術的な技術を持つメイク担当・渡辺ちひろはすつ、とその表情を消した。

「何ですつて……？」

元々ベリーショートの髪型に、くつきりとした派手且の顔立ちといつ、見た目の印象がちょっとキツい少女なのだが、無表情になるとその迫力がハンパない。

「……下沢君を？ナンパしたのは分かるわよ？それはもう、この世の真実というものだもの、全く当然というものよ？」

「……あれ、ちひろさん？何か、瞳孔が開いて……」

「でも……それを、殴ろうとした、と。そればかりか、ことあるつに『カマ野郎』だなんて低俗下劣な言葉で愚弄した、と？この私の、最高傑作を……？」

(· · ·)

申し訳ありません。

何か、とても開いてはいけない扉を開いてしまったみたいです。

すいません悪氣は無かつたんです、ただちょっと彼女の素晴らしいメイク技術で、アホな不良少年にちょっと笑える化粧をして貰つてからお帰り頂きたいな、なーんて調子に乗つたことを考えてしちただけなんですよー！

そのちひろの血のところの「最高傑作」、真幸がその空虚な視線を受けて顔を引きつらせる。

「いっ、いや、別に殴られたわけじゃねーしー七瀬ーありがとうなーお陰で助かっただぜー！」

「ふはは、気にするなー！」ソチの時には助け合つのが仲間とゆーもんじやないかー！

びしひとサムズアップを交わす、（一見）ふたりの美少女。

うふふおほほのお嬢様ワールドが崩壊し、何故か暑苦しい漢の友情が展開しつつある中、「え・・・・何、あの口も男の子なの・・・？」「ウツソー、幾ら何でも・・・」「でもでも、あっちの口だって男の子なんだし・・・」とお客様の間で混乱が生じつつあったが、当人達の額にはだらだらと冷や汗が滲んでいた。

すうひー・・・と、まるで幽霊の如き足取りで、幸福にも未だにおねんね中の不良少年の傍にちひろが近づく。

『な・・・七瀬つー？ 渡辺がこええつー田が完全にイッてるー。』

『いいいこぞとなつたら殴つて氣絶させるー。』

女の子を殴るのは物凄く氣が引けるが、流石に教室を殺人現場にはしたくない。

ちひろが抱える、プロ並みのメイク道具がぎつしり詰まつたジエラルミンケースの輝きが、「ボク、結構重たいんだよ」と訴える。あんなモノをまともに食らつたら、とてもじやないがタダでは済まない。

しかし、ちひろが不良少年まであと三歩、と詰つ距離に詰め寄つたとき、「ああああーちやあああああんつー」とひのむかわぬのひつくり返つた叫び声が響いた。

「お密様ーー志波先輩が来たよーーーーー？」

(・・・つ和馬ああああつー)

これぞ天の助け！と半分泣きそうになりながら振り返ると、そこにはバー・テンドーのような格好をした和馬が、ランニングにジャージと言つ、「体操のおにーさん」な格好の元バレー部エースの新藤（趣味・バンジージャンプ）と共にそこにいた。

「・・・何だ？」の凍り付いた空気は

「あれ、喧嘩があ？」

首を傾げた彼らの疑問に答えるのは後回しにして、和馬のコスプレ姿に見惚れるのも我慢して、有紗はがっしこの腕を掴んだ。

「和馬！」

「・・・また、ものすげえ美人つぶりだな？」

ありがとうございます、でもひとつじゃ絶対出来ないからね、このお代わり！

自分でも鏡見たとき「誰コレ」って思ったもん、いやマジで！

でも、そんな和馬の心からの賛辞にきゅんきゅんとあめくのも後
回しです！

今はどこかしてちひろの氣を逸らさねば…

「さあ和馬！誰がうちの自慢の男の娘か、一目で全部当てられるモノなら当てるぞ」覧なさい！」

「…………あ?」

訝しげな顔をする和馬に視線だけで懇願すると、何が何だかと言う顔をしながらも、ざつと教室内に視線を巡らせた和馬は、おもむろに口を開いた。

「三番、十一番、八番、二十四番、十九番」

全く迷いを見せずに正解を弾き出すのは、幾らお化粧をしたところで、和馬がイキモノの性別を間違えるわけがないお人なので当然です。

イカサマっぽくてすこません。

心の中ですいませんごめんなさいと手を合わせていると、クラスメイト達が「うわあ」と羨しき感じにさせられます。

『・・・す、すげえ・・・けりと見ただけで全問正解?』

『お、オレ、ちょっと自信あつたんだけどな・・・』

『いや・・・イケてると思つぞ? オレだつてそんな悪くねーよな? な?』

『ひょっとして化粧崩れとか?え、直して貰つた方がいいのか?』

・・・スマン、男の娘諸君。

君らは立派に男の娘だよ、自信を持つて大丈夫だよ。

そんな彼らの不安げな様子に、ちひろが何かしらの反応を見せてくれないだろうかと思つたのだが、やはり無理だったかと有紗が覚悟と拳をぐつと固めたときだった。

「自分達が原因で殺人事件が発生ですか!? それはイヤです!」
とビビりまくっていた有紗と真幸の視線の先で、ちひろがふつと何

かに反応したように瞬いた。

「化粧崩れ……？」

（……つよっしゃあああっー）

力一杯、ガツツポーズ。

ふらりと完全にロックオンしていた不良少年から視線を外したちひろは、すぐ傍で硬直していた真幸に目をやると、先程のやりとりで着崩れた浴衣の胸元を見て眉を顰めた。

「……下沢君」

「ハイ！」

「……控え室」

今すぐ着付けを直してもらって来い、との命令に真幸が素早く従うと、ちひろは何事も無かったように化粧道具を抱えて去つて行った。

神様、和馬、ありがとう。

お陰でこの教室が殺人現場になることは避けられました……うう、怖かった。

さて、取り敢えず悲劇の発生を回避出来たものの、最後の面倒事としてまだ残つてるのは、未だにのんびりお休み中の不良少年。

妙にガタイがいいので、かなりの床面積を占領しているのが鬱陶しい。

今更ながら、まさか有紗の投げた盆の当たり所が悪かつたんじゃあるまいなどどきどきしながら突ついてみたのだが、「うみゅう・・・」と言う全く似合わん可憐らしい寝言を零したので大丈夫そうだ。ああ良かつた。

しかし、その少年の寝顔を見て「あれ?」と首を傾げたのは、和馬と一緒にやつて来た新藤だった。

「コイツ、北高の及川じやん」

「北の及川・・・つて、ああ、去年クラブハウスで煙草吸つて、バレー部を退部になつたつてアホか」

腕を組んで頷きながらの和馬の言葉に、何となく「ああ・・・」とその場の空気が痛々しい子を包み込むようなものになる。

北高と言えば、スポーツで有名な高校だ。そのバレー部と言えば、卒業生から実業団選手も多数輩出しているといつも門中の名門。

未成年だとかそれ以前に、スポーツ選手が煙草なんか吸うな、アホんだら。煙草を吸う人間に、競技スポーツをする資格はない。

つまりは、喫煙問題で名門バレー部を退部になつた挙げ句、分かれやすくなつた不良少年が、ここで転がつてゐる及川だと。

何人か一緒に來ていた連中がいたはずなのに、どうやら及川は彼らに見捨てられてしまつたらしく、最早どこにもその姿はない。友達甲斐のない連中だ。

まあ、恥ずかしさの余り逃げ出したくなる気持ちも分からなくはないが、幾ら重そうだからつて氣絶した友達を置いて行くか、普通。持つて帰れ、ポイ捨てするとほんとマナーがなつとらん。

迷惑だなー、早くさつき委員長が呼びに行つた学校祭実行委員（トラブルシューター）便利屋さんとも言つ（う）が来ないかなー、と一年F組の生徒達が戸惑いながら見守る中、及川がぽつかりと田を覺ました。

勢いよく跳ね起きて悲鳴を上げる。

「うああー!?」

「おー、お田覚めかー？」

「及川。美少年をナンパして断られ、逆ギレした上に返り討ちに遭つた挙げ句、公衆の面前で氣絶したことを広められたくなつたら、今すぐ失せろ！」

「・・・・・」

顔見知りらしく、呑氣にへらりと片手を挙げた新藤と、目覚めたばかりの及川が、淡々と告げられた和馬の言葉にビシイツと凍り付く。

「一ん、和馬の言つてることは端的に事實を表していんだけど、そんな風に言つと及川が物凄く不憫で軟弱な変態さんのようだ。

しかし、和馬はアホな勘違い野郎に遠慮なんていたしません。

ああ、若干魔王モードの入った容赦ない横顔がステキです、惚れ直します。

「オレは、失せろ、と言つたんだが？」

「いえ、聞こえていると思いますよ？ただ、及川の足腰が生まれたばかりの子羊のよーにガクブル状態で、中々立ち上がれないだけですよ、和馬さん。」

暖かみの欠片も無い、超絶クールな冷え切つた声にうつとりとしていると、つんつんと浴衣の袖を引っ張られた。

何ですかもう。

只今恋人に絶賛惚れ直し中なんだぞ、ジャマをしないで下さいよと思ひながら振り返ると、女王様な委員長・美保が些か青ざめた面持ちでそこにいた。

「あ、お帰り」

その腕章を付けたおふたりが実行委員さんですか？」苦勞様です。

「な、七瀬ちゃん……」

何故か声を潜めて、ぼそぼそと。

「何?」

「頼むからアンタのカレシを止めてくれ……！たかが頭の悪い不良高校生に、あの霸王な威圧感はいらんだらつー?」

(・・・おおい)

それもそうですね、和馬の魔王モードな視線は、暴れ狂う魔族でも「ヤバいマズい逆らつたら死ぬ」となつちゃうモノなのだからして、ちよいと不良がかつた高校生程度が耐えられるよーなモノじや「いざこません。

いや、和馬にしてみたらこの位でんと本気じやないのだが、それでももう十分過ぎるだろう。

何だか今にも三度目の氣絶に入りそうになつてゐる及川が、ちょっと氣の毒になつてきた。

「和馬さん、和馬さん」

「ん? どうした?」

途端に相手を圧殺しそうな気配を消し、穏やかな笑みを浮かべた和馬に、周囲が揃つて「はああああ」と大きく息を吐き出すのが聞こえた。・・・何だかすいません。

でも実際、これはクラスの問題なのだから、和馬に矢面に立つておひかのさじうかと思つたので。

「実行委員のヒト達が來たし、後はお任せじよつへ。」

実行委員の方々が腕章を付けて校内を練り歩いているのは、正に「うじうつトラブルを解決する為なのだから、利用出来るモノは利用させて頂きましょつ。

・・・いや、やこでチツとか残念そうに舌打ちしない。それが正しい一般生徒の姿と言つモノです。

何せ、彼らにはそんな面倒事をこなす為に、それはもう様々な特権が付くされているのだから、その分働いて頂きたいなと思うのはコレ人情。

だつて、実行委員の腕章を付けていれば、どこのクラスに行ってもタダ食い出来るんですよ。

その分の代金は生徒会執行部の予算から補填されるんですよ。

そりやあ、「パトロールしてる間は遊べねーし、それ位役得があつたつていいじゃん」ってお話なんでしょうけど、このパトロール任務に就いてるメンツつてのが、当然ながら柔道部やら空手部やらレスリング部のバリバリの武闘派連中ばかりとなると、そのガタイでどれだけタダ飯食つてんだコノヤロウとか思つちゃつても仕方がないと言つものでしょつ。

おまけに、これもやつぱりと言つべきなのか、女装したら即座に

ささめに駆逐されそうな体格の（要はマッヂョの）実行委員のおふたりは、既にまな板に載つた哀れな獲物（及川）を田にした途端、それはそれは嬉しそうなイイ笑顔を浮かべられました。

彼らが学園祭の間にどれだけトラブルを解決したによって、生徒会執行部から出る報酬のランクが変わるらしいと言ひ尊話は、本当なのかも知れません。

「ほほー、ナルホドナルホド。女装した男子生徒をナンパして断られ、逆ギレして暴力沙汰を起した、と」

「はつはつは、会長もまさか、こんな事件は想定外だつたんじゃないですかねー」

「会長から指示されたマニヨアルは、きつちり頭に入つてるな？」

「当たり前だろー？」の御仁が栄えある生け贋第一号つてわけだな！」

（・・・生け贋？）

それはまた何だか、不穏な響き。

夏休み明けに代替わりしたばかりの生徒会長殿は、お約束通りの眼鏡系知性派男子です。

先代の生徒会長が、普段はおつとりさんだけビシメるとこはちゃんとシメるよ？なお人で、優秀な仲間達に「信者ですか」な勢いで慕われていたのだが、その筆頭であつた副会長が繰り上がりで新たな生徒会長となつたのだ。

元々優秀なヒトだと言つ噂話には事欠かない人物で、有紗は遠目にしか見たことはないが、如何にも怜俐、冷静、冷徹、冷淡と言つたひんやりした単語が似合にそつた雰囲気の持ち主である。

その生徒会長殿が、学園祭実行委員・トラブルシユーター要員の面々にどんな指示を出したのか、と皆興味津々、わくわくしながら見守つていたのだが、常に一人一組で行動しているという彼らは、既に顔面蒼白になつてゐる及川を「どっせい！」と言つ掛け声と共にそのマッヂョな肩に担ぎ上げた。

（おおおー？）

前後に並んだマッヂョな実行委員は、仰向けになつて呆然としている及川を担ぎ上げたまま、「それでは失礼！」と爽やかな笑顔を浮かべて教室を出て行くと、おもむろに腰に装着していた拡声器のマイクを取り出した。

『あー、あー、テステス。ただいまマイクのテスト中』

『テステス。・・・えー、校内の皆様ー、毎度お騒がせしております、こちらは当学園祭実行委員、樹川と、』

『小林と申しますー』

なんだか、ご町内をのんびり周回するちり紙回収車のようだ。

『えー、我々は現在、一年F組、「男の娘はだれだ カフエ」において、問題行動を起こした人物を捕獲致したところで御座います

『「」存じの通り、この一年F組では、女装した可愛らしい男子生徒がお客様をお待ちしております』

『そこで、この人物はことあらうに男子生徒を熱心にナンパ致しましてー』

『その男子生徒に断られたことに腹を立て、暴力行為に及んだとのことで御座いますー』

（うーわー・・・・）

止める、降ろせ、と喚き散らす及川のわめき声が、時折マイクの音声に混じつて聞こえる。

しかし、のしのしと校内を練り歩きながら、彼の行為を喧伝しているらしくマッチョなふたりは、そんなことは全く意に介していないようだ。

・・・物凄い晒し者の刑だ。これは恥ずかしい。恥ずかしすぎる。

彼の人生で、本日の出来事はきっと、輝かしい黒歴史の一ページとなつたことだろう。

こんなオソロシイ指令を出した生徒会長殿は、間違いなく敵に回してはいけないタイプだ、気を付けよつ。触らぬ神に祟りなし。

そんなことを考えながら、何度も深呼吸して心の平穏を取り戻そうとしていると、有紗、と柔らかな声で和馬に呼ばれた。

「何?」

「良かったな。実行委員がお前達の宣伝、してくれてるだ?」

「……ねえー。」

言われてみればその通り、と有紗は手のひらを拳でぽきゅんと呂いた。

禍転じて福となす。これは立派な宣伝になる上に、「あんまりアホな真似したらここんな田に遭っちゃうよ、お行儀良くして楽しもうね」といつ抑止効果もばっちりだ。

グッジョブ実行委員、ナイスアイディア生徒会長、流石です。

しかし、良かった良かったと和馬と一緒に笑い合っていると、「お前ら・・・とすっかりその存在を忘れていた新藤が呻いた。

そう言えば、何でこのひと和馬と一緒にだつたんだろう。友達だったのかな、仲良さげだし。

「今のを見て、いつことがソレか・・・?」

「?何がだ?」

「ありがたいですよね?感謝します」

「……オレだったら、あんなことをされたら恥ずかしくて、しばらく家から一歩も出られねーぞ。高校拒否位ふつーにしちゃうだ」

「んなの、自業自得つてモンだろ？」「

「男のひとつて、意外と纖細なんですねえ」

そう言つ問題じゃねーだろ？と肩を落とした新藤は、ふと遠い目をして及川が連れ去られた廊下の向こうを見詰めた。

「オレ、昔あいつとゲーセンで、格ゲー対戦とかしたこと也有ったんだけどなー・・・」

ああ、青春の一ページを共有した仲だつたんですね。

それはまた、何と言つか・・・」愁傷様です。

第44話 フリー・ダムなヒト。

和馬と新藤が連れ立つてやつて来たのは、別に申し合わせたわけでもなんでもなく、単に有紗のシフト時間に合わせて和馬が迎えに来たとき、たまたま新藤が興味本位で「男の娘はだ~れだ カフェを覗きに来ただけらしい。

それでも、元バスケ部とバレー部の主将同士、それなりに親交はあつたと言つたりが並んではいるが、その長身も相俟つてかなりの迫力だ。

「へー。君が、噂の和馬のお姫様かー」

「噂?」

何となく流れで一緒に教室を出るなり、「ナルホドナルホド」と妙に訳知り顔で肯く新藤に首を傾げる。

にやあ、と笑つた新藤に和馬が何か言つよつ先、彼はけらけらと笑いながら口を開いた。

「コイツはねー。もう昔はなんてーのかな、女子に対しても人当たりはそこそこだけど全部上つ面なカンジで、告られても全部『面倒くさい』でばつさり切っちゃうひでー野郎だったのにねー」

「おいー!」

「その和馬が!バレンタインに貰つたチョコを、纏めて全部焼却炉に放り込んだ外道伝説の持ち主が!まーさーか、教室の真ん中でベ

ろちゅーして所有権がつづり主張しちゃう位、ガチで女の子にメロ
つちやうなんてねー！」

「ははははー」と笑い転げる新藤にとつては、和馬が入学当初にし
でかしてくれたちょっと懐かしい思い出が、和馬をからかう絶好の
ネタとなっていたようだ。

お・ま・え・は！と和馬がその「体操のおにーさん」なランニン
グシャツをぎりぎりと締め上げているというのに、それでも爆笑し
続いているとは、随分と頑丈なお人である。

「さつき及川にキレたのだって、アイツがお姫様のクラスに迷惑掛
けたからだろー？分つかり易ーー！」

「啓介。お前のその思つたことを脳髄を通過させずに脊髄反射で口
から出す短絡的な性格に、どれだけバレー部の連中が苦労してきた
か、細大漏らさず文書にして放送部に提出してやろうか？」

きつと一週間は毎の放送のネタに事欠かねえぞ、と低く低ーく言
う和馬に、新藤がへ？と目を丸くする。

「オレ、ネタになるよつなことなんて何かしたかー？」

心底不思議そうに首を傾げる新藤に、珍しく和馬が固まつた。

「……啓介」

「何だよ？」

「……悪いことは言わねえ。一度、仲間と後輩達の前で、何も言わ

「すこ下座して来い」

えええーーー?と田を丸くする新藤は、一体今までナードをやらかしていたのやー。

どこか疲れたような顔をして和馬が新藤から手を離したとき、先程着崩れた浴衣を着付け直しに行つていた真幸（やつぱりどこから見ても可憐系美少女）が控え室から戻つて来た。

「お疲れー」

「……ああ」

そこはかとなく疲労感の漂う風情が、また妙な色っぽさというか「守つてあげたいオーラ」となつて真幸を取り巻いていて、すれ違う人々が男女問わず百パーセントの確率で振り返つている。

「一む、これで中身は一本筋が通つたアーチキなのだから、人は本当に見かけに寄らん。

「シフト交代でしょ?少し控え室で休んでたら?」

何だか疲れているようだし、その姿で下手に出歩いたらまた妙な輩に絡まれたりして気が休まらないんじやないかと思つたのだが、真幸は「はあああ」とそれはそれは深々と溜息を吐いた。

「オレは今、よーやくその控え室から逃げてきたところなんだよ」

「はー?」

さよとんと皿を丸くすると、真幸は些か恨みがましに皿つきで有紗と和馬を見詰めてきた。

「……志波先輩が、オレら全員を一発で見抜いただろ」

「あ……ああ、うん？」

「それで、メイク担当の連中が燃え上がつちまつてな……」

現在、控え室はそのプライドを刺激された彼女達の戦場と化しているらしい。

……うん。言われてみれば、確かにさつきまでよつお化粧は一層艶やかだし、髪型もずっと凝つたものになつている。

実に可愛い。「清楚可憐なお嬢様・完全版」と言つたところだろうか。

「うわ君、男なの？マジでー？」

そこには、唐突に新藤の声が割つて入つて、間近に顔を覗き込まれる格好になつた真幸がすざつと後退る。

ああ、これだから体育会系のおーさんば。

文系少年は、基本的にパーソナルスペースの内側に不用意に入り込まれるのは苦手なんですよ。

だからこそ有紗は「ああッ、間近でじっくり観察してみたい！」とつづつしながらも適度な距離感を保つていたというのに、新藤

は、何故にそんな反応をされるのか分からなかつたよつた。

「えっと……あれ？さつき、及川にナンパされた子、だよね？」

「……ええ、まあ」

警戒モード発令中の真幸に、新藤がふうん？と首を傾げる。

そうしてまじまじと真幸を見下ろしていたが、不意ににかつと教育番組に相応しい朗らかな笑みを浮かべた。

「かつわいいなあ。こりやー及川が間違うのも仕方ねーわ」

「...」

今日だけで一生分の「可愛い」と書ひ言葉を聞いたに違ひない真幸は、そのまま軽く会釈してスルーしようとしたようだが、新藤はそんな真幸の腕をひょいと掴んで引っ張った。

「和馬ー、オレ、この子クラスの連中に見せてくるわー」

それはもうあつたりと真幸を自分の左腕に座らせ、所謂子ども抱つこ状態にしてそんなことをのたまう新藤に、有紗と和馬は同時に力一杯ツツコんだ。

「お前は……！ そのフリーダム加減を少しづつにかじりや！」

「下沢君、暴れるんじゃないわよ！？」また着崩れたら控え室に強制送還「ースよ！？」

有紗の指摘に、ただでさえ硬直していた真幸がびきつと凍り付く。

そんな真幸を腕に乗せたまま、新藤が不満げに口をとがらす。

「えー、駄目なのかあ？」

「そこで駄目じゃねえと思えるお前の思考回路の方が、オレは分からん」

「やつですよ！ウチの大事な看板娘なんですから、観賞したければどうぞお店にお出で下さい！お持ち帰りは禁止です！」

ええええ、と残念そうに眉を下げる新藤の腕で、余りのことに機能停止していた真幸の思考回路が、よつやく再起動したようだ。

ひくひくと淡いパールピンクのルージュを塗られた唇が引きつって、その額に盛大なお怒りマークが浮かび上がる。

「……センパイ」

「んー？」

「今すぐ。降ろして。頂け。ませんか。ね？」

「えー、ヤだん」

「……」

……あのー、新藤さん。幾ら可愛くても、その口は男の子なんですか？それとも、男の子もイケちゃうひとなんですか？

有紗が思わず半目になつて新藤を見ていると、隣で和馬がどこか遠くを見ながら深々と溜息を吐いた。

『……ジロー君が出た』

『へ？』

『アイツは善意のドジだ。無自覚にひとの嫌がることが大好きなイキモノなんだ。力エルの苦手な後輩に「男は力エルを触れてこそ一人前なんだぞ、頑張つて訓練しような！」とか言って、水槽一杯のヒキガエルを生物部からかつぱらつてくるよーなヤツなんだ』

え、嫌だなそれは。ドジなだけならまだしも、無自覚つてのが物凄く面倒くさい感が致しますよ？

バンジージャンプが趣味だなんて、てっきりMなヒトだと思つていたのに、予想外もいいところだ。

若干引き気味に見遣つた先で、新藤は何やら思い付いたような顔をして、よし、と肯いた。

「お持ち帰りが駄目なら、持つて歩こー！」

真幸の顔が、盛大に引きつる。

「……だ……ひび……」

『……察するに、「だから、ビーしてそーなるー!」ってところか
なあ』

『多分な。オレでもやつまつ』

『ええ、和馬が新藤さん抱つこられたことは見たくないよ。』

『ンなもん想像するな、気色悪い』

好きでしたわけじゃないやい。

「冗談抜きに全身に鳥肌を立てていいし和馬」、「スマン」と
片手を上げて謝罪の意を示していると、新藤があくまでもこいつこと
笑顔を絶やさずに言葉を続けた。

「おかしなナンパ男はオレがきつちり撃退してやるからな。安心し
ていいぞ!」

……確かにそのウラオモテの無い笑顔は、「善意」とゆーモノに
満ち溢れて見える。

ついでに、そんな羞恥プレイを提案された真幸が、ざあっと音が
聞こえるような勢いで責める。気の毒に。

「ビーのアヤシイ変態だ、アンタは!~男を持ち歩いて何が楽しい
!~!」

「変態違う、オレはキレイで可愛いモンが好きなだけー。いや、女の子だつたらマジ好みなんだけどなあ」

「そのつ、発言の一ビートがビート変態じゃないとーー？」

「何を言ひーこんなことを女子にしたら、セクハラで通報されてしまつじやないか！」

「何このビート、日本語通じないんですけどーー？」

キリッとした顔である意味正論ではあるものの、微妙に趣のずれた発言をする新藤に、真幸は半ば以上パニックに陥つていひた。

しかし、そんな真幸には悪いが、この新藤とつむーさんは何だかあんまりお近づきにならない方がいい感じがする。

卑怯にも「頑張れ！」と軽く拳を振り上げて、そそつとその場を離れた有紗と和馬にもまるで気付かないようだつた真幸は、一時間後、飛び入りで参加した（わせられた）女装コンテストで準優勝に輝いていた。

今年も見事に優勝を果たし、有終の美を飾つた斎藤氏（お色気たつぱりのチャイナドレスでした）が、スピーチで「初めてライバルらしいライバルに出会えて嬉しかつたワ」ときつちりオネエ言葉でコメントしていたのに対し、真幸は彼からマイクを受け取ると、それはそれは可愛らしい笑顔を浮かべて、言つた。

「ボクが今ここにいるのも、三年E組、元バレー部主将の新藤啓介センパイのお陰です。いきなり抱き上げられて「可愛い」を連呼さ

れたり、「マジ好み」とが眞顔で言われたときには、ソッチの気がないボクでも、うつかりドキドキしちゃうocopilotでしたー

そうして、数秒間の沈黙の後。

「…………つきたああああああああーー?」

校舎前の前庭に設営されたステージ周辺は、女子高生達の腐敗臭漂う盛大な悲鳴に埋め尽くされ、その様子を少し離れたところで眺めていた有紗と和馬は、「肉を切らせて骨を断つ」を見事に実践した真幸の心意気に、心からの拍手を送っていた。

「自分のプライドを犠牲にしても、敵に一矢報いるとは…………

「バレー部の連中にも、あれ位の気概があればな…………」

その余りの盛り上がりよう、後日広報部が売りに出した写真の入賞者は、絶対このコンテストの出場者で占められると思つていたのだが、堂々とその中でぶつちぎりの売り上げを叩き出したのは、大輝とランスレイルの「髪が触れ合つよーな至近距離で熱く見つめ合つています」なツーショット写真だった。

……ナニしてんの、あんた達。

第44話 フリー・ダムなヒト。（後書き）

次回、大輝視点で件の「写真」が撮られた経緯を（笑）。

灯乃の作品は、このよーに時々腐敗臭がほのかに香りますが、本格的なBLは敷居が高く感じるもので、ネタ的な扱いはしてもガチで語る予定はいまのところありません。

いえ、「読み物」としてのBLは余りえぐいものでなければむしろどんと来いなのですが、基本ハッピーエンド以外は書きたくない派なもので……。

ゲイの方をあからさまに差別するような浅ましい精神構造は持っていない自分を信じたいとはいえる、リアルにカレシを男性に寝取られたら、女性に寝取られるよりイヤだなあと考えてしまう辺り、全く差別意識がないとは言えないですし。

少なくとも同性が恋愛対象になる方々の苦悩というのは、灯乃には想像も出来ないほど過酷なものがあるのじゃないかと思います。

最近は大分世間的にも認められて来ているとはいえる、欧米諸国に比べればまだまだマイノリティを宿命づけられている彼らの真剣な恋愛を、女性である自分が軽く考えて安易に「ハッピーエンド」な物語を書くのも失礼な話かなーと……。

あ、時代モノなら大丈夫なのか。

江戸時代までは「衆道」と言えば、繁殖目的の男女の恋愛より崇高なものと考えられていたらしいですし……って、時代考証めんどく

そこから修理でした。ま。

第45話 マジで××する五秒前

クラスの出し物である「男の娘はだ～れだ 女装を免除された一年F組の男子」と言つのは、学園祭が始まつてしまえばもう特にすることはない。

かなりカオスなことになつてゐるだろう教室には、「極力近づかない方が身のためだよね！」との学校に入学して以来、何だか妙に発達してしまつた気がする自卫防衛本能の命じるまま、大輝とランスレイルは極ふつーに学園祭を楽しむべく、一色刷のパンフレットを眺めながら校内をのんびり歩いていた。

一体、どこの誰が判定しているのかは知らないが、この学校の学園祭において、飲食関係については「金取つていいだけのモノ以外は提供するんじゃねエぞ？」と言つ通達が生徒会執行部から出でる為、何を食べてもハズレがないのが嬉しいところだ。

まずは前評判の高かつた一年F組のシシケバブをゲットし、スペイスの効いた肉にかぶりつきながら渡り廊下を進んでいると、窓の外に見覚えのある水色が見えた。

「お、わわわじゃん」

「ええ、いつ見ても小さくてキュートデス」

ほのぼのとそんなことを言つランスレイルの横顔をちらりと見ながら、大輝は編入当初からランスレイルがささめに妙に懐いていた理由が、「あの黒くて丸い目が、子どもの頃、友達に貰つたマウス（よくよく話を聞いてみたら、どうやらハツカネズミの模様）

にそつくりなのデスよ」というモノだということは、絶対に有紗とささめには知られてはなるまい、と改めて口々口に誓つた。

あのふたりは、基本的に一般的な女子と比べれば呆れる程凶太いくせに、虫だのネズミだのは普通に嫌がる。何故だ。さつぱり基準が分からん。

いや、授業中に現れたイニシャルGを、眉一つ動かさずに叩き潰す委員長のようになつて欲しいわけではないから、それは別にいいのだが。そこまで最強になられたら、むしろ引く。

それにしても、せめてハムスター辺りだつたならまだ良かつたものを、何故にハツカネズミ。

アメリカではハツカネズミにチーズをやるのが、子ども達の間で通過儀礼だつたりするのだろうか。

ここからはその小さな後ろ姿と、微笑ましく「お手々繋いで」状態の青年の大きな背中しか見えないが、ささめが浮かれているのかぴょんぴょんと落ち着き無く跳ねているせいで、何と言つか……。

「……親子だな」

「親子デスねえ……」

今は学園祭真っ最中の学校の敷地内だから、周囲も皆どんな組み合わせのカップルがいようと完全スルーしているが、これが外だとしたら警察に通報されてしまいそうで、他人事ながらちょっと心配だ。

まあそれでも、当初の浴衣姿よりはマシだろう。アレは七五三といつよりもしる、テイスト的には座敷童だつたと大輝は思う。

今後も和服を着ない人生をためが歩めることを祈りつつ、ふたりは十六歳の若い胃袋を満たしに行くことにした。

広島風お好み焼き、学食の厨房使用権を見事引き当てたクラスの本格ピツツアと、粉モノを連続で腹に収め、甘いものが欲しくなつてジェラートを購入すると、大分腹もふくれてきた。

「ディーは結構、甘党デスよね」

同じジェラートはジェラートでも、甘さ控えめエスプレッソフレーバーをチョイスしたラムスレイルにそう言われ、チョコレートとマスカルポーネのダブルをチョイスした大輝は、やかましい、と軽くラムスレイルを睨み付けた。

「ガキの頃、あんまり甘いモンが食えなかつたからな。その反動みてーなんだ」

「？ディーの家は、子どもには甘いモノを食べさせない教育方針だったデスか？」

「おやつと言えばピーナツバター、チョコチップ入りなら尚ヨシ」なアメリカ育ちのラムスレイルにとつて、子ども時代に甘いモノが身近に無いと言つ事態は信じ難いものようだ。

しかし、大輝の幼年時代に、余り甘いモノが「えられなかつたのは教育方針とか、そういう高尚な理由ではない。

「そもそも、アニキと七歳だか八歳だか離れてるつてんだから、結構離れてる方なんだうけどなー。オレんとこ、兄貴は十七、姉貴は十三離れてるんだよ」

それはマタ、ヒランスレイルの瞳が丸くなる。

因みに、大輝の母親が兄を産んだのは十六歳。今の大輝と同じ年である。

いたいけな少女にナニしてくれとんだアホオヤジ、殆ど犯罪じゃねーかと呆れたものだが、父にそう言つと「ナニを言つ！かーさんが十六になるまで待つた、このとーさんのすんばらしい忍耐力を褒め称えんか、バカもんが！」と力一杯どつかれた。痛かった。

まあそれはそれとして、大輝はぶっちゃけ「予定外の授かり物」だつたわけで、両親や祖父母だけでなく、兄と姉にまで「かーわーいーいーいーいー！」といじり倒されて育つ羽目になつた。

兄や姉など、大輝が物心つき始めた頃には「僕がパパだよ」「私がママよー」などと巫山戯たことを言つてくれて、そのお陰で幼い頃は「ぼくのかぞくは、おとーさんと、おかーさんと、ぱぱとままです」だと本気で思つていた。

子どもが恥を搔く前にちゃんと訂正しろ、親。

しかし、いくら「ママよ」と言つたといひで、姉の玲奈は大輝の幼少時、正に思春期真っ直中だったわけで、そうなるとお年頃の少女といつものディエットに励み出すと相場が決まつている。

『私の見えるところに甘いモノなんて置かないでちょーだい！置

いたりしたら……ふふふふふ』と言つて女の切実かつ脅迫じみた宣言は、彼女が就職して家を出るまで、城島家において遵守されたこととなつた。

兄の伊織は、『……大輝。ことダイエットというモノに関しては、女性の言つことに逆らつてはいけないよ。時には命に関わるからね？』と物凄く実感の籠もつた先人の知恵を授けてくれて、稀に姉が家にいないとき、兄が買ってきてくれるケーキがとてもとても美味しくて嬉しかつた為、大輝はかなりのお兄ちゃんつ子だ。

両親や祖父母も、誕生日やクリスマスにはちゃんとケーキを用意してくれたが、ソレとコレとは別なのだ。

餉付けだ何だと言われようが、兄が大輝の好むものを覚えて、普段から気に掛けてくれているということのカタチがあのケーキだったのだ、文句あるか。

祖父の可愛がり方など、「うむ！大輝にはワシがすんばらしい嫁を用意してやらねばのー！」などと黙つて持つて来たのがあの婚約話なのだから、根本的に全てが間違つてている。じーさん、少しほ兄貴を見習つてくれ、切実に。

万年新婚夫婦の両親はそこはかとなく頼りにならないし、「大輝をあんな辛気くさい女にやるもんですか！」な姉が、常日頃から防衛ラインを引いてくれているからそれ程気にせずに済んでいるが、その事実が普通に重いです。

そういうや、と大輝は自分より少し背の高い友人を見遣つた。

大輝も高校に入つてから大分背が伸びたものの、その分ランスレ

「まあ、お土産に何を選ぶか、悩まなくていいのは楽デスけどね」

「そりゃそりゃだな。……んじゃ、次は物理部の方行つてみつか」

「いいデスねー、熱気球デスね？」

学園祭当日が晴れで風が無ければ、と言つ条件付きで物理部が申請していたのが、黒いゴミ袋を何十枚も繋げてバルーンを作り、そこに送風機で空気を送り込んで燃料ナシの熱気球を飛ばすと言つ実験「一ノナード」だ。

幸い今日の天候はバツチリ、時間は午後二時からとなつてゐるから、今からグラウンドに行けば丁度いいだろつ。

途中、絞りたてのオレンジジュースを買い込み、すぐに飲み終えたそのコップをちゃんとリサイクルボックスに投入してからグラウンドに向かうと、白衣を着た物理部の面々が、わくわくした面持ちで巨大な送風機を引っ張り出して來ているところだつた。

グラウンドには一袋を幾つ使つたものやら、これまた巨大なバルーンが「まだかー」とぺつたり地面にひつついてゐる。

……それでも、この実験にあそこまで巨大な送風機は必要なのだろうか。風力を全開にしたら、人間くらい普通に吹つ飛べそうだ。

どこからあんなモノをレンタルして來たのやら、と思つてゐると、やはり物理部の面々も扱い慣れていないからなのか、「あれ?」「いや、こっちがこうだろ」「おーい、誰かマニアアル持つて来てくれー」などと、何だかちょっと不安な感じだ。

と、漸く景気のいい駆動音が聞こえてきて、「おおおーー」と歓声が上がる。

しかし、次の瞬間。

(のわあつー?)

送風口が若干下向きになつたまま送風機を駆動させてしまつたのが、乾いたグラウンドに叩き付けられた空気は大量の砂埃を巻き上げた。

歓声が悲鳴に変わり、物理部の「申し訳ありません、申し訳ありませんーー」と叫ぶ声がスピーカーでハウリングを起こしているが、大輝はまともにその砂埃を食らってしまった。

「だつ、大丈夫デスか、ティーーー?」

「い、いや……お前は?」

「ワタシは、どうにか……ああ、擦つては駄目デスーー!」

痛む両手を開けていられなくて、咄嗟に擦るうとした手首を掴まれる。

「う……そ、サンキュー」

周囲でも悲鳴だの苦痛の声だのがあちこちで上がつていて、なのに目が開けられないと言つのはかなりキツい。

「ええと……水飲み場に行くテスよ？水で洗い流すのが一番早いテス」

「悪いー、頼むー」

ランスレイルに手を引かれ、痛む目を閉じたままどうにか校舎脇の水飲み場に辿り着く。

（あだだだ……つたく、ちくしょー）

冷たい水で洗い流すと、ようやく目を開けられるようになつたものの、何だかまだひりひりする。

「酷い目に遭つたテスね……大丈夫テスか？」

「あー……どうにか？」

「目が赤いテス、保健室に行くテスか？」

気遣わしげに覗き込んでくるランスレイルに、別にそこまでじゃない、と言おうとしたとき。

パシャ、と聞き覚えのある機械音が耳に届いた。

（……なんすと?）

物凄く、それはもう物凄く嫌な予感がしてきしがしどそちらを見ると、まだ少し見難い視界に映つたのは、立派なカメラを構えた女生徒の姿と、その腕に「カデカ」と「広報部」と記された腕章。

「……」」ちやつさまでした」

律儀にぺこりと一礼し、すたすたと去つて行くその女生徒の後ろ姿に、ランスレイルは「あ、どうもデス?」などと言つているが。

「ああ、今のが学園祭の様子を記録して回つてゐるという、広報部のヒトデスか」

お仕事大変そうデスねー、なんて呑気に言つてゐる場合じやねーと思つぞ、ランスレイル。

近い将来の悲劇を正確に予測した大輝は、その場にへのへと座り込みたくなつた。

数日後。

「によははははーだつ、大輝君、オトメーーこれはオトメだようーー」

広報部が掲示板に貼りだした「欲しい写真があつたら、申込用紙にナンバーを書いて注文してね一枚三十円」の中に、その写真を見つけたささめが瞬時に爆笑したのを、大輝は丸めたノートで力一

杯しぶき倒した。

「いつたーいいいい！何でノートなんて持つてるのよーー！？」

「うなることが予想出来たからに決まつてんだから、この天然小悪魔。いいから黙れ。

いくらうねるお田々で見上げられても、それを毎日の一に見慣れている大輝に対する攻撃力は、最早ゼロだ。ざまあみろ。

そのささめが爆笑をかましてくれた写真ナンバー、198。

そこには、「田元を朱く染めて、何だかとつても頼りなさげ（不本意）な表情を浮かべている大輝と、至近距離で見つめ合っている（ようしか見えない）ランスレイル」のツーショットがばつちり写し取られていた。

この場合、恨むべきは物理部か、広報部か、それともその元締めの生徒会執行部なのか、はたまた許可を出した教師連中か。

腐った女子しか喜ばないようなこんな写真を、堂々と売りに出してんじゃねえ。

「ササー・メイ、ディーは砂埃に田をやられて、とつても大変だったデスよ？笑つては失礼デス！」

「うー……そうなのー？……つで、でも、コレつて、コレつてーー！」

めーとささめを奢めるランスレイルに、しかしささめはふるふると震えてまたしてもナニか余計なことを口走りうとしたため、大輝

は丸めたノートをほん、と手のひらで弾ませた。

「…… カルタ」

その、地の底を這うよーな低音で、ささめがぴょーと飛び上がる。

「は、はいー？」

「あんまり、余計なことは、言ひつな？」

『…………あーちゃん あああんつ！ 大輝君が、大輝君が怖いようひひひー』

『…………うん。あのねーささ、男の子にはね、コレだけは譲れねエつていう大事なモノがあるのだよ？ その辺りの事情を斟酌して、今はそつとしておいてあげようひうね？』

ぽんぽんとささめの背中を叩いていた有紗が、小さく息を吐いて顔を上げる。

「大輝」

「んだよ」

「人の噂も七十五日よ？」

お前にしてはベタなフォローをありがとづ、有紗。

「そつそつ、この『マジでキスする五秒前』な写真の噂だつて、いつかはきっと風化するから！」

「……つお前なあああああつ！…」

ぐつとサムズアップなんぞして、改めて言葉にするとますます攻撃力の上がった氣がする現実を指摘してくる有紗の隣で、ランスレイルがオヤ、と首を傾げる。

「オウ……言われてみれば、そんな風にも見えるデスね？良かつたデスね、ディー。」これでワタシが女性でしたら、またおかしな噂が広まってしまうとこるデスよ」

「…………」。

「……ランス」

「ハイ？」

「……いや、何でもないです」

お前はそのまままでいてくれ、ランスレイル。

相手が男のお前だからこそ、おかしな噂が広まりまくっているんだなんて言つ腐った事実は、きっと知らない方が幸せだ。

第45話 マジで××する五秒前（後書き）

次回は、久しぶりにムーン様の方を更新してみたいと思つております。

和馬視点ですが、相変わらず糖度がすごいことになつておりますので、十八歳以上の方はお気を付けてお出で下さいませ（汗）。

第46話 初テート？（前書き）

年内最後の更新となります。

皆様、よいお年を！

第46話 初デート？

「和馬。今度、外でデートしよう？」

「……は？」

突然の有紗の申し出に目を丸くした和馬は、リビングのローテーブルで広げていた、有紗の幼い頃の写真を収めたアルバムを閉じると、いきなり何だと首を傾げた。

「どうか、行きたいところでもあるのか？」

「いや別に」

「あ？」

和馬が部屋に来るようになつてから欠かすことのなくなつたミネラルウォーターに、レモン果汁を少し混ぜたものを注いだグラスをテーブルに置くと、当然のように抱き寄せられ、既に定位置となつている腕の中に落ち着く。

（まあ、「おうちデート」なら、現在進行形なんだけじねー）

先日の学園祭の開始直前、ささめの「ダブルデートがしてみたいの一」と言つ可憐らしいお願ひに、有紗は深く考へることもなく安易にOKしてしまつたわけだが、改めて考えてみると、初デートと言つものはやっぱり和馬とふたりがいいな、と我ながら少々オトメちづくなことを思つてしまつたのだ。

そう言つと、人間椅子になつてゐた和馬がくくつと笑つて、頬に落ちかかつてゐた有紗の髪をさらりと耳に掛けってきた。

「そりやあそだな」

「でしょ、つてこら、いきなり耳を齧るな、胸を揉むなつ

「いや、お前があんまり可愛いこと言つから」

「え、ちよ、んん……つ

……我ながらちょっと似合わないなーと思つたオトメ的思考を披露した結果は、久しぶりの「エロ竜モード」でした。

しかし基本的に、有紗も和馬もいわゆる「デートコースとされるような人混みにわざわざ行くのは面倒に感じてしまう方だし、遊園地のアトラクション等も、異世界で魔族討伐なんてものをしてしまつたふたりにとつては今ひとつそぞられるものがない。

映画館、アミューズメントパーク、有名所の公園なんかのそれっぽい候補を一通り挙げてみても同様だ。

いつそ海か山にでも繰り出すかとも思つたのだが、日帰り、もしくは土日の一泊で行ける範囲となると、やはり人混みが予想される上に移動だけで終わつてしまいそうだ。

「どうせなら、景色の綺麗なところがいいんだけどな

「つても、近場だとなあ。こっちでも空を飛べるんだつたら、海だらうが山だらうがすぐ行ける……」

「……」

「ち、に、さん。

「「それだ！」

そういうわけで、記念すべき初テートは異世界探訪と相成りました。

前回は運悪く魔族の繁殖期なんてものにバッティングしてしまったが、あんなレアなことはそうそう無いだらうし、久しぶりにヴァンフレッド達の様子を見に行くのも悪くない。

ついでに、オススメの「テート」ースなんかを百戦錬磨のカイルに教えてもらえば一層楽しめることだらう、とうきうきしながら、今度は転移先の半径五十メートル以内に大型生物の生体反応がないことをきちんと確認してから移動したのだが。

(ち……つ寒いいいいいいつつ……暖かいいいいいいつつ……)

一瞬で体温を奪われるようなブリザードに見舞われ、更に次の瞬間には和馬の腕の中に抱き込まれて、何をどうしたものやら、兎に角とんでもない突風も雪も冷氣も遮蔽された空間の中、有紗はひとばかりに和馬にしがみついた。ああぬくい。

「びびびびつくりしたあ……」

「すげえ雪だな……」

今まで、余りこちらの世界との気候の差を感じたことはなかつたのだが、こんな世界を白く染め上げるような猛吹雪なんて初めてだ。

「 イヒ ちはもう冬だつたんだ。…… ていうか、 イヒ、 王都じゃないよね？」

目標であるヴァンフレッドの指輪からそう離れた場所ではない筈なのに、どちらに田を向けてもまるでシベリアのような雪原と針葉樹林が広がるばかり。

幾ら雪のせいで景色が違つて見えるにしても、あの壮大な王宮や、それを幾重にも取り巻く見事な町並みが、僅かも確認出来ないなんてことがあるのだろうか。

「ヴァンに連絡取れないのか？」

「ん、ちょっと待つて。…… 意思疎通 ・ 遠話 」

二人とも、以前この世界で入手した衣服を着ているものの、有紗は裾の切り替えが可愛らしいワンピースとカーディガンにブーツ、和馬は黒のパンツとブーツ、生成りのシャツにジャケットを羽織っているだけで、とてもこんな「THE・冬-」に対応した格好ではない。

残念ながら今回はここでのデートは無理のようだが、折角来たのだから友人の顔くらい見て帰りたい。

有紗の「呼びかけ」にヴァンフレッドが応じるつもりがあるなら、ぴこぴこと光る指輪の宝石部分に触れてくれれば話が出来るようになるから、と伝えておいたのだが、中々応答が無い。

ひょっとして今は手近に置いていなかつたのかな、と諦めかけた頃、脳裏に相変わらずの美形声が響いた。

『……アリサか？久しづりだな、元気にしていたか？』

何だろうな、顔が美形な連中つて大抵声もいい気がする。やつぱり整つた骨格とかが、そういう声を作つてるんだろうか。

「あ、王子様。元気ですよー、そつちは？」

ああ勿論、と応じるヴァンフレッドに、今から会いに行つても大丈夫か、と問う前に、ぐいと和馬に頬を挟まれて深く唇を奪い取られた。

「んん……っ」

『？アリサ、どうした？』

「……よし、ヴァン。聞こえるか？」

『ああ、聞こえるぞ。カズマも元気そつだな』

(「、この……っ）

しつとした顔で術式を共有してヴァンフレッドと会話する和馬に、有紗はふるふると拳を固めた。

不意打ちで持つて行かれるキスなんてもう数え切れない位だつうのに、妙なしてやられた感があつて、何だかむかつく。

むかついたので、足の甲でも踏んでやるのかと思つたけれど、それで和馬が吹雪を防いでくれて、壁が崩れたら困るのでやめた。チツ。

ええそりですよ、今ひとつ思考回路がオトメモード優先状態だから、「好きだよ」じゃないキスをいきなりされたのが何だか嫌だつたんですよーだ。

やつぱり、馴れない思考回路なんて使うもんじゃないかもしない。わざと通常モードに復帰しよう。

まあそりして、「僕も暇だから、顔を見せてくれるとありがたいな」と言うヴァンフレッドの言葉に、「あ、じゃあ今から行くねー」とこう話になつたのです、が。

「…………は？」

一面の雪原に、そこだけ違う時間が流れていそうな威容を誇る、その要塞としての姿を隠すことのない城の名は、ヒルデガルド。

それまでに訪れた王宮や離宮とは明らかに雰囲気の異なる、この

質実剛健を絵に描いて枠に入れたような風情の城は、周辺の森に住まう人々からはただ「砦」と呼ばれているのだと言つ。

勿論、その中に入れば相変わらずの完璧な空調設備が整えられている為、重厚な家具で統一された応接間で迎えてくれたヴァンフレッドを始め、お馴染みナイフ執事のヴィクトール氏、お色気猫耳団長のカイル、肩にらぶりーな使い魔ノーラを乗せたアルフォンスも二人と似たような生地の衣服を着ていたが、そんなことはどうでもいい。

彼らの話を聞いて、「へえ……」と口元だけで物騒な笑みを閃かせた和馬が、もしヴァンフレッドの父親である国王と対面することがあつたなら、きっと有紗が頼まなくとも、髪だけでなく、眉毛まできれいサッパリハゲ散らかしてくれることだらつ。

ヒルデガルド城があるのは、この国で最北の地、ミュスカ。

点在する鉱山と木材による収入はそこそこあるものの、王都から遠く離れた辺境と言つても過言ではないこの極寒の土地を、ヴァンフレッドが「魔族討伐の報償」として与えられ、自ら赴いて治めるべし、と要は思い切り僻地にトバされたのは、彼が魔族討伐で活躍し過ぎた為であるらしい。

それまでは、母親が庶出ということで、王宮内の勢力争いからは一歩外に出た位置にいたヴァンフレッドだが、そんな事情など知つたことじやない国民は正直だ。

「イザといつに体を張つて魔族と戦つてくれた王子様」であるヴァンフレッドと、「その間ずっと安全な王宮でぬくぬくしてました」なその他の王族。

じちらがその心を驚掴みするかなど、正に火を見るよりも明らかで、そうなると機を見るに敏い貴族達も、手のひらを返したようすり寄つて来始めたのだそうだ。

「僕は元々、いざれルカの補佐に就くと宣言していたから、別にそれは構わないと思つていたんだが……」

はあ、どうアンフレッヂが溜息を吐く。

「想像以上に、貴族達の動きが大きくなつてしまつてな。このままでは王宮内で余計な紛争が起きかねんと言つことで、まあこういうことになつた次第だ」

「いやもつ、マジで凄かつたぜ？ オレやアルの屋敷まで、殿下と繫ぎをつけたがる連中の賄賂で溢れかえつたもんなあ」

「賄賂なら賄賂らしく、すぱつと現金で寄越せと言つのですよ。趣味の悪い絵画や骨董は売りに出せばいいとしても、こ本人の原形を留めているのかも分からぬ見合に用の肖像画など、精々暖炉の焚きつけにしかならないと言うのに、全く困つたものです」

……燃やしたんですか。

この国の暖炉つて、飾りといつか、雰囲気を楽しむための工芸品だと思つていたんですが、まあこれ程立派な暖炉で燃やされたなら、お氣の毒な肖像画達もきっと成仏出来たことでしょう。

でもどうせならそんな肖像画、小学生男子の教科書並の落書きをして、まとめて王都の壁に貼り出してやれば良かつたのに。けつ。

しかし、再会早々そんな「巫山戯てんじゅ ねエゾオラ」な話を聞かされて、それはもう力一杯はらわたが煮えくり返ったものの、当事者であるヴァンフレッド達がもう済んだこととして納得している以上、有紗達がぶつちぎれて余計な騒ぎを起こすわけにもいかない。

……話を聞いている間、覚えただけで実際に使つたことは一度も無い戦略用術式をあれこれ検討していたことは、取り敢えず黙つておひづ。

彼らがこの城に移動してきたのは一月ほど前のことで、その頃はまだ雪も無く、少し離れたところにある美しい湖の水で仕込んだ穀物酒をぱーっと振る舞う祭りもあつたりして、北国らしく素朴で大らかな気質の住民達と親交を深めて楽しむ余裕もあつたらしい。

あの酒は美味かつたなー、と思い出すだけでその素敵尻尾をくねくねさせているカイルの様子に、和馬があからさまに「いいなあ」と言つ顔をする。

元の世界ではちゃんと「お酒は二十歳になつてから」を守つている和馬だが、こちらに来る度、アルコール度数ばっかりの果実酒を筆頭に、色々なお酒を楽しんでいる。

おかしな酔い方をしたことはないから別にいいのだが、有紗が即座に「無理つス」と白旗を揚げるようなシロモノを男達だけで楽しめると、何だかやつぱりちょつと悔しい。

いの際、少しお酒に馴れてみようか、と未成年にあるまじき」と

を有紗が思つたときだつた。

(え)

突然、ソファの隣に腰掛けっていた和馬が弾かれたように立ち上がり、その腕に攫う勢いで抱き寄せられた。

何を、と思う間に視界の端で白い光が弾けて、それがそれまでアルフォンスの肩の上でまつたりしていたノーラが瞬時に実寸大の戦闘形態を取り、大きく広げた純白の翼だと知る。

爛々と紅く輝く瞳。いつでも敵に飛びかかるように低く伏せたしなやかな体躯を覆う毛皮は総毛立ち、羽根の一枚一枚までを震わせて牙を剥き出しにしながら、未だ降り止まない吹雪ばかりを映す大きな窓から注意を外さないその様子に、ヴァンフレッド達がすかさず立ち上がり、「魔族狩り」を起動させる。

しかし、そんなことよりも。

(和馬、が……)

緊張、している。

いや、緊張、なんてものじゃない。

有紗を抱き締める腕は強張り、押しつけられた体から直接伝わつてくる感情は、恐怖に近い。

息苦しい程に強く抱きすくめられ、どうにか視線だけ動かして和馬の顔を見上げると、ノーラと同じように窓から僅かも逸らさない

その瞳が、鮮やかな金色に染まっていた。

どうして。

一体、何が。

「ノーラ」

「……マスター、逃げて」

微動だにしないままそう応じるノーラに、アルフォンスがちらりとカイルに視線を投げ、それに軽く頷いて応じたカイルが、おい、と声を掛けて来る。

「カズマ、アリサ。悪い。殿下を連れて逃げてくれ」

「カイル！？お前、何を……」

「カイル」

ヴァンフレッドが顔色を変えてカイルを振り返るより先に、今まで聞いたことのない、和馬の乾いた声が部屋の空気を震わせた。

「もう、遅え。……お密さんだ」

(……つ)

ざわ、と全身の皮膚がそそけ立つ。

一気に、部屋の重力が増した気がした。それ程の、圧迫感。

窓の外は、白。

ただし、そこには既に風に舞う細かな雪片の織りなす濃淡はなく、代わりに磨き抜かれた水晶のよつな、或いは鍛え上げられた金属のようすに艶やかな光沢と、その白銀の輝きの中、更に美しく煌めく黄金の輝きがあった。

和馬の瞳と、同じ黄金。

それは、一抱えほどもある巨大な宝玉にも似て、しかしその中心に一層濃い黄金を宿すそこには、明らかな知性の光があった。

その視線の重みに、息が詰まる。

(竜……)

四角く切り取られた窓から見えるのは、その瞳と顔の一部だけ。もし全身を見ることが叶うなら、きっとこの城と遜色ない大きさがあることだろう。

いや、もしかしたらそれよりもずっと大きいのかもしれない。ここから見える部位だけでは、全体像を想像するなんてとても無理だ。

…… 一体どうやって重力に耐えているんだろ？。これだけでかいと、体の向きを変えるだけで一苦労だろ？。

ああ、そう言えば竜だから魔法を使えるんだよね、基本でしたね。すいません、と有紗が思い切り力の限り現実逃避していると、縦長

の瞳孔を持つ竜の瞳がきらりと動いた。

カイルとアルフォンスが、ザッピヴァンフレッドの前に出て「魔族狩り」を構える。

『……「えーらつしゃいまつせー」』

『……「えーらつしゃいまつせー」』

『むつ……間違ったか。ヒトの挨拶ってこんなだつた気がするんだが……そうだ、「えー、らつしゃいらつしゃい」だつたか?』

『……「えーらつしゃいまつせー」』

『む、これもハズレか……むつ……おお、そつだ!』

『きりーん!』と巨大な黄金がキラめく。

『「よつ、そこの美人の奥さんーちよーと寄つてかないかい?』』

『……「コソニーチハ。ハジメマシテ」』

『……』

この日、がっくりと田を伏せて落ち込む竜というものを、生まれて初めて拝見しました。

ゼノンと呼んでくれ、と低く渋い美声で仰つたのは、仄かに蒼みを帯びて輝く、正に雪のような白銀の髪を短く刈り込み、北国独特の刺繡を施された風雅な衣服を纏う男性体となつた童のヒト。

勿論、彼が親から頂いたといつ長つたらしくも大切なお名前はちゃんと別にあり、ゼノンと言つのは他者と関わるときの通り名のようなものらしい。

「いやあ、市の噂でこの巣にヒトの王の子が入つたと聞いて、一度会いたいと思っていたのだが、いきなり我がコンニチハと行つたら驚かれるかと思ってな。そうしたら、何やら同族の気配がしたものだから、ならば大丈夫だろうとこうして訪れた次第だ」

そう朗らかに仰るゼノンは、人型となつてもとんでもないラージサイズで、二人掛けのソファに腰掛けているといふのにそれが丁度良く見える位の巨漢だった。

見た目の印象は、三十代半ばの男盛り。

もしルネッサンス美術の彫刻モデルがいたなら、こんな感じだろうか。

ゆつたりとした衣服の上からでもその隆々たる筋肉美が予想出来る、正に偉丈夫と言うに相応しい、男性からは問答無用に羨望と憧憬の眼差しを、女性からはその好み次第だが概ね好意的な視線を集め

め、子どもからは間違いなく「くまーー」泣き出されてしまって、そんな迫力満点の御方である。

そんな荒削りな印象ながら、正に漢！と言つ風情の剛胆さが滲み出る風貌のゼノンだが、そのいかにも豪快そうな見かけに寄りす、意外と気遣いのヒト（？）であるらしい。

はあ、と応接室に新たに設けた席にどつしつと腰掛けるゼノンを迎えていたヴァンフレッドが、そつと未だに若干緊張を滲ませている和馬に目を向ける。

同族、という言葉にカイルとアルフォンスも同様に意識を向けて来るのが分かつたけれど、以前余りに非常識な和馬の力について、「特殊な術で竜石の力を取り込んでいる」と、嘘ではないが眞実でもない言い訳をしていたせいか、それ以上のリアクションが無いのが有り難い。

距離感を間違えない大人のひとつて、素敵だと思います。

（ でも、どうしたのかな…… ）

さつきから、和馬の表情が硬いままのが、少し気になる。

ゼノンがこちらに善意を持つていないこと位、有紗にでも分かる。

なのに、和馬の横顔はきつく引き締まつたままで、殆ど瞬きすらせずにゼノンから僅かも目を離さない。

臨戦モードこそ解除しているものの、ノーラもアルフォンスの足元で実寸大のままじつと伏せているし、やはりまだまだ警戒は解い

ていないらしい。

カイルとアルフォンスが一見平常モードなのは、別に彼らが鈍いわけではなく、実戦経験豊かなオトナであるからだろ。多分きっと。

しかし、ある意味有紗が知る限り、最も肝が据わっている人類であるヴァンフレッドは、それでは、といつもと同じような調子で白竜の化身に向き直った。

「ゼノン殿。竜の御方が私のような若輩者に、どのようなご用でしようか？」

以前和馬から、天然モノの竜は、それぞれの属性に合った土地に巣を構え、自然の気を取り込むだけで生きている仙人ばりの生態をしているようだと聞いたことがある。

動物、と言うよりはむしろ精靈に近い存在であるらしく、書物によつては、自然そのものの具現と言う表現をしている記述もあつたらしい。

そのときは随分不思議なイキモノだなあと思つただけだったが、その実物を見て妙に納得した。

人間なんて簡単に指先で「ぶち」と出来そうなあの巨体を、他の生き物を補食して維持しようと思つたら、一体どれだけのお肉が必要なことや。

あつという間に地上全ての生物が竜のお腹に収まって、エサの無くなつた竜が餓死しちゃいました、と言う何とも哀愁漂う結末が訪

れてしまつに違ひない。

実際のところ、和馬も人間ベースの竜族（？）だから、普通にご飯を食べた程度では生命維持にはとても足りず、本来ならしおりゅう森林浴だの海水浴だのをして体内の魔力を活性化させなければならぬらしい、のですが。

……いえ、竜が「契約」済みの場合は、伴侶との性交渉だけが魔力の循環と活性化の方法となつてゐるから、特に自然の中でまつたりする必要はないとか、それは別にいいんですけどね。

最近和馬が「腹減つた」って言つてくるとき、妙に楽しそうといふか前より随分余裕っぽいといつて、本当に空腹なのかと密かに疑問に思つていたりとか、気持ち良すぎて困るからたまには少し手加減してもらえませんかと思つてゐるとかも、他人様に愚痴つたら「ノロけてんじやねーよバーカ」の世界ですよね、分かつてます。

しかし、最近久しぶりの活動期に入り、ヒトの世界も随分様変わりしたものだと興味深く思つていたといふゼノンは、実は、と些か困つたように眉を寄せた。

「我的住處は、向こうの山を越えたすぐのところにあるのだが」

向こう、と先程ゼノンが登場した窓の方を指さすと、ヴァンフレッドが不思議そうな表情を浮かべた。

「それでしたら、グラン首長國の所領ですね？何故わざわざこちにまで？」

「？」

「……失礼致しました、どうぞお受け下せー」

はー、やつですね。

休眠期に入ると平氣で數年単位で巣の中でじんじんしている竜が、人間の引いた国境なんて氣にするわけが御座いませんね。

だから尚更、基本的に氣ままな単独行動、他種族どころか同族との交流も殆どゼロと言う引き籠もり一族である竜が、何故にわざわざヴァンフレッシュに会こに来たのやら、と詰つ疑問を一同が覚える中、ゼノンは溜息混じりに口を開いた。

「それが……住処の近くで、ヒトの子を拾つてな

「ナビも、で御座いますか」

つむ、とゼノンが重々しく頷く。

「暫くは我が育てていたのだが、やはりヒトのナマヒトの中で育つべきだろ。それで、こきなじこんな申し出をするのはどうかとも思つたが、その子がヒトの世で生きていけるよう、世話をしてくれぬものだらうか? ヒトの王のナム」

……どちら突然やつて來た白竜のくまさんは、森のくまさん並にいじひとだったみたいですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7419u/>

NEXT TO YOU

2012年1月5日21時40分発行